
ISガンダムSEED

タナトス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISガンダムSEED

【Nコード】

N6901Q

【作者名】

タナトス

【あらすじ】

IS、それは女性にしか反応しない世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス』の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代、そんな世界にキラとアスランが迷い込む。

2人は何を為すのか？

ブローグ

キラとアスランは久しぶりに会う事が出来た。

キラはプラントの最高指揮官として、アスランはオーブ軍最高指揮官としての仕事の会合だった。

この会合ではある宙域にいるロゴス残党が海賊行為を働いている事が問題となり、ソレの解決としてプラントとオーブとの両国連携で海賊退治の打ち合わせをしていた。

会合も終わり、作戦が決まってからキラとアスランがストライクフリーダムとインフィニットジャスティスによる偵察を行った。

接触回線でお互い語り合う。

「アスラン、この宙域だったと思うけど……」

そのキラの問いかけにアスランも頷きながら通信を返す。

「ああ、だが、おかしい……襲撃をつけた形跡も戦闘をした形跡も無い……何も無い。人がいた形跡も、MSの整備した形跡も無い」

お互いコレは可笑しいと考えながらも調査を開始した。

暫く調査をしたが、何も出てこない。

人がいた形跡すら無いのだ。

キラは考えながらアスランに問いかける。

「此方の調査に気付いて逃走を？」

その質問にアスランは否定的に言う。

「ソレにしては鮮やか過ぎる。何も形跡を残していない」

キラとアスランはコックピット内で会話を交わしていた時だった。

突如コックピット内の計器が異常を知らせるアラートが鳴り響いた。

「「！？」」

キラとアスランは大慌てでコンソールを操作する。

「クッ！？ アスラン！ 周囲に重力異常！」

「クソ！ 駄目だ。操縦桿も動かない！！」

その瞬間、キラとアスランを乗せたフリーダムとジャスティスは重力の歪に吸い込まれるのだった。

1話 招かれる者達

IS学園、この学園はIS、『インフィニット・ストラトス』と呼ばれる特殊なパワードスーツの候補生を育てる教育機関である。

その特殊な学園の職員室に2人の教員がお茶を飲みながら会話をしていた。

二人共女性で一人は黒髪のロングで眼つきが鋭いスーツ姿の女性、二人目は緑の髪をショートにした眼鏡をかけた女性だ。

2人の共通点があるとするならば、2人はこの学園の教師であり、スタイルが良く美しいといった所だろうか。

緑髪の女性、山田 真耶が黒髪の女性、織斑 千冬と談笑を楽しんでいた。

「ソレにしても、あのニュースには驚きました」

真耶の言葉に千冬も頷く。

「ああ、例の……」

二人が話題にしているのは女性しか動かせないISを男が動かしたと言うニュースである。

二人が談笑を一通り終えた頃、突如、警報が鳴り響く。

『第1アリーナにて侵入者あり。侵入者は2名の模様。当直の教員は即時対応されたし。繰り返す』

それを聞くと2人は教員の顔から歴戦の戦士の顔に変身する。

「山田先生、第1アリーナに急行しましょう。ISは常時機動状態の方がいいでしょう」

「はい！」

そう言い2人は現場に急行した。

上空からアリーナの地面に着地した2人は自分達が1番乗りだと理解すると武装を装備しながら侵入者達に迫る。

侵入者達は気を失っているのか地面に寝転んだままピクリとも動かなかった。

2人は油断無く近づくと侵入者達を覗き込む。

真耶が油断無く倒れている侵入者達に銃口を向けながら千冬が侵入者達の所有している物を検める。

（何かのパイロットスーツだな。しかし、こんなパイロットスーツは見たことが無い。ISの物とも違う。武器は所持していないみた

いだ)

そう思いながら千冬はヘルメットを取ろうとする。

(首の所にロックがあるな。ここをこうして……取れた……)

ヘルメットを取り侵入者達の顔を拝む。

(男か……16、17歳といった所か……ん？ ドッグタブ？ 英語か？ ザフト軍ヤマト隊、キラ・ヤマト？ コツチの男はオーブ軍、アスラン・ザラ？ コイツ等軍人か？ ソレに、ザフト？ オーブ？ 聞いた事が無い組織だ)

そう思いながらもふとキラの胸元を見ると蒼い8枚の羽をあしらったネックレスを発見する。

「コレは……もしや!？」

そう言いながらアスランの体を念入りに検めると右指の中指に赤い剣をあしらった指輪を発見する。

「織斑先生……こ、これって……」

真耶の驚きの問いかけに千冬は頷きながら肯定した。

「ええ……間違いなくIS、『インフィニット・ストラトス』ですね」

その肯定に真耶は驚きの否定を言う。

「そ、そんな！？ 男性でISを保有しているなんて……ソレにこのIS見たことありません！！」

そう、IS、『インフィニット・ストラトス』は原因は不明であるがISは女性にしか動かせない代物なのだ。

例外として千冬の弟の織斑 一夏がいる。

更に、ISには謎が多く、その全容は明らかにされていない。特に心臓部であるコアの情報は自己進化の設定以外は一切開示されておらず、完全なブラックボックスでありロストテクノロジー扱いだ。数にも限りがあり、開発者である篠ノ之 束がそれ以上の開発を行わなかった為、現存するISは467機しか存在しない。

つまりこの2機はナンバリングがされていない事からも篠ノ之 束以外の開発した機体に分類される。

それを男が保有しているのだ。

真耶の驚きも納得がいく。

「とりあえず二人を医務室に運び、ISを取り外し調査しよう。何か解るかもしれない」

千冬の言葉に真耶も頷いた。

キラはふと目を醒ますと知らない天井をその目に映し出す。

キラは飛び起きるように掛けられていた布団をどかし辺りを見回す。

「ここは……」

キラの呟きに隣のベッドに座っているアスランが答える。

「どうやら此処は医務室らしい」

アスランの声にキラは安堵の溜息を肺から吐き出しアスランに語りかける。

「アスラン、無事だったんだね。よかった……所でここは？」

キラの質問にアスランは答える。

「解らない。調べたいんだが監視カメラが俺達を見張っているし、扉は鍵が掛かっている。ソレに窓から外に出ようとしてもこの高さじゃあ……」

そう言いながらアスランは外を見やる。

キラは窓まで歩み寄り景色を見やる。

キラの眼下には遙か彼方に地上を確認する事が出来た。

ざっと50メートルはあるだろうか。

「……成る程、コレは無理だね」

キラの言葉と同時に医務室の自動ドアが開く。

「どうやら起きたようだな」

黒髪の女性がそう言いながら入室する。

「貴女は？」

キラの質問に女性は静かに答える。

「私の名は織斑 千冬という」

キラとアスランは軍人の癖で千冬に敬礼しながら自己紹介をする。

「ザフト軍フェイス、ヤマト隊所属、キラ・ヤマトです」

「オーブ国防軍、総参謀作戦司令部所属、アスラン・ザラです」

その返答に千冬は納得した様に頷く。

「成る程、軍人とは思っていたが、本当に軍人なのだな。敬礼が様になっている」

キラとアスランはその言葉に生返事をかえした。

「ハア……」

「どうも……」

ソレを聞きながら千冬が質問をする。

「おまえ達にとりあえず聞きたいのは2つ。我々に敵意があるのか、そしてどうやってここに侵入したのかだ」

その質問にアスランが答える。

「私達に敵意はありませんし、如何して此処にいるのか解りません。私達は任務中に突如重力異常に遭遇、気が付けば此処にいました」

その言葉を聞き、千冬はキラとアスランの目を見つめながら問いかける。

「本当だな？」

キラは千冬の眼を見つめ返しハッキリと答える。

「そうです」

暫く睨み合いをしていると千冬は溜息を吐きながら答える。

「その眼は嘘はついていない様だな。だが、まだ隠し事がある眼だ。まあいいとりあえずは信じよう」

その言葉にキラとアスランは内心安堵の溜息を吐きながらお礼を言うのだった。

そして、キラとアスランは自分達の身の上を語る。

ヤキンドゥー工戦役、メサイア攻防戦、簡単な歴史の話、MSの事などだ。

千冬も語りだす。

この世界の事を……

話を聞き終わりキラとアスランは自分達が元の世界に帰れない事を知り激しく落ち込んだ。

正直、キラとアスランはこの世界の不条理を呪いそうになった。

「しかし、まさか、異世界に来るとは……」

「しかも、16、17歳くらいの年齢の体になってるし……僕達、19だよな？」

アスランの唸るような声にキラも頭を抱えたい衝動を押さえ込みながら言葉を吐き出す。

「これから僕達はどうなるんだろうか……」

「解らない……」

「ラクス達、心配してるかな？」

「だろうな……」

呟くキラも答えるアスランも気力なく答えるしか無かった。

キラとアスランが落ち込んでいる頃、千冬と真耶はキラ達から没収したISの解析を進めていた。

「な、な、な、な、何なんですか！？ このISは！？」

真耶の悲鳴にも似た驚きに千冬も同意する。

「ああ、全くふざけたISだ。シールドエネルギーがほぼ無限とはな……ソレを可能にしているシステムが、『ハイパーデュートリオンエンジン』か……更に装甲はシールドエネルギーを消費する事によりある一定の物理攻撃を無視する『VPS装甲』、かすめただけで装甲が熔解し、気象条件に左右されないほどの大出力ビーム兵器や特殊兵装、更に多数の敵を同時ロックが可能な『マルチロックオンシステム』にビームシールドのオマケつきときている」

千冬も呆れの言葉に真耶も答える。

「しかも、フリーダムとジャスティスは全領域の戦闘を可能としている機体で、フリーダムは砲撃戦や殲滅戦が得意分野でジャスティスは1対多数の接近戦が得意のコンセプトと言う設計ですね……」

その解説に頷きながら答える千冬。

「全く、コレを開発した奴はイカれているとしか思えん。国家とでも戦争する気か？」

「如何します？ 正直、こんなデータを提出したら……」

真耶の言葉を繋げるように千冬は言い放つ。

「国家や企業が放って置く訳が無い。彼等共々独占を狙うだろうな。最悪戦争だ」

彼女等とてそんな愚は犯さないだろうが人の口に戸は出来ない。

更に彼女達には報告の義務がある。

「……彼らと話をする必要があるだろうな……」

そう言っていると千冬はキラ達のいる医務室に向かって歩き出すのだった。

2話 力の片鱗

キラとアスランは医務室でこれからの事について話し合っていた。

「正直、僕達は戸籍も住む所もお金も居場所も無い。本当に何も無いね」

「ああ、ここまで何も無いといつそ清々しいな。まずは戸籍の確保と働き口だな」

その時だった医務室の自動ドアが開いた。

キラとアスランは扉の方を見つめると千冬が入出てきた。

「話中失礼する。先ずはお前達の処遇だが、この学園に入学してもらつ。学費も無論免除、生活費も国から支給されるぞ」

それを聞いてキラとアスランは嫌な予感がした。

必ず美味しい話には裏があり、何かを要求されることは明白だからだ。

「その見返りは？ まさか、僕達の境遇が哀れと思つて慈善事業でそんな事するわけが無い。この学園はISと呼ばれる特殊な物を起動させるために作られた学園、ここには女性しか入れない。そこから導き出される答えは、僕がISを男で起動する事ができる存在だから国も学園も僕たちを確保しておきたい」

キラの言葉にアスランが引き継ぐ形で話す。

「さらに貴重な男でのIS起動可能な人材の研究、多分、解剖はされないだろうが、データ収集は確実に行われるだろうな」

キラ達の説明を聞き、千冬は感心したように答える。

「そのとおりだが、この限られた情報だけでほぼ正解に近い答えを導き出すとはな。頭はいいようだ」

千冬は一拍置いてから重要な話しに入る。

「君達の持ち物を検めさせてもらった。その中にナンバーの無いISが発見された。467機すべてに施される筈のコアナンバーの無いIS、つまりノーナンバーのISがあつたのだ」

それを聞いた瞬間、キラとアスランは驚きを露にした。

千冬はそれに構わず話を続ける。

「さらに2つのISを調査したがこの世界では考えられないオーバーテクノロジーのオンパレードだった。バリアエネルギーをほぼ無制限かつ無尽蔵に生み出すハイパーデュートリオンエンジン、一定の物理攻撃を無視するVPS装甲、天候に左右されず大出力荷電粒子を吐き出すビーム兵器とまあ、出鱈目にも程がある代物だった」

それを聞いたキラ達は思い当たる単語に反応する。

どれもC・Eの世界では聞いたことのあるシステムなのだ。

「つまりだ。君達は男でISが操縦でき、さらに大国の純軍事力に

匹敵する戦闘能力を秘めたISを所有している。国家や企業が君達をほおつてはおくまい。そこでIS学園と日本政府は戦争の火種である君達に自由国籍権という権利を与え、何処の国家、企業や組織にも属さないという立ち位置で戦争回避を図った」

それを聞いた瞬間、キラとアスランは頭を抱えて唸ってしまった。

自分達が下手をすれば戦争を誘発する火種であり、たった1人で国家とすら戦える能力を有する存在になってしまったのだ。

「まるで危険人物扱いですね」

アスランの皮肉ないい方に千冬が現実を突きつけた。

「解ったか？ 自分達の立ち位置がどれ程危ういかが」

「ええ、考えたくないほどに」

キラも答えるがその言葉には何時もの力強さは感じられない。

「しかし、各国が猛反発してな、『日本がISの技術を独占している。アラスカ条約に違反している』と言われては日本政府も仕方なく君達の所属を決めることになった」

さらに投げ込まれた爆弾によりキラとアスランはさらに落ち込んだ。

「現在は未定だが、お前達は何れ何処かの国家に属する事になる。異論は？」

その質問にキラとアスランはヤケクソの皮肉を吐き出す。

「俺達に決定権は無いんでしょ？ その質問は無意味ですよ」

「聞くだけ効率的ではないですよソレ」

その言葉を聞き、千冬はこれからのスケジュールを言う。

キラとアスラン、千冬と真耶の4人は格納庫にいた。

「それでは、ISの起動を行う。ISを装着するときは念じるように装着しろ」

「「はい」」

キラとアスランは目を閉じた。

その瞬間、キラとアスランの頭の中にISの情報が流れ込んできた。

「解る。ヤッパリ、フリーダムだ。フリーダムと変わらない……その操縦方法や兵装さえ」

「ああ、こいつはジャスティスだ……不思議な気分だ……まるでジャスティスが語りかけているみたいだ」

そう2人が呟いた瞬間、2人は光に包まれる。
そして光が晴れるとそこにはメタリックグレーのフリーダムとジャスティスが現れた。

「外見はフリーダムを小さくしたみたいだね……」

キラの言葉にアスランもうなずく様に同意した。

「ああ、何だかジャスティスになったみたいだ……」

そう呟いた瞬間、目の前にフリーダムとジャスティスのOS画面が浮かび上がる。

その瞬間、フリーダムとジャスティスのメタリックグレーから色が浮かび上がる。

フェイスシフト装甲を展開

そう表示されている。

「ますますフリーダムだ」

キラの言葉に千冬は指示する。

「感嘆に浸ってないでカタパルトまで歩いていけ」

そう言われキラとアスランは頷くとカタパルトまで歩いていく。

その姿を見た真耶は驚きの声をあげる。

「ま、まさか今日起動したばかりなのにこんなに簡単にかつ完璧に歩行ができるなんて……」

その真耶の驚きに千冬は内心同意した。

（彼らは確かMSという兵器のパイロットだ。操縦の違いに最初はもたつくと踏んでいたが……こうもアツサリ歩行ができてしまうと……しかも完璧だ。新人のヨチヨチ歩きとは訳が違う。完成された歩行だ。最高峰のIS操縦者になれば、基本で実力が理解できるがまさかここまでとはな）

ある種の感動にも似た思いを抱きながらキラの発進を見届ける。

キラがカタパルトのロック位置まで移動を完了させると、ロックがかかり足元が固定される。

『カタパルトのロックを確認、ヤマト君、発進どうぞ』

真耶の発進許可が下りた。

後は飛び立つのみ。

キラはガンダムのフェイスに隠れた瞳を静かに閉じ、見開きながら言う。

「キラ・ヤマト、フリーダム、行きます！！」

その言葉が言い終わると同時にカタパルトはキラを勢いよく光さす世界へと解き放った。

キラが空へ飛び上がりバレルロールをしながら上昇し、約40メートルの所で静止した。

その頃、管制室ではその様子を見ていた真耶は驚きの声を上げていた。

「ウソ……信じられない……初めてISを装備した人間のする芸当じゃないです。あんな鮮やかなバレルロール上昇をやったのけるなんて……」

「ああ、だが目の前の出来事は現実だ。ヤマトはフリーダムの限界を理解した上で機体を自分の手足の様に扱っている。機体特性をすべて熟知している証拠だ」

モニターでその様子を見ていたアスランは当然の物を見ている様な様子であることから2人は理解した。

アスランもまた同じことが可能なのだという事を。

キラが上空で静止していると目の前にウィンドー画面が開き、真耶の顔が映し出される。

『ヤマト君、先ずはターゲットシューティングを行います。標的は50機のシーカーです。シーカーはオートで動き回り、攻撃も行います。ヤマト君はこれを制限時間内にできるだけ多く撃破してください。質問は？』

「いえ、ありません」

『では、訓練開始!』

その言葉と共にシーカーは高速で動き出す。

キラも背中ドラグーンを全機パージした。

その瞬間、蒼い8枚の翼は不規則にキラの周りを飛び交い、高速で四散した。

そして、キラの手元に粒子が輝きライフルが両手に握られる。

次の瞬間、腰の折り畳まれていた砲身が前に伸び、両手のライフルを構える。

「ハイマツトフルバースト!!」

その号令と共にフリーダム砲身から緑、赤、黄の合計5つの砲撃が放たれる。

そして8機のドラグーンからは緑のビームがマシンガンの様に吐き出される。

その瞬間、50機のシーカーは全機破壊される。

ソレを見ていた真耶は啞然としながら呟く。

「さ、3秒……そんな事って……」

「正確で出鱈目な砲撃だ。50機のシーカーを同時ロックオンして撃破、いや最早狙撃の域だな。多分、ヤマト位だろうこんな芸当ができるのは。普通の人間ではあんな膨大な情報処理能力や反射速度はありえない」

その言葉に真耶が疑問を投げかける。

「それはどうしてですか？」

その真耶の疑問に詳しく答える千冬。

「50機もいるシーカー全ての動きを把握し、かつシーカーの予測進路を計算、そこから導き出される最適な砲撃位置に誘導兵装の移動と同時に全シーカーにロックオンを行いつつ自分も砲撃に最適な位置に高速移動し砲撃を行う。人間の反応速度を超えている。口で言うのは簡単だがコレを実戦の場でやれといわれれば私でも不可能だ。同時並行処理作業が多すぎて対応できない。こういう脳味噌をしているのか疑いたくなる」

その説明に言葉を失い何もいえない真耶を他所に千冬はキラに命じる。

「ヤマト訓練は終了だ。あがっていいぞ。次はザラの訓練に入る」

『了解』

キラはIS格納庫に着陸するとISを解除する。

その瞬間、PS装甲がダウンし、メタリックグレーにカラーチャンジすると胸部装甲が開き上半身が下に倒れこむ様に外れる。

ガンダムフェイスのマスクとヘルメットも外れる。

「ふう」

キラはフリーダムから下りるとため息を吐きながら一息をつく。

「お疲れ、キラ」

ジャステイスを装備したままのアスランが語りかけてくる。

「いや、そこまで疲れては無いけど。次はアスランの番だね。頑張つて！」

キラの応援にアスランは手を挙げて答える。

アスランもまた鮮やかな歩行でカタパルトまでたどり着く。

何とか気を取り直した真耶がアスランの発進を許可した。

『カタパルトのロックを確認、ザラ君、発進どうぞ！』

「アスラン・ザラ、ジャステイス、出る！！」

アスランもまたカタパルトから勢いよく飛び出し、空を鮮やかに舞う。

アスランの訓練内容もまた50機のシーカーの破壊だった。

『それでは、訓練開始！』

その掛け声と共にアスランは左腰のビームサーベルを引き抜き右腰のビームサーベルと連結させアンビデクストラス・ハルバード形態にする。

そして、シーカーの密集地帯に超高速で接近するとビームサーベルの両刃を最大出力に切り替えた。

その瞬間、桃色の光刃は片刃が15メートルまで伸びる。

アスランはソレを振り回し周囲にいたシーカーを切り刻んでいく。

「おおおおおおおおお！！」

アスランの雄叫びと共にその刃の舞は美しくも獣じみた代物になっていく。

シーカーの反撃はあったがアスランはソレを鮮やかな機体制御で華麗にかわしシーカーを切り刻む。

全てのシーカーを刻み終わる頃にはグラウンドはズタズタになっていた。

ソレを見ていた千冬は啞然とした。

「5秒……接近戦が得意とは言え早すぎます！！」

その言葉に千冬はまたも解説を始めた。

「ザラの奴もとんでもない処理能力だ。乱戦の中、全シーカーの動

きを把握しつつ双刃剣を的確に敵に当てていた、オマケに、シーカの攻撃タイミングすら予測し攻撃と回避を同時に行っている。さらに接近戦型熱量兵器の重量は全てが柄の部分に集約されている。手に伝わる感覚は柄の重さのみで、刃があるという実感が湧きにくく、下手をすれば使い手自身を切りかねない。そのため未熟な者が持つ武器としては甚だ不適當だが、ザラは簡単に扱いこなしている。私ですら雪片を使いこなすのにソレ相応の訓練はしたぞ」

ソレを聞いた瞬間、とうとう真耶が質問をしてしまった。

「えっと……2人ともIS動かすの今回が初めてですよね？」

「その質問をしたくなる気持ちは解るが現実が目の前にある」

こうして、キラとアスランのIS起動訓練は幕を閉じた。

3話 出会い

IS実機演習ら3ヶ月が経過した。

キラとアスランの2人は自由国籍をもらい、国際運転免許証を習得しそれぞれ車を持つことができた。

キラの車はレクサスのISFでカラーリングはエクシードブルームータリック。

アスランはマツダのRX-8でカラーリングはベロシティレッドである。

それぞれ車で街中を散策しながらキラはPCショップでPCとパーツを購入。その後、町中のコーヒースhopを巡り、数種類の豆と手動式ミル、ドリッパーとフィルター、コーヒースイフォーンを購入した。

アスランはジャンクショップで機械のパーツを買い、その後は本屋に立ち寄り、機械工学の専門誌を購入した。

取り合えずキラとアスランは寮に戻り、明日の登校の準備を開始する。

「アスラン、入学前の参考書と授業で使うテキストは鞆に入れた？」

「ああ、必要だからな。入学前に読む参考書は簡単に理解できた。」

まあ、アレは簡単なISの説明だったから覚えるのは簡単だったよ。しかし、覚えるのに1日を費やした」

アスランの言葉にキラも同意する。

「うん、そうだね。MSの初期整備マニュアルなんか紙に直すとアレの5倍の厚さだからね」

そんな事言いながらキラとアスランは明日の準備を終えベッドに潜り込んだ。

キラとアスランは自分達のクラスの教室に向かう。

「同じ1 - 1で良かったね。アスラン。でもなんか作為的な物を感じるよ」

そのキラの言葉にアスランは頷く。

「ああ、織斑教諭が担任のクラスと言う事は俺たちの監視とデータ収集だろうな」

その言葉にキラは頷く。

「ヤッパリね……三ヶ月ではデータは取れなかったか。それにしても……周りの気配というか目線が気になるね」

キラの言葉にアスランも同意しながらキラを諭す。

「その意見には同意だな。だが、仕方が無い。俺達やもう一人の織斑教諭の弟しか男はいないんだ。それに、纏めて監視しデータを取った方が効率はいいからな」

とりあえず色々な目線を感じながらもキラ達は教室に入る。

自分の名札が浮かんでいる机に鞆を置き座る。

しばらく待っていると真耶が入室してきた。

「皆さん、入学おめでとう。私は副担任の山田 真耶です」

自己紹介を開始し、学園の概要を説明する。

自己紹介が始まり最初からアスランが自己紹介になった。

アスランは静かに立ち上がり、名前を述べる。

「皆さん初めまして。自分の名前はアスラン・ザラといいます。1年間、よろしく願います」

『き……きゃあああああああああああああ……!!』

その自己紹介の瞬間、女子が色めき立つ。

「男……! しかも美形でクール系……!」

「カッコいい!!」

「ザラ様~~~~!!」

「アスラン様~~~~!!」

口々に黄色い悲鳴を上げる生徒達にアスランは若干引き気味になる。

(す、凄いな……)

アスランは内心そう思いながら着席する。

女子の自己紹介が順当に終わり、キラの順番が回ってきた。

キラも静かに立ち上がり、自己紹介を開始した。

「皆さん初めまして、僕の名前はキラ・ヤマトです。よろしく願
いします」

その瞬間また、女性人が色めき立つ。

『きゃああああああああああ!!』

「美形第二弾!! しかも紳士系!!」

「有難う神様!! 私の学園生活はバラ色です!!」

「キラ様~~~~!!」

「ヤマト様~~~~!!」

キラも内心、引き気味になる。

(す、凄いね…… コレは…… 女子のテンションについていけない)

その様子を見ながら織斑　一夏は考え事をしていた。

(俺以外にISを起動できるヤツが2人もいるのか、しかも超美形。アイドルと言っても差し支えないルックスしてんな…… しかも2人とも身長もソコソコ高いし、意外ガツチリした体つきだな…… まあ、何にしても男が3人、仲良くできそうだ……)

一夏がそんな事考えていると真耶に呼ばれて思考の海から引き上げられた。

「織斑君、織斑君！」

その声に驚きながら答える一夏。

「！？　は、ハイ！」

「次、織斑君の自己紹介なんだけど？」

そう言われて慌てて立ち上がる一夏。

「俺の名前は織斑　一夏です。よろしく」

『き、きゃあああああああー!!』

「美形第三弾！！ しかもワイルド系！！」

「私、地球に生まれてきて良かった~~~~！！」

一夏もキラ達と同じように内心、引いていた。

（オイ、オイ、マジかよ……）

何だかんだ自己紹介も終わり休み時間の時、キラとアスランは一夏の机に近づく。

「君が織斑君？ 僕はキラ・ヤマトって言うんだ。よろしく」

「俺はアスラン・ザラだ。よろしく織斑」

そう自己紹介をするキラとアスラン。

「ああ、ヤマトにザラな改めて俺は織斑 一夏、よろしく。この学園、男は俺達だけだろ？ 仲良くやろうぜ。ソレと俺の呼び方は一夏でいい」

「それじゃ一夏って呼ぶね。僕の事もキラでいいよ。よろしく、一夏」

「遠慮なく呼ばせてもらう。俺の事はアスランと呼んでくれよろしく、一夏」

そっついお互い握手を交わす。

その光景を見ていた女子たちは遠くから騒ぐ。

「アレが男の友情ってヤツ？」

「絵になるわね……」

休み時間も終わり、早速授業をかいしする。

真耶が教団に立ち教鞭をとる姿は正に教師の姿だった。

キラもアスランも真面目にデスク備え付けのタッチスクリーン型画面に筆記していく。

「とまあ、ISに関する説明はここまです。この時点で何か質問はありますか？」

その質問に誰も挙手しなかった為に真耶は誰かを当てることにした。

「んーそれじゃあ、織斑君、何か質問はありますか？」

その問いかけに一夏は脂汗を掻き始める。

そう、彼は入学前必読のテキストを読まずに捨ててしまい基本知識すらない状態でここにいるのだ。

当然、何処がどのように解らないと言う具体的な質問ができず、全体的に解らないと言う勉強につまずく典型例をやらかしているのだ。

「えっと……あの……その……」

「？ 何ですか？ 織斑君？」

観念したのか一夏は蚊の羽音並みに小さな声で答えた。

「全体的に解りません……」

「へ？」

もう一夏はヤケクソ気味に言う。

「全体的に解らないんです」

ソレを聞いた真耶は唸るような声を上げた。

「ぜ、全部……ですか……」

「はい……全部です……」

その言葉に千冬が一夏に語りかける。

「織斑、お前、入学前に読むテキストを読んでいないのか？」

その質問に一夏が答える。

「ああ、あの分厚い教本？ 読まずに捨てたけど？」

その言葉を聞いた瞬間、千冬は強烈な拳骨の一撃を一夏の頭に見舞った。

「イツ！？」

「馬鹿者！ あれに必読と書かれていただろうが。まったく……ザラ、この馬鹿にESについての基本を教えてやれ」

アスランは千冬の指示に従い暗証した事を言う。

「ハイ、IS『インフィニット・ストラトス』は宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォームスーツです。ISを形成するパーツは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されています。また、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高いが故に『究極の機動兵器』と呼ばれています。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることは殆どありません。また、ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出すことができ、さらに、ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ実行へと移せます」

アスランの説明に感心したように頷く真耶と対照的に当然だと頷く千冬。

「そうだ。次にヤマト。ISの世代説明を行え。」

そう言われキラも淀みなく答える。

「ISの世代には大きく分けて、第一世代から第三世代のISに分類されます。第一世代型は兵器としての完成を目指したカテゴリーで現在は殆どがコアを抜き取られ退役しています。第二世代は後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代で、現在最も多く実戦配備です。第三世代は操縦者のイメージインターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代で、未だ実験機の域を出ない事からも実戦機とは言い難くテストベースの機体が殆

どです」

「その通りだ。織斑、コレくらいは教本を暗記していれば誰でも理解できる内容だ。後でテキストは再発行してもらえ」

こうして、キラ達は1時間目の授業を終えるのだった。

4話 男達の誇り

3時間目の休み時間、キラ、アスラン、一夏は一夏の机を囲みながら話していた。

「災難だったね。一夏」

キラの慰めの言葉に一夏は項垂れて答える。

「いや、まったくだ。しかし、お前らよく覚えていたな」

その言葉にアスランが事もなく言い放つ。

「いや、1日あればアレくらい簡単に暗記できるだろ？」

その言葉にキラはウンウンと頷くが一夏はありえないと言う様に返す。

「ソレはお前らだけだろ？」

その言葉にキラがさかさ反論する。

「覚えて理解したいと思う気持ちの問題だと思うけどな。一夏だって好きなものに熱中すると自然と覚えるでしょ？ 様は覚えたい理解したって思っただけで初めて勉強できると思う。テストでいい点数取れたかったらカンニングした方が早いから」

キラの物言いに呆れながらもアスランが付けくわれる。

「キラの最後の言葉はどうかと思うが、確かにキラの言葉にも一理ある」

その言葉に考えを巡らす一夏。

彼はキラやアスランの様に成り行きでこの学園に入学した。

しかし、ソレはあくまで状況に流されて入学したに過ぎない。

キラやアスランの場合は状況の中で自分が選択できる限られた選択肢の中から選び、決断してここに来ている。さらに、自分の一定の自由と権利を得る為にこの学園に入学した。

立ち位置からして歴然の差が生まれるのも無理はないだろう。

キラ達の決断力や行動力が優れているのは、あくまで経験に裏打ちされた実績の積み重ねが今のキラとアスランを支えているに過ぎない。

キラやアスランは過酷な戦場の最前線で生き残ってきた兵^{つわもの}なのだ。

それと一般人である一夏を比べるのは間違っている気がする。

その時だった、突如、金髪のロングヘアーの女子が歩み寄ってきた。

「ちょっとよろしくて？」

その可愛い声にキラ、アスラン、一夏はそれぞれ反応する。

「え？」

「ん？」

「はあ？」

その反応に少女はありえないと言わんばかりに言い放つ。

「まあ！？ 何ですの、そのお返事！？ 私に話しかけられるだけでも光栄なのでそれからそれ相応の態度と言うものがあるのではないのかしら？」

3人は突如現れた少女に戸惑いつつ、一夏が代表して質問する。

「悪いな……俺、君の事知らないし……」

その一夏の言葉が癪に障ったのか少女は喚く。

「まあ！？ 私を知らないのですの！？ イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを！？」

しばらく一夏は熟考した後、セシリアに問いかけた。

「なあ、一つ質問いいか？」

「ハン、下々の者の要求に答えるのは貴族の務めですわ。よろしくてよ」

セシリアは優雅な振る舞いで一夏の質問に答えようとする。

「代表候補生って……何？」

その瞬間、聞き耳を立てていた周囲の女子は盛大にすっ転び、セシリアは転びそうな状態を自前の優雅さで押しとどめた。

キラは苦笑いをしながら右人差し指で頬を掻き、アスランは顔に右手をやりながらヤレヤレと言いたげに頭を左右に振った。

代表候補生を知らない一夏にキラが耳打ちで補足説明を行う。

「代表候補生って言うのはね、各国のIS操縦者の候補生として選出される人達で、国家やスポンサーたる企業から専用ISを与えられる。その国の代表選抜に参加することができる人達の事だよ」

その補足説明を聞いて一夏は理解した。

「そいつは凄いな……」

感心する様に言う一夏にセシリアは優雅な振る舞いで自慢する。

「そう！！ 限られた、一握りのエリートですわ！！」

そっくり終わった瞬間、チャイムが鳴り響く。

「お話はまたの機会に……」

そう言いながらセシリアは自分の席に戻った。

LHRの時間、クラス対抗戦のクラス代表を決める事になった。

「先生、代表は織斑君がいいと思います！」

一人の女子の発言に他の女子も同意した。

「い！？ 何で俺！？」

一夏が慌ててそう言うが周りの雰囲気が一夏が代表でいいだろうと言う雰囲気になっていた。

そこで慌てた一夏はこう言った。

「先生！ 俺はキラかアスランを推薦します！！」

突如振られたキラとアスランは困惑する。

周りの女子もソレもアリかも、と言う雰囲気になる。

そんな雰囲気を打ち破る様にセシリアが叫ぶ。

「納得がいきませんわ！！」

そう言いセシリアは勢いよく立ち上がり言い放つ。

「その様な選出は認められませんわ！ 男がクラス代表なんていい恥曝しですわ」

その言葉にキラとアスラン、一夏はムスツとする。

「この様な屈辱をこのセシリア・オルコットに1年間味わえとおっしゃるのですか！？ 大体、文化としても後進的な国で過ごさなければならぬ事事態、耐えられない苦痛ですわ！！」

なおも続くセシリアの言葉に一夏が言い放とうとした時だった。

「い……」

「イギリスにも大した国の自慢なんか無かったと思うけど？ 不味い料理位しか自慢が無いでしょ？ 後、あるのは無駄に高いプライドくらいですか？」

キラの言葉を付け足すようにアスランが続けざまに言う。

「後、有名なのがスピットファイアとローバー位か？ 思った以上に少ないな？」

その言葉にセシリアが切れた。

「あ、あ、あ、貴方達！？ 我が祖国を侮辱しますの！？」

その言葉にキラは冷静に言い放つ。

「最初に日本を侮辱したのは貴方でしょう？ 侮辱を侮辱で返されるのが嫌なら侮辱を口にしなければいい」

アスランもまた言い放つ。

「ソレにな、友が侮辱されているのを黙って見ている程、俺達は大
人しくも優しくも無い」

思わぬ反撃にセシリアはワナワナ体を震わせながら高らかに3人を
指差し言い放つ。

「決闘ですわ!!」

その言葉に一夏が負けじと言い放つ。

「おお、いいぜ。四の五の言うより解りやすい」

セシリアはズカズカと歩み寄り一夏の前で止まる。

「もし、勝負に手を抜いたら小間使い！　いいえ、奴隷にして差し
上げますわ!!」

「ハンディはどの位つける？」

一夏の質問にセシリアは間の抜けた声を出し、鼻で笑い飛ばしながら
言う。

「あら、早速お願いかしら？」

一夏はその言葉を否定する様に言う。

「あ、いや、俺がどの位ハンディをつけるのかなと」

一夏の言葉に教室中の女子が笑い出す。

「織斑君、それ本気で言っているの？」

「男が女より強かったのって大分昔の話よ」

その言葉にキラとアスランが柔らく切り捨てる。

「それはISが女性しか使えないからでしょ？ でも、ここにはISを使える男が3人いるよ」

「後は経験と努力と発想力が勝敗の差になってくる。その固定した考えは捨てた方がいい」

その言葉に女子が押し黙った。

柔らく否定された筈なのに、キラやアスランからは何か得体の知れない物を感じたからだ。

ソレは、キラやアスランが抑えていた戦う者の姿勢、戦士としての闘気がにじみ出ていたからに他ならない。

ソレを正確に理解できていたのは千冬位だろう。

一夏の幼馴染の篠ノ之 箒は何となく理解していると言った所だろうか。

「じよ、上等ですわ！！ で、3人の誰が相手をなさいますの？ 何なら3人同時にかかって来ても宜しくてよ？」

それに若干、恐れながらも言い放つセシリアは中々勇気があるだろう。

何せ、押さえているとは言え、最前線で戦い続けた歴戦の勇士の闘気を正面から浴びているのだ。実戦経験があるとは言え、殺し合いの戦場を体験したこと無いセシリアがソレに耐えているのだ。評価に値する。

そこで突如、提案したのが千冬だった。

「織斑、お前がオルコットと戦え。ヤマトかザラではオルコットの勝率は億に一つもありえない」

その言葉にセシリアが千冬に詰め寄る。

「そ、ソレはどう言う事ですか!？」

その言葉を千冬は冷静にかつ冷酷切り捨てた。

「ヤマトとザラの実力は全盛期の私と互角の実力だ。今の私では勝率が4割にまで落ち込む。正直、今のお前では荷が重い。相手にすらならん。瞬殺だ」

ここまで言われればいっそ清々しい言い方で切り捨てる千冬。

周りは爆弾を投げ込まれた様な動揺が支配する。

「う、ウソ……あの千冬様の全盛期と互角?」

「あの公式試合で負けたことがなく、大会で総合優勝を果たした世界最強のIS操縦者、織斑先生と互角?」

その中で一番の衝撃を受けたのが一夏と筈だった。

彼らは千冬の強さを一番良く知っている人物だ。

その千冬自身の口から互角の実力者と称されるキラとアスランを見て千冬に質問する。

「それは本当か！？ 千冬姉！？」

「織斑先生だ、馬鹿者」

そう言いながら一夏の頭に拳骨をくれながらセシリアに質問する。

「オルコット、ターゲットシューティングのレベル5での記録は？」

ソレを聞かれたセシリアは胸を張って高らかに宣言する。

「15秒で50機、全機撃墜ですわ」

ため息を吐きながら千冬は更なる爆弾を投げかける。

「ヤマトのタイムは3秒で全機撃破だ。正確には3.25秒。ザラの場合は5秒で全機撃破だ。因みにヤマトとザラが挑戦したのはレベル10、最高難易度。モンド・グロッソの大会基準設定だ。私ですら6.54秒はかかる代物だ」

ソレを聞いた瞬間、オルコットは千冬に噛み付く。

「そんなのあり得ませんわ！！」

「証拠はあるぞ。その時の映像が残っている。更に管制を行ったのは私と山田先生だ。お前にウソをついても徳にはならん」

「な、な、な、な、な、」

言いよどむセシリアに止めを刺す言葉を千冬は放つ。

「ならオルコット、お前、50機もいるシーカー全ての動きを把握し、かつシーカーの予測進路を計算、そこから導き出される最適な砲撃位置に誘導兵装の移動と同時に全シーカーにロックオンを行いつつ自分も砲撃に最適な位置に高速移動し砲撃を超高速同時進行で行う事ができるか？ コレがどれだけ出鱈目でふざけた事か射撃戦の得意なお前なら理解できると思うが？ ソレが無理なら乱戦の中、全シーカーの動きを把握しつつ双刃剣を的確に敵に当て、シーカーの攻撃タイミングすら予測し攻撃と回避を同時に行えるか？」

ついにセシリアは諦めた。

正直、人間業では無いのだ。

「まあ、いいですわ」

こうして、一夏対セシリアの戦いが実現した。

4話 男達の誇り（後書き）

どうしよう、オリジナル種目を作ってしまった……

ハイ、反省終了!!

次回はキラとアスランと箒による特訓です多分……

5話 訓練と疑問と

セシリアに決闘を申し込まれて2日目、キラ、アスラン、一夏、第4人は千冬の許可を取り、放課後の空いている時間帯に第3アリーナの使用許可を取り付けた。

「まずは、一夏に専用のISが届いた。今から完熟起動を行い、フォーマットとフィッティングを行う。今回の訓練は機体のフォーマットとフィッティングを行うと同時に機体特性を実戦的な訓練の中で学んでいく」

アスランは腕組をしながら一夏に今回の訓練内容の説明を行う。

続いてキラが一夏のISの説明を行う。

「一夏の専用ISは白式、機種は第4世代型ISに分類。『ISを使える男』である一夏の為に用意された専用機だよ。この機体開発には僕とアスランの開発した新機能も盛り込んである。主に僕が関わったのはソフト面、アスランが関わったのはハード面だね。どう言う機能なのかはフォーマットとフィッティングが完了してからの楽しみ」

その言葉に一夏は驚きの声を上げる。

「凄いな2人共！！ ISの開発もできるのか！？」

第4も何か納得するように言う。

「それでか、2人が休んでいたのは」

その言葉にキラは頬を掻きながら苦笑いし、アスランは目線を明後日の方向を向いた。

種を明かせば、フリーダムとジャスティスのデータバンクの中にISに流用できそうなデータが存在していた為、千冬と真耶に頼み込み、機体搬入を1週間無理やり繰り上げさせたのだ。その時、開発人に2人が設計した物を提出したら採用された。

そうして2日前に届いた機体と部品をアスランが貫徹突貫作業で組み上げ、OSの調整をキラが不眠不休で行ったに過ぎない。

キラやアスランはIS学園に入学する前からISの情報やその機械工学的な理論、ISに使われているOS、各企業や各国家のIS開発史や開発状況を調べ上げた。

無論、この中にはハッキングと言った違法行為も含まれる。

こうして手に入れた膨大な資料を持ち前の記憶力と分析力をフルに使い習得した。

ISのコア以外ならキラ達は組むことが出来るレベルにまで極めた。

ここでもキラとアスランのMS開発や整備の経験が生かされる。

正直、違法行為のオンパレードな為、余り大ぴらに自慢できないのが難点だ。

何せISは国家や企業が管理している。

つまり、他国や他企業に知られない様、ネジ1本にいたるまで綿密

な管理運営が行われている。

OSにも何重にもプロテクトが掛かっている。

ソレを千冬やIS学園の名を使って横から割り込ませ無理やり収得したり、OSのロックをバレない様こじ開けたりした。

更に2人は国家や企業の管理下にある専用機を弄くり倒したのだ。

下手をしなくともブタ箱でクサイ飯を長く食べなければならない行為だ。

ソレを知らず無邪気にハシャぐ一夏を見て罪悪感に囚われる2人だった。

なぜ2人が危険を冒してまで一夏の専用機をカスタマイズしたかと言えば、一夏一人を決闘に行かせる申し訳なさとセシリアの決闘に勝ってほしいと言う願いから今回の暴挙に打って出たのだ。

アスランとキラはこの話題から逃れる為に話を元に戻した。

「それでは一夏、ISに乗り込んでくれ。乗り方は機体に背を預ける様にな、後はシステムが最適化してくれる」

アスランの指示に従い乗り込む。

「不思議な気分だ…… ISが俺に語りかけてくる感じがする。解る。コイツの事が解る……」

一夏の独白の終了と同時に一夏の胸部、腹部に装甲が展開、装着、両腕のアームは回転しながら飛び出て一夏の意味に反応して動いた。

A C C E S S

機械の音声と共に一夏の目の前に次々とウィンドーが展開していく。

『パワーエクステンダー起動により、シールドエネルギー最大値、700↓1400』

と記されていた。

「パワー……エクステンダー？ 聞いたこと無いな……」

「コレか？ ヤマトとザラが開発した新システムは？」

一夏と箒の言葉にキラが頷く。

「うん、大容量シールドエネルギーパック、『パワーエクステンダー』ってって一夏の胸部装甲についてるのがそつだよ」

一夏と箒はマジマジと一夏に取り付けられている装甲を見つめる。

アスランは一夏に歩み寄り語り掛ける。

「どうだ？ 体に違和感は無いか？」

その問いかけに一夏は力強く答える。

「問題ない。今からでも飛び立てそつだ」

その言葉に頷きながらアスランは一夏に命じる。

「ならカタパルトまで歩いて先に発進しろ。俺も後から行く」

「解った」

一夏はアスランにそう答えると危なげ無い足取りでカタパルトまで歩いていく。

「キラ、管制を頼む」

アスランの言葉にキラは意地の悪い笑みをしながら言う。

「ウン、解った。アスラン、あんまり苛めないでよ?」

その言葉を聞いてアスランは皮肉を湛えた顔をして言い放つ。

「安心しろ、戦いの素人相手に無茶はしないさ。お前みたいにな」

ソレを聞きながらキラは管制室に入室した。

キラが管制室のコンソールを操作し、一夏に通信する。

『白式のカタパルトオンラインを確認、カタパルト権限を白式に譲渡、進路クリアー、白式発進どうぞ!』

その言葉と共に一夏は膝を少し折り曲げ、カタパルトを起動した。

一夏はカタパルトに押し出されるようにアリーナの空へと舞い上がっていった。

ソレを見送ったアスランは右手を掲げISを起動した。

その瞬間、アスランは光に包まれ、ジャステイスに変身した。

「な！？ フルスキン 全身装甲！？ しかし、こんなIS見たことが無い！！」

箒が驚きの声を上げるのも無理が無いし見た事も無いのも当たり前だ。本来ならフリーダムやジャステイスは存在しないISなのだ。

アスランは箒の驚きの声を背に受けながらカタパルトまで歩み寄る。

ジャステイスの足がカタパルトにロックされる。

『ジャステイスのカタパルトオンラインを確認、カタパルト権限をジャステイスに譲渡、進路クリアー、ジャステイス発進どうぞ！』

「アスラン・ザラ、ジャステイス。出る！！」

そう言い、膝を少し折り曲げ、カタパルトを起動させた。

メタリックグレーのジャステイスはカタパルトから押し出された。

アスランは鮮やかなバレルロールをしながら思考制御でPS装甲を起動させる。

その瞬間、全体のメタリックグレーは鮮やかなローズレッドにその

姿を彩る。

機体は超高速起動に至り、機体の間接部は白銀に光輝く。

この現象は、間接部PS装甲素材作動値が極大値にされた際の内部骨格部材の余剰電力を光子の形で放出されて間接部に掛かった負荷を外部に逃す役割がこの発行現象を引き起こしている。

特に、ストライクフリーダムにこの現象が如実に現れる。

これはキラとアスランの戦闘スタイルの違いからである。

キラの戦闘スタイルは超高速スピードで敵を翻弄しヒットアンドアウェイで敵を倒すのが得意分野に対し、アスランは超絶的な技量と奇抜な戦術で相手を出し抜き倒すスタイルを取っている事から余りこの現象にはならない。

アスランは一夏の前で静止すると一夏に語りかける。

正直、一夏は驚きを隠せない。

いきなりメタリックグレーの全身装甲フルスキンISがバレルロールしながら鮮やかなローズレッドに染まったのだ。驚くなど言うほうが無理な相談だ。

「待たせたな、一夏。キラ、何時でもいいぞ。始めてくれ」

一夏はその声でそのISの操縦者がアスランである事をようやく理解できた。

『それじゃあ、一夏対アスランの模擬訓練を開始するよ。模擬訓練、スタート!!』

その声と共にアスランはMA-M1911 高エネルギービームライフルを構え、一夏に目掛けて発砲した。

緑色の光弾が一夏目掛けて飛んでいく。

「うおわ!?!」

一夏は何とか防御をするが間に合わず肩部装甲を破損させられる。

ジャスティスのビームライフルの威力なら装甲破損どころかシールドを貫通し、装甲溶解、貫通して地面に穴が開く位の威力があるが、アスランはビームライフルの威力を最低に設定し発砲したのだ。

アスランにとっては牽制射撃以下の攻撃でも戦闘経験の無い一夏にとっては正に恐怖だ。

「戦いの場で止まる馬鹿がいるか! 動きながら考えろ! 思考と行動を止めるな!」

アスランは一夏に激を飛ばしながらも射撃を止めない。

その射撃は一夏がギリギリ避けられる範囲での射撃だ。

アスランにとっては手抜きもいい所の手加減だが撃たれる一夏にしてみれば溜まったもんじゃない。

緑のビームが掠め、シールドを削るたびに恐怖に怯え、冷や汗を流

しながら何とか対応していた。

しかし、バリアエネルギーは問答無用で削られていく。1400もあったエネルギー残量は今や900にまで削られた。

「お前のISは飾りか！？ 反撃する位の気骨を見せろ一夏！」

容赦無いアスランの射撃を掻い潜りながら一夏は思考制御で白式の兵装を調べる。

「装備、装備は！？」

ウィンドー画面には刀が表示されていた。

「コレだけか！？ でも無いよりはマシだ！」

そついい、刀を展開させ、果敢にもアスランの射撃を掻い潜り接近戦を挑もうとする。

「いい判断だ！ だが甘い！」

そつ言いながらアスランはビームをフルオートに切り替え、乱射する。

「うわ！？ クソ！！ 近づけね！！！」

焦る一夏にアスランの激は尚も飛ぶ。

「こんな温い牽制射撃で怯んで如何する！？」

アスランにとっては温いかも知れないが一夏にとっては正直、鬼の様な弾幕だ。

「クソ、このままじゃシールドエネルギーを削られるだけだ。こうなりゃ、一か八か!」

そう言いながらアスランの牽制射撃を数発もらいながらもアスランに突っ込んでいく一夏。

「ほう、シールドエネルギーを削られるの覚悟で突っ込んでくるか。いい覚悟だ」

その瞬間、一夏のISの形状が変化した。

「何だ!?!」

「ようやくか……」

突然の事に戸惑う一夏にアスランは笑みを浮かべる。

フォーマット、フィッティング終了

そんな文字が浮かびあがる。

「コレでその白式はお前の機体になった」

アスランがそう言うとビームライフルをリアスカートにマウントする。

一夏の目の前のウィンドーに

近接特化ブレード、雪片弐型

と表示される。

「雪片……弐型……？ 雪片って、千冬姉が使ってた武器だよな？
姉さんと同じ刀が悪くない。いや、最高だ」

その瞬間、刀の刀身は二つに割れ折曲がると中央から青白い光の刃を形成した。

アスランはその様子を見ながら右マニピレータをレフトスカートに装着されているビームサーベルに手を伸ばしサーベルのグリップを掴むとソレを一気に引き抜いた。

その瞬間、桃色の光刃が煌きを放つ。

「白式の基本戦術は高速起動にて相手の攻撃を避けつつ翻弄し接近、雪片のバリア無効化特性を持つその剣で敵のシールドを切り裂く事がメインだ」

そう言いながらアスランは構える。

「さあ、来い！！」

アスランの言葉と共に一夏は高速で動き出す。

（さっきまでと全然違う！ 機体が自分のイメージ通りに動く！）

そう思いながらアスランに高速で迫る一夏。

ここにキラの開発したOSが生かされていた。

初期設定で得た一夏の身体能力、反射速度、動体視力などの情報を収集、フォーマット、フィッティング終了と同時に一夏の神経ネットワークに無線接続する事により反応速度を大幅に上昇させるキラが開発したOSが白式の動かしやすさに一役かっていた。

一夏が踏み込み袈裟懸けに切り裂こうとするが、アスランは鮮やかに逆袈裟で防ぐ。

それに諦めず位置かは踏み込みを素早くし連続して切りかかるがアスランはその悉くを防ぎきる。

ある時は受け止め、ある時はそらし、ある時はかわす。

アスランの身のこなしを見た篤は戦慄した。

（す、凄い…… 太刀捌きに全く無駄が無い。 あんなに綺麗な太刀捌きをするなんて……）

その時だった、突如ブザーが鳴り響く。

『一夏機のシールド残量ゼロにより訓練終了。 お疲れ様』

スピーカからキラの声が響き渡る。

訓練初日はこうして幕を閉じた

キラとアスランは一夏に正確な機体解説をした後、二人はモニタールームで話あっていた。

「あの白式……何か違和感を覚える。如何表現したらいいのか解らないが何か変だ。こう、古いパーツを無理やり新しく作り直した様な印象がある」

アスランの言葉にキラは頷いて答えた。

「うん、ソレは僕も感じた。OSを弄っていたら元からあるOSに誰かが上書きした形跡があったんだ。巧妙に隠されてはいたけど……」

キラはその言葉に付け足すように言う。

「この白式を提供した企業の開発人をちょっと洗って見たけど、開発責任者が架空の人物だった」

アスランは顎に手をやりながら考え込む。

「一体誰だ？ 白式の開発責任者は？」

アスランの独白は室内に虚しく響くだけだった。

6話 一夏の成果

一夏の訓練を開始して2日目、箒は一夏に剣術を教え、キラは戦闘での機動回避の訓練を行い、アスランは実戦形式の模擬戦を行った。負けたくない一夏としては有難かったが、キラのリアル弾幕鬼ごっこ（フルバースト、ドラグーンの使用はしていない）やアスランの高速斬撃に一夏は悲鳴を上げた。

2人の生かさず殺さずの神がかり的な手加減で一夏は何とか訓練に耐えている。

例によって例の如く一夏はキラの弾幕祭りに全力で逃げていた。

「如何したの？ 逃げないと危ないよ？」

そう言いつつも2挺のビームライフルをフルオートで連射しまくるキラ。

しかもその狙いは正確無比で全弾正確な狙撃と疑いたくなる砲撃だ。

「クソ、キラ！？ 手加減しろよ！？」

一夏の悲痛な訴えも虚しくキラは冷静に言い放つ。

「安心して、全力で手加減してるから」

（ウソだ！！）

「いや、本当だから。本気で撃つてたら1発目で終わってたよ?」

（心を読まれた!? しかも何か途轍もないこと言ってる!!）

一夏が心で絶叫しているとキラは容赦無く言い放つ。

「考え事なんて余裕だね? ほら次が来るよ?」

そう言いながらキラは一夏に急速接近しクスイファイアス3レール砲をぶっ放した。

「ぐっわあああああああああ!」

派手な爆発の後、煙の中から爆風で弾き飛ばされた一夏が地面に叩きつけられる。

「今日はこちらまでだね。ご苦労様、一夏」

ソレを見た後キラは優雅に着地し今日の訓練の終わりを告げた。

一夏が地面に大の字に寝転がっていると幕が一夏の顔を覗き込む。

「大丈夫か、一夏?」

その問いかけに浅い呼吸をしながら何とか答える。

「ゼエ、これが、ゼエ、大丈夫に、ゼエ、見えるか？」

何とか答えられたが正直、一夏は限界だった。

集中力を切らさず手加減しているとは言えキラの鬼の様な弾幕をひたすら回避していたのだ。

集中力は削られ、ソレと平行して体力までも削られる。

更にその上に恐怖までプラスアルファされれば余計にその両方の消費は早い。

箒は一夏が起き上がるまで待つとペットボトルに入ったスポーツドリンクを差し出す。

「飲め。喉も渴いているだろう？」

「有難う。箒」

一夏はソレを嬉しそうに貰うと蓋を素早く開け喉を鳴らしながら勢いよく飲み始めた。

「そんなに慌てて飲むと咽るぞ」

箒はそう言いながら一夏を見つめる。

「ぶはっ……サンキューな箒」

「か、勘違いするな。コレは幼馴染であり、同門への気遣いだ」

頬を赤らめながら明後日の方に顔をそらす篤に一夏は微笑みながらお礼を言う。

「それでもだよ。ありがとな篤」

その顔をみた篤は更に赤くなる。

「如何したんだ篤？ 顔が赤いぞ？」

その言葉に更に赤らめながら誤魔化する。

「わ、私の事はどうでもよい。ソレより一夏、どうだ？ ヤマトとアスランの訓練は？」

その質問に一夏は渋い顔をしながら答えた。

「正直、解んねえ」

その言葉に眉根を顰めながら問いただす篤。

「どう言うことだ？」

「正直、自信が無いんだ。キラやアスランは教え方は滅茶苦茶上手いよ。でも、強くなってるって実感が全然無いんだ。来る日も来る日も2人に軽くあしらわれて、それでも我武者羅に喰らい付いていても簡単にアッサリ遠くに離される。だからかな……実感が湧かないのは……」

一夏は握り拳を解きながら掌を見つめ独り言の様に呟いた。

その言葉に箒は天を仰ぎながら一夏に語りかけた。

その声は何時の鋭い棘を帯びた言葉ではない。

彼女自身の掛け値無しの本音だった。

「安心しろ。一夏、お前は強くなってる。私との剣術の訓練では互角に戦っているじゃないか。自信を持て。そうしないと、勝てるものも勝てなくなる」

その言葉に一夏はスックと立ち上がり、箒に向き直り礼を言った。

「ありがとな、箒。スッゲー力が出てきた気がした」

そう言いながら一夏は歩き出すのだった。

取り残される形となった箒はソッポを向きながら誰もいなくなったアリーナで詠う様に言霊を吐き出す。

「昔の一夏に戻ってきたかな……」

と。

セシリアに決闘を申し込まれ丁度1週間、一夏、箒、キラ、アスラ

ン、千冬、真耶がアリーナIS発進場にいた。

「いいか、一夏、今回はヤマトとアスランに訓練をつけてもらった成果、見せてもらおうぞ?」

千冬のその言葉に一夏はニヤリとしながら答える。

「ああ、行ってくる、千冬姉」

そう力強く言いながら一夏は専用IS、白式を展開する。

光に包まれ、光が晴れるとそこには白式を装着した一夏がいた。

一夏はカタパルトまで歩き出しながら手を振り、答えた。

それを見た千冬は感心したような顔をする。

「フン、少しはマシな顔が出来る様になったじゃないか。なあ、ヤマト、ザラ」

その言葉にキラは微笑み、アスランはニヒルに笑う。

「ええ、何処かの幼馴染が強烈な喝を入れてくれましたから」

「ああ、全く、愛とは偉大だな。自信の無い男をあそこまで奮い立たせるのですから」

キラとアスランは茶化しながら箒を見つめそんな事を言う。

突然そんな事言われた箒はたじろぎながら言い訳をする。

「あ、あ、あ、アレは、一夏が余りにだらしくてだな、その、そう！ 激励したに過ぎない。他言は無い！」

キラとアスランは先ほどとは打って変わって優しく微笑む。

「僕達も一夏の自信の無さは多少知っていたよ？ でもソレは自分で解決していく物だからね。あえて何も言わなかっただけさ」

「それにな、男友達の千の言葉より、近くで自分を見つめ一緒にいる乙女の一言で男は奮い立つもんだ」

その言葉に今度は千冬と真耶が飛びついた。

「ほう……まるで経験があるみたいない言い方だな？ 2人とも」

「そうですね。さっきのしゃべり方からしたら明らかに経験した言い回しですよな？」

その言葉に2人は寂しそうな顔をして遠くを見つめる様な目をして言った。

「まあ、取り戻したくとも取り戻せない記憶ですから……」

「今の俺達には……途轍もなく遠い世界の出来事なんですよ……」

その言葉を聞き、千冬と真耶は不用意な発言だったと後悔した。

状況が解らない筈は場の雰囲気为重苦しい事から2人に質問しなかった。

かくして、一夏が飛び立つ準備が整った。

「カタパルトのロックを確認、進路クリア、一夏君、発進どうぞ」

真耶の言葉に一夏は目を瞑り数秒した後、一気に目を見開く。

「織斑 一夏、白式、行くぜ!!」

一夏はキラやアスランが発進の時に名前と機体名を名乗った後、発進する事からカッコいいなと言う短絡的な発想からそんな事を言った。

しかし、キラやアスランが一々、発進のたびに自分の名前と機体名を言っているのは訳がある。

本来、MSなどの機動兵器は部隊内において発進の順番が決まっている。

更に、同じ機体が多い為、例えばシグナルが存在していても管制官や整備兵の混乱が多々あった為、誰が何に乗って発進するのかを明確にする為に言っているのだ。

しかし、ISはあくまで競技、スポーツといった意味合いが強いため、そんな事はしなくていいのだが、キラとアスランは元の軍人としての癖が抜けきらないから言っているだけに過ぎない。

兎に角、一夏は実戦と言う名の空へと飛び立った。

一夏が高度30メートルに達した時、セシリアが高度40メートルから語りかけてきた。

「余りに遅いので逃げたのかと心配いたしましたわ。ですが、逃げずに貴方は来た。その蛮勇には敬意を払いますわ」

あくまでイギリス人淑女らしく気に食わない相手は優雅に嫌味を飛ばした。

しかし、一夏も今までの一夏では無い。

ソレくらいの嫌味を返せるくらいの余裕はある。

「そいつは悪かったな。ちょっとティータイムを楽しんでいたんで遅くなった」

「あら、レディーの約束に遅れるなど紳士の風上にも置けませんわ」

「そちらこそ、男を待てるくらいの優雅さと包容力をイギリスにでも落としてきたのか？」

いい加減、舌戦をしても仕方が無いとセシリアは切り上げる。

「まあ、いいでしょう。舌戦は辛うじて合格といたしますわ。次はその口に見合うだけの力を見せてもらいますわ」

「ああ、見せてやるよ、日本男児の実力を！！」

そついい、お互いが臨戦態勢を取る。

『セシリア・オルコット対織斑　一夏のクラス対抗戦選手決定戦を開始します。始め！！』

アナウンスがそう告げた瞬間、セシリアが先手を取った。

セシリアはスターライトmk?を即座に構え一夏目掛けて発砲した。青いレーザーが一夏を襲うが一夏も青い光の軌跡を高速機動でかわす。

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲を！！」

セシリアは優雅にそう言いながらスターライトmk?を一夏に照準を合わせ乱射する。

しかし、一夏も高速で移動しながら回避に専念する。

その頃、キラ達は、その様子をモニター越しに見つめていた。

「アスラン、彼女、如何思う？」

キラのその問いかけにアスランは自分の考えを述べた。

「オルコットのヤツ、デカイ口叩くだけあって射撃は正確だ。本人の才能もあるだろうがそれを開花させるための努力は惜しんでいな

いようだ」

その言葉にキラも頷く。

「さすがは、代表候補生と言った所かな？ でも射撃が素直すぎるね。フエイントや回避先を読んでの射撃が無いね。ただ、正確に狙いを定めて撃っているだけだ。アレでは無駄撃ちを重ねるだけだよ。更に欲を言えば相手の呼吸や視線、気配やフエイントの意味を読み取れたら合格かな？」

アスランもキラの言葉に頷きながら付け足す。

「更に欲を言えばキラが言った事を行いつつ高速移動が出来ればいいがな。棒立ちでは唯の的だ」

その言葉に箒が質問する。

「何で解つたんだ？」

その質問にキラは簡潔に答える。

「オルコットさんの視線、銃口、立ち位置、呼吸かな」

「射撃は簡単な様に見えて実は難しい。特に熱量銃火器はな。射撃の腕は勿論の事、銃の出力とエネルギーの割り振り、射撃位置による地形応用活用理論、敵との距離による出力変化、天候によるダメージ変化の補正、心理戦などを瞬時に把握、決定して攻撃していかなければならない」

アスランの解説を聞いた瞬間、箒は明らかに嫌な顔をする。

「む、難しいのだな……」

「接近戦にも相手と自分の距離や自分と相手の得物の長さ、自分と相手の移動速度、地形の応用活用、相手との技量の計算や心理戦なんかの要素もあるかな」

「まあ、訓練はそんな説明をせず体で覚えて、経験が補正するのが普通だな」

「あ、アスラン、オルコットさんが痺れを切らせて奥の手を出すよ」

「ああ、オルコットのヤツ、余裕でいい相手で無いことを把握したか」

セシリアはまさか、一夏がここまで戦えるとは思っていなかった。

精々4、5発食らって御仕舞いと踏んでいたが、目の前の男がここまで鮮やかに回避するとは思っていなかったのだ。

「貴方が初めてですわ。ここまで私の攻撃を避けたのは。その貴方に敬意を表して本気でいかせていただきますわ!!」

そう言い、ブルーティアーズの肩部装甲の下に伸びる4本の角が一斉に飛び立つ。

そして、一夏の周りを飛び回りレーザーの攻撃を開始した。

「うお！？ 何だコレ！？」

一夏はシールドエネルギーを削られながらも何とか回避する。

「さあ、もっと踊りなさい！ 踊り疲れる程に！！」

セシリアはそう言いながら機体と同じ名の誘導熱量兵器を一夏に差し向ける。

「クッ！！ これじゃあギリ貧だ！ こうなったらやるしかない」

そう言いながらシールドエネルギーを削られるの覚悟で超高速回避をしながらセシリアに迫る。

しかし、セシリアも何とか回避してみせる。

「無茶苦茶しますわね！！」

セシリアは毒づきながらも4機のブルーティアーズを操作し一夏を追いつまう。

しかし、一夏もブルーティアーズの速度に慣れたのか回避しながらブルーティアーズを破壊する。

「読めたぜ！ この兵器の弱点！ コイツ等を操作する為に集中してお前は一切攻撃が出来ない」

そう言いながら3機目を切り落とす。

4機目を切り落とし、セシリアに迫った時だった。

「4機！ コレで最後だ！！」

セシリアは口元を吊り上げ静かに笑う。

「掛かりましたわね」

「何！？」

その瞬間、ブルーティーズの後ろ側が前にせり出す。

「4機だけじゃ無くてよ？」

その瞬間、ミサイル型の誘導兵器が一夏を襲う。

しかし、

一夏もまた口元を吊り上げる。

「奥の手を出したな？」

そう言い雪片式型のビーム刀を展開、ミサイル型誘導兵器を切り落とす。

「な、何ですの！？ それは！？」

セシリアの驚きの言葉に静かに瞳を閉じゆっくりと見開きながら名

乗る。

「雪片弐型……」

「雪片……弐型？」

一夏はまるで独り言を言う様に語り出す。

「そうだよな、千冬姉と同じ武器を使ってるんだ。弟の俺がまけちゃあ姉ちゃんの名に傷がついちまう。俺はこの刀で自分の大切な物を守る。そう決めた」

そう言いながら雪片弐型を構え直す一夏。

「さあ、セシリア・オルコット。お互い奥の手を出した。そろそろ幕としようぜ！」

そう言いながら一夏は超高速でセシリアに迫る。

「ああ！！ もう！！ ゴチャゴチャ五月蠅いですわ！！」

そう言いながらセシリアもそれに答える様に手持ちの兵装を連射する。

しかし、一夏はそのことごとくを回避しセシリアの目の前に迫り、無数の斬撃を浴びせる。

回避しようにも高速で追いつがる一夏を振り切れず、シールドエネルギーを削られるセシリア。

しかし、一夏も真近くからの攻撃によりシールドエネルギーが削られる。

暫くの攻防の末、ブザーが鳴り響く。

『セシリア・オルコットのシールドエネルギーエンプティーにより、勝者、織斑 一夏――！』

その瞬間、勝負は一夏の勝利に終わったのだった。

7話 古き知り合い、異国より来たりて

1組の生徒全員がISを装着する為のISスーツを来て整列していた。

キラやアスランもその例に埋もれず。ISスーツを着ている訳だ。

キラは青を主体とした白のラインの入ったスーツ。

アスランは赤を主体とした緑色のラインの入ったスーツを着ていた。

「これより、ISの基本実技訓練を開始する。オルコット、織斑、ISを起動しろ」

千冬は生徒達を見回しながらそう言う。

「はい！」

「は、はい！」

セシリアと一夏は千冬の言われた通りにISを機動、装着した。

「それでは2人共、飛行を開始しろ」

「「ハイ!!」」

そう言い2人は空へと舞い上がる。

2人は同時に飛び上がり、20メートルまで飛ぶとそこで停止した。

「よし、下りて来い」

千冬の指示でセシリアは素早く下り立つたが一夏が制御に失敗、急降下して地面に突き刺さる。

一夏は大きなクレーターをグラウンドにつくりその中心で顔を地面に埋めながらジタバタしていた。

「誰が地面に穴を開けると言った」

千冬は軽くため息を吐きながらヤレヤレと言わんばかりに一夏を見る。

何とか一夏は地面とのキスシーンを終了させる。

「す、すいません」

一夏は申し訳なさそうに千冬に謝罪した。

「一夏さん！！ 大丈夫ですか！？」

セシリアはそう叫びながらISを解除し、箒を押しつけ、一夏の所まで滑り下りる。

「ああ、大丈夫ですか？……一夏さん？」

セシリアが一夏の呼び方を変えている事に一夏は疑問の声をセシリ

アに投げかける。

セシリアはそれに構わず、一夏の怪我を確認する。

「お怪我はございませんか？ もしあるなら保健室に……」

「無用だ。IS装着時には滅多な事では怪我はしない」

そう言いながらセシリアと一夏の間に割ってはいる筈。

「あら、篠ノ之さん？ クラスメイトを心配するのは当たり前ではなくて？」

セシリアは筈に割って入られた事にムッスとしながら筈に噛み付く。

「フン、相変わらずの猫被りだな？」

「あら？ 鬼の顔を被っているよりは遥かにマシですわ」

そう言いながらお互い視線は派手な火花を散らしていた。

（この2人ってこんなに仲が悪かったっけ？）

一夏はソレを見ながらある意味見当違いの事を考えていた。

「いい加減、戯れるのは止めろ。馬鹿者共！」

千冬は事実上授業を妨害している2人を黙らせると今度はキラとアスランを指名した。

「ヤマト、ザラ、コイツ等に手本を見せてやれ」

そう言われ、キラとアスランはISを機動させる。

2人がISを装着完了した瞬間、辺りからどよめきが聞こえてきた。

「アレがザラ君とヤマト君の専用IS？」

「まるで鎧を着てるみたい……」

その瞬間、キラ達の目の前に画面が表示される。

「G……UN……DAM……？」

「ガンダムって読むのかな？ あれ？」

「ガンダム……強そうな名前だね……」

セシリアはソレを見ながら驚きの声を上げる。

「な！？ フルスキン 全身装甲！？ でもあの様な機体、見た事ありませんわ！？」

そして2人はVPS装甲を展開させる。

「色が変わった！？」

「き、綺麗」

女子の感嘆を余所にキラとアスランはそれぞれ空へと舞い上がる。

「キラ・ヤマト、フリーダム、行きます!!」

「アスラン・ザラ、ジャスティス、出る!!」

素人でさえ解るくらい無駄の無い飛翔で空へ飛び上がり超高速のアクロバット飛行を披露するキラとアスラン。

「す、スゲ」

一夏は感動しながら言葉を呟くがセシリアは驚きで声が出ない。

（凄いですわ……あそこまで無駄の無い飛翔は見た事がございませ
んわ。飛び立つ時に足を少し折り曲げISの脚力を加速に転用して
いますわね。なるほど、そうする事により即時飛翔が可能になりま
すのね……地面を蹴ると同時にPICを機動タイムラグの無駄な時
間のロスを極力控えていますわ。普通はPICを機動させてから飛
び立ちますのに……）

そこでセシリアは一夏を見ながら考える。

（確か、一夏さんにIS操作を教えたのはあの2人でしたわね……
よし、決めましたわ!!）

セシリアは決意を胸にキラ達を見つめた。

IS学園、寮食堂の一角では一夏のクラス代表決定の祝賀会を行っていた。

「では、1年1組代表は織斑君に、特例としてヤマト君とザラ君の3人に決めました〜！」

その瞬間、拍手が巻き起こる。

「えっと、ありがとう」

「有難う。皆」

「有難う」

一夏はたどたどしく、キラは微笑みながら、アスランは完結的にそれぞれ答えた。

「まあ、当然ですわね。私に勝ったのですもの。潔く負けを認め、一夏さんに代表をお譲りいたしますわ」

セシリアはそう言いながら一夏に近づき、オレンジジュースを一夏のコップに注ぐ。

「あ、ありがとう。セシリア。でも、俺がなくても良いのかな？代表。正直、キラやアスランになった方が確実に優勝できると思うけど？」

一夏の戸惑いながらの疑問にアスランはキツパリと答える。

「一夏、勝負に勝ったのはお前だ。確かに一夏の実力は未熟だが、まだ伸び代は大きい」

その言葉にキラも頷きながら答える。

「自信を持つて、一夏。一夏は確実に強くなってる。更に言えばオルコットさんも訓練と経験を積みめばもっと伸びるよ」

そう言われ、一夏は嬉しそうに微笑みながら言う。

「サンキューなキラ、アスラン。お世辞でも嬉しいぜ」

セシリアはさも当然と言ったように胸を張る。

「当然ですわ。こんな所で躓く私ではありません。ソレとヤマトさん、ザラさん、私のことはセシリアとお呼びください」

その言葉にキラは質問する。

「いいの？」

「いいのか？ 俺達まで？」

「ええ、よろしくてよ。私も一夏さんと同じように貴方達から技術を習わせていただきますわ」

その言葉にキラはアスランに問いかける。

「いいのかな？ アスラン？」

アスランは考えながらもセシリアの言葉を肯定した。

「いいんじゃないか？　一夏にも言える事だが経験を積むのも良い事だろう」

キラはセシリアに向き直り、こう言った。

「それじゃあ、セシリア。頑張ろう」

「そう言う事だ。一夏、いいよな？」

アスランの問いかけに一夏は素直に答えた。

「良いも何も、アスラン達が講師だろ？　2人が良いなら俺は良いぜ」

キラはその言葉を聞き、セシリアに向き直り許可をだす。

「だそうだよ。一夏共々厳しく鍛えるからその積もりでね？」

セシリアは優雅な振る舞いでハッキリと答えて見せる。

「望む所と言わせて頂きますわ」

こうして、セシリアがキラ達の訓練に参加する事になる。

翌日、キラとアスランが登校すると何やら何時も以上に賑やかだっ

た。

キラとアスランは一夏の席に行くと数人の女子に囲まれて一夏が何やら話していた。

「何の騒ぎ？」

キラの質問に一人の女子が答えた。

「何でも2組に転校生が来るんだって」

その言葉にアスランは考え込む。

「転校生？ この時期に？ 珍しいな」

他の女子はその話題と関連してクラス対抗戦の話をする。

「でも、専用機持ちは1組と4組だけでしょ？ 楽勝だよ。何たってウチには専用機持ちが4人もいるもん」

その時だった、突如、黒板側の扉が勢いよく開き、活発な少女の声が響く。

「その情報、古いよ！」

クラス全員が扉の方へ振り向くとそこには少し背の小さいツインテールの女子が立っていた。

「残念だけど、2組の専用機持ちなの。そう簡単には優勝させたげないわよ!!！」

その少女に見覚えがあるのか一夏が少女の名を言う。

「あ、鈴？」

「そ、中国代表候補生、鳳鈴音。今日はあんた達、1組に宣戦布告しに来たって訳」

その言葉と共に教室はざわつく。

一夏はそれにわき目をくれず鈴に語りかける。

「お前ソレ、似合わないぞ」

その言葉に鈴音は激昂する。

「な、何よ！？ 折角格好よく登場したのにぶち壊しじゃない！！」

その時だった。

鈴は頭を叩かれ、上半身だけ前のめりになる。

「イッタク、誰よ！？」

そう言い後ろを振り返ると千冬が立っていた。

「いい加減、教室に戻れ。邪魔だ」

「ち、千冬さん……」

千冬の登場にたじろぐ鈴音。

しかし、久しぶりの再開にも関わらず千冬は容赦なく言い放つ。

「織斑先生だ。早く行け。馬鹿者」

「逃げないでよね！　一夏！」

その言葉にたじろぎながら鈴音は撤退した。

ソレを見ながらキラとアスランは一夏に語りかけた。

「何だか嵐みたいな娘だね……」

「知り合いか？　一夏？」

その言葉に一夏は説明しようとするが、出席簿の軽快な音3つがソレを遮断するのだった。

8話 白い天使と赤い騎士の実力

午前の授業が終わり、昼休み。

一夏達は鈴と一緒に学食にいた。

「しかし、驚いたぞ。鈴がIS学園に転入してきたなんて、しかも中国の代表候補生として」

その言葉に鈴も驚いた様に一夏に言う。

「コツチだつてニユースみて驚いたわよ。行き成り、試験会場でIS動かして騒ぎになったんだって？」

その言葉に一夏は苦笑しながら箸を止め思い出すようにその時の様子を鈴に語る。

「あの時は私立の試験会場で試験が行われていたんだ。その時、迷っちゃって……係の人に聞いても解らないって言うから廊下をウロウロしてたらISを見つけてな」

その時の事を一夏は今でも鮮明に覚えている。

薄暗い部屋に光を浴びながら鎮座するIS。

それに触れた瞬間、膨大な情報が頭に流れ込んでくる感覚。

触れたISが輝く瞬間。

今でも思い出せる。

「ふうん」

鈴が返事を返した時だった。

箒とセシリアが勢いよく立ち上がり2人のテーブルまで歩み寄ってきた。

そして2人は勢いよく両手を机に押し当てた。

ドンと言う重たい音が2つ同時に響き渡る。

「一夏」

「一夏さん」

一旦、一夏の名を同時に呼んでこれまた同じタイミングで同じ内容を言う2人。

「ソイツは誰だ？」

「その人は誰ですの？」

その質問に一夏はたじろぎながらも答える。

「え、あ、ああ、凰 鈴音、箒が転校して入れ違いで転校してきたんだ。鈴とは中二の頃まで一緒だったぞ」

鈴は疑問に思いながらも一夏に質問した。

「この2人誰？」

その質問に一夏は答える。

「ああ、俺のファースト幼馴染の篠ノ之 篁、そしてコッチが同じクラスのセシリア・オルコット」

「よろしくな」

「よろしくですわ」

「よろしく、一夏の幼馴染の凰 鈴音よ。よろしく」

その言葉に2人は青筋を浮かべて言い放とうとした時、キラとアスランが立ち上がり話に加わる。

「一夏、今日の訓練内容と人数なんだけど、篁も加わる事になったんだ」

「それでお前の内容も変えてみる事にした。今回から接近戦主体の一夏と量産機で接近戦主体の打鉄には俺が訓練を行う。中距離戦の主体のセシリアはキラが担当する」

その言葉にセシリアが文句を言う。

「何ですかの？ 私も一夏さんと一緒に……」

そこにすかさずキラが理論的に反論する。

「ブルーティアーズは中距離戦特化型の兵装が大部分だからね。僕

が教えた方が効率が良いんだ。基本的に僕もアスランも距離を選ばない万能型ISだけど、どちらかと言えばアスランは接近戦が得意で僕は中長距離戦が得意なんだ。その為にこんな配置になったんだ」アスランは宥める様にセシリアに言う。

「すまないな、セシリア。俺も中長距離戦は教えられるが、キラの方が的確に教えられる」

「解りましたわ……」

セシリアは渋々ながら了承した。

キラ達の話が終わった時、鈴が質問してきた。

「ねえ、一夏、コイツ等だれ？」

その質問に一夏が答える。

「ああ、同じクラスの俺のダチでキラ・ヤマトとアスラン・ザラだ。俺にISの操縦技術や戦闘方法を教えてくれてるんだ」

「よろしく」

「よろしくな」

キラとアスランの挨拶に興味なさそうに答える。

「ふん、よろしく」

鈴は一夏に向き直り、提案してくる。

「私がISの操縦、教えてあげようか？ 私の方が旨く教えられると思うんだけどな」

その提案に筈とセシリアが怒鳴ろうとした時、一夏がソレを否定した。

「いや、いいよ。正直、キラとアスランの訓練は凄いの確かだし、最初は上達を実感できなかったけど最近じゃキラ達の言いたい事や教えた事が理解できたんだ。だから上達してるって実感はあるんだ。それに、キラ達、千冬姉の全盛期と互角の実力だからな」

一夏の最後の言葉を聞いた瞬間、鈴は驚きを露にしながらキラ達を見ながら言う。

「全盛期の千冬さんって……モンド・グロッソでブリュンヒルデを取った時の頃の！？」

その驚きの言葉に一夏が肯定する。

「コレはマジだからな。あの千冬姉が自分の口から言った事だ。今だと勝率が4割にまで落ち込むんだと」

更なる爆弾を降下された鈴はキラ達をマジマジと見ながら絶句した。

そもそも、モンド・グロッソとは21の国と地域が参加して行われるIS同士での対戦の世界大会。格闘部門など様々な競技に分かれ、各国の代表が競うことになる。

各種目での優勝者をワルキューレと称え、全種目制覇者に与えられ

る称号をブリュンヒルデと称される。

このブリュンヒルデを取る為には全ての種目を漏れなく高得点を叩き出さなければならぬとんでもない偉業なのだ。

ブリュンヒルデには射撃、接近戦、スピード、戦術や戦略、強靱な意志、高度な知識と理論、IS操縦の美しさまでもが要求される。

正にIS操縦者の頂点に相応しいか如何かが試される。

その初代ブリュンヒルデと互角と聞いてもウソ臭く感じるのは無理も無い。

ソレが自称なら鈴も鼻で笑い飛ばすが、千冬自らがそう言うなら事実なのだろう。

事実、千冬が論理的思考の持ち主である事は鈴も解っている。

その千冬をして互角と言わしめるキラとアスランに少なからぬ興味を鈴は示した。

「アンタ達、ドッチが代表なの？」

その質問にキラは苦笑しながら答える。

最初は興味が無かったのが何時の間にもやら興味深々で聞いてくるのだ。

この変わり身の早さにキラとアスランは半分驚いて半分呆れていた。

「代表は一夏だよ。僕達は副代表」

そう言われ鈴は残念そうに言う。

「そうか……一度で良いから戦って見たかったな……」

その言葉と共に昼休み終了の予鈴が鳴り響く。

こうして、鈴との話は一旦、終わりを迎える。

放課後、訓練用の小さなアリーナを借りて、キラとアスランは一夏達を鍛える事にした。

アスランと一夏と箒はISを機動して対峙した。

「2人とも最初は軽く流すだけだ。箒は兎も角、一夏は基礎体力は殆ど無いからな」

アスランの言葉に一夏はムッスとしながらもソレが事実なため文句が言えない。

実際、アスランはザフトの士官学校をトップの成績で卒業している。その為、基礎体力はかなりの物である。

そして、キラもザフト軍に入隊してからは一平卒として士官学校年長訓練校に入り直し、戦闘訓練を受け、トップの成績で卒業してい

る。

コーディネーターと言うことを差し引いても同世代と比べてもトップクラスの身体能力をその体に秘めている。

そんな2人と比べたら一夏や箒も可哀想ではあるが。

兎に角、アスランは2人をシゴクことにした。

反対側ではキラとセシリアが向き合って射撃訓練をしていた。

「今回の訓練は、移動しながら距離50メートルすべて100ポイントの的に素早く当てる訓練だよ」

「解りましたわ」

セシリアはそう言いながら移動してスターライトmk?を構えた。

暫く撃っていると時々100ポイントの的を外す様になる。

「集中力が切れてるよ。ほらもつと集中して。実戦じゃないんだから」

「クツ、解っていますわ!!」

そつは言うが目に見えて集中力は切れかけていた。

訓練が終わり一夏、箒、セシリアはバテバテであった。

一夏は大の字になって地面に寝転がり、箒は両掌と両膝をついて荒い息を吐き、セシリアは尻餅をついた体制で荒い息をする。

「はい、今日はここまで。お疲れ様、3人とも」

「まあ、今日は初日だから軽く流したただけだが、次から厳しくしていくぞ」

そう言いながらキラとアスランはアリーナから退場した。

次の日、クラス対抗戦当日。

キラがカタパルトにいる一夏に言う。

「凰さんは第3世代型のISだよ」

その言葉にアスランも頷く。

「ああ、接近戦主体の機体で名は甲龍だ。セシリアの時とは違う戦術が要求される。油断せずに行け」

一夏は力強く頷く。

そして箒やセシリアも一夏に語りかけた。

「一夏、絶対に勝てよ」

「一夏さん、頑張ってくださいまし」

「おう、行ってくる」

一夏は正面に向き直り発進する。

「織斑 一夏、白式、行くぜ!!」

カタパルトに押し出され一夏はアリーナ中央で飛翔しながら腕組をして待っている鈴の所まで移動した。

「今の内に誤るならボコボコにする度合いを緩くしてあげるけど？」

「そんなのいらねえよ。全力で来い。」

その鈴の提案に一夏が言い放つ。

その言葉にムスツとしながら鈴は更にいう。

「絶対防御も絶対じゃないのよ？ 防御を破壊して直接ダメージを与える事も出来るんだからね？ 覚悟しなさいよ!!」

そう言い放ち双天牙月を連結させる。

一夏も雪片式型のビーム刃を展開した。

『クラス対抗戦、凰 鈴音対織斑 一夏の試合を開始します。ソレでは両者、始めてください』

その瞬間、お互いが動き出した。

モニター越しにキラとアスランは戦いの様子を見ながら語り合う。

「今の所、一夏がスピードで翻弄してるね。いいペースだ」

しかし、アスランは懸念を口にする。

「だが、向こうは戦いなれてるのか、一夏の戦術には乗ってこない。肩部の、多分空気が摩擦で揺れたから衝撃砲の類だろうな。それで一夏を牽制しつつシールドエネルギーを削っている。凰のヤツ口だけじゃないみたいだ」

その言葉に対しキラは対策を考える。

「対策は色々有るけど、一夏の場合は接近戦兵装しかない。一番有効なのは高速で接近して相手にも砲撃のダメージが来る所で砲撃を封じて剣技で相手を倒す事かな？ コレはアスランの得意分野だね」

アスランは頷きながら言う。

「一夏がそれに気づくか如何かだな。問題は……」

一夏は見えない砲撃に焦っていた。

（クソ！ 全然見えねえから砲撃のタイミングが解んねえ……そのせいか鈴に近づけねえ！ クソ！ あの二人なら如何する？ キラなら砲撃で相手を牽制、誘導しながら自分のペースにしちまう。アスランの場合は確か、射撃を併用しながら牽制して相手との距離を一気に詰めて接近戦に持ち込んでたっけ……そうだ！ アスランの

戦闘スタイルだ！でも射撃兵装の無い俺じゃあ即座に距離を離される。仕方ない、シールド削られるの覚悟でいくぜ！！）

そう思い、一夏は作戦を変更、直線で鈴に迫る。

「アンタ、正気！？」

そう言いながら甲龍の龍咆を乱射する。

だが一夏は回避も防御も捨てて一気に駆け抜ける。

「クツ、行っけええええええええええ！」

その時だつた。

突如、アリーナの上空をふさいでいた。シールドが光で打ち抜かれ、砕けると同時に地面に突き刺さり爆風と土煙を上げる。

「何だ!？」

「何!？」

一夏と鈴は同時に同じような言葉を発し、状況を確認しようとする。

上空には全身装甲のISがいた。

辺りは一時、騒然となる。

キラとアスランはモニター越しに見ながら冷静に分析する。

「アスラン、シールド外部からの攻撃だ。粒子の尾を引いていたから多分ビーム兵器だよ」

「ああ、ソレもカナリの出力のビームだった。PS装甲は貫通できないがエネルギーシールドは貫通可能なほどの」

PS装甲は従来の装甲より耐熱が優れている。

その為、大気圏の摩擦熱にも耐えうる強度と耐熱性は確保できるが戦艦やMSのビーム兵器の火力には対抗できない。

その為、ビームライフルの出力には耐えられなくともビームマシンガン出力には耐えられる設計となっている。

PS装甲の電圧を上げればセシリアのスターライトmk?のゼロ距離射撃の直撃にすら耐えうる装甲なのだ。

正直、破碎できるのはC・E・世界のビームかレーザー砲位だろうか。

「一夏の救援に行くべきだね」

その言葉にアスランは返す。

「ああ。だが、問題は凰の方だ。正直、此方の指揮に従ってくれらかも解らない。更に彼女の戦闘連続機体稼働時間も把握できていない。更に悪い事に白式の稼働限界時間が迫っている。この場合、2人の救出を行いつつ敵勢力の把握と2人の退避時間を稼ぐ為に1人で敵勢力を抑え、もう一人が2人の護衛を行わなければならない」

その言葉にセシリアが急かす。

「何を悠長に話し合っていますの！？ 2人が危険ですよ！？
早く助けないとー!!」

その言葉にキラは落ち着かせるように言う。

「闇雲に出て行くのは自殺行為だよ。セシリア。先ずは落ち着いて
状況を把握し行動する事が2人を助ける最良の手段なんだ」

「ですが……」

尚も言いよどむセシリアにアスランが語りかける。

「心配するな。2人とも助けるさ」

そう言い、キラに作戦を伝える。

「キラ、敵勢力が開けた穴から強襲、敵勢力を抑えてくれ。俺は2
人の護衛に入る」

「了解」

そう答えると、キラとアスランは走り出した。

セシリアはじっとしていらなくなりアリーナに通じる緊急用通路
から外へと向かう。

そう、筈がそこから出て行った様に。

その頃、2人は少ないシールドエネルギーを遣り繰りしながら何とか戦っていた。

「一夏、如何するの！？ このままじゃあ持たないよ！？」

「解ってる！ でも、コイツのシールドが硬いんだよ！！」

そう言いながら鈴が龍咆を発射するがその悉くを回避した。

「ウソ！？ 目に見えない衝撃波を回避した！？ どんなセンサー積んでんのよ！？」

「コナクソ！！！」

そう言いながら一夏が高速の突撃を開始した。

しかし一夏の渾身の袈裟懸けもこの全身装甲のISは鮮やかに回避して見せた。

「オイオイ、マジかよ……」

キラ達と同等の回避を見せる敵に一夏は冷や汗を流しながら愚痴る。

正直、あの2人も人間業じゃないが、このISも半端ではない。

そう踏んだ一夏は鈴に作戦を伝える。

「鈴、もう一度砲撃を！！ 最大出力でだ！！」

その言葉に鈴が意見する。

「撃つてもかわされるわよ!! 意味無いじゃない!!」

その言葉に一夏は力強く答える。

「安心しろ! 俺を信じろ!! キラ達ほどじゃ無いけどうまくやれる!!」

その言葉に鈴は覚悟を決める。

「良いわ! やるわよ!!」

そう言いながら鈴は龍咆の出力を最大にし、チャージを開始する。

「チャージ、95%。撃つわよ!!」

そう言った瞬間、一夏が鈴の目の前に立つ。

「な!? 一夏、退きなさい!! それじゃあ撃てないわよ!!」

叫ぶ鈴に一夏は頼もしく言う。

「良いから撃て!!」

「ああ!! もう!! 知らないわよ!!」

そう叫びながら鈴は最大出力の龍咆を一夏の背に向けてぶっ放した。

「グッ!? オオオオオオオオオオオオオオ!!」

獣じみた咆哮と共に一夏は衝撃波をその背に受ける。

その瞬間、一夏のESのシールドエネルギーが一気に回復する。

一夏はその瞬間、雪片式型の出力を最大に切り替え、PICを最大に設定した。

細かった光の刀身は輝きを増しながら長くなる。

一夏はソレを腰だめにし最大出力で敵ISに向けて突撃を開始した。

一夏の耳から風の唸り声が届く。

目の前には敵のビームの弾幕が見える。

それでも一夏は恐れていなかった。

[illegible]

そう叫びながら敵ＩＳに雪片を突き立てる一夏。

敵ISのシールドエネルギーは削られていく。

しかし、敵ISのシールドエネルギーは確実に削られる。

破壊される直前、敵ISは右手を突き出し、ビームをゼロ距離から一夏に撃ち込む。

辛うじてシールドに救われた一夏は地面に叩きつけられた。

迫る敵に慌てる鈴。

明らかにボロボロの一夏。

しかし、

一夏は笑っていた。

「遅せえぞ、セシリア」

その瞬間、5本のレーザーが敵ISに降り注ぐ。

敵ISは回避できずにシールドで防御した。

「あら？ コレでも早く来ましたのよ？」

セシリアは優雅に言い放ちながらスターライトmk?を敵ISに乱射した。

正確無比な射撃が連続して発射される。

ブルーティアーズの一斉発射のオマケ付きでだ。

敵は一夏からジリジリと撤退する。

その瞬間、シールドが粉碎されレーザーが胸部を直撃、爆発した。

「やった!!」

「まだ!!」

一夏の喜びに鈴が叫ぶ。

その瞬間、爆煙から敵ISが出てきた。

「一夏！！何をやっている！！その様な相手に負けるな！！」

声のする方を向くと箒が声を張り上げ叫んでいた。

その叫び声に反応する敵IS。

「！？」

「箒！逃げろ！！」

敵ISは箒にビームを放とうとした瞬間、

上空から緑色のビームが一筋、敵ISに向けて舞い降りた。

超高熱量のビームに貫かれた敵ISの右部装甲は爆発で吹き飛ぶ。

シールドで自分を覆いながら後方へと下がる敵IS。

「何！？」

鈴の言葉に一夏、セシリア、箒はそれぞれ答える。

「正直、遅すぎる上に狙ったとは思えない様なタイミングだな？
オイ！」

「全くですわ。ヒヤヒヤ物ですわね」

「真打気取りか？ キラ、アスラン」

その瞬間、蒼い翼の天使と紅の最強騎士が舞い降りた。

「待たせたね？」

「もう大丈夫だ。3人共下がれ。後は……俺達がやる！！」

その声に鈴は聞き覚えがあるらしく鈴は考え込み、答えを導き出す。

「もしかして……ヤマトとザラ！？」

そう言った瞬間、一夏にお姫様抱っこをされる鈴。

「鈴、ここは引くぞ」

「どうしてよ！？」

その言葉に一夏は答える。

「あの2人が敗北する事なんてありえない」

そっつい飛び立つ一夏達を背で感じながらキラは先制攻撃にクスイファイアス3レール砲を撃ち込む。

最大出力のレール砲の弾頭は黄色いラインを引きながら敵ISS目掛けて突き進む。

音速を超えた速度で飛来する弾頭を回避困難とした敵ISは防御に入るが、その行動は間違いだった。

磁気を帯びた弾頭はシールドを貫通、装甲に着弾し爆発した。

よろめきながらも残った左のビーム兵装で反撃する。

しかし、キラは右手でビームサーベルを引き抜き、ビームを鮮やかに回避しながら直進する。

ジグザグにビームとビームの隙間を縫うように回避するその機動は正に芸術的であった。

ソレを見た鈴は戦慄する。

（ウソ……亜高速で飛んでくるビームをシールドエネルギーを消費することなく純粋な回避で避けてる！？）

そして、キラは超高速の速度を殺す事無く敵IS側の左方向へ突き進み、バレルロールしてすれ違った。

その瞬間、敵ISの左手は二の腕から下が無くなっていたのだ。

宙を舞う敵ISの腕。

そして腕が地に落ちた瞬間、一陣の赤い風が空から舞い降りる。

アスランは敵ISの真上から急降下し、ビームサーベル2本を同時に抜刀し、敵ISの肩口を切り裂く。

両肩から下を切り落とされる敵I S。

しかし、アスランの攻撃はそれだけに留まらない。

ビームサーベルを連結させアンビデクストラスハルバードモードにすると、ソレを逆手から上手に持ち替え、右に振るい、敵I Sの首を跳ね飛ばす。

更に止まらず。胴体、足と切り刻む。

その姿はまるで鎌イタチを纏った赤い竜巻の様だった。

バラバラにされ崩れる瞬間、アスランはその場から飛びのく。

そして、コレを待っていたと言わんばかりに敵I S後方にいたキラがカリドウス複相ビーム砲を最大出力で撃ち込んだ。

腹部から発せられるプラズマビームは赤い光を煌かせながら敵I Sのコアに直撃、爆散した。

この間、僅か5秒。

自分達が苦戦した敵I Sが僅か5秒で完全征圧した事に一夏達は恐怖すら覚えたのだった。

9話 遠き地より来た太陽と夜の女神達

S H Lの時間、ソレは突然言い渡された。

真耶が壇上に立ち嬉しそうに言い放つ。

「今日からまた新しい転校生が何と2人も来ました!!」

その言葉にザワつく教室。

「静かにしろ!! 馬鹿者共!!」

千冬の激昂に水を打った様な静けさを取り戻す教室。

「それでは入ってきて下さい」

その言葉と共に2人が入室してくる。

一人は明るいブロンドをポニーテールで束ね、男子の制服を着た男の子で、女の子に似た顔立ちの男子だった。

もう一人は、シルバーブロンドをストレートにした少女だが、一番目を引いたのは左目を覆う眼帯だろうか。

「それでは自己紹介をお願いね？」

真耶の言葉に頷きながら金髪の少年は自己紹介を開始する。

「初めまして、フランスから来ましたシャルル・デュノアといいま

す。よろしく」

その瞬間、女子の大多数がざわめく。

「男子？」

「男の子！？」

そのザワめきに笑顔で答えるシャルル。

「ええ、此方にも僕と同じ男性が3人いると思うのですが」

その言葉に女子が黄色い悲鳴を上げた。

「きゃあああああああ！！ 男子！！ しかも守ってあげたい系！！」

「最っ高！！ 紳士系のキラ君にクール系のアスラン君、ワイルド系の一夏君に続いて守ってあげたい系までくるなんて！！」

「我がクラスが男子を独占よ！！」

「え……」

その叫びにタジろぐシャルル。

正直、このテンションの高さにどう対応すればいいのかわからないと言った所だろう。

そこに真耶から注意が入る。

「皆さん！！　まだ紹介が終わってませんよ！！」

その言葉で騒いでいた女子は沈静化する。

「それじゃあ、自己紹介してくれるかな？」

その真耶の言葉に無言を貫く少女。

「あ、えつと……」

真耶もこの反応に如何返せばいいのか解らず言いよどんだ。

そこにすかさず千冬が助け舟をだす。

「ボーデヴィッヒ、挨拶をしろ」

「ハイ、教官」

その言葉に反応したのか少女は千冬を教官と呼び名乗りを上げる。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

完結的かつ名前しか言わない少女に戸惑いながらも真耶は質問した。

「以上……ですか？」

「以上だ」

取り付く島も無い位の反応に女子は如何反応して良いのか解らなか

った。

キラとアスランはそのラウラと名乗る少女から自分達と同じ匂いを感じた。

軍人の匂いを。

その少女は突如一夏の前まで歩み寄り、質問した。

「織斑……一夏だな？」

その質問に戸惑いながらも一夏は答える。

「ああ、そうだけど……」

その瞬間、少女は手を左へやり振りぬこうとした。

反応できない一夏。

しかし、ラウラの手は振り抜かれる事は無かった。

「!？」

強い力で自分の腕を掴まれている事に気づく。

渾身の力で振り解こうにも解けない。

一夏の頬、数センチで止まるラウラの腕。

「いい加減にしないか。どのような関係があるにせよ君と一夏は初

対面だ。それとも相手の頬を殴るのが君の挨拶なのか？」

アスランだ。

彼はラウラの気配を察し、コレは危険と判断し止めに入った。

「離せ」

しかし、アスランは離さない。

それどころか、ラウラの手を強引に一夏から離す。

そして、一夏からある程度離れた時、力を緩める。

その瞬間、ラウラの手は振り解かれ、後ろに後退した。

「暴力で訴えるな。其処からは何も生まれはしない」

アスランはそう言うと自分の席に向かおうとした。

「貴様に何が解る？ 力が無ければ物事は解決しない」

ラウラの言葉にアスランは背中を向けながら答えた。

「心の無い力は唯の暴力だ。力とは強い信念で制御して初めて本来の意味を成す。君からはその信念が感じられない。言わば空っぽの力、君の言う力は中身の無い空っぽの力だ」

話は終わりとアスランは席に着いた。

暫く教室は重い空気が支配していた。

一夏、キラ、アスラン、シャルルは着替える為、更衣室に移動していた。

まあ、女子に取り囲まれる騒動があつたが何とか切り抜け、更衣室に到着した。

「しかし、キラ達、筋肉あるよな」

一夏の言葉にキラとアスランは何でも無い様に答える。

「普段から鍛えているからな」

「まあ、一夏やデュノア君も鍛えたら？」

その言葉に一夏は否定する。

「いや、キラ達みたいなのは相当鍛えないと無理だから。な、シャルル？」

その呼びかけにシャルルは顔を真っ赤にしながら答えた。

「う、う、う、う、ウンそうだね。ハハハ……」

シャルルは話を変える為に提案する。

「僕もシャルルで良いよ。その代わり皆の事を名前でごぶね」

そう言われキラ達はソレを了承した。

訓練も終わり、昼休み。

キラ、アスラン、一夏、箒、鈴、セシリアとシャルルは屋上でご飯を食べていた。

「しかし、キラ達のそれ手作りか？」

一夏の質問にキラも答える。

「うん、コーヒーに合うようにクロワッサンサンドにしたんだ。サンドの中身はナチュラルチーズとサニーレタス。ゆで卵のスライスとハムだね」

そう言いながらキラは魔法瓶の蓋を開ける。

その瞬間、コーヒーの香ばしい香りが辺りを支配する。

「旨そうな匂いだな」

一夏の言葉にシャルルも頷く。

「うん、本場のカフェみたい」

女性陣はなにやら屈辱そうな顔をしている。

「どつぞ」

ブラックで差し出されるコーヒーを一口啜った瞬間、一夏の顔が微笑む。

「旨いな！」

キラは嬉しそうな顔をして言う。

「良かった。それ、僕がブレンドしたんだ。これでも自信はある積もりだよ。コロンビア4割、ブラジルが3割、モカが2割、ロブスタが1割の構成。まあ、ポピュラーな配合かな」

シャルルが感心したように言う。

「キラってコーヒー詳しいんだね？」

その瞬間、キラはコーヒーを啜りながら遠くを見つめる。

「まあ、ある人の直伝かな。その人は結構、癖の強いコーヒーが好きだったけど」

アスランもまたコーヒーを啜りながら言う。

「まあ、バルドフェルドさんには遠いかな」

その言葉にキラは苦笑する。

「まあ、ね」

その姿を見たら人はキラとアスランが急に大人びた雰囲気をかもし

出していると感じた。

2人の過去は余り解らない。でも、多くを背負っている事は理解できた5人だった。

放課後、訓練アリーナではキラとアスランによる、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルの訓練を行っていた。

鈴は一夏達が格段に強くなっている事を知ったから、シャルルは自分の目的を果たすためだ。

「今日から鈴とシャルルが加わる事になったけど、鈴の担当はアスラン、シャルルの担当僕だね」

そのキラの言葉に一夏が質問した。

「なんか、アスランの方が生徒の人数多くないか？」

その質問にアスランが理由を答える。

「理由は簡単だ。一夏と箒は接近戦主体兵装、それで鈴は近距離、中距離対応型だから俺が纏めて教えた方が効率がいい。シャルルの場合はオールラウンダーで兵装選択を行う事からキラが講師をしたほうが的確だ」

あくまで訓練は合理的にかつ的確に行う事を心がけている2人である。

理由を聞いて一夏は納得した。

こうして訓練を開始した。

キラはセシリアとシャルルを集め、講義内容を説明する。

「まずはセシリアだけど、ブルーティアーズを操作しながらの高速機動訓練を行うのが今回の課題。そして、シャルルは専用機のISのデータを見せてもらったけどシャルルが何処まで出来るのか解らないから2人共、僕と模擬戦だね」

「良いですわ」

「解った」

その言葉に力強く答える2人。

そしてキラは頷きながらISを展開した。

その姿を見たシャルルが驚愕する。

「え！？ 全身装甲！？ しかも見た事が無い！！」

セシリアはなれた物で平然と見ていた。

「それじゃあ、はじめようか？」

そう言い3人は空に飛び立つ。

セシリアは先制攻撃にブルーティアーズを機動しキラに狙いを定めるがキラもドラグーンを左右2機ずつ展開した。

「な！？ 誘導兵器！？ その翼は誘導兵器ですよ！？」

戸惑いと驚きの声を上げるセシリア。

「ちゃんと制御して。じゃないと撃ち落されるよ」

「クッ！！」

そう言いながらキラはシャルルにビームライフル2挺を構えて発砲する。

「な！？ 誘導兵器を操作しながら攻撃してる！？ どんな平行処理能力！？」

シャルルの驚きも無理は無い。

誘導兵器とは特殊なOSをつんでいないと制御は難しい。

しかもそのOSは相手にジャミングされる事無く起動し、制御しなければならぬ事から膨大なシールドエネルギーを消費する。

故に思考制御が専らだろうが、ソレを手足のように扱うのは超人的な空間認識能力が要求される。更に戦闘も行いつつとなれば空間認識能力と超人的な平行処理能力が要求される。

更に誘導兵器は操作性の悪さと膨大なシールドエネルギー消費、更にコストの割の合わないさが相まって余り普及していない。

実験的にセシリアのブルーティーズが導入したくらいだろう。

（機体が化け物なのか、操縦者が化け物なのか……）

シャルルの考えはある意味正しい。

両方化け物レベルなのだ。

そもそも、ストライクフリーダムはハイパーデュートリオンエンジンと言う無制限かつ無尽蔵に大出力のシールドエネルギーを生成することが出来る半永久機関を搭載。

其処から生み出される超大出力兵装にヴォウチュール・リユミエール推進システムと言う光パルス高推力スラスターを装備、コレはシールドエネルギーが続く限り推進切れを起こす事無く超高速で移動が可能。

更にキラの誘導兵器であるドラグーンは空間認識能力に依存しない第2世代型ドラグーンである。

しかし、ストライクフリーダムの場合、キラの要望により、より複雑な操作が出来るようにした結果、特殊な空間認識能力が要求される様になり、第1世代型ドラグーンに近いと言える。

また、ドラグーンは量子通信で制御されている。電波通信とレーザー通信は電気や光の『波』の性質を利用するが、量子通信はそれとは違い電子や光などの『粒子』の性質を利用する技術だ。解り易く説明するなら絶対に解読不可能な暗号通信ができ、しかも超高速、大容量な通信技術といった所だ。

その為、敵のジャミングや乗っ取りは通用しない。

しかし、キラ達の世界でもこの量子通信は莫大なコストと電力消費量が半端無い為、一部政府機関や軍事目的でしか使われなかった。

しかも一般の通信装置とは規格が全く違う為、使う場合は既存の通信装置も一緒に用意する必要がある。コスト的な物を考えたら途方も無い金額になる。

フリーダムやレジェンド位にしか実戦でお目に掛かれないのはその為だ。

また、欠点もある。ソレはキラしか扱えない代物であると言う事が最大の理由だろう。

元々兵器は、ある一定の訓練さえすれば十全の成果を発揮すると言うのが最高の兵器の定義だが、ストライクフリーダムはこの近代兵器論の対極に位置する兵器だろう。

何故なら、キラの技量ありきで開発された、設計思想からして対極なのだ。

その事を知らないシャルルは何か釈然としない物をフリーダムとキラに抱きながら訓練をした。

一方の鈴もアスランと戦いながらも驚愕していた。

「一夏！ 遅いぞ！ それでは白式の速度を生かせないだろうが！ 箒、相手との間合いの詰め方が甘い！ 相手をよく見る！！ 鈴、少しは考えて砲撃をしる一夏と箒を巻き込むだろうが！！」

激しい訓練の中でアスランは呼吸を乱す事無く的確な指導を行う。

3人は同時に別方向からの斬撃を繰り出すがアスランは一夏の斬撃をビームサーベルで受け止め、箒の斬撃をシールドに固定したシャイニングエッジで受け止めた。

そして鈴の斬撃を右足のグリフォンビームブレードで受け止める。

「ええ！？ 足から刃が！？」

その鈴の驚きを他所にアスランは左足で一夏を蹴り飛ばし、箒にピ

ームサーベルで切り倒すと、鈴にハイパーフォルティスビーム砲を叩き込んだ。

訓練も終わり地面に倒れこむ4人。

正直、キラ達の訓練は地獄とここで鈴もシャルルも体感した。

キラは一通り、無人IS事件の資料をまとめ千冬に提出すると、千冬に頼み込み大浴場を解放してもらった。

湯船につかりながらキラはオッサン臭いため息を吐く。

「あ~~~~~最っ高」

そう言いながら肩にお湯を掛けていた時だった。

風呂の扉が開いたのだ。

「ん？」

キラが人の気配を感じ立ち上がると其処にはシャルルがいた。

「ああ、シャルル？ 良かったね。丁度、大浴場がかいほうされ…
…」

キラの言葉は段々尻すばみになる。

「……」

無言のシャルルにキラは啞然とした。

男にはあり得ない胸の膨らみがあるからだ。

「えっと……シャルル……だよね？」

「えっと、あの、その……」

シャルルは胸と股を隠しながら言いよどむ。

取り合えずキラは湯船に入る。

「と、と、取り合えず、入るか出るかしてくれると嬉しいな。その、目のやり場に困るから……」

その言葉にシャルルは慌てて湯船に浸かった。

離れた距離で正直会話が出来ない状況のキラとシャルル。

「キラは……さ……何も言わないの？」

シャルルの質問に何とか答えるキラ。

「正直、驚いてる。でも、君が男装してまでこの学園に来たのは何か理由があるんでしょ？ ソレを無理には聞かない」

その言葉にシャルルは観念した様に自分の身の上話をした。

「実はさ……父の命令なんだ……」

「デュノア社の？」

そのキラの質問にシャルルはコクリと頷いた。

「ウン、僕はね。父と愛人の間に生まれた嫡出児なんだ。父の事を知らないで母と暮らしてたけどデュノア社の人に引き取られてね。そこで様々な検査を受けたんだ。そしたらIS適正が高かったから非正規操縦者としてテストパイロットをした。父と会ったのは2回で話したのも1回位かなその時間も1時間にも満たなかった。正規の奥さんからは『泥棒猫の娘』って言われたな……」

嫌な事を思い出させたとキラは思った。

そしてキラはある結論に達した。

「デュノア社の経済事情や開発事情は知っている。第3世代型ISの研究は滞ってる。更にそれに連動してISの開発権を剥奪される可能性もある。だから君は……」

キラの予測にシャルルは辛そうに笑う。

「キラの推測通りだよ。僕を男装させて学園に送り込んだのは宣伝の為にISの情報収集が目的」

「ヤッパリ……」

キラは顔を抑えながら言う。
その言葉の中にシャルルを道具の様に扱うデュノア社のやり方に怒り心頭だった。

「これから君は如何するの？」

その質問にシャルルは答える。

「バレた以上はここにはいられない……本国に帰るかな……帰った後は行く当ても無いよ。良くて牢獄かな？」

その言葉にキラは切れた。

シャルルの両肩を掴み怒鳴った。

「ふざけるな！ シャルルは何も悪い事をしていない。逆らえない状況でソレを指示したデュノアの人間が悪いだろう！」

「でも……」

キラの怒った所を見た事の無いシャルルは戦慄した。

キラがここまで怒れる人間だと言うことに。

「そんなの親じゃ無い！！ 君はここにいろ！ 僕が黙っていればいいだけだ！ もしバレても君の父親や会社、国家は手出しできない」

「え？」

キラは目を瞑りながら言う。

「ISS学園特記事項、『本学園における生徒は、在学中においてありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない』」

その条文を聞きシャルルは目を見開く。

「つまり、この学園に在学中、3年間は大丈夫と言うことだよ。その間に僕が方法を考える」

その言葉に呆れながらシャルルが答える。

「よく覚えてるね。特記事項は50もあるのに……」

キラは微笑みながら言う。

「簡単だったからすぐ覚えた」

キラの言葉にシャルルは微笑みながら答える。

「ありがとう、キラ、庇ってくれて……でも何で僕を庇うの？」

その質問にキラは遠くを見つめるように言う。

「僕も本当の親の顔を知らないから」

「え……」

キラは遠くを見つめるように言う。

「僕は生まれてからすぐ養父母の元で過ごしたんだ。だから本当の

親の顔は写真でしか知らない。家族はもう会えない。僕にはアスランがいる。でも君には誰も支えが無い。なら僕が君の支えになる。そう決めたからかな」

その瞬間、シャルルはキラに抱きついた。

「有難う、キラ」

キラは抱きつくシャルルを何とかする為に言う。

「シャルル……余り抱きつかないで……その、当たってる……」

そう言った瞬間、キラの言葉を察したシャルルが慌ててキラから離れて胸を隠す。

「もしかして気になる？」

その言葉にキラは正直反応に困った。

「ひょっとして見たいの？ ……キラのエッチ」

「な！？」

年齢的には4歳も離れているシャルルを性的な目で見る事は無くとも本能的な所がキラを攻め立てる。

こうして、シャルル、改め、シャルロットはキラと共に歩む道を選択したのだった。

9話 遠き地より来た太陽と夜の女神達（後書き）

キラ~~~~~
~~~~~!!

§!  

今すぐ其処を変われ！！ さあ、変われ！！

俺が抱きしめるから！！

＊作者は暴走しています。暫くお待ちください。

$$\begin{matrix} \overline{15} \\ \overline{15} \\ \overline{15} \\ \vdots \end{matrix}$$

全く、小説で読んだ時は余り意識してなかったけど、アニメ見たら恐ろしい破壊兵器だった！！

そりゃ、シャルロット党なて物もできる訳だわ！！

## 10話 夜の女神は赤い騎士を見初める

シャルル改め、シャルロットがキラに秘密を明かしてから2日後。

IS学園はトーナメントの話題で持ちきりだった。

その話題に関連して、トーナメントはツーマンセルのチーム戦方式と言う異例の設定になった。

これは無人IS襲撃事件の対抗措置としての学園側の配慮により変更された。

教職員や生徒会、実行委員会は明確なルール作りと会場の広さ、避難経路の確認などを話し合う為、連日会議が続いた。

キラ達もその話題で今週の会話が成り立つくらいだ。

屋上ではキラ、アスラン、一夏、箒、鈴、セシリア、シャルの7人は屋上で昼食を取りながらトーナメントの話題を話していた。

「キラとアスランは如何するんだ？ お前等2人が組むのか？」

一夏の問いかけにその事を否定するキラとアスラン。

「いや、俺達は今回、組むことは出来ないんだ」

「織斑先生がソレを禁止したんだ。何でも、『お前等2人が組んだら1年から3年で勝てるヤツが存在しなくなる。だから、組むな』」

だそつだよ」

一夏達はああ、納得と言わんばかりに頷いた。

正直、無人ISみたいにバラバラにされて蹴散らされるのがオチだ。

優勝者が目に見えているだけに千冬の英断はさすがと思った一夏達だった。

「それに関連して、僕達のISにリミッターを掛けられるんだ」

その言葉にシャルが質問する。

「どうリミッターを掛けられるの？」

その質問にアスランが答える。

「エンジン出力を100%から50%にカット、ビーム兵装の出力制限、装甲強度低下、特殊推進システム、俺の場合はファトゥム・01の推進システム50%カット、キラの場合はヴォワチュールリユミエールシステムの機動性を50%カット、マルチロックオンシステム使用不可だな」

ソレを聞いた鈴が呆れながら言う。

「何それ？ リミッターのオンパレードじゃない」

セシリアは納得しながら言う。

「まあ、妥当ではなくて？ 正直、化け物みたいなISですから」

その言葉に筭が噛み付く。

「しかし、手枷、足枷、目隠し、重りを取り付けて戦う様なものだ。ハンディも過ぎると言うものだ」

その言葉に一夏が同意する。

「まあ、フェアじゃないわな」

シャルは違う質問をした。  
心なしかモジモジしながらキラをチラチラ見ている。

「じゃあ、さ……キラは誰と組むのかな……？」

その言葉にキラは考えながら言う。

「今の所は決まって無いんだ」

その言葉を聞いたシャルの顔色は一気に明るくなる。  
心なしか嬉しそうにキラに提案した。

「じゃあさ、僕と組まない？ アスランには及ばないかもしれないけど……ダメ……？」

最後の方は瞳を潤ませながらキラに懇願する様に質問するシャルにキラは安心させる様に言う。

「ダメじゃ無いよ。解った。よろしく。シャル」

「うん！ よろしく。キラ」

シャルとキラがコンビを組む事が決定し、話題は一夏と誰が組むかで揉めていた時だった。

突如、キラとアスランを呼ぶ声が響き渡る。

「アスラン・ザラ、キラ・ヤマト」

その声にキラとアスランはユックリと振り向くと屋上の出入り口の所にラウラが立っていた。

そして、ラウラがユックリと歩みを進める。

屋上の空気は重たい物へと変わり筈、鈴、セシリアは臨戦態勢を取っていた。

シャルも緊張した面持ちでラウラを見つめる。

「何だ？ ボーデヴィツヒ？ 俺達に用か？」

アスランの問いかけにラウラは頷きながら答える。

「トーナメントの事は聞いたな？」

その質問にアスランが頷きながら質問した。

「ああ、だが、ソレと俺達と何の関係がある？」

その問いかけにラウラが答える。

「教官から聞いた。貴様等は全盛期の教官と互角の実力者だと……その実力を確かめたい」

その言葉にアスランが問う。

「もしお前の御眼鏡に適うなら俺がキラをパートナーにしたい。そう言う事か？」

アスランの質問にシャルは明らかな敵意の目を向ける。

頷きながら一方的に言い放つラウラ。

「話が早くて助かる。どちらが私の相手をする？」

その上から目線の態度を崩さないラウラにキラが名乗りを上げようとした時、アスランが静止し、名乗りを上げる。

「俺が相手をしよう。時間と場所は？」

「1600時、第5練習アリーナだ」

言つべき事は言ったとばかりに踵を返すラウラの背にアスランは言う。

「もし、俺と戦うなら決死の覚悟で来い」

その言葉にラウラは背を向けながら言い放つ。

「貴様もな……」

今度こそラウラは屋上から出て行くのだった。

ラウラは廊下を歩きながら敬愛する教官、千冬との会話を思い出していた。

（教官の強さこそ私が目指すべき“力”。その力と互角と言うあの2人……気に入らん……教官こそ最強なのだ。まずはアスラン・ザラの化けの皮を剥がし、教官の目を覚まさせて差し上げなければ……この様な腑抜けた所でおられるから見ると目も曇るのだ）

そして、誰もいない廊下で一人呟く。

「力こそが全てだ。ヤツの、アスラン・ザラの甘ったるい言葉など我が力で粉碎する」

そう言いながらラウラはISの調整の為にメンテナンスルームへと歩を進めた。

アスランはラウラとの戦いに備えて彼女の情報を収集する為、午後の授業を休んだ。

アスランは自分の寮に帰りパソコンを起動、ドイツの政府、軍のコンピュータにハッキングを開始した。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、ドイツ連邦軍少佐、ドイツ連邦陸軍特殊作戦師団隷下のIS配備特殊部隊、シュヴァルツェ・ハーゼ、通称、黒ウサギ部隊の隊長、年齢15歳。性別、女」

アスランは更に画面を読み進めていくうちに顔色が変わる。

「……遺伝子強化試験体、ナンバーDNF-185？ ナノマシーンとの適合値が高かったものの精密検査の末、遺伝子異常を発見、カテゴリーFとする……何だと……？」

更に読み進めるアスラン。

「チフユ・オリムラのIS戦闘訓練プログラムに参加、最優良成績者としてIS専用機を受領する……だから、織斑先生を教官と呼んでいたのは……」

しかし、アスランが気になったのは遺伝子強化試験体の行だった。

「何処の世界でも変わらないな……人の命を弄ぶのは……」

アスランはコロニーメンデルやブルーコスモスのロドニアのラボの事、デュランダル議長が推し進めたディステイニープランの事を思い出した。

唯、出来るからと言う理由だけで作りだされた命、命を意思無き歯車としてしか見ない世界。

その中でラウラは力こそ全てと思って生きてきたのだろう事をアスランは感じ取った。

「彼女も自分の無力に泣いて、力を求めたか……」

アスランはキラやレイ、シンの事を思い出す。

そして自分の過去も思い出した。

ユニウス7の核攻撃を唯、見ている事しか出来なかった自分。

戦場で散って逝った仲間達。

兵士達の怒りや嘆き。

父の死。

ミーアの悲痛な嘆きと願い。

デュランダル議長の正しかった思いと間違った行動。

「本当に正しい事は自分で見つける。か……」

正しさなど人それぞれだ。

他人の正しさを認めながら自分の正しいと信じた信念を貫いた者だけが正しい。

あの戦争でアスランが学んだ教訓だ。

「俺の勝利条件は……彼女を理解した上で俺の思いを伝えるだな」

そう言いながらパソコンの電源を落としたアスランは立ち上がり、第5練習アリーナへと向かった。

午後、4時。

第5練習アリーナにはラウラが彼女の専用IS、シュヴァルツエアレーゲンを装着した状態で中央に立っていた。

アスランはアリーナの中央にやって来る。

「ISを起動しろ。すぐ始めるぞ」

その言葉にアスランは無言で右手を掲げながら瞳を瞑る。

そして、アスランの体を光が包み込み、ジャスティスへと変身した。

「ソレが貴様のISか？」

ラウラの問いかけにアスランは静かに自分の愛機の名を謡う。

「インフィニットジャスティス……ソレが俺のISの名だ」

「英語で『無限の正義』か？ ご大層な名だな」

そう言いながらラウラは右肩のレールカノンのアスランに向けながら言う。

「勝敗は簡単だ。どちらかのシールドエネルギーがエンプティィになるか降伏を口にした時点で勝敗が決まる。質問は？」

その言葉にアスランはビームライフルを構えながら言う。

「いや、無い」

その言葉を聞き、ラウラは言う。

「行くぞ」

その言葉と共にレールカノンの砲口から眩い放電の光が吐き出される。

それと同時に空薬莖が排莖される。

アスランは慌てる事無くレールカノンから撃ち出された弾頭をビームライフルで撃ち落とす。

弾頭に緑のビームが着弾、アスランとラウラの間に爆煙と爆炎がお互いの視界を塞ぐ。

ラウラは平静な顔をしながらもアスランの技量に感嘆とも恐怖とも取れない物を抱いていた。

（レールカノンの発射速度は音速を超えている。ソレを距離10メートルしか放てていないのに発射タイミングを合わせて中央で爆発させるように弾頭を迎撃しただ！？ 何てふざけた技量だ！？）

ラウラの驚きを他所にアスランは爆煙から飛び出し、右手を左腰のビームサーベルを引き抜きラウラに迫る。

「!？」

ラウラは繰り出されるアスランの斬撃を何とか回避する。

回避する時にシールドとアーマーを損傷した。

（な!？ 此方のシールドを切り裂いてISの装甲にダメージを与えただと!？ どんな出力の熱量兵器なんだ!？）

これ以上近づかれたら危険と判断したラウラはAICを起動しようとした。

しかし、アスランはラウラの目で追い切れない程の超高速起動で翻弄した。

「ツク!？」

そもそもこのAICはもともとISに搭載されているPICを展開させたもので、対象を任意に停止させることができ、1対1では反則的な効果を発揮するが、使用には多量の集中力が必要であり、複数相手やエネルギー兵器には効果が薄い。

つまり、相手を認識し、集中力を費やす必要がある。

アスランはソレを理解した上でラウラが認識できない超高速で動き回り、集中力をかき乱し、ビームライフルで牽制する。

（AICの対抗策を用意してきているとはな……少々悔っていた）

そう思いながらラウラはAICをカットし、ワイヤーブレードを射

出するが、アスランはバレルロールしながら複雑にうねるワイヤーブレードを縦横無尽に回避する。

「そんな力の使い方では駄目だ！」

「何を！？」

「過去に囚われ、力を求め、お前は何をする！？ 力は唯の道具だ！！ 存在定義じゃない！！ その力で何を成したかによって力の価値は決まる！ お前はその力で何をする！！」

その言葉にラウラは明確に答える。

「自分の存在意義を証明する為だ！！」

そして、アスランは再度ラウラに接近する。

ラウラはプラズマ手刀を展開、アスランを突き刺そうとした。

しかし、アスランは超人的な太刀捌きでラウラの右手を切り裂いた。

ラウラの目の前にスクリーンが映し出され、 右腕部損傷 の文字が浮かび上がる。

「クッ！！」

ラウラはアスランから距離を取る様にレールカノンを乱射する。

「お前は存在意義とは何だ！？」

回避しながらアスランは叫びながら問う。

「戦闘単位として完成された存在！！　ソレが私の全てだ！！」

ラウラもまた叫ぶ。

「それは人の生き方じゃない！！　そんな機械の様な生き方は！！  
お前にだって、明日を夢見る事だって出来るんだぞ！！　ソレを  
放棄して与えられた役割を淡々とこなす！　ソレがお前の望みか！  
」

その言葉にラウラもまた叫ぶ。

「私はソレしか与えられなかった！！　ソレしか知らない！！　貴  
様に何が解る！！　私の何が！！」

アスランはからシャイニングエッジビームブーメランを引き抜きラ  
ウラに投擲する。

桃色の円を描きながらビームブーメランはレールカノンを切り裂く。

それに引き続き頭部バルカン砲と胸部バルカン砲をラウラに浴びせ  
る。

シュヴァルツエアレーゲンはソレをマトモに喰らい、装甲がズタズ  
タになる。

その時だった、ラウラの目の前に突如ウィンドー画面が現れ、表示  
した。

機体の損害……レベルD、IS操縦者の精神負荷……最大値、ロ  
ック解除、ヴァルキュリートレースシステム起動

その瞬間、ラウラと彼女のISシユヴァルツエアレーゲンが放電し  
だす。

「あああああああああああああああああああああああああ  
ああああ!!」

アリーナを切り裂く咆哮に似た悲鳴にアスランは来るべき物が来た  
と考え、ビームライフルをリアスカートにビームライフルをマウン  
トしビームサーベルをアンビデクストラスハルバードモードにし構  
えた。

その瞬間、ラウラの眼帯が吹き飛びヴォーダンオージェが露になる。  
そして、ラウラのシユヴァルツエアレーゲンの形状が変化する。

変化が終わった時、黒い全身装甲が現れ、その手にはビーム刀が握  
られていた。

「VTシステム……過去のモンド・グロッソ部門優勝者の戦闘方法  
をデータ化し、そのまま再現、実行するシステムか……多分、アレ  
は織斑先生だな……」

アスランはビームアンビデクストラスハルバードを前に突き出しな  
がら言う。

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

獣の叫びに似た雄叫びを上げながらラウラはアスランに襲い掛かる。

「クツ」

超高速で接近するラウラにアスランも超高速で移動を開始、ビームの刃同士がぶつかりあい激しくスパークする。

次の瞬間、  
ラウラが神速の剣捌きで対応してきた。

アスランもそれに対応してみせる。

お互い激しい剣技の応酬を繰り広げる。

ラウラの袈裟懸けを流しながらアスランは叫ぶ。

「ラウラ！！ 意識を強く持て！！ お前、それで良いのか！？ システムの操り人形で！！ 他人の力を借りて！！ ソレで満足なのか！？」

「O A A A A A A A A A A A ! !」

獣の言葉しか返さないアスランはついにキレた。

「この！！馬鹿野郎！！」

アスランはSEED能力を開放した。

思考がクリアになっていく感覚に囚われながらもアスランは冷静にラウラの斬撃を回避する。

我武者羅に振るわれる太刀筋を簡単に回避するアスラン。

一旦、距離を取りアスランはバレルロールしながらすれ違い様にラウラの左腕部を切断する。

それでも突き進んでくるラウラにアスランはビーム刀の根元を切り裂き使用不能にする。

それでも追いつがるラウラにアスランは脚部グリフォンビームブレードを展開、ラウラが伸ばした右腕部装甲を切断した。

その時の衝撃でラウラは地面に叩きつけられる。

その瞬間、ラウラに電撃が走り、全身装甲が解かれる。

「……………終わったな……………」

アスランはそう言いながら地上に降り立った。

ラウラは保健室のベッドで目を覚ました。

「……………ここは……………?」

ラウラの質問にアスランは答えた。

「保健室だ。アレから君は死んだ様に眠っていたよ」

ラウラは起き上がろうとした時、体中に激痛が走り、起きられなかった。

「無理をするな。全身に無理な負荷がかかった事で筋肉疲労が出ている。早めに対応したから回復も早い1週間くらいで回復するから1ヶ月後のトーナメントまでには間に合う」

その言葉を聞き、ラウラは天井を見つめながらアスランに問いかけた。

「一体、何があった？ お前にブーメランみたいな物を投げつけられた所までは覚えているのだが……」

その問いかけにアスランは静かに答える。

「君の機体の中にあつたVTシステムが作動、システムに心を飲み込まれ、支配され暴走した」

その言葉を聞き、ラウラはアスランを驚きの目で見つめた。

オッドアイの瞳がアスランを射抜く。

「国、企業の開発、研究、使用の全面禁止されているシステムが以前のシュヴァルツェアレーゲンに積まれていた。俺はソレを破壊、君を保健室まで運んだ。因みに、君のISは無事だ。システムを破壊しただけだ。安心しろ」

暫くの沈黙の後、ラウラが口を開く。

「笑いたければ笑え。散々デカイ口を叩いて、蓋を開ければ反則までして勝てなかったんだ。私の存在意義はお前に完全に否定された」

その言葉にアスランはため息を吐きながら言う。

「なら、見つければいい。自分が戦う意味を……君が戦士としての戦う理由を……どの道、この学園には3年はいなければならぬ。時間は沢山ある」

「……私に見つけられるだろうか……？」

その言葉に戸惑いを見せるラウラにアスランは尚も語りかける。

「大丈夫だ。見つけられる。俺だって見つける事が出来たんだから……」

その言葉にラウラが問いかける。

「見つけられると思うか私に？」

その問いにアスランは違う回答を返した。

「もし、見つけられないと思うなら俺と一緒に探してやるさ」

アスランは微笑みながらそうつ。

日も沈み、月がアスランの端正な顔立ちを映し出す。

ラウラは暫くそれに見惚れていた。

そして、思い出す。

アスランとの戦いでアスランの想いが太刀筋から伝わってきた不思議な感覚。

アスランもまた彼女の空虚な想いを感じ取っていた。

それがごく稀にIS同士で起こる相互認識干渉だと言うことをアスランもラウラもその時は理解できていなかった。

「ああ、ソレと、君の御眼鏡に適ったかな？」

アスランらしくない言葉にラウラはアスランに背を向けこう言う。

「満点だ」

そう言いながらラウラは寝た。

アスランも彼女を見守りながら椅子に座りながら眠る。

アスランとラウラ、赤の騎士と黒の砲兵は、お互いをパートナーとして認め合った。

## 11話 白き天使と赤い騎士は女神に衣を献上する。

キラ達は一夏達と共にトーナメントに向けての訓練を開始していた。

「ソレは良いのだが……」

箒は腕組をしながら目を瞑り、不機嫌そうに言う。

「何でソイツがいるのよ？」

鈴もまた不機嫌そうにある人物を見ながら言う。

鈴の視線の先にはラウラが涼しい顔をしながら立っていた。

「ああ、ラウラは俺と組む事になった。だから訓練にも参加する」

その言葉にセシリアが疑問を投げかける。

「アスランと貴女が？」

アスランはその言葉に頷きながら答える。

「ああ、俺は接近戦で前衛、ラウラが後方で砲撃戦と言った具合だ」

キラは、話は終わりと訓練の内容を説明する。

「今回のトーナメントはツーマンセルの1小队としたチームでの戦

闘が基本。勝敗はチームのIS2機ともシールドエネルギーがエンブティーになるか降伏宣言をした時点で敗北となるね」

ソレを引き継ぐようにアスランが説明する。

「今回のトーナメントの勝利の鍵はチームワークだ。そこで、それぞれチームに分かれての模擬戦を戦い、チームの配置、陣形、お互いの兵装、連続戦闘稼働時間、癖や戦闘での特徴を把握するのが今回の訓練の目的だ。質問は？」

アスランは周囲を見回し、質問が無い様なので話を続ける。

「それでは、チームに分かれて30分間お互いの兵装の確認や連続戦闘稼働時間、得意分野を話し合い陣形を決めろ」

そう言い、アスランは一時解散を命じた。

一夏と箒のチームではお互いの兵装を話し合った後、陣形の割り振りを決めかねていた。

「如何すんだ？ 正直、俺も箒も接近戦主体だろ？」

「ああ、前衛も後衛も無いからな……」

一夏と箒は頭を抱えながら話し合った。

鈴とセシリアのチームではややテンションが低い。

陣形やお互いの兵装、稼働時間は把握できたが、ジャンケンで破れ、一夏と組む事が出来ずテンションは低かった。

「全く……最悪ですわ……一夏さんと組みたかったのに……」

「全くよ。セシリア、アンタ、私の足だけは引つ張らないでね?」

その言葉にセシリアも憎まれ口を叩く。

「それは此方の台詞ですわ。鈴さん」

その頃、キラとシャルはお互いの兵装や能力について話し合う。

「キラの場合はリミッターのオンパレードだけど、兵装は豊富だね。ビームライフルが2挺、腹部のプラズマビームに腰部レール砲が2挺、背中ドラグーンって言う誘導兵器が8機に頭部バルカン砲、そして、ビームサーベル。距離も選ばないし」

その言葉にキラもシャルのラファールリヴァイヴカスタム?の機体能力についても触れる。

「ラファールリヴァイヴカスタム？もいい機体だよ。高速切替の大容量の拡張領域を活用し、事前に武装の呼び出しをせずに戦闘を同時進行で武装を呼び出す事で目まぐるしく変わる戦闘に即時対応が出来るんだから。それに灰色の鱗殻も面白い装備だね」  
グレースケール

その言葉にシャルは落ち込む。

「キラには全然通用しないけどね。それに第2世代型だし」

その言葉にキラがある事をシャルに提案する。

「じゃあ、シャル。訓練が終わったら僕の所に来てくれる？ ISの強化をしてあげるから」

その提案に流石のシャルも驚く。

「え！？ でも、ISは国家や企業が管理しているんだよ？ ソレを勝手に弄るのは良くないよ！ バレたら捕まるよ！？」

シャルの言葉にキラは素敵な微笑を浮かべながら言い放つ。

「バレなければ問題ないよ」

と。

アスランとラウラはお互いの兵装と陣形の確認が終わり話し合っていた。

「アスラン、ヤマトとデユノアのチームと当たった場合の対策は考えているのか？」

その言葉にアスランは頷く。

「ああ、キラとマトモに戦えるのは俺くらいなものだ。言い方は悪いがハッキリ言ってラウラが出てきても意味が無い。多分、キラは俺と当たった時、俺を押さえる為に前に出るだろう。そこで、ラウラ、君にはシャルルに当たってもらおう」

アスランの言葉に内心憤慨しながらもアスランと対等のキラとマトモに戦える訳が無いとその身をもって理解したラウラはアスランの言葉に頷く。

「了解した」

そこで、アスランはラウラに提案を持ちかけた。

「ラウラ、君のISを改良したい」

その言葉にラウラは質問する。

「国家や企業が管理しているISをどうやって改良する気だ？ パーツにしても国家や企業が厳重な管理を行っているし、OSもロツクが何重にも成されている」

その質問にアスランはハツキリと答えた。

「I S学園の名でパーツや部品は取り寄せる。O Sはキラ程の技量が無くてもロックの解除は可能だった」

その言葉にラウラは尚も反論する。

「我が国がそんな事を許す訳が無いだろう？」

その言葉にアスランはキツパリと答える。

「V Tシステムを搭載した事をネタに脅迫して黙らせる」

ソレを聞いた瞬間、ラウラはアスランと組んだ事をちょっと後悔した。

訓練も終わり、キラとシャルはキラの車に乗り、キラが学園郊外に用意した工房にいた。

「キラってこんな工房を持ってたの？」

シャルの質問に作業をしながら答えた。

「僕が開発したOSを国家や企業に匿名で売りさばいて稼いだお金で用意したんだ」

ソレを聞いた瞬間、シャルは驚きを露にする。

「ISのOSを開発できるの!？」

「うん、まあ、一夏のOSを組んだのも僕だし、織斑先生の依頼で打鉄のOSを改良して学園からお金も大分貰ったし」

キラは思い出す様に言いながらシャルのラファールリヴァイヴカスタム?のOSを改良していく。

「ところでどんな改良をするの？」

シャルの疑問にキラは作業をしながら答える。

「OSの要領の向上による操縦者のイメージインターフェイスを『ストライカーパックスシステム』に適合させる様にOSをグレードアップ。その為のメモリーの拡張と『ストライカーパックスシステム』のOSの作成。考え方は第3世代と第2世代を融合させた考え方かな？」

キラの言葉に聞きなれない言葉を質問するシャル。

「『ストライカーパックスシステム』？」

その言葉にキラは頷きながら答える。

「特定のコンセプトに沿った武器やスラスタなどの装備を複合し

た換装型バックパックで、機体背面に専用のプラグを持つISに、状況に見合ったストライカーパックを装備する事で、どのような用途、状況に対しても能力の高い機体として臨む事が可能なシステムなんだ。また、シールドエネルギーバッテリーも内蔵されて、ISの稼働時間を延長する役割を果たしているのが特徴だね。つまりIS本体とストライカーパックの2つのシールドエネルギーバッテリーがあるから長時間の戦闘を可能にしているんだ」

ソレを聞いたシャルは驚く。

「そんな事が可能なの!？」

シャルの驚きにキラは作業を完了させこう言った。

「可能だよ」

そう言うときらは次にストライカーパックの作成に取り掛かった。

「ありがとう!! キラ!!」

そう言いながらシャルはキラの背中に抱きついた。

「じゃ、シャル!? 抱きつかないで!! 今作業中だから!! それに当たってる!! 僕の背中に当たってる!!」

その言葉にシャルは頬を赤らめながらキラの耳元で語りかける。

キラの耳元にシャルの甘い吐息が当たりキラの耳を撫った。

「2人だけの時はシャルロットって呼んでよキラ……」

シャルは暫くキラの背中に抱きついたまま耳元で甘い吐息を吐いてキラの反応を楽しむのだった。

「シャル！？ 止めて！ 手元が狂うか！？」

そのキラの抗議にシャルは意地の悪い笑みを浮かべこう言った。

「シャルロットって呼んでくれないキラが悪いんだからね？ シャルロットって呼んでくれたら止めてあげる」

この時、キラは心で絶叫した。

（シャルロット！！ 何て恐ろしい娘！！）

同じ頃、アスランとラウラはアスランの工房にいた。

「どのような改良を加える気だ？」

ラウラの問いかけにアスランは答える。

「破壊したVTシステムの余剰スペースを利用して追加のパワーエクステンダーを搭載、肩部装甲内に3連装ビーム砲と連装砲を搭載、背部にはバラエーナ改2連装ビームを搭載した。後、レールカノンの省電力化と威力向上の為の改良をした」

その言葉にラウラが疑問を投げかけた。

「ビーム兵器か？ シールドエネルギーの消費が早いと思うのだが？」

その言葉にアスランは説明をする。

「エネルギー変換効率の改善を行い、火力を落とす事無く大出力ビーム兵装の使用が可能になった。前のシュヴァルツエアレーゲンのレールカノンよりバラエーナ改2連装ビームの方が消費エネルギーは少ないくらいだ」

その説明にラウラはアスランを驚きながら見る。

「そんな事が可能なのか？」

「可能さ」

その言葉を聞き、ラウラは誇らしくこう言った。

「流石は私の“嫁”だ！」

その言葉にアスランは苦笑しながら言う。

「ソレを言うなら“婿”だろ？ ソレと俺は何時から君の伴侶になったんだ？」

「私がそう決めたからだ！！」

胸を張りながらそう言うラウラにアスランはため息を吐きながら言

う。

「俺はそう言う冗談は嫌いだが？」

その言葉にラウラはムスツとしながらアスランに近づき、アスランの唇を奪う。

「~~~~~!？」

突然の不意打ちにアスランは反応出来ないままラウラにキスをされてしまった。

ラウラは唇を離しながら頬を赤らめ、してやったりと言わんばかりにアスランに言い放った。

「コレが証拠だ。因みに私のファーストキスだ。責任は取ってくれるのだろうな？ アスラン。婚姻届でいいからな？」

その言葉にアスランは頭を抱えて心の中でこつ言った。

（ラウラ!! 何て恐ろしい娘!!）

と。

## 12話 女神達のダンスレッスン

キラとシャルは土日の休暇を利用してシャルの新型IS、ラファールリヴァイヴmk?の実機訓練を行っていた。

フォーマットとフィッティングは改良が完了した時に即時に行った。元々、ラファールリヴァイヴカスタム?の機能を残しての改良だっただけに、其処までの時間を必要とはしなかった。

キラは通信越しにシャルに語りかける。

『シャルロット、今回の演習はストライカーパックの装備試験だから兵装を把握するだけで良いからね』

その言葉にシャルも頷きながら言う。

「解ってる。折角、キラが作ってくれた機体を壊す事はないよ」

そう言うときシャルは訓練アリーナから飛び上がり、地上15メートルの所で静止した。

『それじゃあ、始めよう。まずはエールストライカーから』

通信でキラがそう言うときシャルはイメージしてエールを背中に展開した。

その瞬間、シャルの左手と右手、背中に粒子が舞い、形を形成した。

『兵装の説明をするね。まずはエールの基本装備は右手のライフルが高エネルギービームアサルトライフル、左手の盾はアンチビームコーティングシールド、そして、背中には高機動戦闘用のスラストーとビームサーベル2本が搭載されているね』

その言葉にシャルは自分のISを見回しながら質問する。

「各種兵装の特徴はキラの説明で解ったけど、ビームアサルトライフルはシールドエネルギーの消費が激しそうだね？」

その質問にキラは対抗策を説明する。

『だからこそのカートリッジシステムなんだよ。ビームライフルの後方にカートリッジがあるでしょ？ セミオート、フルオートモードで1500発の大出力ビームが発射可能で収束射撃の場合は30発が発射可能なんだ。シールドの内側にカートリッジが5個収納されてる。合計弾数は7500発、一回の試合なら牽制射撃を含めても十分過ぎるよ』

これはザクのビーム突撃銃やハイペリオンのビームマシンガンを参考にキラが改良した威力と命中精度を落とす事なくバッテリーに負担をかけずにビームを撃ち出すシステムとして開発した。ザクのビーム突撃銃の場合、精度は少々低いが扱いやすく、優れた速射性能でビーム弾をばら撒き多数の敵への同時攻撃が可能であった。

しかし、キラはコレに満足する事無く改良に改良を重ね、このビームアサルトライフルの完成に漕ぎ着けた。

ビームライフルやビームサーベルにはセカンドステージの技術である低エネルギー消費型大出力ビーム機能が取り付けられバッテリー

の直接ドライブでも長時間の運用が可能だが、より実戦的な方法としてキラはカートリッジシステムを採用した。

『それじゃあ、エールのテストを始めて』

「解った」

キラの言葉にシャルは頷きながら、決められたコースを移動しターゲットを撃ち抜いて行く。

「クツ！？ ラファールリヴァイヴカスタム？の4倍以上の加速力があるから操作しにくい！」

コレこそC・Eの世界で余りエールが使われなかった原因だった。

確かに宇宙、地上を問わず高い機動性は確保できるが操縦性に難があり、また、地上ではジェットストライカーに取って代われ、宇宙用に推し進めていたが、余り機動性は不要、大火力を長距離から運用した方が効率的と言う軍上層部の判断で余り見かけなくなった。しかし、メサイア攻防戦ではザフトの高軌道型のグフに蹴散らされる格好となり、連合は高速でのドッグファイトの重要性を改めて認識させられる結果となった事から現在の地球連合ではOSの改良を行いエールの宇宙使用が進められている。

余談は兎も角、そのエールの機動性に振り回される形となったシャルは所々射撃を外す様になった。

「クツ！？ 機動の制御に集中すると射撃が疎かになる」

その言葉にキラは考えながら呟く。

「……ヤッパリ、完全なマニュアルでの操作に難があるかな……補助OSの調整も加えないと……でも、ムウさんってマニュアルで操作してたよねたしか……でもカガリは補助OSで操作してたからな……」

キラの世界でもトップクラスのムウとシャルを比べるのもどうかと思うがカガリの例もあるので補助のOSを加える事を考えたキラだった。

キラはシャルに通信を繋げ次の指示を出した。

『シャルロット、次はソードストライカーを兵装選択して』

「解った」

キラの指示でエールを粒子に変換しソードを展開したシャル。

その背にはISを装備した自身を超える身の丈の大剣が右側にあった。

シャルは高速で目標に近づき大剣を振り下ろす。

ターゲットは真っ二つになり消滅した。

「正直、この兵装重過ぎて扱いづらいよキラ。振り下ろす時也大振りだし取り回しに難がある。それにISのマニピレータにも負荷が掛かるよ」

そのシャルの言葉にキラは考えながら呟く。

「確かにね。如何しよう……兵装として外すかな……でも、それじゃあ接近戦兵装に限られるし……そうだ、グフのテンペストビームソードを参考に小型化を試みよう」

考えが纏まるとキラはシャルに通信を繋げる。

『解った、改良を試みるから次のランチャーを装備して』

「解った」

シャルは次にランチャーを装備する。

背には大きなアグニが左側に配備されていた。

シャルはソレを左脇に抱え込み右手でアグニのサブグリップを抱えながらターゲットに向けて発砲した。

このアグニ、ザクのオルトロス長距離ビーム砲を参考に改良が加えられ、旧アグニと同等の破壊力、射程距離を有しつつ、信頼性や連射性能の点で上回る様改良した。

シャルは暫く発射していてアグニの難点を挙げていく。

「このアグニ、重いし反動も大きいね。左のマニピレータに相当の負荷が掛かるよ。それに一番の問題は左手に武装がある事かな……僕、右利きだから撃ち難いよ」

その難点にキラはまたもや考えながら呟いた。

「最大の難点は其処か……射手の利き腕に左右されない兵装が課題かな……」

考えを纏めたキラはシャルに次の指示を命じた。

『次は高速切替でのストライカー兵装の運用を試みようか』

キラの言葉にシャルは頷きながらエールを展開し、移動を開始した。シャルは両腕にアサルトビームライフルを腰溜めに構えながら乱射した。

ターゲットを蜂の巣にした後、エールのまま対艦刀を展開、目標を叩き切ると、次に左手でアグニをターゲットに向けて発射した。

ターゲットはアグニの大火力に巻き込まれ全滅した。

そして最後に、グレースケールを打ち込む。

こうして、キラとシャルは演習を終了させた。

アスランとラウラは学園の第二訓練アリーナにてシミュバルツエアレーゲン・ツヴァイの稼動訓練を行っていた。

アスランはラウラに通信をしながら機体解説を行っていた。

『ラウラ、今回は兵装の運用を行いながらの解説だ。先ずは高初速レールカノン、『アハトアハト』の試射を行って見てくれ』

ラウラはその指示に従い右肩に搭載されているアハトアハトレールカノンを構える。

ターゲットが現れ、それにアハトアハトレールカノンを撃ち込むラウラ。

8・8センチの口径から眩い光が漏れ出し、音速を超えた砲弾がターゲットを粉々にした。

その威力に唖然とするラウラ。

「A c h t - A c h t だ」

アスランはドイツ語で88を意味する言葉を言いながらその様子を見ていた。

このアハトアハトレールカノン、第二次世界大戦のナチスドイツが使っていた、8・8 c m F l a K、独軍通称、A c h t - A c h t、連合国軍通称、e i g h t y - e i g h t と呼ばれている高射砲を見た目そのままにアハトアハト S K C / 3 0 をレール砲として再現した。

アスランはラウラに質問する。

『どうだ？ アハトアハトは？』

その質問にラウラは戸惑いながら答える。

「若干、威力過剰な気もするが……素晴らしい威力だ」

その言葉に満足するアスランに質問した。

「何故、名が A c h t - A c h t ( 8 8 ) なのだ？」

その質問にアスランがハッキリと答える。

『口径が 8・8 センチで見た目も第二次世界大戦のドイツが使っていたアハトアハトに似せて作った』

実質、アスランの趣味全快な回答にラウラ呆れながら呟く。

「国家が管理する I S を趣味で着色しないほしい……」

しかし、アスランは悪びれもせずこう言う。

『しかし、威力はお墨付きだぞ』

更に呆れながらラウラは次の兵装の試験に入った。

次にラウラが試射したのは 3 連装ビーム砲と連装砲だった。

最初は 3 連装ビーム砲を展開、合計 6 門のビーム砲が火を噴く。

周囲にいたターゲットは緑色のビームの乱射に巻き込まれ容赦無く吹き飛ばされる。

次にラウラは連装砲を掃射、4 門の砲が弾頭を吐き出し、ターゲット

トを吹き飛ばす。

「コレも威力過剰だな……」

そう言いながらラウラは次に背部バラエーナ改2連装ビーム砲を展開、ターゲットに撃ち込み破壊する。

「一番の貫通力と破壊力と聞いたが確かに凄い威力だな……」

複数のターゲットが爆風で吹き飛ぶ様を見ながら冷や汗を浮かべて唖然とするラウラ。

『ラウラ、次は全兵装開放モードでの砲撃を行ってくれ』

「解った」

その言葉にラウラは連装砲を掃射した後、背部バラエーナ改2連装ビーム砲、左右3連装ビーム砲を撃ち込む。

複数いたターゲットは吹き飛び陰も形も留めなかった。

「……もう無茶苦茶すぎて、驚きを通り越して呆れの境地だ」

アスランは次に、爪内部にあるビーム発生デバイスを展開するよう命じた。

『ラウラ、爪部ビーム刀を展開してくれ』

そう言われラウラは手刀を作り爪からビームの刃を展開した。

人差し指から小指までビームが発生しソレをターゲットまで高速で接近、ソレを振り下ろした。

そして続け様に手刀を崩し、指を曲げ引っかく様にターゲットを切り裂く。

五本のビームの爪は容赦無くターゲットをズタズタに切り裂く。

『問題なく作動したようだな。ラウラ、お疲れ様』

アスランがそう言いラウラを労う。

「正直、コレだけの兵装を効率良く使うのは神経を使う。もう少しソフト面の改良を要求する」

その言葉にアスランは考えながら呟く。

「そうか……兵装が増えた事で操縦の複雑化を招いているのか……ソフト面での改良と威力を抑えた兵装の開発が課題だな」

そう言いながらアスランとラウラのシュヴァルツェアレーゲン・ツヴァイの稼動試験は終了した。

オマケ

シャルはシャワーを浴びた後、キラの元に帰って来るとキラに語りかけた。

「キラ、もうお昼だけど、予定ある？」

シャルは上目使いでキラに質問してきた。

キラは真面目に答える。

「今日は昼からラファールリヴアイヴmk?の調整と改良以外はやる事は無いけど？」

その答えにシャルはパーツと顔を明るくして提案した。

「じゃあ、さ、ソレが終わったらさ、僕と一緒に遊びに行かない？  
たまには生き抜きも必要だよ？」

その提案にキラは頷きながら答える。

「そつだね。悪くないね。たまには遊ぶか」

その言葉を待っていたシャルはタウン情報誌を取り出し何処に行くかキラと話し合った。

アスランとラウラは今回の演習について話し合った後、ある話題になった。

「そう言えばラウラ、この町は回ったのか？」

アスランの言葉にラウラは首を横に振りながら答える。

「いや、その必要は無いと思ってそんな事はしなかった」

ラウラの言葉にアスランは呆れながら答えた。

「ヤッパリな……いいだろう。俺がドライブのついでに町も案内するでしょう」

その言葉にラウラは反応する。

（コレはもしや……ハルフォーフが言っていた“フラッグ”と言う奴ではなかるうか……嫁とのフラッグ！！ ああ、何て素敵な響き……）

顔が無表情なラウラにアスランは語りかける。

「嫌なら別にいいんだが……」

その言葉を光速もかくやというスピードで否定するラウラ。  
勿論、無表情で。

「いや、“嫁”との仲を進展させるのも悪くは無い。いいだろう」

アスランは呆れながらも言う。

「だから……ソレを言うなら“嫁”じゃなくて“婿”だろ……後、君とはパートナーでそう言う関係ではない」

アスランの否定にラウラはこう言った。

「なるほど、コレが“ツンデレ”と言うものか」

（それ使い方が違う！ ツンデレは箒の専売特許だから！！）

アスランは盛大なため息を吐きながら取り合えず否定した。

### 13話 戦鐘は鳴らされて

午前、11時30分、キラとシャルは学園郊外をドライブしていた。

「キラって車の運転も出来るんだ？」

キラは運転しながら答える。

「ウン、国際免許を習得したからね」

そう言いながらキラは軽快なアクセルワークで道を進む。

キラとシャルが市街地の立体駐車場に車を止め、歩きながらキラはシャルに言う。

「先ずはご飯から行こうか？ お腹すいてるでしょ？」

キラの提案にシャルは嬉しそうに頷きながらキラの腕を取り、引っ張る。

「さっき、車の中でタウン誌を見ていて行ってみたい所があるんだ。行こー！」

そう言いながらシャルはキラの腕を引っ張る。

アスランとラウラはアスランの車でドライブを楽しんでいた。

「しかし、お前が車を運転できるとは知らなかったぞ?」

ラウラの言葉にアスランは運転しながら答えた。

「ああ、その気になればジャンボ機やヘリの運転も出来る」

そう言いながらアスランはラウラに語りかける。

「どうだ、たまにはこういうのも悪くは無いだろ?」

アスランの言葉にラウラは戸惑いながら答える。

「悪いな、余りこういうのは経験が無いんだ。来る日も来る日も訓練に明け暮れていたからな……」

ラウラの言葉にアスランは内心苦い顔をする。

（こんな少女に戦闘訓練を施すなんて……多分、ラウラはこの年の少女にある物を教えられずに育ったんだろうな……友達と遊び、恋の話題に華を咲かせる事も無い。あるのは唯、強さを追い求める事だけか……）

アスランは思考を切り上げるとラウラに提案する。

「ラウラ、町に行かないか?」

「町に？」

アスランの提案にラウラが問いかける。

「ああ、君、学園の制服ぐらいしか持っていないだろ？ だから、服を買いに行くのさ」

「服、か……？」

アスランの提案に戸惑うラウラ。  
なおも続けるアスラン。

「レディーにお洒落は必要だ」

アスランはラウラの外面的な所から徐々に少女らしく引き戻そうとした。

正直、ラウラは可愛い。しかし、自身が発する剣呑な空気と絶対零度の視線が他者を遠ざけている。

そこでアスランは少しでも女の子らしい事をさせてやろうと言つて意図で提案したのだ。

「任せる」

ラウラはそう言つと窓の方を向き過ぎ去る景色を眺めた。

キラとシャルはカフェレストランのオープン席で向かい合って食事をしていた。

「このプレーンオムレツおいしいね。セットメニューで比較的安いし」

キラの言葉にシャルは頷きながら答える。

「ウン、このオムレツも本場に近いし」

キラとシャルは一通り食事を終わらせた後、キラはコーヒーをシャルは紅茶を楽しみながら会話する。

「次はウィンドーショッピングでもする？」

キラの提案にシャルは嬉しそうに頷く。

「ウン、ここのお店とか余り知らないから見てみたかったんだ」

「決まりだね」

そう言いキラとシャルは店を出た。

アスランとラウラはショッピングモールをブラブラしながら女性用の服を扱っているショップに入る。

「いらつしゃいませ」

店員が愛想良く挨拶をするとアスランとラウラに語りかけてくる。

「本日はどのような物をお求めでしょう?」

アスランは店員の言葉にラウラを前に出しながら答える。

「ああ、彼女の服を見繕ってくれ」

その言葉に店員はラウラを頭からつま先を見た後、頷いて答える。

「かしこまりました」

そう言う店員はラグジーガールの服をラウラの前に差し出す。

「チェックと裏毛の重ね着風のトップスですがどうです?」

ラウラはソレをマジマジと見ながら固まる。

「試着してきたらどうだ?」

その言葉にハツとするラウラ。

「……解った」

そう言う店員は試着室で服を試着するラウラ。

暫くしてラウラが試着室から出てくるとトップスとスカートを穿い

たラウラが現れる。

アスランはすかさず誉める。

「可愛いよ、ラウラ」

そのアスランの言葉に顔を赤く染めるラウラ。

「そ、そうか？ 余りこういうのは来た事が無いんだ。変でなければいいが……」

そう言う店員は次の服を持ってきた。

「同じメーカーですけど、ベルト付のツイルベアワンピースです」

ラウラはソレを受け取るとまた試着室で着替えを開始した。

暫くしてラウラが試着室のカーテンを開く。

其処には黒のロングTシャツの上にブラウンのベルト付のツイルベアワンピースを着たラウラがいた。

「お似合いですよ。それにお客様はロングヘアですからツインテールにしたら可愛く見せられますね。ストレートだと大人な感じを演出できますよ」

店員の言葉にアスランも頷くと財布からカードを取り出し、会計を済ませた。

「すまないがコレを着ていく値札は取ってくれ」

アスランそう言うつと次にラウラの靴を見繕う。

ヒールタイプのショートブーツを購入するとラウラはソレを履いて鏡を見る。

「……コレが……私……」

ラウラはジッと鏡を見ながら違う姿の自分を見つめた。

ラウラの姿を見たアスランはラウラに近づき語り掛ける。

「どうだ？ 女の子らしい服装を着た感想は？」

その言葉にラウラは頬を赤らめながら答える。

「足元がスースーする」

その言葉にアスランは何とか笑い出しそんな自分を堪えて語りかける。

「まあ、慣れだろう」

そついい店を出る2人だった。

土日が終わり、1週間が過ぎ、いよいよトーナメント当日。

キラ、アスラン、一夏、シャルはISスーツに着替え終わり、更衣室のモニターを眺めていた。

「しかし、凄い人だな……」

一夏はモニター越しにいる来賓を眺めながら言う。

「3年はスカウト、2年は今までの訓練の成果を発表する場だからね」

シャルもそう言いながらモニターを見つめる。

其処には各国の政治家や軍事高官、ISを扱う部署の高官が熱い視線を注いでいた。

「ISを保有するイコール強大な軍事力を持つと同義語だからな。幾らアラスカ条約で軍事目的の使用を禁止していても軍事力としての抑止力は働いているんだろう」

アスランの言葉にキラは頷く。

「ISは兵器としてみたら破格の戦闘能力だからね。しかも機体数は限られている。ソレこそ有能な人材を乗せて国家の力とするのは自明の理だね」

キラの言葉を聞いて苦い顔をする一夏。

「まるで戦争目的で国家が管理しているみたいな言い方だな」

一夏の言葉にキラはさも当然と答える。

「国家は奇麗事では回らないよ。国民には見えないように汚い事を平然とやる。アラスカ条約の裏では軍事力としての研究がなされている。ラウラのISがいい例だよ」

その言葉にアスランは内心苦い顔をする。

「あ、対戦表がでたよ」

その言葉に話を切り上げ、モニターを見る。

「俺は……アスランの所か」

一夏の言葉にアスランは頷く。

「ああ、いい試合をしよう」

そう言うとアスランは一夏に握手を求めた。

「ああ、負ける気は更々無いぜ！」

そう言い、アスランの握手を返す一夏。

「僕達のチームはセシリアと鈴か……」

キラはそう言うとモニターを凝視する。

「キラ、頑張ろう!!」

シャルの言葉に頷くキラ。

戦いのゴングは鳴り響こうとしていた。

## 14話 赤い騎士と夜の女神の演舞

他の組の対戦が終わり、アスランとラウラ、一夏と箒のチームの対戦となった。

千冬はピット内で一夏と箒にアドバイスをしていた。

「いいか、織斑、篠ノ之。相手は学園最強の一角のザラと多分代表候補生で最強のボーデヴィツヒだ。間違いなく優勝候補筆頭だ。更にザラはオールラウンダーだが接近戦が得意、ボーデヴィツヒは中距離戦と組み合わせの愛称もいい。お前らの勝敗は相手の連携をいかに分断できるかに掛かっている」

そのアドバイスに頷きながらカタパルトに歩み寄る一夏。

「織斑 一夏、白式、行くぜ!!」

一夏はそう言うとかタパルトに押し出され飛び立つ。

一夏を見送った後、箒も打鉄をカタパルトまで歩ませる。

箒の打鉄がカタパルトに固定される。

(私も発進の時、言うべきかな……)

発進の許可が下りた。

箒は躊躇いながらも言う

「……篠ノ之 箒、打鉄、出る！！」

そう宣言するとカタパルトから飛び出す箒。

鮮やかに舞いながら地上に降り立つ。

アスランとラウラは反対側のピットのカタパルトで会話を交わす。

「ラウラ、一夏の相手はお前に任せる。因縁があるんだろ？」

その言葉にラウラは言う。

「いいのか？ 誤って殺すかもしれんぞ？」

「その時は俺が止めるさ。だから、思いっきりやれ」

その言葉にラウラは頷く。

アスランはジャスティスをカタパルトまで歩ませると足をカタパルトに固定させ発進シーケンスに入る。

「アスラン・ザラ、ジャスティス、出る！！」

そう言うとアスランは空へと飛び立った。

ラウラはアスランが飛び立った後、シュヴァルツェアレーゲンをカタパルトまで歩ませ、足を固定させる。

（嫁と同じ様に飛び立つのも悪くは無いな……）

そう思ったラウラは目を閉じ大きく息を吸い込み、そして吐き出すと発進する。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、シュヴァルツェアレーゲン、出撃する  
！！」

お互いの機体が地上に着地し、向かい合う。

『それでは1年ブロック、第3試合、アスラン・ザラ、ラウラ・ボーデヴィツヒ対織斑 一夏、篠ノ之 箒の試合を開始します』

そのアナウンスと共に生徒だけでなく各国の代表も熱い視線を注ぐ。

アスランはジャステイスのビームサーベルをアンビデクストラスハルバードモードにし構える。

ラウラはアハトアハトを展開する。

一夏は雪片式型のビーム刀を展開し、箒は打鉄の刀を構えた。

『始めてください』

その瞬間、先制攻撃で先に動いたのはラウラだった。

ラウラはアハトアハトを一夏と箒の合間に撃ち込む。

「チッ！」

「クッ！」

一夏と箒はそれぞれ別方向に回避した。

その瞬間、アスランは箒に接近しながらハイパーフォルティスを牽制射撃で叩き込む。

ソレをマトモに喰らった箒はシールドエネルギーを消費し体勢を崩した。

「箒！？」

叫びながら箒の援護に向かおうとした時、赤いビームと緑のビームがソレを阻む。

「お前の相手は私だ」

ラウラだ。

「クッ！ 邪魔をするな！！」

そう言いながら一夏は直線的に突撃し、ラウラに切り掛かる。

しかし、ラウラはA I Cを展開し一夏の突撃を阻む。

「馬鹿が付く程の直線的な攻撃だな。それでよくあの人の弟を名乗れたものだ」

そう言いながらラウラは一斉砲撃で一夏を撃ち落そうとするが、一夏とて伊達にキラ達の訓練を受けてはいない。

イグニッションブーストでラウラの一斉発射を回避した。

「何!？」

驚きの声を上げるラウラ。

まさか一夏がここまでするとは想像も出来なかったのだろう。

その悔りが油断となって現れてしまった。

一夏はラウラの後ろを取るとラウラの背中を蹴り、イグニッションブーストを発動し、アスランと箒の間に割って入る。

「私を踏み台にした!？」

ラウラは衝撃を殺しながら体勢を立て直す。

「私を踏み台にした報い、払ってもらおうぞ!!」

そう言いながらラウラはアハトアハトを構えるが撃てなかった。

「クッ! こうもアスランに近づかれては誤射してしまう」

そう言いながらラウラは空へ飛び立ち一夏を追う。

アスランは箒に切り掛かろうとした時、一夏の接近に気づきビームサーベルを左手に持ち替え、右手でビームライフルを掴み撃ち込む。

「クッ、おおおおおおお！！」

一夏はそれに構わず雪片式型をアスランに振り下ろす。

アスランはソレを回避しながらガラ空きになった一夏にビームライフルを叩き込もうとするがソレを体勢を立て直した箒が阻む。

「させるかあああああああ！！」

箒の斬撃をビームサーベルで受け止めながらアスランは再び一夏にライフルを撃ち込もうとするが体勢を立て直した一夏がイグニッションブーストで再度接近を試みる。

「勇敢だな。だが、あと一人を忘れているぞ？」

その言葉と共にラウラが一夏に迫る。

一夏はイグニッションブーストを止めずにアスランに挑むがラウラがソレを阻む。

「させない」

そう言いながらラウラは3連装ビーム砲と背部バラーナ改2連装ビーム砲で壁を作り一夏を遮断する。

一夏は慌ててイグニッションブーストを逆使用し回避する。

一夏はイグニッションブーストをカットするがソレが不味かった。

ラウラはソレを見越してビーム爪を展開、一夏に切り掛かった。

一夏はソレを雪片式型で受け止めた。

激しい鏝迫り合いが展開し観客は沸きあがる。

「なるほど、アスランの訓練を受けているだけの事はある。いい判断と剣技だ。だが、甘い！」

そう言うトラウラはA I Cを展開した後、連装砲を一夏に向けるとソレを一斉発射した。

爆煙と爆風が一夏を包み込むが一夏はそれにめげる事無くラウラに接近する。

「馬鹿の一つ覚えが！ 私の制止結界は抜けられない！」

そう言うトラウラはA I Cを展開するが、一夏が突如として目の前から消えた。

「何！？ 見失った！？」

そう、一夏はA I Cを展開する直前でイグニッションブーストを展開したのだ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおー!」

「クッ!?!」

(静止結界が間に合わない!?　なら!!)

一夏は後方からの奇襲に対応が遅れるラウラ。

ラウラはビーム爪を展開し一夏の直進を阻む。

突き出されるラウラのビーム爪。

しかし、一夏はソレを掻い潜りすれ違い様にラウラを切り裂いた。

「悪いな……千冬姉の名は汚させない!　俺はもっと強くなる!」

その言葉を聞いたラウラは笑みを浮かべる。

「良いだろう……私に勝ったのだ。ソレを言う資格はある。一応は認めてやる。織斑　一夏」

アスランは箒と空中で斬り合っていた。

箒は素早い太刀捌きでアスランに攻撃を仕掛けるがアスランはそのことごとくを退ける。

「クッ!？」

焦る箒にアスランはアンビデクストラスハルバードモードを解除し二刀流で箒を攻撃する。

「相変わらず攻め手に欠くと焦って剣技が疎かになるな。箒」

そう言うときアスランはグリフォンビームブレードを展開し箒の左足を蹴り斬る。

「きゃあああああああ!？」

箒は悲鳴を上げながらバランスを崩し落下する。

「箒!？ クソ!! これ以上、やらせるか!!」

一夏はそう叫びながらアスランに斬り掛かるが、アスランはその超絶的な技量で回避して見せた。

「おおおお!!」

そう叫びながら体勢を立て直した箒がアスランに一太刀浴びせようと迫る。

しかし、アスランは右手のビームサーベルで一夏をあしらいながら左手のビームサーベルで箒の相手をしていた。

2対1の圧倒的優位の箒が一夏と箒からは余裕が感じられない。

（クソ!! マジかよ……機体の出力や武装面で制約を受けていて

もこの実力がよ！ 実質2対1だぞ！？）

一夏は内心焦りながら距離を取る。

筈もまた距離を取る。

この試合を見ていた観客、来賓は啞然とする。

アスランの余りの太刀捌きの冴えとIS操縦技術に。

正直、1年にしては余りにも強すぎるのだ。正直、正式な代表としても通用するレベルの太刀筋に啞然としながら見ていた。

観客は兎も角、来賓は男がISを操縦できると言う物珍しさからこの試合を見ていただけに過ぎない。

しかし、蓋を開けて見ればアスランの化け物ぶりに恐れを抱いた。

（残りシールドエネルギーの残量も400を切った。このままダラダラ戦ってたらコッチが先にエネルギー切れで負けちまう……なら！）

一夏は此の俣では埒が明かないと思い、勝負に出た。

イグニッションブーストを最大にし、アスランに急速接近した。

「一夏、お前は焦ると博打に出たがる。悪い癖だ」

アスランの冷静な声と共に桃色の斬撃が無数に一夏を襲った。

「な！？　ぐわあああああああ！？」

一夏からすれば何が起こったか理解できないが簡単な事だ。

アスランはビームサーベルをアンビデクストラスハルバードモードにすると、一夏の雪片式型のビーム発生デバイスを切断、そして、右腕、右足、左足、右腕を切り裂き、更に擦れ違い様に一夏の背部スラスターを切り刻んだのだ。

しかし、その速度が尋常では無い。

イグニッションブーストを超える反応速度と斬撃速度で切り裂いたのだ。

斬られた事を一夏が理解したのは白式の警告画面が現れた時だった。

一夏は重力に引っ張られ地上に落下す。

しかし、アスランは落下する一夏を踏み台にし、箒に高速機動で迫った。

箒はそれに反応できずアスランの斬撃をマトモに喰らう。

右腕を破壊され、今まで蓄積されたシールドエネルギー消費によりシールドエネルギーが空になる。

こうしてアスランとラウラ、一夏と箒の試合はアスラン達の勝利で

幕を閉じたのだった。

## 15話 怒れる白い天使

アスランとラウラの試合が終わった後、キラはアスランに話しかけた。

「お疲れ様、アスラン」

キラの言葉にアスランは頷きながら言う。

「ああ、意外に疲れた」

アスランの言葉を聞いたキラは500mlのスポーツドリンクを渡しながらかう。

「アスランらしく無かったね？ 何時ものアスランならあんな無茶をラウラにさせなかったはずだよ？」

キラの言葉にアスランはドリンクを一口飲み、一息ついてから答えた。

「ラウラと一夏の関係は知っているか？」

その言葉にキラは微笑から険しい顔になった。

「うん、剣呑だね」

言葉を選ぶ事無く率直に答えた。

アスランもまた、率直に答える。

「時には話し合うよりぶつかり合った方が解り合う事もある」

その言葉にキラは納得した。

「確かに、一夏は兎も角、ラウラは最初から聞く耳は持ち合わせてはいなかったからね」

キラは苦笑しながらラウラの自己紹介を思い出した。

「兎に角、ラウラと一夏は最初の一步を踏み出した訳だ」

そう言いアスランは真面目な顔になりながらキラに質問した。

「次はお前の番だぞ、キラ。抜かりは無いだろうな？」

アスランの質問にキラは親指を立てて言い放つ。

「任せて。シャルもいい仕上がりだし大丈夫」

キラの余裕とも取れる言葉に呆れながらアスランは言う。

「お前な……悪い癖が出てるぞ？ 油断して足元すくわれる。シンの時もそうだっただろ？」

アスランは苦言を呈すがソレをキラは苦笑で聞いていた。

「……まあ、ね……でも、もう戦いで油断を持ち込むほど愚かじゃないよ。指揮官の油断は部隊全体の損失に繋がるから……」

その言葉にアスランは問いかける。

「“あの事”を引き摺るのは止める。アレは俺やシンでもそうだった」

その言葉にキラは苦い想いで言葉を吐き出す。

「戦争が終わって数ヶ月の混乱期、テロが地球、プラント問わず起こった。そのテロを止める為、僕の部隊はプラントの1つに派遣されたけど……一つの街がそのプラントから消え、部下も5人死んだ……タスク、ジオ、ライル、フェルセル、アリアが死んだ……僕の甘さが、殺したくないと言う思いを逃げ道にして起こった悲劇だ……テロリストは武装解除しても自爆で部下の機体に体当たりした。その衝撃でテロリストが仕掛けた爆弾も爆発……死傷者、行方不明者多数……僕の引き起こした惨状だ」

そう、キラはこの時、思い知らされたのだ。

殺さないで相手を制するのにも限界はがあると。

一人で戦うのは不可能だと。

自分の感情や思考を優先した結果が何を齎すのか。

ソレは、遺族の涙と怨念にも似た罵倒、部下の亡骸無き墓、プラントを覆った悲しみ。

そしてキラは知った。

部隊を率いる者の重みを。

そして、本当の意味で殺す事の覚悟を。

数多犠牲の末に其処によりやく思い至る自分の馬鹿さ加減を。

殺したくないからと言う理由で殺す事を避けた結果がこれだ。

指揮官には、相手を殺す覚悟も、自分が死ぬ覚悟も、部下が死ぬ覚悟も、部下が行った行為に責任を持つ覚悟を背負って初めて指揮官になれる事をこの時、キラは理解した。

「殺さないにこした事はないさ。でも、判断を誤った時、自分以外の人が死ぬのは嫌なんだ。だから、僕はその時が来たら……迷い無く“殺す”……」

言葉とは便利な物だ。

幾らでもオブラートに包む事が出来る。

だからこそキラは“討つ”では無く、“殺す”と明確にしたのだ。

自分の決意と覚悟を鈍らせない為に、人の命の重みを忘れない為に、自分が人殺しである事を明確にする為に。

「解っている。だが、今の俺達は学生で今は戦争じゃない。覚悟は胸の内に留めておけがいい。自分さえ知っていればいいんだから」

アスランはそう言うトラウラの元へと歩き出す。

その頃、来賓席ではアスランの話題と次に始まるキラの試合で持ちきりだった。

「しかし、“ガンダム”……か。態々本国から出向いた甲斐があるというものだ」

ドイツのIS管理委員会の担当者はそう独り言を言いながら先ほどの試合を手元のモニターで見る。

「しかし、シュヴァルツエアレーゲンのあの兵装の変化は目覚ましい物がある。VTシステムを外してもお釣りがくるくらいだ。シールドエネルギーに負担を掛けない低電力消費で大出力の荷電粒子砲が発射可能なビーム兵器、更に小型大容量のパワーエクステンダー。ザラからの脅しが無ければ我が国がこれ等の技術を独占する事が出来なかった」

そう言いながらコーヒーを飲み乾し、呟いた。

「ぜひとも我が国にザラを招きたいものだ」

キラとシャルはISを展開し、機体最終確認をしていた。

キラは手元に投影型タッチパネルキーボードを展開し、OSの調整を行っている。

シャルはビームアサルトライフルのカートリッジを装填していた。

キラは一通り作業を完了するとシャルに語りかける。

「シャル、準備は？」

その言葉にシャルはビームライフルショットティーを顔まで上げて答える。

「OK、何時でも行ける」

キラはその言葉を聞きながら頷くと、カタパルトまで歩みを進める。フリーダムがカタパルトに固定され、発進の許可が下りる。

「キラ・ヤマト、フリーダム、行きます！！」

そう言うときらはカタパルトから外界に押し出された。

その様子を見ながらシャルは思う。

（僕も言ってみようかな……カッコ良かったし……）

シャルのラファールリバイヴがカタパルトに固定される。

シャルは少しでも息を吸い込み、そして、静かに吐き出すと発進を開始した。

「シャルロット・デュノア、ラファールリヴァイヴカスタム？、行きます！！」

シャルもまた、キラと共に戦場へと飛び立った。

シャルが中央に着地するとセシリア、鈴が向かい合って立っていた。

シャルはキラの前に陣取る。

大会前日に決めたフォーメーションだ。

アナウンスが会場全体に響き渡る。

『キラ・ヤマト、シャルル・デュノアペアー対セシリア・オルコックト、凰 鈴音ペアーの対戦を始めます』

そのアナウンスと共にキラはビームライフル2挺を構えた。

シャルはビームアサルトライフルを2挺構える。

セシリアはスターライトmk?を構えた。

鈴は双天牙月を連結させ回転しながら構える。

『それでは開始してください』

その声と共に4人は上空へ飛び上がる。

「シャル！フォーメーションA！」

「了解！」

キラの命令と共にシャルはストライカーパックをエールを装備し右手にビームアサルトライフル、左手にビームライフルショットターを鈴に向けて撃ち撃ち込む。

「ウソ！？ ビーム兵器！？ ラファールリヴァイヴは第二世代のはずよー！！」

そう言いながらシールドエネルギーを消費しながら何とか回避する鈴。

「クッ！？ 鈴さん！」

そう言いスターライトmk？構えるセシリアだったが。

「ソレは甘いよ、セシリア」

キラが左手のビームライフルをセシリアに向けて発砲。

右手のビームライフルを鈴に向けて発砲する。

「キャ！？ ああ、もうー！！」

「クッ！！ 甘かったですわ……」

鈴とセシリアは何とかキラの射撃をかわし体勢を立て直そうとするがシャルはソレを許しはしない。

「僕の手忘れてない？」

そう言いながらシャルはストライカーパックをランチャーに変更した。

両脇にランチャーを抱えながら左手には何時の間にかビームアサルトライフルが握られていた。

「な！？ ラビットスイッチ 高速切替！？」

シャルはケルベロスmk？とデリュージーレール砲、左右ビームアサルトライフルを同時正射した。

鈴は慌てながら何とか回避するがシールドエネルギーはかなり削られた。

確かにシャルが使ったのはラビットスイッチ高速切替だが、ストライカーパックすら高速切替する荒業をこの場で再現した。

余りの兵装切替の速さに鈴は舌を巻く。

赤いビーム2本、黄色いレール砲の弾道2発、緑色のビームアサルトライフルのビームが多数。

ソレが問答無用で鈴に襲い掛かる。

しかし、鈴も並みの操縦者とは訳が違う。

伊達に中国代表候補生を名乗ってはいない。

ひたすら回避し、時にはシールドエネルギーを消費しながら何とかシャルの張った分厚いビームの弾幕を掻い潜りながら突き進む。

「コッチだつて伊達に地獄の訓練積んできて無いのよ!!」

その言葉にキラは笑顔で心の中で思った。

（アスランって厳しいからね。僕と違って）

アスランは控え室でその声を聞き、ムスツとしながら呟いた。

「鈴、訓練の質量共に倍な……」

セシリアもまたブルーティアーズを放出しながら鈴をサポートする。

キラの牽制に2機、鈴の護衛に2機を展開する。

「全くですわ!! 伊達に地獄は見ていませんわ!! 特に私、キラさんの鬼畜ド外道鬼訓練の受けてますのよ!!」

その言葉にキラは額に青筋を浮かべながら思った。

（セシリア、訓練を倍に決定!!）

シャルはストライカーパックをソードに変更しテンペストビームソードを引き抜く。

「それ、本人の前で言う!? 紛れも無い事実だけど!!」

シャルは鈴の双天牙月をテンペストビームソードで戦いながら突っ込んだ。

その言葉にキラはリアルに落ち込む。

（ブルータス！！ お前もか！？）

いい加減腹が立ったキラはドラグーンを8機パージしてセシリア、鈴に狙いを定める。

「ちょ！？ キラ！？ 行き成りドラグーンはないでしょ！？」

鈴の抗議にセシリアも同意しながら叫ぶ。

「そうですわ！！ 幾ら凶星を突かれたからといって！！」

その言葉にキラはキレた。

「ああ、セシリア、鈴、君達の敗因は実に実にシンプルだよ……」

キラは笑顔で微笑みながらドラグーンを高速機動で展開する。

もう、セシリア、鈴、シャルには視認できない速度だ。

その瞬間、8機のドラグーンから緑色のビームが一斉に吐き出される。

「君達は！！ 僕を！！ 怒らせた！！」

そして、キラは左右のビームライフルを粒子に変え、消すと胸元で左手を右から左に振りこつ言う。

「判決……」

そして、左手を上に掲げ下ろしながら告げる。

「<sup>リンチ</sup>私刑!!」

その瞬間、ドラグーンはキラの判決を忠実に守る処刑官の如く、銃口からビームを吐き出し、あるドラグーンはビームを固定しビームの刃を展開、2人を突き刺した。

「きゃあああああああああああああああああああああ  
ああ!!」

2人はいい感じにボコボコにされ、地面に叩きつけられる。

2人のボコボコさ加減に啞然とする会場。

シャルは若干ヒキ気味になる。

ここに、黒キラ伝説が爆誕した瞬間だった。

## 15話 怒れる白い天使（後書き）

現在、私はGジェネワールドプレイ中、

皆さんはやってます？

もし、プレイされているならお勧めユニット教えてください。

個人的な感想ですが、全体的に全ユニットが弱体化した感が……

アムロ（CCA）とHi-Vガンダムは最高です。（飛べない事意外は）

って……あとがきと全然関係無い！！

## 16話 激突の白と赤と異物と

キラとシャルは1年ブロック決勝、アスランとラウラとの戦いに備えていた。

キラはキーボードを高速で叩きながら画面を見つめる。

正直、その雰囲気はプレッシャーを放っていてシャルは内心怯えていた。

怯えながらシャルは何とかキラに語りかける。

「キラ……あの、休憩しない？ もう30分以上作業してるよ？ 決勝まで後1時間もあるよ？」

その言葉にキラは画面に顔を向けたままシャルに言う。

「シャルだけ休憩に入ってもいいよ。それに、後1時間“しか”無いんだから」

キラはアスランの強さも部隊運用の上手さも心得ている。

正直、数パーセントだがラウラの運用も在り得るだろう。

その事を見越して此方もシャルとの連携を取りつつアスランと戦わなければならない。

だが、確率的にはキラ対アスランの構図は揺るがないものだろう。

正直、ラウラではキラの相手は無理だ。

そのまた逆のシャルではアスランの相手は無理。

なら必然にキラ対アスランの構図が成り立つ。

しかし、相手はアスラン奇抜な策を弄する可能性も捨てきれない。

これはタッグマッチ、ツーマンセルの戦いだ。

此方も考えて戦術を組む必要もある。

アスランに集中している最中に横槍を入れられては堪らない。

アスラン相手だと集中力を切らせて戦える相手ではないのだ。

そう思いながらキラはシャルに顔を向け今回の決勝についての作戦を話した。

「今回、多分、アスランの戦術は僕との対決に持ち込みラウラが牽制の為にシャルに当たると思う。正直、アスラン相手だと護衛も難しい。いけるね？」

その言葉にシャルは任せてと言わんばかりに親指を立てながらウィンクをする。

「任せて！ ラウラは僕が何とかする。だからキラは存分にアスランと戦ってきてよ」

その言葉にキラは頭を下げて礼を言う。

「有難う。シャルロット……」

「気にしないで。優勝したらご褒美にキラにキスしてもらおうから」

そう言い残しシャルは休憩に入った。

アスランとラウラは機体調整を行っているが、正直、空気が重い。

その原因はやはりアスランだった。

余りの張り詰めた空気にラウラが堪りかねてアスランに語りかけた。

「アスラン、今回の作戦だが……いいのか？ 私のバックアップ無しで？」

その言葉にキーボードを叩きながらアスランは静かに答える。

「ああ、今回の相手はキラだ。正直、キラにラウラの砲撃が当たる確立は限りなくゼロに近い。それなら、シャルルを相手してくれた方が効率が良いからな」

その言葉にラウラは内心憤慨する。

何せ自分の嫁に戦力外通告されたからだ。

明らかにジャマだから離れてると言われた様なものだ。

彼女のドイツ軍特殊部隊隊長としての矜持は甚く傷ついた。

しかし、冷静な軍人としての判断ならアスランの言葉は限りなく正しい。

無駄な損害を出さずに任務を完遂するならラウラもアスランと同じ判断をしただろう。

それ故にラウラは喉元まで出かかった反論の言葉を何とか腹の中まです押し戻した。

「解った。アスラン達の邪魔はさせん。好きなだけヤルがいい」

その言葉にアスランはラウラに礼を言う。

「有難う、ラウラ」

その言葉にラウラは当然と答える。

「気にするな。嫁の我が侂を聞けないほど器量は狭くない。優勝したら結婚式だ」

その言葉に苦笑しながらアスランは修正する。

「ソレを言うなら婿だろ？ いい加減直せよそれ……後何で挙式？」

1年決勝の会場は正に熱気に包まれていた。

正に全学年の決勝戦と言ってもいい対戦カードに胸を躍らせているのだ。

来賓もその例外ではなくキラのペアーとアスランのペアーの戦いに熱い視線を送る。

その中にフランスのIS企業、デュノア社の人事部担当がデュノア社社長と電話で話していた。

「お送りした資料は以下の通りです。正直、シャルルのあのIS、化け物のスペックです。我が社が開発したラファールリヴァイヴとのスペック差は歴然かと……ソレよりも私が注目しているのはキラ・ヤマトの存在です」

その言葉にデュノア社長は資料を見ながらラファールリヴァイヴカスタムmk?の資料を見ながら部下に語りかけた。

『キラ・ヤマトが作り上げたストライカーパックスシステムにパワーエクステンダー、それにISに使用可能な小型ビーム兵器……素晴らしいな……キラ・ヤマト……我が社に欲しい逸材だ』

その言葉に人事部担当の男はデュノア社長の言葉の意味を読み取りながら言う。

「キラ・ヤマトの調査とスカウトを行います」

担当の男の言葉に満足したのかデュノア社長は満足しながら言う。

『頼むぞ』

「お任せを」

そう言い、男は携帯の終話ボタンを押すのだった。

キラとシャルはカタパルトから飛び立ち、アリーナに下り立つ。

其処にはアスランとラウラが既にスタンバイしていた。

キラとアスランはお互い無言で正面に立つ。

その瞬間、会場は水を打った様な静けさが支配した。

余りの息苦しさに生唾を飲み込む会場。

キラとアスランは既に牽制の意味でプレッシャーを放っていた。

そのプレッシャーの余波でアリーナの客席を全て黙らせた。

そのプレッシャーを真近で感じているシャルとラウラは堪ったものではない。

2人は冷や汗を掻きながら開始を待った。

『キラ・ヤマト、シャルル・デュノアペアー対アスラン・ザラ、ラウラ・ボーデヴィツヒの対戦を始めます』

その瞬間、キラとアスランはビームライフルを構える。

それに遅れてシャルはビームアサルトライフル2挺を、ラウラはアハトアハトを構える。

『それでは開始してください』

その声と同時にキラとアスランはフルブーストで上空に舞い上がる。

イグニッションブーストと同じ速度で飛び上がる2人。

ISの常識では考えられない速度だ。コレで通常のフルブーストなのだから会場の観客、来賓はキラとアスランを見失う。

パートナーのシャルやラウラですら一瞬見失った。

しかし、その中で千冬だけが見失わないで目で追いかけていた。

（あり得ん速さだ。通常のフルブーストでイグニッションブースト並みの加速力だと？ 2機のポテンシャルの半端無さもそうだが、ヤマトとザラのポテンシャルも出鱈目の域だな）

腕組をしながらその様子を見ていた千冬は真耶に命じた。

「山田先生、2人は速い。見失わない様に。因みに二人は上空30メートルの所だ」

その言葉に慌てて真耶はコンソールを操作し、上空のカメラに切り替えた。

其処には青い軌跡と赤い軌跡が緑色の光を放っていた。

キラとアスランはお互いビームライフルで牽制しながら相手の後方や死角を取る為にクルクル回りながらビームライフルを撃ち合う。

アスランはビームライフルを左手に持ち替え、ビームサーベルを引き抜きソレを連結させる。アンビデクストラスハルバードモードしフルブーストでキラに迫るアスラン。

キラは右のクスイフィアス3レール砲を後方に移動させビームライフルを右腰に装着し、右手で左腰のビームサーベルを引き抜くとフルブーストでアスランの攻勢を迎え撃つ。

アスランは左から右へビームサーベルを振るい、キラは下から上へ振るう。

高速で擦れ違った瞬間、激しくスパークする現象が発生する。

2人は高速旋回をし、また切り結ぶ。

お互いのビームサーベルが激しくぶつかり鍔迫り合いを開始した。

お互い鍔迫り合いをしながらクルクル回る。

これには理由がある。

ビームサーベルはミラージュコロイドの応用でビームの刃を形成している。

その為、C・Eのビームサーベル同士がぶつかると双方の磁場が干渉し合って刃が維持できなくなる。

しかし、干渉が途切れると即座に刃が形成される。それ故に刃を干渉させたまま、斬りつけるのに有利なポジションの取り合いの為、お互い距離を取ったり、クルクル回りながら有利なポジション取りをしている。

それ故に、ビームサーベルで斬り結んでる時の機動は独特だ。『相手が振ったビームサーベルの延長線上から常に機体を外す』これが基本的な動きとなる。

結果として『ビームサーベルで鍔迫り合いしたままクルクル回転してる』ように見えるわけだが、実際は超高速で動く戦闘で相手の斬りつけるラインを読み違えたり、ビームサーベルの相互干渉を意図せぬポジションで外されたらソレだけで命取りになる。ビームサーベルでの戦闘は実際は超高度な心理戦の様相を呈してくる。

しかし、セカンドステージやミレニアムシリーズのビームサーベル兵装は電圧調整とシステム変更により、ビームサーベル同士がぶつかっても刃が維持が可能になった。

セカンドステージの技術を流用して作られたフリーダム、ジャスティスもその例外では無い。

しかし、キラ達は旧式のビームサーベル運用の癖でこのような戦い方をしている。

キラとアスランはお互い距離を取り、ビームライフルの牽制に入る。

キラはビームライフルを撃ちながらアスランの隙を窺う。

アスランはソレを回避しながらビームライフルを撃ち帰り、何とか距離を詰めようとする。

アスランの射撃を無駄なく回避しながら射撃するキラ。

アスランはソレをかわし、ハイパーフォルティスをキラに叩き込む。

回避困難と考えたキラは左腕を突き出し、ビームシールドを展開、ソレを無力化する。

お返しとばかりにキラはカリドウスを発射する。

赤いプラズマビームがアスランに襲い掛かるがアスランはビームシールドを展開し無力化する。

開始からこの間、20秒。

ソレを見ていた一夏達は啞然とする

「キラが腕から出したのって……ビーム……だよな？」

一夏の言葉に筈もまた啞然と一夏に言う。

「それを言うならアスランのあのシールドもビームが出てたぞ……」

そう、一夏達はキラ達がビームシールドを使うところを見たことが無かった。

「あいつ等、アレでリミッター付き？ 化け物じゃない」

鈴の掛け値無しの言葉にセシリアも頷く。

「ええ、全く勝てる気がいたしませんわ……」

キラとアスランは上空で静止したまま睨み合う。

不意にキラがアスランに語りかけてきた。

「もう、肩慣らしはいい、アスラン？」

その質問にアスランは頷きながら答える。

「ああ、ここからは遊び抜きの本気で行かせてもらおう！」

その時だった、会場の天井に張られたシールドが破壊される。

緑色のビームがキラとアスランを襲うが、2人は難なく回避する。

ソレが地上に落下し地面が爆ぜる。

「「!?!」」

地上で戦っていたシャルとラウラは驚きの声を上げる。

「何!?!」

「何だ!?!」

会場もざわつく。

その瞬間、ユックリと2つの“何か”が下りて来た。

ソレを見た瞬間、会場からどよめきが起こる。

「アレって……」

白い四肢。

「間違いないよ!?!」

1つは右手のビーム兵器と背中 of 2つの筒状の兵器。

2つは右手にライフルと左手に盾、背に4つの赤い筒。

「あれは!？」

1つは緑色のツインアイに赤い“Vアンテナ”

2つ目は緑色のツインアイに黄色の“Vアンテナ”

赤い“口”

不意に会場とキラ達の言葉が重なる。

『ガンダム!？』

“高い天を行く者”、“ギリシャ神話の神の名”を持つガンダムと  
“勇敢なる者”“Xを冠する王道からそれた者”の名を持つガンダムが天より舞い降りたのだった。

## 16話 激突の白と赤と異物と（後書き）

少し、ビームサーベルの設定を修正しました。

実際、ディステニーでは長時間の鰐迫り合いもありましたし。

今回はセカンドステージのビームサーベルやミレニウムシリーズのビーム格闘兵装は鰐迫り合いが出来ると言う設定にしました。

その理由は、チャンバラさせたかったと言うのが今回の変更の理由です。

SEEDではチャンバラは無かったですから……二次ではチャンバラさせてみたいと言う私の勝手な理由です。

申し訳無いです。

## 17話 頼れる仲間達と椿の苦悩

2機のガンダムの乱入で会場は騒然となる。

一気に観客席の防御シャッターが強制的に観客の視界を遮り、アナウンスが会場中に響き渡る。

『試合中止、試合中の生徒は即時退避。警備担当の教員は即時対応。観客、来賓は非常口より非難してください!!』

そのアナウンスで来賓、観客は我先に逃げる。

「キラ！」

アスランの言葉にキラは頷きながら答える。

「解ってる。シャルとラウラを逃がす為に時間を稼ぐ。多分、“アレ”は先生達じゃ対処できない！」

そう言うときラ達はディスプレイタッチパネルキーボードを展開し、フリーダムとジャスティスのロックを解除しに掛かる。

アスランは作業しながら千冬と真耶に通信を開始する。

「織斑先生！ 即時警備担当の教師を下がらせて下さい！！ アレ  
は“ガンダムタイプ”だ！！」

その言葉に千冬は質問する。

『ガンダムタイプ？ お前達と同じ機種か？』

アスランは強い口調で尚も言う。

「質問は後です！！ 早く！！」

その言葉に真耶は押されながら千冬に問いかける。

『織斑先生……』

千冬はため息を吐きながら問いかける。

『お前達なら止められる。と？』

その問いかけにアスランは自信に満ちた顔で答える。

「機体のロックを解除したら確実にと言う単語が頭に付くくらいには」

その言葉に千冬は決断を下す。

『良いだろう。ロックの解除を許可する。だが、ロック解除には時間が掛かるぞ？』

その言葉にアスランは頷きながら答える。

「最低でも後、3分時間が掛かります。ソレまで逃げながらOSのロックを此方で強制解除します」

その言葉に真耶は反論する。

『それじゃあ2人が的になります!!　せめて護衛をつけるべきでは?』

その言葉にキラは反論する。

「相手が悪すぎます。護衛が護衛の意味を成さない相手ですから」

その時だった、上空からまた別の機体が複数下りてきた。

「ザク!?!」

アスランの言葉にキラも頷く。

「12機……3個小隊規模……」

その時だった、菱形の陣形の後方にいるザクウォーリアがオルトロスを構える。

3機のオルトロスの銃口がキラとアスランに向けられる。

そして赤い3本の光がキラとアスランを襲う。

「クッ!?!」

「チィ!!」

キラとアスランは慌てて回避する。

回避と同時に赤い光はキラ達がいた所を通り過ぎアリーナの壁に激突、アリーナの壁を吹き飛ばした。

上空に飛び上がった瞬間、先頭のスラッシュザクウォーリアがキラとアスランを襲う。

3機は連携しながらキラ達から見て左のザクが突撃を開始。そして中央のザクがハイドラ ガトリングビームを撃ち込む。

ソレを回避するが左のザクがキラにファルクスG7ビームアックスを振り下ろす。

ソレを後ろに回避するキラ。

しかし、右側のザクが後方に待機していた。

横薙ぎにファルクスG7ビームアックスを振るうがキラは倒立反転で相手の後方に回避する。

「キラ!?!」

アスランが叫ぶがそんな余裕はアスランには無い。

菱形の陣形の左側のブレイズザクウォーリア3機がビーム突撃銃を乱射する。

「チィ!!」

その内の1機がビームトマホークを引き抜き、アスランに白兵戦を仕掛ける。

振り下ろされるビームトマホークを最小限の動きで回避するが、2  
機目のザクがビーム突撃銃でアスランに攻撃を仕掛ける。

「クソ!!」

ソレを横に回避するアスラン。

しかし、もう1機がファイヤビー誘導ミサイルを撃ち込む。

アスランはソレを高速機動で回避するがロックオンされている為、  
追いかけて来る。

アスランはジグザグにバレルロールでしてミサイル同士を衝突させ  
その爆風の余波で別のミサイルを巻き込んだ。

（良い様に分断された!? クソッ!! こいつ等、統率が取れて  
いる。まるで軍隊の動きじゃないか!! 厄介だ）

これではお互いOSの解除に集中できない。

シールドエネルギーも先ほどの高速機動で磨り減った。

「残りエネルギーが1000を割り込んだ!? 不味い!! せめ  
てハイパーデュートリオンのロックだけでも!!」

その時だった。

ブレイズザクファントムが動き出し、アスランを襲撃した。

「しまった!？」

左と正面、更に下、理想的な十字砲火だ。

アスランが落とされる覚悟を決めた時、下のザクファントムに黄色の弾道が襲い掛かる。

ソレを回避するザクファントム。

「アスラン!!」

「ラウラ!? 逃げろと言った!!」

その言葉にラウラは全兵装を乱射しながらアスランに集っていたザクを追散らす。

そして、アスランの近くに来るとアスランに反論する。

「今の状況は最悪だ。冷静なお前らしくない」

その言葉にアスランが反論する。

「相手は明らかに部隊運用を主眼に置いた動きをしている! お前達では無理だ!!」

アスランの反論にラウラ砲撃をしながら尚も反論する。

「悪いな、私とて戦闘のプロだ。見くびるなよ? アスラン・ザラ」

その言葉にアスランはため息を吐く。

「……良いだろう。俺達の護衛だ！ 行けるな？ ラウラ！」

その言葉にラウラは振り向きながら答える。

「無論だ。だが、ヤマトの護衛は不要だぞ？」

その言葉にアスランが質問する。

「何故だ？」

その言葉にラウラはニヒルに笑う。

「アチラにも頼もしい護衛が付いたからな」

キラは何とかこの囲いを脱する為に動き回る。

「クッ！？」

キラがビーム突撃銃を回避した時だった。

オルトロスのビーム3本が襲い掛かる。

（駄目だ！ 回避しきれない！！）

直撃覚悟で回避行動を行おうとした時だった。

一陣のオレンジ色の風がキラの前に現れる。

シャルだ。

シャルはアンチビームコーティングシールドを正面に突き出し赤い3本のプラズマビームを防ぎきる。

「シャル！？ どうして！？」

キラの驚きの言葉にシャルはケルベロスを装備し、アグニ2挺を脇に抱えながら発砲した。

赤い4本のビームが4体のザクに襲い掛かるがザクはアンチビームシールドで防ぐ。

「ごめん！！ シールドエネルギーの充電に手間取って遅くなった！！」

キラはその言葉を遮るように言う。

「そうじゃないよ！！ 逃げろって言ったろうが！！ 何故逃げない！？」

その言葉にシャルはキラに言う。

「悪いけど、キラに守ってもらうほど僕は弱くないつもりだよ？ 確かにキラ達から見たら僕は弱いけど。でも！！ 今はキラの護衛くらいは出来る！！」

そう言いながらラビットスイッチでストライカーパックをエールに

変換し、ビームサーベルを引き抜き、ビームトマホークで襲い掛かるザクと激しい鏝迫り合いを演じる。

シャルはザクの腹部を蹴り飛ばし、距離を強制的に取る。

「守って見せるよキラー!!」

その言葉にキラはため息を吐き出し、シャルにお願いをする。

「後2分、2分耐えてシャル」

シャルは嬉しそうに言う。

「了解、丁度、一夏達も着たしね」

その言葉どおり、一夏、セシリア、鈴の3人が乱入する。

「無事か!? キラ、アスラン!?」

その問いかけに驚きを露にする2人。

「如何して!?!」

キラの問いかけに一夏は答える。

「ダチがピンチの時に指銜えて見てろって? 冗談じゃない!!  
俺はそんな薄情者でも情けない訳でもない!! 時間稼ぎくらい出来るさ!!」

更にセシリアも付け加える様に言う。

「そうですね！ 相手は多数！ なら、数は多い方に越した事ありませんわー！！」

鈴もまたキラ達に言う。

「そう言う事！ アスラン、キラー！！ チンタラしてないで、ロツクをサツサと解除しちやいなさいよー！！」

その言葉にアスランは礼を言う。

「すまない」

一夏はニヤリとしながらアスランに言う。

「そう言う時は『ありがとう』だぜ？ アスラン」

「ありがとう」

「頼むよ。皆ー！！」

「おう！」

「ええ！」

「任せなさい！」

「解った！」

「了解！」

一夏達はそう答えて、ザクとの戦いを開始した。

その時、箒はモニターを見つめながら悔しさで胸が一杯だった。

（私にも……専用機があれば……私は……悔しい……情け無い……  
一夏が、キラ達が戦っているのに見ていることしか出来ないなんて  
……）

体をワナワナ震わせながら箒はモニターを見つめた。

## 18話 解き放たれる力（前書き）

先ず始めに……

今回の地震に遭われた被災者の方々に哀悼に意を表明すると共に、亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。

## 18話 解き放たれる力

キラとアスランは一夏達を信じて超高速かつ正確にタッチパネル投影型キーボードを叩く。

（死なないで皆……）

（俺達が終わるまで持ち堪えてくれ皆！）

キラ達は刻一刻と変わる“戦場”を見ながら思いを巡らせる。

その頃、一夏達はキラ達の時間を稼ぐ為にザク3個小隊との戦闘に突入した。

「いい加減しつこい！！」

そう言いながら一夏は雪片式型でザクを切りつけようとするが違うザクがビーム突撃銃でソレを阻む。

シールドバリアを展開し何とか防ぐが、また違うザクがオルトロスで一夏を狙い撃とうとする。

しかし、セシリアがスターライトmk?でオルトロスを装備したザクを狙い撃つがザクはアンチビームシールドで防御をした。

「解っていましたが……」

セシリアの苦い言葉を受け継ぐ形で鈴がザクに斬りかかりながら言う。

「コイツ等、連携が半端無いわよ!」

ラウラは砲撃しながら言う。

「まるで軍隊の動きだ……」

そう言いながらシャルは全員に言う。

「全員聞いて。此の佯じゃジリ貧だよ。相手は組織的に戦っている。此方も組織的に行動しないと無理だよ」

その言葉にラウラが反論する。

「いや、この相手ににわか連携はかえって逆効果だ。相手は少なくとも部隊連携を主眼に置いたIS運用をしている。それに……」

ラウラが言いよんだ言葉を付け足すようにセシリアが問いかける。

「2機のガンダム……ですわね……」

そう、今の所上空で静止しているガンダムだが、何時戦線に参加するか解らない。

別段、命令を下すでもなく、戦闘に参加するでもなく、唯、傍観しているガンダムに不振がる一夏達。

「兎に角、今は一つ目、緑色のISだ。正直、強い。第3世代型と

対等かそれ以上の性能だ」

一夏の言葉に全員が同意した。

一夏達は知らないだろうが、このザク、ザフトが作り上げた“量産期”なのだ。

何故、これほどまでに一夏の機体と渡り合えるかにはそれ相応の理由がある。

キラ達の世界のMSを開発している勢力は3つ、連合、ザフト、オーブの3カ国だ。

それぞれ採用しているのは、連合はウィンダム、ザフトはザク、オーブはムラサメとなる。

この中でカタログスペック上、頭一つ飛びぬけているのはザクだ。

ストライクを基準に考えてみると解りやすい。

ストライクとザクでは総合的にザクが勝っている。

ウィンダムとは同等の戦闘能力。

ムラサメでは機動力が勝っている。

因みに、一夏のISとストライクでは一概には言えないがストライクの方が総合力で勝っている。

汎用性が半端無い。

その理由としてはストライカーパックなどの追加装備による拡張性の高さや兵器としての拡張性の高さが上げられる。

一夏達の専用機はシャルを除き一辺倒な感じを受ける。

その際たる例が一夏の白式だろう。

このストライカーパックの思想はザクやウィンダムなど後に開発されるMSにも大きく影響を与えた。

シャルもまたストライカーパックの合理性の恩恵を受けている一人である。

兵器としての見た場合、汎用性に優れる。多様性があると言うことはアドバンテージなのだ。

それだけ伸びしろがあると言うことなのだから。

しかもザクはその気になればセカンドステージとも渡り合える戦闘能力を持ち、大気圏の摩擦熱にも耐え得る堅固な装甲、機動性を兼ね備えている。

それが部隊を成し、連携して一夏達に襲い掛かる。

正直、厳しい相手だ。

その時だった、2機のガンダムがユックリと地上に降り立つ。

『!?!』

一夏達に緊張が一気に走る。

「不味いわね…… “ガンダム” が2機に一つ目緑色が12機……」

鈴は冷や汗を額に流しながら呟く。

「如何するの? 一夏?」

シャルの言葉に一夏は考え込むが相手はそれを許さなかった。

ハイペリオンは背中 of フォルファントリーを展開し、ザスタバステイグマトを構え、一斉掃射した。

何とか一夏達は回避するがアリーナの観客席はシャッターを完全破壊されズタズタになる。

「ウソだろ!?! オイ!!」

アリーナのシャッターはISの攻撃にも耐えられるよう設計されている。

それをズタズタにしたビームに一夏は恐れを隠すように毒づく。

しかし、回避した一夏達に二の矢が襲い掛かる。

Xアストレイが背中 of ドラグリーンをパージしたのだ。

「ウソ！？ オールレンジ攻撃！？」

シャルはそう叫びながらストライカーパックをエールに切り替え、高速回避をする。

それでも防ぎきれないビームはアンチビームコーティングシールドで防ぐが衝撃波で吹き飛ぶシャル。

その時だった、1機のドラグーンがシャルをその射程に捕らえる。

（駄目だ、間に合わない！）

シャルは目を硬く瞑り覚悟を決める。

しかし、自分に襲い掛かる痛みも衝撃も無い。

（何で……？）

そう思いながらシャルはユックリと目を開く。

其処には右手を正面に掲げながら淡い水色の光を放ち、蒼い8枚の翼を広げながらシャルの前に立つストライクフリーダムがいた。

「ごめん、待たせたね。シャル」

その優しき声にシャルは満面の笑顔でその少年の名を呼んだ。

「キラ！！」

と。

ラウラは何とかセシリアと鈴の護衛を受けながらハイペリオンに砲撃するが、その砲撃は光の壁に阻まれ届かない。

「クッ!!」

ラウラは齒噛みしながら光の壁の中からの砲撃をかわす。

（厄介だな……此方の砲撃はあの球体上の光の壁に防がれる。その癖、向こうの攻撃は全部素通り……対応のしようが無い……）

ガンダム相手に考え事をしていたのが間違いだった。

ラウラが気が付いた時にはフォルファントリーは発射体勢だった。

（しまった!! 私とした事が!!）

ラウラは左肩部装甲を前にしながら防御しようとした時だった。

ラウラの瞳に、赤い一陣の風が吹き荒ぶ。

ラウラはソレが何なのか直ぐに理解した。

「アスラン!!」

そう言いながらラウラはインフィニットジャスティスの背を見つめた。

「待たせたな、ラウラ。お前らは下がれ。後は、俺達がやる」

そう言いながらアスランは全員に通信を送る。

「此方、アスラン、待たせたな。各機、ピットまで後退しろ。後は俺とキラがやる」

その通信に一夏が答える。

『アスラン！？ キラ！？ 機体のロック解除は終わったのか！？』

一夏の問いかけにキラが答える。

「ウン、ギリギリだったけど。皆、下がって。もう皆シールドエネルギーが切れ掛かってる」

その言葉に一夏達は改めて自分達のシールドエネルギー残量を確認した。

ほぼ全員のシールドエネルギーが120を切っていた。

例外はシャルとラウラでシャルは500、ラウラは300といった所だ。

シャルの場合は細かく状況に応じてストライカーパックと兵装を切り替えていた為と、シールドエネルギーに負担をかけない兵装を選

扱っていた。

ラウラの場合は無駄弾や無駄撃ちを避け、確実に仕留められる状況で砲撃をしていた。

後は2人とも、エネルギーに負担の掛かる無駄な回避をせず、シャルはアンチビームコーティングシールドで、アビスに似た肩部パーツのアンチビームコーティングされた外殻で相手の攻撃を止めていた。

これはキラやアスランの個人レッスンで収得した技法だろう。

しかし、シャルやラウラもまた、体力的、精神的に厳しい。

兎に角、一夏達にこれ以上の長期戦を継続できる余力が無い以上、下がらすしかない。

一夏達もソレを理解しているのか渋々下がる。

ソレを見送ったキラ達は一気に上空に飛び上がり、マルチロックオンシステムを展開した。

「悪いけど、これ以上の無法を許す訳にはいかない!」

「ここで落とさせてもらおう!」

そう言うときらは左右のビームライフルを構え、両腰のレール砲を展開、ドラグーンを全機パージした。

アスランも右手のビームライフルを構え、ファトウム-01のハイ

パーフルティスビーム砲を展開した。

「コレで落ちろ!!!」

そう言いながらキラとアスランは一斉砲撃で全ての敵を殲滅しんかった。

眩い赤、緑、黄色の光がフリーダムから、緑色の力強い光がジャステイスから放出される。

その無数の光はザクの頭部、兵装、スラスターを腕部を脚部を破壊していく。

全12機のザクは僅か数秒で殲滅される。

だが、2機のガンダムは例外だった。

ハイペリオンはアルミューレリュミエールを全方向に展開。

Xアストレイは有線式ドラグーンのワイヤーを切断し、ドラグーンを立体的に展開、自機を包むように防御フィールドを展開していた。

このXアストレイの技術はハイペリオンを捕らえる時に活用され、アメノミハシラから技術が流れ、アカツキのシラヌイにも採用される。

キラとアスランはやはりと言った面持ちで2機のガンダムを見やる。

「解ってはいたが……並みの敵じゃないな……」

アスランの言葉にキラも頷きながら答える。

「如何する？」

キラの疑問にアスランは決断する。

「俺はハイペリオンをやる。キラはXアストレイを」

「解った」

キラはそう言いながらXアストレイに戦いを挑む。

何故、キラ達が機体名を知っていたかと言えば、過去に開発された全MSのデータが全て収めれている。

ソレの特性を理解した上でアスランは割り振りを決めた。

キラはビームライフルで牽制射撃をしながらXアストレイに近づき、右手のビームライフルを右腰にマウントすると左腰のビームサーベルを引き抜き、接近戦を挑む。

しかし、牽制射撃をかわしたXアストレイもキラを迎え撃つべく複合兵装防盾システムの先端からビームサーベルを展開し迎え撃つ。

そして、お互いのビームサーベルがぶつかり合うが、Xアストレイが吹き飛ばされる格好となった。

この理由は簡単、Xアストレイが旧式である事と、AIで動く“無人機”はプログラム通りにしか動かないからだ。

キラ達は遠めで観察し、センサーで確認したが生体反応が無かったのだ。

よく動くが所詮、無人機、プログラム通りの動きしかしない。

体勢を崩したXアストレイにキラは素早くビームサーベルを仕舞い、ビームライフルを取り出すとソレをXアストレイに向け、ドラグーンをパージする事無く、ハイマツトフルバーストを叩き付ける。

ソレを何とか回避したが、全て回避しきれずビームライフル、右手、両足を破碎される。

そしてキラはビームサーベルを抜き放ちながら急接近し、バレルロールしながら頭部とスラスターを切断しXアストレイは機能を停止した。

アスランはビームライフルで牽制射撃するが、左手のアルミューレリユミエールを展開し防いだ。

ハイペリオンはザスタバスティグマトを乱射するが、アスランは鮮やかなバレルロール回避で全弾回避すると素早くビームライフルをリアスカートにマウントし左腰のビームサーベルを右手で引き抜き斬りかかるがハイペリオンはアルミューレリユミエールを全方位展開し、アスランの進撃を阻む。

「クッ!？」

アスランはそう吐き捨てながら一旦距離を取り、ファトゥム-01

をハイペリオン目掛けてパージした。

ファトゥム・01は目にも止まらぬ速さで突撃し、先端部のシュペールラケルタビームサーベルとアルミューレリユミエールとぶつかる。

少しの拮抗の後、ビームコーティングされたスパイクがアルミューレリユミエールを貫通し、ハイペリオンの腹部に激突、ビームスパイクはハイペリオンの上半身と下半身を引き千切った。

この様子をモニターで見ていた千冬と真耶は語る。

「私はあの2人の実力を勘違いしていた……」

その言葉に真耶は問いかける。

「どう言う事ですか？」

その疑問に千冬は語る。

「あの二人の実力は確かに全盛期の私と同等です。ですが、全盛期の私や今の私にも無いモノを持っているんです」

「それは？」

真耶の言葉に千冬は静かに答える。

「ソレは途轍もない密度の実戦経験と戦場と言う過酷な環境で生き残るインテリジェンスとサバイバリティー、そして、一番大きなウエイトを占めているのは自分より強い相手との戦闘経験が豊富でそ

の戦いから生き残ってきたと言う事です」

その言葉を聞き、真耶は驚きの声を上げる。

「それじゃあ、あの2人は……」

真耶が言おうとして押し黙った言葉を千冬が代わりに言う。

「……戦争と言う場所に身を置いていたんです。そして、生き残ってきた。殺めた人数は両手両足の指では足りないほどの命を贄と手にいれたでしょう……自分や仲間の為に……そして、あの2人が“殺す”と決意したなら躊躇いも迷いも無く殺せるでしょう……」

千冬も強いが、自分と対等な人間と余り戦った事が無い。

まして、自分より強い敵と命のやり取りをした事が無いのだ。

競技と戦闘は違う。

スポーツと殺し合いの差は歴然だろう。

相手も死に物狂いで殺しに来る。

そんな敵を制するには殺すか、無力化するしかない。

その差が全盛期の千冬とキラ達の勝敗の差を分けるものだろう。

その様子を見ながら千冬は教員に撃墜したガンダムの回収を命じたのだった。

キラとアスランは今回の事件の事後処理をしながらある決断をする。

「今回の事でハッキリした事がある」

キラの言葉にアスランは確信を持って答えた。

「“ザク”と2機の“ガンダム”……俺達以外にも俺達の世界の人間がいる。と言う事だな」

その言葉に頷きながらキラは付け足す。

「それも、MSに詳しく、開発能力がある人間……」

アスランは顎に手をやりながら言う。

「これは……もしもの時に備えておく必要があるな……」

その言葉にキラも頷く。

「ウン……ストライクフリーダムの後継機……『プロミスドフリーダム』と……」

「インフィニットジャステイスの後継機……『プレシヤスジャステイス』の準備を……」

そう言いながらキラとアスランは作業を再開した。



## 18話 解き放たれる力（後書き）

フリーダムとジャスティスの後継機の名前が余りに不評だったので変えてみました。

## 機体解説（前書き）

プレシャスジャスティスの設定とアスランの能力を上げて見ました。

アスランの今の能力でV.L.機関搭載機も操縦可能です。

プロミスドフリーダムとプレシャスジャスティスの機体と兵装解説です。

## 機体解説

『プロミスドフリーダムガンダム』

### 機体解説

プラント最高議長、ラクス・クラインが『ラフト・クライシステロ事件』を受け、ザフト全設計局に命令し、オーブの国営企業、モルゲンレーテとの共同開発で、キラ・ヤマト個人の為に作り上げたMS。

本機の特徴は核融合炉エンジンを搭載した事に尽きる。

$D + T \rightarrow He + n$  通称D-T（デューテリウム、トリチウム）反応を採用している。

核融合時には核燃料が1億度以上、つまりプラズマ状態になる。このプラズマに触れたら、基本的にどんなものでも溶けて削り取られてしまう。普通の核融合容器はプラズマを磁場で操作できる事を利用して、容器とプラズマとの間に磁場で空間を作って容器を守っている。しかし、核融合路反応を起こさせる為の核分裂路の容器にはその磁場が無いためプラズマが発生した場合、一瞬で発電所ごと破壊される。

分かりやすく言えばフリーダムガンダムのバリエーナ収束プラズマ砲が容器内で暴れまわる様な現象が引き起こされる。

そこで開発局は核分裂路にゲシュマイディッヒパンツァーの力場を応用しそのプラズマから核分裂路を守ることに成功する。

そのエンジンを積み込んだのが本機だ。

なぜ、本機に核融合炉エンジンを積む事に拘ったかといえば、現在の火力発電に用いているガソリンと、ユニウス7を灰燼に帰した

核分裂燃料のウラン235の1g、そして核融合に用いる重水素1g、それぞれを完璧に反応させた時に精製できるエネルギーは……ガソリン――1万1千カロリー（コップ半分の氷を一気に蒸発させる事ができるエネルギー）  
ウラン235――200億カロリー（プール1杯の温度を一気に10度上げてしまうエネルギー）  
重水素――1300億カロリー（プール半分の氷点下すれすれの水を一気に蒸発させてしまうエネルギー）  
となる事からも開発陣が核融合に拘った理由だろう。

この莫大なエネルギーの恩恵により、兵装やVPS装甲、ビームシールドの大出力化を成す事が出来た。

それに伴い、ドラグーンの強化が成され、キラの戦闘記録や実験からキラがドラグーンを扱いながら高速機動戦闘を行いつつマルチロツクオンシステムを使いこなせるのは12機までと言う事が判明した。

なお、このドラグーンはアカツキやXアストレイのデータを下にビーム砲を1機当たり3つに増強、立体的に配置する事により防御フィールドの形成が可能となった。

兵装の見直しでは腹部カリドウス複相ビーム単体の使用は余り無かった為、オミットされる事となった。

これにより、高速機動型空間制圧機としての戦闘能力を発揮する事が出来た。

しかし、完成直前でラフト・クライシステロ事件が解決、機体は解体処理され封印される事となる。

## 兵装

頭部近接防御機関砲×2

ビームライフル×2（連結により収束貫通モードと大出力モードに切り替えが可能）

ビームサーベル×2（アンビデクストラスハルバードとしての使用が可能）

バラエーナ？プラズマ収束ビーム砲×2

腰部クスイフィアス4レール砲×2

ハイパードラグリーン機動兵装ウイング突撃砲×12

ビームシールド×2

ワンオフアビリティー

『ドラグリーンフルバースト（竜騎兵の一斉掃射）』

『プレシャスジャスティスガンダム』

ラフト・クライシステロ事件を受けカガリ・ユラ・アスハがモルゲンレーテにアスラン・ザラ専用機の開発を命令。

同盟国たるプラント設計局の技術協力の下、完成したMS。

此方にもプロミスドフリーダムと同等のエンジンを積んでいるのが特徴であろう。

更に、モルゲンレーテはアスランの戦闘データを徹底的に分析し兵装の変更と強化を行っている。

その最大の特徴であるリフター、ファトゥムシリーズをオミットし、ヴォワチュール・リュミエールシステムを採用した事が上げられる。

そもそも、ファトゥムは戦術上優れた兵装ではあったが、使用中はジャスティス本体の機動性が著しく低下すると言う、諸刃の剣の要素も含んでいた。

その事から開発人はMS本来の運用方法である。万能高軌道型白兵戦と言うコンセプトに立ち返り、機体を見直す事にした。

結果としてファトゥムを廃止、新しくバックパックにVレシステムを搭載する事となった。

（感じとしてはガンダムUCのシナンジュのバックパックメインスラスターの内側にドレッドノートイータの長距離ビーム砲、ビームソードをつけた感じ）

しかし、アスランはコレに満足せず、より簡単に接近戦での高速機

動を行う為、メインスラスタ周囲にミラージュコロイドによる重力制御による機体安定の技術スピノフした。コレにより接近戦時の制御が容易となりより高度な密集地帯での超高速機動空間把握戦闘が可能となった。

しかし、プロミスドフリーダム同様、完成直前でラフト・クライシステロ事件が解決、機体は解体処理され封印される事となる。

## 兵装

マガジン式グレネードランチャー付きビームライフル（収束貫通モードと通常射撃モードに切り替え可能）

アムフォルタス？プラズマ収束ビーム砲×2

上部ハイパーフォルティス ビーム砲×2

（形状はドレッドノートイータの長距離ビーム砲、ビームソードに似ている）がスラスタ内側に装備

グリフォン3ビームブード×2

ビームキャリーシールド

（ヒートスレイヤーウィップ、ビームシールド発生装置）

大出力ビームブレード『カラドボルグ』×2

（形はアカツキのビームサーベルを双刃剣から単体にし、グリップの延長とカラーリングを金から赤に変更し核融合炉に合わせた大出力対応型にした設計。アンビデクストラスハルバードとしての使用の可能）

ワソフアビリテイー

『シャイニングカラボルグ（光り輝く硬き稲妻）』

## 19話 明かされた太陽の女神の秘密

キラとアスランは千冬に連れられ、学園内の研究室に案内される。

研究室ではキラとアスランが完膚無きまでに破壊したザクとハイペリオンとXアストレイの解析が進められていた。

千冬はソレをガラス越しに眺めながらキラとアスランに問いかけた。

「さて、2人を呼び出したのは他でもない。あの、一つ目緑色のISと“ガンダム”についてだ」

その言葉に先ずキラが答えた。

「緑色のシールドが片方しか無い機体はZGMF-1000、ザクウォーリア、次に角が付いてて両肩にシールドが付いているのがZGMF-1001、ザクファントムです。ザフトのニューミレニアムシリーズに分類される量産機です」

その言葉に千冬が質問する。

「ZGMFとは？」

その質問にアスランが答える。

「Zero Gravity Maneuver Fighter、無重力下用機動戦闘機の略です。このシリーズは第二次ヤキンドゥー工戦役終結後にザフトが開発した量産機です」

その言葉に千冬は頷きながら問う。

「つまり、キラが属していた軍の機体か？」

その問いかけにキラは頷く。

「ええ、今はZGMF-3000、“ゲルググブラスト”がロールアウトして旧式化してますが」

「解った、次はあの“ガンダム”2機について質問する」

千冬の質問にアスランが先に答える。

「俺が交戦した機体はCAT1-X1/3ハイペリオンガンダムです。此方がその資料です」

そう言いながらアスランはSDカードを千冬に差し出す。

ソレを受け取った千冬は端末に差込み、データを見る。

「とんでもない機体だな……核エンジンによる無制限のシールドエネルギーの補給が可能、光波防御帯シールド、アルミューレリウムエール……展開されたら最後、此方の攻撃は受け付けない、向こうの攻撃は素通りとは……最強の盾だな」

その言葉にアスランは否定する。

「アルミューレリウムエールにはちゃんと対策があります。アンチビームコーティングされた物なら簡単に素通りされるんですよ」

ソレを聞いた瞬間、千冬は呆れる。

「まるで、コロンプスの卵だな……」

その言葉にキラが言う。

「まあ、最新兵器がイニシアティブを握ってられる期間は短い物ですよ。幾らでも穴を見つけて対策をされるものです」

そう言いながらキラも千冬にSDカードを差し出す。

「因みに、僕が戦ったのはYMF-X000A、ドレッドノートガンダム、または、Xアストレイとも言われる機体です」

千冬はそのデータを見ながらこれまた驚きの声を上げる。

「装甲がPS装甲に核エンジン、更に有線式ドラグーン……今更ながら思うが、ガンダムは特殊な装備が多いな……」

その言葉にキラが考えながら答える。

「元々、地球連合が開発した最初のガンダムシリーズのGが試作機の色合いが強いですからね……特殊な装甲や小型ビーム兵器、特殊兵装が満載されていましたよ。今でこそ僕達の世界では当たり前になってますけど、当時はMSに搭載可能な小型ビーム兵器は革命でしたから」

その言葉に千冬は渋い顔をする。

「そもそも此方では気象条件に左右されず、過酷な戦場で乱暴に使っても壊れない小型荷電粒子砲や収束プラズマ砲があること自体革命なのだが？」

そう言われキラとアスランは苦笑いするしかなかった。

「最後の質問だ。ガンダムを相手に勝てる生徒はいるか？」

その質問にキラとアスランは考え込む。

最初に結論に至ったのはアスランだ。

「一概には言えませんが……第二世代型なら先ず勝つには卓越した部隊間での連携と兵数ですね……ガンダム1機に最低1個中隊規模30から40機は必要でしょう。専用機なら小隊規模、3から4機での対応で戦えるでしょうが……やはり、パイロットの腕しだいでしょう」

そしてキラも付け足す。

「更に言えば、兵装にはアンチビームコーティングされた質量兵装かビーム等の熱量兵装が必要でしょうか……」

その回答に満足したのか千冬は頷きながら命令する。

「解った、話はコレで終わりだ。後、この事は決して外部に漏らすな。マスコミには特にな。一応、全世界のマスコミにはお引取り頂いたが何時何処で情報が漏れるとも限らない」

その言葉にキラとアスランは居住まいを正す。

この2人とて軍の重職についていたのだ。情報の重さを知らない訳が無い。

2人はつい軍にいた頃の癖で敬礼しながら答える。

「ハッ！！ 了解しました！！」

その敬礼に千冬は苦笑しながら注意する。

「オイオイ、気をつけろよ？ それをマスコミの前でやらかすとあらぬ疑いを持たれる。ソレと私は教師だ。軍人であった頃もあったが今は教師。ソレを間違うなよ？」

その言葉にキラはしまったという顔をして、アスランは苦い顔をして答えた。

「すみません」

「申し訳ありません……」

こうして、キラとアスランの事情聴取は終了した。

翌日、教団に立つシャルを見てキラ以外は全員啞然とする。

真耶も何と言ったらよいのやら解らないと言った風に何とか言葉を紡いでいく。

「……えっと……今日は皆さんに……転校生を紹介します……」

その言葉と共にスカートを穿いたシャルが壇上へと歩み寄る。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願いします」

シャルの紹介が終わり、真耶は何とか紹介をする。

正直、教室は微妙な空気だ。

「えっと……デュノア君は……デュノアさんと言ったことでした……」  
誰かが何処からともなく口にした。

「は!?!」

「デュノア君って、女の子だったの?」

「美少年じゃなくて美少女だったのね……」

兎に角、教室は騒がしくなる。

アスランはキラの様子を観察し、呟く。

「キラ……お前、知っていたな? シャルが女である事を……」

その喧騒の中、アスランの眩きがクラス全員の耳に届いた。

その言葉に観念したのか、キラが言う。

「うん……まあ、ね」

その言葉に更に騒がしくなる教室。

その喧騒を眺めながらキラは苦笑いを、アスランはヤレヤレと頭を横に振りながらこの成り行きを見守るのだった。

## 20話 白い天使と赤い騎士が語る愛すると言つ事

キラとシャルは臨海学校の準備の為に街に繰り出し買い物をしていた。

「所でキラの買うものは水着だけ？」

シャルの質問にキラは考えながら答える。

「うーん……今の所、携帯用歯磨きセットとタオル、後、コーヒー豆が切れてたからソレも買わないと……私服も数点見繕おうかな……」

キラは臨海学校に必要な物と切れていたコーヒー豆の事を思い出す。

「以外に少ないね……そうだ、買い物が済んだら丁度お昼だし何処かで食事しない？」

そのシャルの提案にキラは微笑みながら答える。

「いいね、決まり。それじゃあ、行こうか、シャル」

その言葉にシャルは頬を膨らませ拗ねた様に言う。

「二人でいる時はシャルロット！ もう、キラ絶対ワザトだよそれ」

その仕草に苦笑しながらキラは修正する。

「ゴメン、ゴメン、シャルロット。ほら、行こう?」

そう言いキラは左手を差し出す。

シャルは何とか機嫌を直したらしく、キラの手を握る。

「もう、今回だけだからね?」

そついい、2人は手を繋ぎながらショッピングモールを歩くのだった。

この時、キラは気付いた。

シャルが本心から笑うようになった事に。

前のシャルの笑顔は何処か余所余所しく、何処か卑屈な笑顔だった。

そう、昔の、ヘリオポリスにいた自分の様に。

そう思い、キラは最近見るシャルの掛け値無しの笑顔が嬉しかった。

キラの場合は友達の中でコーディネーターは自分一人、軋轢を生まないようにと自分の意見を押し殺し卑屈に笑っていた。

シャルもまた、デュノア社に引き取られてからは嫡出児と言う眼で周囲がシャルを見つめる。

キラは今思えば、子供の処世術だったのかもしれない。

そう思ったとき、キラはこの笑顔が守れるなら命を懸けて戦えると思えた。

そして、自分なりにシャルの思いを受け止める位の器量はあると負している。

アスランとラウラもまた、買い物の為、街に来ていた。

「アスラン、今回は水着を買うの？」

その質問にアスランは考えながら答える。

「そうだな……今の所は水着と旅行用の歯磨きセットとタオルくらいだな……」

そう言いながらアスランの腕に寄り添うようにラウラがしな垂れてきた。

「ソレが終わったらデートだな。そうだ、私の水着を見繕ってくれないか？」

その言葉に面食らうアスラン。

正直、あのラウラが自分から女の子らしい提案をしてきた事に今までの自分の努力もまんざら無駄では無かったと感じるアスランだっ

た。

昔の自分は父親のパティ―や政治関係者の家に連れられ、父が望む子である事を演じた。

外で遊ぶ同世代を脇目に見ながら“大人の望む子供”とやらを演じた。

そう、ラウラと同じだった。

与えられた事を淡々とこなし、周囲からは『流石、パトリック・ザラの息子』やら『ザフトの明日を担う兵』と言うレッテルをベタベタ貼られた。

ラウラもまた、国家と言う組織の中で作り出され、大人の身勝手な期待を背負わされた。

来る日も来る日も『戦闘単位として完成された兵』と言う大人の身勝手な期待を押し付けられたのだ。

アスランと違いはソレを息苦しいと感じていなかった事くらいだ。

その目的しかないラウラが自分の目標を見失い、新たな目標を見つけた。

ソレが、『アスランを嫁にする』と言う目標だった。

その事を知っているアスランは余り強く否定はしなかった。

そうする事でラウラが少しでも人間らしい生き方が出来るならという想いから、その発言や思いを受け止める事にした。

アスランもまた、それだけの器量は持ち合わせているのだから。

臨海学校当日、1年の学生達は海岸で思い思いに遊んだ後、旅館に戻り、食事を済ませ、入浴を楽しんだ後、それぞれの部屋にいた。

キラ、アスラン、一夏は胡坐を掻いて畳の上に座りながら色々と話した。

「そう言えば、一夏って好きな娘とかいないの？」

キラの突然の質問に一夏は頭を振って否定した。

「無い、無い」

その言葉にアスランは箸、セシリア、鈴に内心同情しながらも一夏に質問した。

「本当か？ 気になる奴くらいはいるだろう？ その年でそれはあり得んぞ？」

その言葉にムスツとしながら一夏はキラ達に質問を投げかける。

「そう言うお前等はどうなんだよ？ 好きな奴いるのか？」

その言葉にキラもアスランも臆せず、迷わず言い放つ。

「恋人はいたね」

「ああ、最愛だった……今はもう会うことも叶わないし、彼女を恋人として接する事も出来ない」

その言葉に一夏は驚きの声を上げる。

「付き合っていたのか!？」

その言葉にアスランはシレッと言いつつ放った。

「行き着く所までいった」

「僕もそうだね」

その言葉に免疫の無い一夏が顔を赤くした。

「ソレはつまり……せ……」

それを言おうとした一夏はキラに止められる。

「それ以上言うとは色々やバイから言わないでね?」

その言葉に押し黙る一夏。

その頃、女性陣は千冬を中心に盛り上がっていた。

「ウグ、ウグ……プハア……!!」

千冬は缶ビールのフタを開けソレを美味そうにグイグイ飲んだ後、  
問いかける。

「所で、お前達、夜這いには行かないのか？」

その言葉に真っ赤になる篤、セシリア、鈴、シャル、ラウラ。

ソレを篤が代表して否定した。

「いや、あの、学校行事でそれは……」

その言葉に千冬は詰まらなさそうに言う。

「何だ、詰まらん。こつ言つのは教師の眼を盗んでやるのが面白い  
んだろ？」

その言葉に益々赤くなる一同。

教師の立場でその発言はどうかと思うが、こつ言つ所が千冬らしい  
と言えば千冬らしい。

「篠ノ之、オルコット、凰、一夏の何処が好きだ？」

その不意の質問に3人共二の句が出ない。

何で織斑 一夏の事が好きなのだろう。

この単純明快なはずの質問に3人は答えを探す羽目になった。

唸る3人を他所に千冬は次にシャルに質問する。

「デュノア、お前は何故ヤマトの事を好きになった？」

その問いかけに、シャルは顔を赤くし戸惑いながらも答える。

「正直、明確な答えはありません。でも、僕は多分、キラの掛け値無しの優しさを好きになったんだと思います」

その答えに満足したのか、次にラウラに向き何故、アスランを好いたのか問いかけた。

「私もデュノアと同じで明確な回答はありません。もし、無理に理由付けをするのならアスランの強さでしょうか……身体的、技術的、そして何よりアスランの心の強さに……」

その問いかけに満足したのか「そうか……」と答える千冬。

その時だった、ラウラの携帯が鳴り響き、ラウラがそれに出る。

「私だ」

クラリツサ・ハルフォーフの声が耳元で響く。

『隊長、隊長の嫁のアスラン・ザラの部屋に例のモノを設置完了いたしました』

「そうか、ご苦労」

その言葉にラウラは完結的に答える。

通話を切った所を見計らい千冬が質問した。

「何を設置したんだ？」

その問いかけにラウラが答える。

「ハッ、アスランの旅館の居室に隠しカメラを設置しました」

その言葉にシャルが突っ込む。

「それ、犯罪だよ！？」

その言葉にラウラはシレッと答える。

「バレなければ問題ない」

ラウラは良くも悪くもアスランの影響を受けた一人だ。

「面白そうだな……ラウラ、映せるか？」

千冬は面白そうに質問する。

「可能です」

そう言うところラウラは携帯を操作し、ウィンドーを開く。

丁度アスラン、キラ、一夏が入室してきた。

3人は胡坐を掻いて畳に座り話し出す。

話の途中で箒とセシリアと鈴は多少落ち込んだ。

そしてキラとアスランの言葉に千冬以外は赤くなるのもご愛嬌か。

3人の話はそれぞれ恋愛の考え方にまで及んだ。

『正直、そう言うのは自分の事がキツチリできて初めて作るモンだろ？ 責任を持てる段階で作るべきだ』

その言葉にキラは諭す様に言う。

『まあ、一夏の考えも解らなくも無いよ。でもそう言うのは結婚とかそう言う世界になってくる。人は義務で恋をしたり愛を知る訳じゃないからね』

アスランも頷きながらキラの言葉に同意する。

『恋をするのに理由は無い。アイツ、優しい。あの娘が可愛い。アイツ、カッコいいとか、そんな短絡的理由から生まれるんだと俺は思う。もし、その短絡的なモノにアイツの事を幸せにしたい。アイツを守りたい。こいつの事をもっと知りたい。と言った明確な信念が生まれた時、ソレが愛になるんだと思う』

アスランの言葉を引き継ぐ様にキラは言う。

『そして、一夏が言った事が発生するのはお互いがお互いの言葉と想いを重ね、結婚して子を生じた時に自然と生まれるモノだよ。相手と言葉と想いを重ねて、相手との距離を把握し、如何したら家族を幸せに出来るかを模索する。生活基盤も重要だけど、一夏の言葉には其処に自分と相手の想いが入っていない。更に結婚するにして

も自分の想いを相手に押し付けるのは良くない。言葉を重ねぶつかり合ってわかってくるもんだよ』

キラとアスランがここまで語れるのは経験があるからに他ならない。

そして、今では別れた理由を客観的に見ることが出来る。

あの時、お互い話し合ったか？

相手の話をちゃんと聞いていたか？

意見をぶつけ合っていたか？

その自問自答にNOとしか言えない自分達がいる事もキラとアスランは知っている。

しかし、彼女いない暦イコール年齢の一夏には語るべき言葉が無かった。

経験が詰まったキラ達の言葉とカラッポの一夏の言葉では其処に言葉の重みが違ってくる。

ソレを理解した時、何となく悔しかった一夏だった。

その様子を見ていた女性陣は、千冬以外なんとも言えない顔をする。

「まあ、あいつ等は経験者だ。何かしら思うところはあるだろうが、悩んで自分なりに答えを出せ。ソレが青春と言う若さの特権だ」

そう言いながら部屋を出る千冬だった。

21話 椿姫、ドレスを纏う

キラ達、専用機持ちと筈は広い岩場に集められ千冬の講義を受けていた。

千冬は全員を見回しながら言う。

「よし、専用機持ちは全員揃ったな」

その言葉に鈴が質問を投げかける。

「ちょっと待って下さい。筭は専用機を持って無いでしょう」

「それは……」

その言葉に筭は言いよどむが千冬が助け舟を出す。

「私から説明しよう」

そう言いながら算の所まで歩く千冬。

「実はだな……」

千冬が説明しようとした時、突如、底抜けに明るい声が響き渡る。

「や  
~~~~~  
ほ
~~~~~」

~~~~~!

その声に嫌そうな顔をした千冬と箒。

声の方を見ると女性が崖を滑り降りながら、人類的に可笑しいハイジャンプをしながら叫んだ。

「チ~~~~~~~~ち~~~~~~~~ん!!」

そう言いながら女性はハイジャンプの勢いそのままに千冬に抱きつかうとした。

しかし、千冬も並みではない。

女性にアイアンクローをかますと同時にハイジャンプの勢いを殺しながら優しく地面に女性を着地させる。

「やあ、やあ、逢いたかったよ！ チイちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛をたしかめ……」

女性が言葉を全て言い終わる前に千冬は指の力を強めながら言う。

「五月蠅いぞ、束」

その辛辣な言葉にもめげず女性は尚も抱きつかうと試みながら言う。

「相変わらず容赦の無いアイアンクローだね」

そう言うところ今度は、岩陰に隠れた箒の所に移動する。

「ジャジャ~~~~ン！ やあ」

そう言いながら両手を広げ挨拶をする女性。

「ど、どうも……」

箒もたじろぎながら挨拶を返す。

その様子を見ながらキラ達は取り残される形となる。

正直、女性のハイテンションに付いていけないのだ。

そんな中、箒と女性とのやり取りに一夏も強制的に参加させられそうになった所を千冬が止める。

「オイ、束。自己紹介くらいしろ」

その言葉に女性は面倒臭そうに、いや実際、面倒臭く言い放つ。

「えゝ、面倒臭いなゝ」

そう言いながらも女性はポーズを決めながら自己紹介をする。

「私が天才の束さんだよ。ハロー。終わり」

その言葉に驚きの声と顔をする4人だが、キラとアスランは、ああ、ヤッパリと言う感想が強かった。

そして、一夏の機体、白式の開発者の正体もこの時解つたのだ。

シャル達がざわつく中、束は上空を指差しながら言い放つ。

「さあ！ 大空をご覧あれ！！」

そう言った瞬間、何か重たい物が落下する音が辺りから響いてくる。

そして、菱形の金属が岩場に突き刺さる。

そう言いながら束はリモコンを押しながら言う。

「ジャジャーン！ コレが篝ちゃん専用機こと紅椿！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよ」

その言葉にキラとアスラン以外啞然とする。

「なるほど、機体に展開開放スペースがあるな。多分、展開装甲だろう」

アスランの言葉にキラも頷きながら答える。

「ウン、展開装甲の展開する根元の装甲が厚いね。多分、熱量兵器を搭載しているんだろうね」

その言葉にアスランは付け足すように言う。

「装備の換装無しでの全領域、全局面展開運用能力の獲得を目指した第四世代ISか」

その言葉にキラは指を指しながら言う。

「アスラン、あの胸部装甲はパワーエクステンダーだよ」

その言葉に頷きながら言うアスラン。

「ああ、多分、白式の運用データを下に開発されたんだろう。差し詰め、白式の妹機といった所か。それなら白式を発展させた。或いは白式との連携を主眼に置いた運用が目的だろうな」

その言葉に束は感心した様に、そして、剥れながら言う。

「ちょっと君達？ 人の説明を取らないでくれる？」

その言葉にキラとアスランはそれぞれ謝罪の言葉を述べた。

「すみません」

「申し訳ない」

そう言いつつ束はスカートからコードを展開し、紅椿に接続、OSの画面を展開、タッチパネル型キーボードを叩く。

「箒ちゃんのデータはある程度先行していれてあるから。後は最新データに更新するだけだね」

そう言いながらキーボードをタイプする速度はキラと同じ速度だ。

「す、凄い、キラと同じ速さでキーボードをタイプする人初めて見た……」

シャルは啞然としながらその様子を見ていた。

キラもその様子を見ながら驚いていた。

（余りに無駄が無い。神経ネットワークの接続と同調には色々手順があるのにソレを理解している……僕達の世界のOSをこの短時間で理解するなんて……まぎりも無く天才だね……）

あつという間にフィッティングを終了させると束は箒に操縦するよう提案した。

「ハイ、フィッティング終了。さすが私、ちょく速いね。それじゃ、試運転も兼ねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

その言葉に箒は力強く答えた。

「ええ、それでは試してみます」

そう言いながらユックリと瞳を閉じて念じる様にP I Cを起動した。

その瞬間、紅椿はフワリと浮き上がる。

「篠ノ之 箒、紅椿、参る！！」

そう言うのと爆発的な加速力で大空へと舞い上がった。

「何これ！？ 速い！！」

鈴の驚きの言葉に同意するようにシャルも呟く。

「コレが……第四世代の加速……と言う事……エールと同じ加速力だよ」

暫く兵装を試していると真耶が大慌てで携帯を持ちながら走ってきた。

「織斑先生~~~~!!」

そう言いながら呼吸を整え、真耶は携帯を千冬に差し出しながら言う。

千冬は携帯を受け取り、ウィンドーを開き、任務内容を読み上げる。

「特命任務レベルA……現時刻より対策を始められたし」

そう言うと千冬は全員に呼びかける。

「テスト稼動は中止だ！ お前達にやってもらいたい事がある」

キラ達は旅館の一室を貸しきり、対策会議を開いた。

「今から2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ、イスラエル共同開発のIS、シルバリオゴスペル、通称、福音が、制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの連絡があつた」

その言葉に全員の緊張が走る。

千冬は詳細を説明する。

「情報によれば、無人のISとの事だ」

「無人……」

一夏は呟くようにその言葉を言う。

前の無人IS事件を思い出しているのだろう。

「その後、衛星での追跡の結果、福音はここから2キロ先の空域を通過する事が解った。時間にして50分後。学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処する事になった。教員は訓練機を使用し、空域、海域の封鎖を行う」

そう言うのと置の上の画面は教員の配置を表示する。

「よって本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

「はい？」

その言葉に一夏は驚きの声を上げる。

その言葉にラウラは律儀に説明をする。

「つまり、暴走したISを我々が止めると言う事だ」

その言葉に更に驚く一夏。

「マジ!？」

「一々驚かない」

鈴に窘められる一夏。

それに構わず千冬は作戦会議を開始した。

「それでは作戦会議を始める。意見のある者は挙手する様に」

その言葉に一番先に手を挙げたのはセシリアだった。

「ハイ、目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

その言葉に頷きながら千冬は言う。

「フム、だが、決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも2年の監視がつけられる」

セシリアはソレを聞き淀みなく答える。

「了解しました」

その瞬間、正面ウィンドーに福音の詳細なデータが浮かび上がる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……私やキラさんのISと似てオールレンジ攻撃が可能ですね……」

その言葉の鈴も頷きながら答える。

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね……」

その言葉にシャルも自分なりの分析を言う。

「この特殊武装が曲者って感じはするね……連続しての防御は難しい気がするよ」

ラウラは顎に手をやりながら考えるように呟く。

「この情報では格闘性能は未知数だ。偵察は行えないのですか？」

その質問に千冬は否定するように言う。

「ソレは無理だな。この機体は超音速飛行を続けている。アプローチは1回が限界だ」

その言葉に今まで黙っていたアスランが拳手をする。

「何だザラ」

アスランは手をゆっくり下ろすと言葉を紡ぐ。

「俺とキラの機体なら威力偵察なら可能です」

その言葉に真耶が疑問を投げかける。

「相手は超音速、スーパースニックで常時移動しているんですよ？
最高時速マッハ4、追いつく事さえ不可能では？」

その言葉にキラは回答を提示する。

「フリーダム及びジャスティスの戦闘機動はマッハ数換算でマッハ

7です。時間を惜しむならイグニッションブーストを展開した場合だとマッハ1.2に跳ね上がります」

ソレを聞いた瞬間、全員の顔が引きつる。

何せ、福音の出す速度はマッハ4、戦闘機の倍の速度で移動している。

これは戦闘機の最高速度がマッハ2で大部分が超音速飛行能力を備えており、短時間マッハ2程度で飛行できるものが多い。

音速にもカテゴリーがあり、サブソニック、トランスソニック、スーパーソニック、ハイパーソニックの4種類に大別できる。

亜音速はマッハ数0.75以下、遷音速はマッハ数0.75から1.25、超音速はマッハ数1.2から5.0、極超音速はマッハ5以上である。

福音の移動速度がマッハ4でスーパーソニックに分類される。

ハッキリ言えばISの稼動時間を考えたら速い部類に入る。

しかし、キラ達は極超音速を叩き出せると言い放ったのだ。ハイパーソニック

常識から逸脱した言葉に全員が、頭が可笑しくなりそうな感覚に囚われる。

更にイグニッションブーストを組み合わせたら、単純計算で福音の3倍の速度だ。

常識外である。

ソレを何の補助装備無しで、通常で行えると言っのだから全員の反応は納得が出来る。

こうして、キラとアスランは自分達の作戦を話す。

22話 加速する白と赤

キラとアスランは海岸線に空を見上げながら瞳を瞑る。

その瞬間、2人は輝きを放ち2人はフリーダムとジャスティスを起動する。

「行こう。アスラン！」

「ああ！」

そう言うとき2人は何時もの通りに膝を折り曲げて発進する。

先行はアスランだ。

アスランはスラスターを全開にまですると言い放つ。

「アスラン・ザラ、ジャスティス、出る！！」

そう言うときアスランは地面を蹴り大空へと舞い上がった。

続いてキラも発進する。

「キラ・ヤマト、フリーダム、行きます！」

そう言うときキラもアスランと同じ方向に飛び立つ。

2人は赤と蒼の軌跡を残して海岸から姿を消した。

ソレを見送った千冬はインカム越しに全員に作戦開始を告げる。

「現時刻を持って、『オペレーション・ブローケン・ゴスペル』を開始する！」

時間は1時間前に遡る。

キラとアスランの作戦はこうだ。

先ず、キラとアスランが福音に接敵、威力偵察を開始、詳細スペックデータに無い情報、敵AIのウィルスの汚染の有無、コアユニットの無傷での奪取の可否、敵AIの学習能力速度の調査、クラッキングの場合、解除の可否及び、衛星データリンクの洗い出しによる発信源の調査、情報に無かった敵兵装の正確な破壊能力と射程の調査を行いつつ、一夏達が到着するまで福音を足止め、然るべき後に情報を加味した上での福音との戦闘。

外部からのアクセスが通じる場合はキラがアクセスするまでの護衛及び時間稼ぎ。

ソレが困難或いは不可能と判断された場合は全機による集中砲火による破壊。

が、キラ達が提示した作戦プランだ。

あくまで作戦の成功を考えればキラ達だけで落とすべきなのだろう

が、外部からの妨害も予想される為、兵数は多いに越した事はない。

「以上が僕とアスランの作戦です。質問は？」

その質問にラウラが拳手をする。

「作戦の大まかなプロセスは理解した。問題は兵員配置だが、どの様に配置する？」

その質問にアスランは真耶の所まで歩み寄り、畳の上に投影された画面を左手でキーボードを操作しながら、右手のポインターで指し示し説明する。

「ストーム・バンガード先ずは、突撃前衛は一夏、箒が担当、ガン・スライパー強襲掃討は鈴とシャルが担当する。ガン・インターセプター迎撃後衛は俺とキラが担当。ストーム・バンガード戦況に依じて俺は突撃前衛とガン・スライパー強襲掃討を兼任、キラは打撃支援、ラッシュ・ガード砲撃支援、インバクト・ガードを兼任してもらう。ラッシュ・ガードセシリアは、打撃支援を担当、ラウラ、君にはインバクト・ガード砲撃支援とブラスト・ガード制圧支援の両方の任務を行ってもらう」

続けてキラは作戦詳細を説明する。

「後は、戦況に依じての臨機応変な対応を行って貰う。実戦部隊の指揮官は今回、アスランが担当。その理由は福音が制御可能な場合、僕が制御を行わなければならないから部隊指揮所じゃ無いんだ。その為に今回は皆、アスランの指揮下に入ってもらう。ヘッド・クォーターHQは織斑先生が担当になるから」

そう言い、キラ最後にこう言い放った。

「皆、コレは実戦であり訓練じゃない。最悪の場合、“戦死”だ。

作戦参加の強制はしない。それでも、戦うと言つなら。僕達の指揮下に入ってもらつ」

その言葉に、一夏は覚悟を決めたらしく握り拳を作り言つ。

「やる。俺はキラとアスランの作戦に参加する」

その言葉に皆頷きながらキラとアスランを見る。

アスランはディスプレイの前に立ち、一夏達の覚悟を受け止めた。

「すまない皆、皆の命を俺にくれ」

そついい、アスランは背筋を伸ばし敬礼をした。

キラもまた、アスランに習い敬礼をする。

正直、アスランもキラも自分の事がバレるかも知れないが、覚悟を決めた一夏達に最大限の敬意を払いたかった。

それ故にアスランとキラは敬礼をしたのだ。

その姿に、一夏達はキラとアスランに軍人の面影を感じた。

特にラウラはソレを肌で感じ取りながら思つ。

（先ほどの作戦立案といい、部隊配置といい、部下への訓示といい、敬礼といい、アスランもキラもまるで軍の指揮官ではないか……アスラン、お前は一体どんな過去を背負っているのだ？ 聞きたい……アスランが最愛といった女の事を含めて……だが……何故だ？

私は怖いと感じている……一体、何を恐れているのだ？)

ラウラの恐怖はソレを聞く事でアスランとの関係が壊れるのでは、という恐怖だが、恋愛経験の無いラウラにソレを理解する事は難しいかも知れない。

シャルもまた、キラを見ながら想いを馳せる。

(キラって軍人みたいだね……さっきの敬礼にしても、更衣室や大浴場で見た体つきにしても……聞きたい……キラの過去を……でも……聞けない……キラの心を傷つけずに心を土足で入らないように聞く事なんて出来ない。解らないけど……あの瞳の奥にある憂いを帯びた光……正直、ソレを聞く勇気も資格も僕には無いと思う……)

そう思いながらキラを見つめるシャルだった。

地図にない基地^{イレイズド}では福音暴走の対応に追われていた。

オペレーターはコンソールを忙しなく操作し、上級指揮官は関係各省庁に連絡を取っていた。

「福音、尚も超高速で移動中！」

「アクセスはまだ受け付けんのか!？」

その言葉にオペレーターが叫ぶ。

「駄目です！ 全て試しましたが効果ありません！！」

ナスターシャ・ファイルスは明らかにイライラしながら事の状態を見守っていた。

その時だった、オペレーターが叫ぶ。

「高熱源体、急速に福音に接近！！ 数は2！！ その速度……」

オペレーターが言いよどむ。

ナスターシャは怒鳴るように命じる。

「早く言いなさい！！」

「……その速度は福音の3倍の速度で接近中！！」

その言葉にナスターシャは我が耳を疑う。

実際、福音の速度はマッハ4。

現在、第3世代では最高速と自負している。

ソレの3倍の速度で移動している物体がこの世界にあり得るのかと。

「ミサイルか？」

ナスターシャの質問にオペレーターは熱紋ライブラリーを慌てて称号する。

「これは……ISです！！　ISが2機、極超音速で接近していますー！！」

「一体何なの！？」

キラとアスランは極超音速で移動しながら通信で会話をする。

「アスラン、目標到達まで後1分、先行して足止めして！」

「解ったー！！」

その瞬間、福音は銀の鐘シルバー・ベルを発射した。

しかし、キラとアスランは極超音速の速度を殺す事無く回避してみせる。

そして、先行したアスランはニヒルに微笑みながら福音を見つめ、
こう言い放った。

「見せて貰おうか、アメリカとイスラエルが開発したISの性能とやらを」

と。

23話 白の騎士、椿姫に不安を抱く

アスランは牽制にビームライフルを発砲。

ソレを回避し銀の鐘を撃ち鳴らす福音。

「当たらなければ如何と言う事はない！」

そう言いながらアスランは鮮やかな回避行動で福音のシルバーベルを全弾回避してみせる。

しかし、かわしたシルバーベルはアスランを執拗に追尾する。

「追尾機能つきのビーム。亜光速じゃないな……粒子を圧縮し加速して撃ち出してるのか。アスラン、シルバーベルを撃ち落してみて」

キラはデータを集めながらアスランに頼んだ。

「解った」

アスランは極超音速で動きながらバルカンでシルバーベルを撃ち落としにかかった。

バルカンを喰らったシルバーベルの1発が爆発。連鎖するように周囲のシルバーベルも爆散する。

しかし、福音はそれでも弾幕を張る。

アスランはそれを回避する。

「ヤッパリ……ある一定の衝撃を受けると圧縮した粒子が不安定化をおこし、粒子による粉塵爆発を引き起こすんだ。追尾機能は福音の翼の特殊電磁場フィールドで制御しているね。弾頭加速もあの翼のPICが制御しているのか。それに、今の砲撃は粒子の圧縮が低いけど速度は速い。連射向きだね。なるほど、爆撃タイプと砲撃タイプの2種類の圧縮粒砲の撃ち分けが可能か。アスラン、福音は翼が弱点だ。アレは機体の姿勢制御、加減速、兵装運用を一手に行っている。データを送るよ」

「解った。今から接近戦を試みる」

そう言うと、アスランはビームライフルを左手に持ち替え、ビームサーベルを引き抜くと目にも止まらぬ速さで福音に迫る。

左から右の横薙ぎの斬撃を福音に浴びせるアスラン。

しかし、福音は倒立反転しながら後方に下がりアスランに蹴りを入れようとする。

しかし、アスランはソレを素早く体を捻り回避する。

攻撃が外れた福音はアスランから距離を取り砲撃戦を仕掛ける。

そう、アスランは相手のインファイトアビリティーを見るためにわざと大降りにビームサーベルを振るつたのだ。

キラはその様子を見ながら分析を開始する。

「接近戦能力は格闘のみか……しかし、並みのパイロットなら確実に喰らってる攻撃だ。あのA.I……ソコソコ高性能なモノを積んでる」

そう言うときらはアメリカ軍の衛星をハッキングし福音にアクセスしようとした。

しかし、エラーの文字が目の中のウィンドーに表示される。

「エラー……まさか……」

そう呟くときは高速でキーボードを叩く。

次々とウィンドーが開いては消えを繰り返す。

「ヤッパリ……外部アクセスを受け付けないように設定されてる。解除するには福音本体にプラグを繋いで解除するしかない。でも、ソレは事実上不可能だ。コレは、破壊するしか手は無いか……」

きはそう言いながらデータを転送するとH.Qの千冬に通信を開始する。

「ブローケン2よりH.Q。福音の詳細データを送る。即時、全隊員に送信されたし」

『少し待て……データを確認した。一夏達に送る。2人は引き続き、福音の足止めを継続しろ』

その命令にきはとアスランは答える。

「了解！」

千冬は全回線を開き、命令を送る。

「HQより各隊員に通達、作戦は第二段階、プランBに移行。繰り返し、作戦は第二段階、プランBに移行」

その通信に一夏達は答える。

『『『『『了解！』『』『』『』』』』』

その頃、一夏達はシールドエネルギーを節約する為、通常飛行で進軍していた。

「一夏、もっと速度は出せないのか？」

箒の言葉に一夏が反論する。

「これ以上、速度出したらシールドエネルギーの消費が早いだろ！落ち着け、焦るな！」

一夏の言葉に箒は勇んで答える。

「キラ達とて長々足止めは出来ないんだぞ！？悠長な事は言っちゃられない！」

この時、一夏達は箒の様子が何時もと違う事に気づく。

その時だった、千冬が秘匿回線で通信をする。

（秘匿回線？ 一体……）

『一夏、私だ。今の篠ノ之は浮かっている。まあ、気持ちは解らなくても無いが、今は任務中だ。一夏、お前が篠ノ之の手綱を握れ。今の篠ノ之はミスをする可能性が高い』

その言葉に一夏は頷きながら答える。

「解った。後、俺に秘匿回線を使わせてくれ」

『解った』

そう言うと千冬は一夏に秘匿回線の使用権限を与える。

「皆、俺だ。聞いてくれ」

その言葉に箒以外の全員が通信に出る。

「秘匿回線？ 一夏如何したの？」

シャルの質問に一夏は険しい顔で答える。

「箒の事だ」

その言葉に全員が思う所があったらしく通信に出た全員の顔が険しくなる。

「今の箒は専用機に初めて乗って浮かれている。だから、全員で箒のフォローを頼みたい」

その言葉に鈴が毒づく。

「あの浮かれポンチ……まあ、良いわ。フォローするわ」
シャルも頷きながら答える。

「まあ、解らないでも無いからね……解った。やってみる」
セシリアも頷きながら答える。

「解りましたわ」

ラウラは別の事に対して懸念を述べる。

「アスラン達にこの事を報告しなくて良いのか？」

その問いかけに一夏は答える。

「アスランやキラだって俺達のフォローや作戦指揮で手一杯の筈だ。
これ以上負担は掛けられない」

そう言つと一夏達は戦場へと急いだ。

24話 敗北の戦

キラとアスランは福音の足止めをしながら一夏達を待っていた。

福音は一定の距離を維持しながらシルバーベルを乱射するがキラとアスランはその悉くを回避する。

「キラ！ 一夏達の到着予定時刻は！？」

アスランの質問にキラはシルバーベルを左へバレルロール回避しながらキラはアスランに言う。

「後、2分！」

そう言いつつ両腕のビームライフルで牽制射撃をする。

アスランは飛んできたシルバーベルを頭部、胸部のバルカン砲で撃ち落しながらキラに言う。

「足止めを継続するぞ！」

「了解！」

その頃、一夏達は戦闘の光を肉眼で確認する事が出来た。

「見えた！ 一夏、距離5キロ！ 2人とも足止めに成功してる！」

シャルの言葉に一夏は頷く。

皆、何とか間に合ったと言う想いが強い。

一夏は通信でキラに語りかける。

「キラ、アスラン！ 無事か！？」

その言葉にアスランは嬉しそうに言う。

『場は盛り上げておいた！ 各員、戦闘配置に付け！』

『『『『『了解』『』『』『』』』』』

そう言うと全員が部隊配置に付く。

この時、キラもアスランも筈の様子が若干違う事に気づく。

そこでアスランは秘匿回線を一夏に繋ぐ。

「ブロークン1よりブロークン3、ブロークン4の様子がおかしい。コンバットハイの可能性もある。筈から目を離すな！」

その言葉に一夏は驚きで息を呑む。

「気づいてたのか？ アスラン」

「ああ、一目見てな……バイタルデータも若干脈拍も高い。アドレナリンの分泌量も通常値より高くなっている。典型的な新兵特有のコンバットハイだ」

アスランとキラはこの作戦の成否は一夏が簞の手綱をどれだけ上手く握れるかに掛かっていると認識した。

今の簞は初めての専用機に乗り、好きな男と共に飛び、機体の力に酔狂している。

ハッキリ言えば危険な状況だ。

周りが見えてないとも言える。

こんな状況の兵が一人ただけで部隊が壊滅した例をキラもアスランも何度もお目にかかっている。

正直、簞を戦場から下げたいが、部隊運用ギリギリの人数の状況で下げる訳にもいかない。

何時、暴走を仕込んだ犯人が妨害にくるか解らない以上、最低限の人数は確保したい。

そこで、アスランは簞に通信を繋ぎ、苦言を呈す。

「ブロークン1よりブロークン4、先行しすぎだ。ブロークン3との連携で目標に対処しろ。一人でやれる相手じゃない！」

しかし、簞はその言葉に反発する。

「アスラン！ 何を悠長な！ 早くコイツを止めねば……」

その言葉にアスランが本気で怒鳴る。

「馬鹿野郎！！ 今は戦闘中だ！！ 部隊での連携で相手を追い込むのが基本戦術だろうが！！ ソレを忘れているなら下がれ！！ 戦闘の邪魔だ！！」

それに不承不承で命令に従う筈。

アスランは本気で筈を下げるべきかどうか悩む。

しかし、福音はその事を許さないとばかりに一夏達にもシルバーベルを撃ち鳴らす。

全員ソレを回避してみせる。

アスランは一夏に命令する。

「ラウラ、セシリア、牽制砲撃！ 10秒！」

「了解！」

「了解ですわ！」

2人がそう言いながらアハトアハトとスターライトmk?を構え砲撃する。

キラはシャルと鈴に命令する。

「シャル、鈴！ 牽制砲撃終了後、福音に牽制攻撃！ 一夏と箒はシャル達が追いついたポイントに急速展開！ 最大出力で攻撃！！」

「了解！！」

「解った！！」

「ああ！！」

シャル達と一夏達もそう答え高速機動を開始する。

福音はシルバーベルをキャンセルしラウラとセシリアの砲撃を回避する。

福音は左上に逃げるが上空から双天牙月を構えた鈴が襲い掛かる。

「はああああああああああ！！」

気合と共に振り下ろされる双天牙月を福音はシールドを左腕に展開し、PICを全開にする。鈴の重たい一撃を揺るがず受け止めた福音は鈴の腹部に左足で蹴りを入れ、鈴を吹き飛ばす。

「きゃああああああああ！！」

「鈴さん！？ これ以上やらせない！！」

シャルはラビットスイッチでビームアサルトライフル2挺とケルベロスを展開し発砲した。

緑の無数の弾幕と赤いビームが福音を襲うが、鮮やかにバレルロールしながら弾幕の隙間を縫う様に回避する。

しかし、セシリアの放ったブルーティアーズが待ち構えていた。

「ソレは、甘いすわー!!」

蒼いレーザーが四方から降り注ぎ、全体に防御を張る福音。

其処から逃れる様に上昇しようとするがラウラが一斉砲撃を開始する。

「甘い!! お前の動きは単調だ!!」

絶対防御により守られた分厚い敵の守り。

しかし、其処に楔を打ち込むべく、白と紅が突き進む。

「私達から逃げられると思うな!!」

そう言いながら箒は雨月と空裂を引き抜き、空裂を振りかぶり一気に振りぬく。

その瞬間、赤い刃の軌跡が福音を襲うが福音は回避してみせる。

しかし、一夏は回避先を読み、零落白夜を展開、一気に振り抜くが、やはり福音は回避するが、回避しきれず、右肩の装甲を損傷する。

この様子に一夏達はどう思った。

いける。勝てるぞ。

と。

しかし、キラとアスランの見解はその180度違う。

いや、焦っていた。

（不味い……皆、勝てると思って気が緩んでる……こういう時ほどミスをする早く引き締めない！！）

（不味いな……全員、気を緩めてる……早く締めなおさないと！！）

キラとアスランは奇しくも同じ意見に至った。

何故、一夏達とキラ達の見解が違うかと言えば理由がある。

一夏達は“戦場”での実戦経験は皆無に等しい。

あのラウラさえ戦場での命のやり取りの経験が無い。

対するキラ達は百戦錬磨だ。

戦場の雰囲気や部隊の状況、戦闘の流れを読み取り、相手の空気を
感じ取り、相手の観察も出来るほどだ。

そのキラ達からすれば勝利条件を満たしていないのに勝利を確信する
のは自殺行為だ。

油断こそ自分と部隊の命を脅かす最大の敵である事を理解している。

その差こそキラ達と一夏達との決定的な差なのだ。

アスランが緩んだ空気を締め直そうとしたその時だった、キラとアスランのハイパーセンサーに何かが引つかかった。

「何だ！？ 民間船！？ こんな時に！！」

「そんな！？ 海上封鎖をしていた筈なのに！？」

アスランは思わず舌打ちしてしまう。

キラもまさかの乱入者に憤慨する。

慌ててアスランは作戦変更をする。

「全機、作戦変更！！ 民間船が戦闘海域に迷い込んだ！！」

その言葉に一夏達は憤慨する。

「ウソだろオイ！？」

「密漁船か！？」

「教師の方達は何をやっていましたの！？」

「空気読みなさいよ！？」

「そんな！？ ここまできて！？」

「クッ！！ 了解！！」

しかし、箒は命令を無視して突撃を開始する。

それに慌てたアスランは箒に通信を繋ぐ。

「ブローケン4！？ 何をやっている！！ 聞こえなかったのか！？ 作戦変更だ！！！」

しかし、箒は反論しながら突き進む。

「今、この機を逃せば逃げられる！！ 私だけで十分だ！！」

そう言いながら箒は肩部の装甲をパージし福音に突撃をかける。

福音は絶対防御で防ぎきる。

しかし、福音は上空へバレル上昇しながらシルバーベルを全方位にばら撒く。

それに慌てたキラとアスランは目配せをしながらキラは迷い込んだ密漁船の前に躍り出てビームシールドを展開する。

アスランも箒達の前に躍り出てビームシールドを最大出力にして箒たちを守る。

しかし、箒はシルバーベルが止むとアスランの張ったビームシールドから抜け出て福音に攻撃を仕掛けた。

流石のアスランもコレにはキレた。

「いい加減にしろ、箒！！」

しかし、無言のまま突き進む箒。

福音はシルバールベルで箒を攻撃するが、箒はソレを回避し或いはシルドで防ぐ。

その流れ弾が密漁船の周囲や一夏達に着弾しそうになる。

キラは慌ててドラグーンをパージし福音の流れ弾を迎撃する。

アスランもハイパーフォルティスとビームライフルをフルオートに切り替え迎撃する。

「箒！？ ふざけるな！！ 下がれ！！」

キラの怒声も意に介さず福音に迫る箒。

完全に周りが見えていない。

キラ達は止めに入りたいがこの弾幕の中、防御をとく訳にはいかない。

下手をすれば一夏達に被弾するし最悪、運の悪い密漁船に着弾する。

犯罪者とは言え民間人。

軍人のキラ達が民間人を見捨てる訳にもいかない。

その時だった。箒にシルバールベルの爆撃追尾タイプが着弾。

シルドを破壊され、吹き飛ぶ。

「きゃあああああああああああ！？」

「箒!!」

一夏はそう叫びながらイグニッションブーストを展開し、箒の所に向かう。

しかし、福音はシルバーベルを発射体勢。間に合うか間に合わないかの瀬戸際だ。

何とか間に合ったが今度は一夏が被弾。

砲撃貫通タイプの弾幕に絶対防御を貫かれ爆発する。

ソレを啞然と見ながら箒は叫んだ。

「一夏!!」

一夏は重力に任せて落下する。

箒は爆炎の中に飛び込み、一夏を受け止める。

アスランは全員の顔を見る。

キラ以外、大小取り乱している

砲撃が止んだのを見計らいアスランは千冬に作戦中止を具申した。

「ブロークン1よりHQ! ブロークン3負傷!! 熱傷、擦過傷、創傷が全身に多数! BP、P、EEG共に大幅な乱れあり! 部隊員の心的ストレス過度!! 戦闘継続は困難!! 作戦中止を具

申します!!」

その言葉に千冬は作戦中止と撤退を許可した。

一夏負傷に動揺する中、キラとアスランは通信で衛生兵の手配と緊急治療の依頼を真耶に連絡。

新たに作戦を考えるべくその頭は高速回転を始めた。

一夏を気遣うのは後でも出来る。今は福音をいかに倒すかを考える時だ。

冷たいようだが自分達に出来る事を最大限にする事が一夏の為になる事を信じて。

作戦は一夏負傷、福音ロストと言う完全敗北だった。

25話 決意の戦乙女達

海岸に到着したキラ達は一夏がタンカに乗せられる所を見送る。

何とかキラとアスランが救護班到着まで適切な処置を行った事が幸いしたのかバイタルデータは何とか持ち直したが意識だけは戻らなかった。

千冬は怒鳴り散らす様に現場の人間に命令を下す。

「救護班は即時、負傷者の搬送を急がせろ！！　ザラ、ヤマトは司令部まで来い！！　他は別命あるまで待機！！」

そう怒鳴るような命令を下すと千冬は一度も一夏の顔やキラ達の顔を見ずにその場を去る。

キラとアスランは千冬に続きその場を後にした。

キラ、アスラン、千冬、真耶の4人は司令部に籠った。

真耶は衛星のデータリンクを利用して福音の位置を割り出す。

「停止していますね……」

真耶の言葉に千冬は画面を睨み付けながら微動だにしない。

キラと、アスランも千冬と同じように画面を見つめた。

「本部はまだ、私達に作戦の継続を？」

その言葉に千冬はようやく重たい口を開いた。

「解除命令が出ていない以上、継続だ」

その言葉に真耶は反論の声を上げる。

「ですが……これからどのような手を……」

その言葉に、アスランが答える。

「もし……もし、許可していただけるのなら、フリーダムとジャステイスの最大火力で福音の完全破壊は可能です」

キラもアスランと同意見らしく唯、黙って頷いた。

千冬が何か言おうとした時、扉をノックする音が響き渡る。

「失礼します」

その呼び掛けに鋭い声で返す千冬。

正直、斬られそうな雰囲気漂わせていた。

「デュノアです」

「待機と言った筈だ!!」

有無を言わせぬその怒声に怯むシャル。

シャルだけではない、セシリアも鈴も萎縮した。

立ち去る足音を聞きながらアスランは外へ出ようとする。

「何処へ行く積もりだ？ ザラ？」

その言葉にアスランは振り返る事無く千冬に言う。

「部隊員のメンタルケアです。部隊長として部下の精神面を支えるのは当然では？」

「勝手にしろ。お前は指揮官だ。その権利も義務もある」

その千冬なりに配慮にアスランは内心感謝しながら向き直り千冬に頭を下げた。

「有難う御座います」

そう言いいアスランは司令部を後にした。

箒は一夏が眠る枕元に正座をしながら後悔の念に苛まれていた。

其処にノックする音が響き渡る。

「俺だ。アスランだ。箒、入るぞ」

その言葉に肩を震わせながら何も答えない箒。

「いい加減に休んだらどうだ？ 休むのもパイロットの仕事だ」

そう言つとアスランは静かに箒の背に歩み寄る。

無言を貫く箒。

アスランは静かだがハッキリとした口調で言い放つ。

「一夏が落ちた。唯、それだけの事だろう。早く休め。何時出撃があるか解らんからな」

その言葉に箒がキレた。

「唯、それだけの事だと！？ 一夏が落ちたのだぞ！？ お前は、一夏の友だろ！？」

そう叫びながらアスランの胸倉を掴む箒。

「悔しく無いのか！？ 悲しく無いのか！？ お前はそんな薄情者か！？」

怒りに任せて罵声を浴びせ掛ける箒にアスランは無言で箒の頬を叩

いた。

その衝撃で、箒は横に倒れこみ叩かれた頬を押さえながらアスランを見やる。

「いい加減にしろ！ 自分で蒔いた種だろう。初めての専用機に乗って浮かれてラリった挙句、命令無視、民間人を見捨てるような行動、挙句に味方の損害を出す行動」

アスランに挙げられた罪状にビクツと肩を震わせる箒。

「確かに、あいつ等は犯罪者だ。だがな、お前は唯、何の信念も無く力に浮かれてあいつ等を見捨てるような事をした。あいつ等と変わらんよ！」

その言葉に箒は反論する。

「あいつ等は秩序を乱したのだぞ！？」

その言葉にアスランも言い放つ。

「お前とて秩序を乱しただろうが！？ 何様だ！？」

そう言いアスランは箒の頬をまた叩き倒した。

「戦場でヒーローを気取るな！！ 戦闘はヒーローごっこじゃない！！」

その言葉に泣きながら反論する箒。

「違う！ 私は！！」

しかし、アスランは箒の反論を切り捨てた。

「戦場では結果が全てだ。力を持ったその瞬間から自分は誰かを悲しませる破壊者になる。お前も専用機を持つ者なら、その自覚と覚悟を持って」

有無を言わせぬアスランの言葉に箒は押し黙った。

箒は浜辺で夕日を眺めながらアスランの言葉を思い出していた。

『戦場でヒーローを気取るな！！ 戦闘はヒーローごっこじゃない！！』

（違う！！ 私には唯……唯、一夏と空を飛べるのが嬉しかった。遠くにいる一夏のそばにいる自分が誇らしかったただけなんだ！！ それにあいつ等は犯罪者だ！！）

『お前とて秩序を乱しただろうが！？ 何様だ！？』

（違う！！ あいつ等は法を犯したのだぞ！？ ソレを助けるだとい！？）

『お前は唯、何の信念も無く、力に浮かれてあいつ等を見捨てるよ

うな事をした』

(違う……私は……)

『戦場では結果が全てだ。力を持ったその瞬間から自分は誰かを悲しませる破壊者になる。お前も専用機を持つ者なら、その自覚と覚悟を持って』

(力を持つ者の自覚と覚悟……)

その言葉に筭は思い至る。

あの犯罪者にも家族はいるだろう。理由もなく犯罪者になる者は少ない。貧しさから悪に手を染めたかも知れない。仕方が無く法を犯したのかも知れない。確かに犯罪は悪い事だ。そんな事、幼稚園児でも理解できる。なら、どうして彼らが法を犯したのか？ その理由を考えた事はあったか？ いや、無い。

(私は犯罪心理学者でもなければカウンセラーでもない。でも、追い詰められて暴力に訴える心境は理解できる)

追い詰められる人間の心境は理解できるが、法を犯すのは個人の意思の弱さだ。

でも、着る物、住む家、食べる物すら満足に無い状況で人間が人間足り得るのか？

答えはNOだ。

何処かの諺に、衣食住足りて礼節を知ると言う言葉を聞いた事がある

る。

なら、アスランは理解した上であんな言葉を吐いたのだろうか？

ソレも解らない。

ただ、言える事はアスランは少なくとも自分より周りが見えているのだろう。

筈は知らないだろう。

キラとアスランは戦後処理で多くの嘆きを、戦場の爪あとを覗いてきたのだ。

自分達が引き起こした罪の在り処が其処にはあった。

自分達の正しさを押し通す為に犠牲になった多くの人たちが其処にいた。

今まで信じていた信念が何度も揺らぎそうになった。

それでも、キラとアスランは背負い続けた。

自分達の罪を、自分が引き起こした事を。

死ぬまで忘れぬ為に。

自分達が信じた信念を嘘にしない為に。

「アンタ、何時までそうしているつもり？」

その声に振り返る箒。

「鈴？」

「アンタ、アスランに修正喰らったそうじゃない？」

その言葉に頬を押さえながら言う。

「ああ」

「で？ アンタは如何したいわけ？」

その言葉に箒は戸惑いながらも答える。

自分の気持ち。

キラやアスランの様な自覚や覚悟は持ち合わせていない。

でも、

ああ、でも。

それでも、

力を持つこの身が成し得る事。

「止めたい。心から……福音の暴走を止めたい。それしか、今の自

分に出来ることが無い」

その言葉に鈴はニンマリとしながら箒に持ちかける。

「珍しく、てっ言うか、初めて意見が合ったわね」

そう言うと岩陰からセシリア、シャル、ラウラがひょっこり出てきた。

「箒さんだけではありませんわ。私達も同じ意見です」

「キラやアスランには悪いけど、僕も箒と同じ意見かな？」

「ああ、あのままでは私のプライドにも関わる」

「と、言う訳。悔しいのは誰もアンター人だけじゃないのよ」

最後に鈴がそう言うとラウラに質問する。

「ラウラ、福音は？」

ラウラは端末を操作し福音の正確な位置を皆に言う。

「ここから30キロ離れた沖合い上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたらしいが、工学迷彩はもっていないようだ。衛星の目視で確認した」

その言葉に鈴は上々と言いたげに答える。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

その言葉にラウラは全員に質問した。

「そう言うお前達は準備できたのか？」

その言葉に箒以外の全員が頷く。

「待て、ソレは命令違反では無いのか？」

その言葉にアツケラカと鈴が答える。

「だから何？ アンタ、今、戦うって言ったわよね？ その言葉に嘘偽りは無いの？」

その言葉に挑むように箒は答える。

「勿論だ。それに誰も行かないとは言わない」

「なら、決まりね。ま、カッチリ福音ぶっ壊して、全員でアスランの修正を喰らいますか」

そう言うところ人は頷きながら歩き出す。

若き戦乙女達は誓いを胸に福音に復讐戦を挑むのだった。

26話 力を持つ者の在り方

箒達が出撃しようとして歩き出した時、ユツクリと2つの人影が箒達の進路を阻んだ。

身構える箒達はその人影が誰かすぐに解った。

キラとアスランだ。

「案の定、だね……」

そのキラの言葉に全員がビクツとする。

正直、キラの言葉は静かだが恐怖を感じずにはおれない物があった。

「全く……様子を見て来て正解だったな……」

アスランは明らかにキレていた。

「お前等……何処に行く気だ？ 待機命令の筈だが？」

その言葉に箒達は答えられない。

キラは静かに、だが、強い口調で箒達に言い放つ。

「君達は何をしているか理解して行動しているんだろうね？」

その言葉に何も言えない篤達。

その態度にアスランがキレる。

「待機命令無視、ISの無断使用、軍法に照らし合わせればよくて無期懲役！ 悪くすれば銃殺刑だ！！」

その怒声に萎縮する篤達。

しかし、ラウラは反論する。

「アスラン、確かに軍でのそれらは軍刑法に照らし合わせた時の罪状だ。だが、今の我々はIS学園生徒だ。国家軍法及び、国際法は適応範囲外だと認識しているが？」

その言葉にキラはIS学園の校則を言う。

「IS学園校則第23条、『IS管理委員会作戦命令下における特例軍事作戦使用の場合、国際法の適応範囲内とし、IS学園生徒は国際法を遵守するものとする』ってあるけど？」

更にアスランはラウラの反論を理論的に潰す。

「更に言えば、IS学園校則第20条、『IS学園生徒はIS管理委員会が定める有事の際、派遣国家の軍事指揮下に置くものとする』とある。ラウラ、悪いがそんな幼稚な言い逃れは通用しない。力を持つものは何かしらの鎖で繋がれているものだ」

更にキラは付け加える。

「今回の作戦は本部、IS管理委員会の勅命での作戦だから確実にハーグ法やジュネーブ法なんかの国際法や、日本国の自衛隊法が適応される」

そう言われ、ラウラはしまったと言う顔をした。

そしてキラ達は武装展開をしながら箒達にビームライフルを突きつける。

「ISを没収する。出せ。さもないければ軍法に基づき貴官等を射殺する」

アスランの有無を言わせぬ言葉は何処までも冷たく恐ろしかった。

銃口から殺気を感じるほどに。

勿論、キラもアスランも本気で撃つ気は無い。

脅しだ。

こうでもしないと彼女達は出撃してしまう。
その為、キラ達は一芝居打ったのだ。

しかし、箒達は頑なに否定する。

「キラ、アスラン！ 今しか無いんだ！ チャンスは！！ 福音は止まっている今しか！！」

箒の叫びは静かな海岸に木霊す。

その言葉に鈴も頷く。

「悪いけどキラ、アスラン、今回は箒に賛成するわ。軍法だか国際法だか知らないけど私達にとって今が戦う時なの」

その言葉に全員が無言で頷く。

「……頭を冷やせ。一時的な感情の赴くままに武力を使つな。明らかに君達は頭に血が上っている」

アスランの言葉にキラも頷く。

「一時的な感情に流されての行動ならハッキリいつて失敗する。冷静になれ。誰も出撃するなどは言わないよ。君達のISをカスタマイズするからISを出せと言っている」

そのキラの言葉に箒達は目を丸くする。

まさか、キラ達がそんな事言うとは思いつたからだ。

箒達の知るキラ達はリアリストだ。
実現可能な事しかないし言わない。

「な！？ ホント！？ キラ？」

シャルの驚きにキラは微笑んで答えた。

「戦いを挑むにしても万全の体制で臨む。ソレが僕達の流儀だ。織斑先生に新しい作戦案を提出してきた。それも可決済み。後は君達だけだ。如何する？」

キラの言葉が終わるとアスランは言い放つ。

「行動を起こす時は。冷えた頭で考えろ。そして熱い想いで任務に当たれ。自分が成すべき事、できる事、したい事と自分の実力と照らし合わせて行動しろ。お前達にはソレが出来る能力がある」

その言葉に全員が驚く。

自分達は唯、闇雲に出撃しようとしただけなのに、キラとアスランは次の戦いに備え、具体的な方法を提出し、万全の体制で挑もうとしている。

理解するしかない。

自分達は頭に血が上り冷静な判断が出来なくなっていた。

そして、キラ達は冷静な判断と決断と行動で示した。

これが箒達とキラ達の明確な差なのだろう。

箒達はキラ達に比べてガキでしかなく、具体的な打開策は無く、感情の赴くままに流されて行動したに過ぎないことを。

ソレが堪らなく悔しかった。

年は変わらないのにキラとアスランは大人をしている。

客観的に物事を見て、現実的か如何かを判断し、理想と現実のギャップを埋める為の努力を惜しまない。

更に、今、成し得る最良の一手を投じる事を怠らない。

その証拠に、キラ達は千冬に作戦の許可を貰う為に即席とは言え、千冬が納得し承認できる内容の作戦を立案したり、箒達の暴走を察知し、箒達を諭し、箒達が納得できるプランまで提出した。

実力はもとよりその精神さえずば抜けている2人に何時か自分達もと思う箒達だった。

一方のキラ達は箒達の無謀を理解していた。

何せ、自分達も感情の赴くままに戦いを繰り広げ、取り返しの付かない所一步手前まで来ていたのだから。

27話 戦の準備（前書き）

今回、少なめです。

何せ、26話にこの話を入れるべきなのに、機体の案が思いつかなかった為、分けました。

27話 戦の準備

キラ達は海岸近くの駐車場に止めてある大型トラックのコンテナの中にいた。

アスランは今回のカスタマイズの説明を箒達にしていた。

キラはOSの調整を行う為に忙しくキーボードを叩いていた。

「今回のカスタマイズはお前達のこれまでの訓練や実戦で得たデータを情報化し、其処から兵装最適化を行い、追加兵装及び推進システムの強化を重点的に改良を施した。更に、ソレを十全に操作する為に思考制御システムの向上も図っている」

その説明にウィンドウを展開しながらアスランは説明する。

「先ずはセシリアのブルーティアーズは兵装面での強化を行う。強化プランはブルーティアーズの操作性の悪さの改善、スターライトmk?の改良が挙げられる。これはキラのストライクフリーダムドラグーンシステムをスピノフする形でセシリアの空間認識能力に合わせてカスタマイズされている。これによりブルーティアーズを操作しながらの高速機動が可能だ。次にスターライトmk?の改良だが、レーザーから荷電粒子ビームへの変更とビームライフル銃身下方にレール砲を搭載してある。これにより戦局に応じた兵装の使い分けが可能だ」

そう言いながらディスプレイ画面を操作しセシリアに説明する。

「次に鈴の甲龍だが、双天牙月の刃の部分にビーム発生デバイスを装備、高周波振動により斬撃の威力も向上している。龍咆の改良型の改良点は衝撃波の弾道強化及び多弾幕放出能力を持たせた。これは多方向に弾幕を張る事が出来る能力で距離や威力、弾数も思考制御で調整可能、推進能力も旋回上昇能力の向上を計った設計をしている。つまり、ドックファイトでの戦闘能力向上を図っている」

そして、アスランはシャルに向き直り、機体解説を行う。

「シャルのラファールリヴァイヴカスタム？だが思考制御系の調整を行い、よりラビットスイッチの効率的な運用が可能となった。更に、フリーダムのレール砲の技術をスピノフする形で両腰部に折り畳み式のレール砲も搭載してある」

説明が終わると今度はラウラに向き直り、ラウラの機体説明を行う。

「ラウラのシュヴァルツエアレーゲンだが、P I Cの高軌道改良とアハトアハトの弾頭に追尾機能を持たせた。その為、火器管制の神経接続ネットワークの見直しを行っている。後、パッケージの増量によりアハトアハトの弾頭交換が可能だ。弾頭はバリアバスターで、種類はサーモバリック弾頭、キャニスター弾頭、A P弾頭、などがある。」

最後に第の方を向き直りアスランは説明する。

「第、今回の紅椿の改良点だが全兵装のエネルギー効率が悪い事から低シールドエネルギー消費大出力型のビーム兵装に変更してある。火力そのままにシールドエネルギー消費量は通常の5割まで削減した」

そう言いながら機動状態の5機を見ながらアスランは今回の機体改良プランの説明を終える。

その説明を聞き、セシリアが挙手をして質問した。

「何だセシリア？」

アスランの問いかけにセシリアは質問を行う。

「国の許可は取っておりますの？ ISは国家や企業が管理しているはず……ソレを易々と国家が許すわけありませんわ。どうやって国の許可を？」

その最もな質問にアスランは答える。

「今回は改良データを君達の国に公開する事による取引を行い、国の許可を得た。問題は無い」

つまり、キラとアスランは情報を餌に改良の許可を取り付けたと言っただけだ。

しかし、これは事後承諾の感が強く、各国も本部の勅命である事を踏まえた上であり、キラ達や千冬も押し切る形で許可を本部から取り付けた。

こう言った法律的な措置が曖昧なのに対し、キラ達を憤慨させたが、千冬曰く、『余りに前例が無い為の特例措置だ』と言う見解を示した。

しかし、政治的な問題や条約に文句を言える立場に無いキラ達が声高に叫んだ所で意味が無い。

兎に角、彼女達のISの調整に専念する事にした。

その時だった、トラックの扉が勢いよく開いた。

「俺のISもカスタマイズしてくれ!!」

一夏だ。

「一夏!? もう良いのか!?!」

篤が皆の言葉を代表してそう叫んだ。

「ああ、大丈夫だ。問題ない」

その言葉にアスランが一夏の所まで歩み寄り体のアッチコッチを触る。

「怪我や筋肉疲労は無いようだ……この短期間でどうやって直したかは解らんが後は……」

そう言い、アスランはビームライフルを武装展開し、強烈な殺気を一夏に叩き付ける。

一夏は若干怯んだものの直ぐ様アスランを睨み返す。

アスランは納得したのか武装解除し、殺気を霧散させると一夏に言う。

「PTSDの心配も無いようだ……いいだろう。ISを出せ。即時力スタミイズを行う」

そう言うで一夏はISを外し、アスランに差し出す。

ソレを受け取ったアスランは空いているスペースに白式を置くと展開させ調整に入る。

その時、アスランは気が付いた。

一夏のISが変化している事に。

「第二形態……雪羅……セカンドシフトしたのか……展開装甲の機能も持っているのか射撃、格闘、防御を全てカバーすることが出来る柔軟性を持たせた装備か……しかし、パワーエクステンダーでも連続稼働時間が3分に制約される。武装面の低シールドエネルギーの省エネを測る改良をすべきだな……射撃用の掌底部荷電粒子砲やビーム爪、防御用として零落白夜のバリアシールドの省エネが課題だろう」

その言葉にキラは頷きながら答える。

「それでも戦闘連続稼働時間は30分が限界……そうだ！アスラン、白式のウイング部分にパワーエクステンダーを装備させてみたら如何かな？イグニッションブーストや機体姿勢制御は翼の部分で補い、戦闘用のエネルギーは胸部のパワーエクステンダーで対応する方式にすれば延長は可能だよ」

そのキラの提案にアスランは頷く。

「そうだな、シャルのストライカーパックのエールを参考にすれば早くできる」

そう言うのアスランは部品とパーツを補修正し改良していく。

キラもそのOSの整備に追われる。

その様子を見ながら全員啞然とする。

何せ、改良プランを予め組んでいたセシリア、鈴、シャル、ラウラは兎も角、即興で一夏や筈のISを改良できるのだ。

驚くなと言う方が無理な相談だ。

しかし、キラ達は野戦整備や補給少ない前線での整備を行った事のある経験者だ。

部品やパーツの少ない状況からMSの調整を行わなければならない。

更に整備兵を前線に出すわけにも行かない激戦区での戦いが主であり一々前線基地に戻る暇も無い程、敵の砲火が降り注ぐ戦場だ。

その経験から野戦整備や機体のメンテは自分達で行う事が多かった。

その経験からこう言った機体のカスタマイズや調整はお手の物だった。

更に今回は費用やパーツ、部品は学園もちで豊富にある。

経費で落とせる事からキラ達は遠慮無しに高品質のモノを学園側に

要求した。

値が張る品物ばかりだったが千冬も福音撃破が最優先とし目を瞑った。

兎に角、キラ達は福音撃破に向けての下準備を着々と進める。

28話 福音は打ち鳴らされ、天帝と十字軍は戦場を見る

微調整と試運転を済ませたキラ達は出撃を開始する。

「アスラン見えた！ 福音だ！！」

キラの言葉にアスランは頷きながら全員に指示を出す。

「各機！ アタックフォーメーション！ ラウラ！ アハトアハト！
サーモバリック」

「了解！」

その命令と共にラウラはアハトアハトを構える。

「撃て！！」

その指示と共にアハトアハトの砲身から黄色い稲妻が吐き出される。

音速を超える弾頭が福音の張った防御結界に接触。

数秒、拮抗状態が保たれるが、弾頭はドリルの様に回転しバリアを貫通、福音に着弾した。

バリア内で固体から気体への爆発的な相変化が引き起こされ分子間の歪みによる爆発が発生する。

そしてバリア内の空気中の酸素と爆熱による爆発が起こる。

バリアはガラス片の様に粉々になりながら霧散した。

ラウラは驚きながらも何故、アスランがサーモバリック弾を選択したか理解した。

（サーモバリックはアセチレンのように、酸素が無くても自己分解のエネルギーだけでも爆発する物質を生成する。酸素が限定されるバリア内の燃料リッチの状態でも爆発することが出来るから……バリアやシールド内の様な空気の量が限られている密閉空間内でも爆発させ相手にダメージを与える為に……）

この想像に至り、ラウラはアスランに対して寒気を覚えた。

ラウラとて軍人であるから知識としてサーモバリックの有効性を理解しているが実戦でソレを理解して実戦するアスランに恐怖すら感じる。

（アスラン……お前は一体、どれ程実戦を経験してるんだ……？）

そう思った時、爆煙から福音が猛スピードで飛び出てくる。

所々黒ずみ、爆発による損傷も見受けられる。

効果ありと見たアスランはラウラとセシリアに指示を出した。

「ラウラ！ 弾頭をキャニスター弾のHESHに設定！ セシリア、レールガンの弾丸を散弾に設定して福音に砲撃、10秒！」

その指示にラウラとセシリアがアハトアハトとスターライトmk？

を構えながら答える。

「了解！」

「了解ですわ！」

ラウラとセシリアはトリガーを引きつ放しする。

黄色い雷光がアハトアハトとスターライトmk?の銃口から吐き出される。

アスランの戦術は至極簡単、動きの速い福音にダメージを与えるには砲撃による点での攻撃ではなく散弾や爆発物の様な面での攻撃にシフトした。

低空飛行で逃げる福音に無数の散弾が降り注ぐ。

堪りかねた福音が上空へ逃げ回避するが、其処にはシャルと鈴が待ち構えていた。

「逃がさない!!」

シャルはそう叫びながらラビットスイッチでランチャーストライカーを展開し、両手にビームショットガンと両腰のレール砲を展開した。

シャルはケルベロスを拡散ビームモードに変換、腰部レール砲も散弾モードに変換し発砲する。

無数の散弾がシャワーの様に福音の正面に降り注ぎ福音は更に上空に逃げる。

「逃がさないってんのよ!!」

鈴はそう叫びながら龍咆を散弾モードに変換し撃ち込む。

水も漏らさぬ十字砲火を浴びせられた福音は空いているスペースへと必然的に逃げるしかなくなる。

勿論、アスランとキラがそんなルートを見逃す訳も無く、其処には一夏と箒が待ち構えていた。

「もう、油断はせぬ!! 福音! 覚悟!!」

そう言いながら箒が懷に飛び込み雨月と空裂をクロスさせるがソレを倒立反転してかわす福音。

だが、その決定的な隙を一夏が逃す筈もない。

福音目掛け舞い上がる一夏。

「落ちろ!!」

そう絶叫しながら零落白夜を展開し、福音の翼を片方切り裂いた。

海面に向かって落ちる福音の翼。

その時だった、福音は放電しながら周囲の物体を吹き飛ばした。

キラとアスランはソレを見ながらこう呟く。

「セカンドシフト……」

「いよいよ本番か……」

そう言いながらアスランは部隊に命令を下す。

「各隊員に通達！ 目標は第二形態へと変貌。作戦は変わらないが速度は倍以上と考えて対応しろ！」

『了解！！』

アスランの命令に油断無く答える一夏達。

正直、作戦開始前は不安があったキラ達だったが、作戦を開始してその不安は間違いだったと認識した。

彼らとて学ぶのだ。

セカンドシフトが終わり飛び出てきた福音は超高速でバレルロールしながらシルバーを発射した。

キラとアスランは華麗に回避するが一夏達はそうはいかない。

バリアを展開し、この豪雨の様な弾幕をやり過ごす。

太平洋に浮かぶ豪華なクルーザーのデッキでくすんだ金髪をたなびかせながら、サングラスの長身の男はモニターでその様子を見ていた。

「存外苦戦しているようだな……あの二人にしては……」

もう一人の黒髪を束ねた長身の男はモニターを見ながら静かに自分の思考を述べる。

「彼奴らの実力からすればあの程度の敵を屠るのに数秒と掛かるまいに……」

そう語りながら不意に声をかける。

「彼奴らの福音撃破後、我々も出るぞスコール」

その言葉にスーツ姿の女性が声をかける。

「命令はあくまで監視だ。お前達が出撃すれば全てが終わる」

その言葉に金髪の男が鼻で笑いながらスコールと呼ばれた女性に語りかける。

「少なくとも“ガンダムタイプ”のIS2機には我等とて手を焼く。
“アレ等”君達の想像の外の実力者達だよ」

もう一人の男も同意する様に言う。

「久しぶりに“戦闘”が出来る。今までが“兎戯”で退屈が過ぎる
と言うもの」

その言葉にロングヘアーの女性が怒鳴る。

「何！？ 貴様！！」

その言葉に黒髪の男が鼻で笑いながら言う。

「ああ、遊びだ。貴様如きに本当の“戦い”が理解できる筈も無か
ろう？」

明らかに馬鹿にされたと思ったロングヘアーの女性が掴みかかろう
とした時、スーツ姿の女性が止めに入る。

「止めなさい、オータム！」

「だが！ スコール！！」

尚も掴みかかろうとするオータムと呼ばれる女性にスコールと呼ば
れる女性が言う。

「貴女では逆立ちしても彼等の片方にも勝てないわ。下がりなさい」

「クッ！！」

そう言われオータムは距離を取るが目線で黒髪の男を突き刺す。
その目線で相手を殺せる程だが男は涼しそうな顔で見送る。

スコールは黒髪の男に釘を刺す。

「余りからかわないでくれるかしら？」

男は鼻で笑いながら詫びを入れる。

「失礼した。ああいう女を見ると虐めた押したくなるのだよ」

「その趣味、直したら？」

スコールの言葉に男は笑う。

「はっはっはっは！ 生憎とこの性格は生まれつきでな直しようがない」

金髪の男は横目でスコールと男のやり取りを見ながらモニターを見て言う。

「どうやら決着が付いたみたいだな……」

黒髪の男はようやくかと言わんばかりに金髪の男に言う。

「では、行くとするかな？ “ラウ・ル・クルーゼ”？」

金髪の男も微笑みながら言う。

「ああ、では行くとするか？ “ラフト・クライシス”」

29話 白い天使と灰色の天帝、赤い騎士と黒い十字軍の戦い

箒は果敢に福音に接近戦を挑む。

「おおおおおおおおおおお！！」

気合と共に振り下ろされる太刀を何とか受け止める福音。

「一夏！！ 今だ！！」

その言葉と共にイグニッションブーストで真っ直ぐ福音に迫る一夏。

「今度は……逃がさねええええええええええ！！」

雄叫びと共に左手を突き出しビーム爪を展開、福音にアイアンクロ
ーを喰らわせる。

絶対防御を破られた福音は防ぎきる事が出来ずに一夏に押される。

「これだけ近けりゃ……箒さねえ！！」

海岸に突き刺さる福音に一夏はそう叫びながら掌底部ビーム砲をゼ
口距離で数発叩き込む。

福音は頭部を破壊されシールドエネルギーがエンプティーになり機
能を停止する。

「これで、終わりだな……」

篤は一夏の元に降り立ちながらそう呟いた。

キラとアスランはソレを見やりながら千冬に通信しようとする。

「此方……！？」

その瞬間、10時方向からビームが多数、アスランを襲う。

しかし、アスランはその悉くを回避した。

「！？ アスラン！？」

キラはアスランの身を案じ、アスランの元に移動しようとしたが、キラにも全方位からビームが浴びせられる。

これもキラは何かを感じ取り全て回避した。

（この感覚は……？）

キラは索敵範囲を最大にする。

ハイパーセンサーにIS2機の機影を確認した。

アスランは10時の方向にその機体を確認した。

ISのカメラが表示していたのは2機の“ガンダム”

アスランは目を見開き驚きを露にする。

「そんな……あの2機は……」

キラもまた、驚きはアスランと同じくらいだったろう。

「プロヴィデンス」……“クルセイダー”……？」

千冬は通信越しにキラ達が緊張しているのが見て取れた。

『オイ！！ ヤマト、ザラ！！ 何があつた！？ 報告しろ！！』

その言葉にアスランは有無を言わせぬ口調で千冬に言い放つ。

「織斑先生、全員を下がらせる！！ 早く！！」

キラもまた、余裕がない。

「この相手に……全員を無傷で守りながら戦う余裕はないです！！
早く下がらせて！！」

キラとアスランは感じ取ったのだ。

ISの装甲越しから伝わるプロヴィデンスからは冷たく凍える様な殺気と殺意を、そして、クルセイダーからは全てを焼き尽くす様な燃える様な殺気と殺意を。

一夏たちも得体の知れない恐怖に苛まれる。

あの“ガンダム”2機と目を合わせただけで自分が殺されるのではないかと言う恐怖。

そして、ただ、対峙しているだけで理解する相手と自分達との絶対的な実力差。

例えるなら獅子と野鼠の差。

絶対的強者と絶対的弱者の差。

天地引っくり返っても届かない圧倒的な武力。

絶対的戦力差の敵と対峙した事の無い一夏達にとっては正に未知の恐怖だった。

自然と全員が同じ思考と結論に至る。

“アレ”は異様で異常で異型で異端だ。

勝てる訳が無い。

あの2機と戦う事、それ自体が敗因であり死因だ。

出来れば会いたく無かった。

今すぐ逃げてしまいたい。

でも、足が震えて動かない。

正に最悪だ。

その時、アスランの声が全員の耳に入る。

「各隊員に通達。全員撤退しろ。後ろを振り返らず。全力全開で……」

アスランの声音が緊張に支配されている事に気づく一夏達。

そして、理解した。

あの2人が危機感を露にする相手、アレがその“ガンダム”なのだと。

「了解……」

その命令にラウラが答える。

「な！？ ラウラ！？」

一夏が何か言おうとしたがラウラの言葉がソレを遮る。

「正直に、包み隠さず言う。あの2機にとって、我々は障害になり得ない。あの2機からすれば、アスランやキラ以外は道端の小石程度の認識だ。悔しいが、ここにいってもアスラン達の邪魔になるだけだ」

あの自分の実力に誇りを持っているラウラがそう言ったことに一夏達は驚きを露にした。

それ程なのだ、あの2機は。

その時だった、クルセイダーがイグニッションブーストを展開、日本刀型ビームサーベルを抜き放ち斬りかかる。

「クツ！ 問答無用か！？」

アスランもまた神速の居合い抜きでビームサーベルを引き抜き、鎧迫り合いを演じる。

クルセイダーは日本刀型ビームサーベルを翻し、また、超高速での袈裟懸けをアスランに浴びせるが、アスランは逆袈裟で対処した。

それだけでなくクルセイダーは次々と必殺にして致死量の斬撃をアスランに浴びせ掛けるがアスランも神懸りのな技量でそのことごとくを捌ききる。

（馬鹿な！？ そんな筈は！？ あの男は俺が殺した筈だ！！ 試してみるか……）

そう思いながらアスランはハイパーフォルティスを撃ち込む。

しかし、クルセイダーは最小限の回避で全てをかわした。

アスランは一旦距離を取ると、シュペールラケルタをアンビデクストラスハルバードにした。

その時だった、クルセイダーは右側のビーム刀のグリップを引き抜き桃色のビームを閃かせ、構えた。

右のビーム刀を突き出し、左のビーム刀を弓を引く様に胸元に構える。

その構えを見てアスランは確信を持った。

（間違い無い……奴だ！ ラフト・クライシスだ！ あの構え、この殺気、そして……クルセイダー……だが、何故だ！？ 死んだ男が何故！？ あの男は俺が確実に殺した筈だ！！）

アスランは真意を確かめる為、突撃を開始する。

イグニッションブーストを展開し、更に機体の駆動形にもイグニッションブーストを展開、極超音速の斬撃がクルセイダーを襲った。

しかし、クルセイダーも同じようにイグニッションブーストを展開、更に駆動系にもイグニッションブーストを展開して見せた。

（解っちゃいたけど、手強い！）

アスランは毒づきながらもビームサーベルを振るった。

キラとプロヴィデンスも苛烈な戦闘を繰り広げていた。

「クッ！！」

キラは吐き捨てる様にドラグーンをパージしながらフリーダムをイグニッションブースト機動で動かす。

更にキラはドラグーン自体にもイグニッションブーストを展開させ、極超音速で運用した。

しかし、プロヴィデンスもキラと同じ事をやってのけたのだ。

キラのドラグーンが先手をとる形で起動したが後手に回ったプロヴィデンスも負けてはいない。

相手の制空権を掌握すべく激しくも計算された動きで敵の陣地を脅かしに掛かる。

キラもプロヴィデンスも極超高速で動き回り時には防御する。

しかし、キラはフルバーストを封じられている。

フルバーストの活かせるのは広域殲滅が基本、1対多数においてその優位性を証明できる。

しかし、武装も集中力も十全な敵には簡単にかわされる。

（間違いない……彼だ、ラウ・ル・クルーゼだ……あのドラグーンの運び、相手の嫌がるドラグーン運びは彼だ。なら、下手な隙は命取りだ……）

キラは今度は違う疑問に至る。

（何で2世代落ちの機体でストライクフリーダムと対等の戦闘が可能なんだろう？）

と。

一夏達はその戦いを遠目で見ていた。

正直、介入できる隙が無い。

ラウラの言葉が図らずも実証された形の格好だ。

不意にセシリアが呟いた。

「何て戦いなんです……高度過ぎて理解できませんわ……」

当たり前だ。一夏達の動体視力ではアスランとクルセイダーの戦いは光のラインがぶつかり、放電している姿しか確認できない。

更に、キラとプロヴィデンスの戦いは無数の光の筋が大本の光の筋の周りを飛び交い、大本の光を消そうとしているだけに見える。

正直、理解の範疇の外の出来事だ。

千冬達もモニター越しにその様子を見ていたが辛うじて千冬だけが目視で追いかける事が出来た。

「そんな……目で認識できない……」

真耶とて代表候補生としての経験を持つ兵^{つわもの}、しかし、その真耶をしてこの動きは理解の外だ。

千冬はこの様子を見ながら思う。

（何て速さだ……機体の機動性だけじゃない。間接駆動系や神経ネットワークの処理速度までもが極超音速で動かす事が可能とは……

最早、アレはISの動きを超えている。あの4機は競技目的でなく“敵”を確実に殲滅する為に存在する“兵器”だ)

不意に千冬は口ずさむ。

「ヤマトもザラも達人の域だ。ザラの戦いは一見、獣同士が噛み合っている様に見えるが自身は超高速での自分と相手の動きを認識し、如何にして相手の次の手を封じ確実に自分の剣筋を活かすかと言う事に重きを置いている。対してキラの戦いは正に論理的な戦いだ。例えるなら、チェスや将棋と囲碁を組み合わせて三次元にした様な戦い方をする。ドラグーンと言う万能の駒を動かし、相手の陣地を如何にして犠牲少なく占領できるかと言う戦いだ」

真耶は黙ってその呟きを聞くことしか出来なかった。

クルーゼは頃合かと思い、秘匿回線でクライシスに通信を繋げた。

「ラフト、頃合だ。引くぞ」

その言葉にクライシスはヤレヤレと言いたげに通信に答える。

「威力偵察は終了か？ もう少し死合えると思ったのだがな。まあ、情報は得た。良いだろう。死合うのはまたの機会にと言う事か」

クルーゼは微笑みながらクライシスに問いかける。

「どうだった？ 彼等は？」

その問いに実に愉快そうに答えるクライシス。

「ああ、以前よりは甘さがあるが実力は変わらん。シャバ気が抜ければ楽しい戦いが出来そうだ」

その問いかけにクルーゼも頷く。

「その意見には同意する。彼等からは戦場にいる兵の気迫が余り無かった。まあ、学生をしている影響だろう。引くぞ」

「承知」

そう言うところクライシスはビーム刀を両腰に納め、クルーゼはドラグーンを元の位置に戻し、銃口を逸らした。

そして、2人は反転するとイグニッションブースト機動で撤退する。

キラ達はソレを見送る形となった。

「撤退した？ いや……撤退してくれたと言うべきか……」

アスランの言葉にキラも頷く。

「威力偵察が目的だったみたいだね……ム力つく位、鮮やかな引き際だよ」

キラ達は一夏達に撤収命令を下しその場を後にした。

戦場だった場所は朝日に照らされ、何事も無かったかの様な静けさ

が
残
っ
た。

事後処理を終えて、断崖まで歩く千冬。

断崖の先には束が座りながら今回の映像を見ていた。

「しかし、白式には驚いたな〜でも、一番の驚きは4機のガンダムかな〜」

そう独り言を呟くように千冬に語りかける束。

尚も独白は続く。

「異世界からの住人にして異世界の兵器、モビルスーツ、通称MS、約18から20メートル平均のロボット。宇宙、地上、空、水中を問わずありとあらゆる場所での戦いが可能な事かな……更に異世界での人類は宇宙にスペースコロニーやプラントなんて言う宇宙に住居空間を作ってる。ちーちゃんからソレを聞いたときは、『頭可笑しくなった?』って聞きたくなったよ」

ソレを聞いた千冬はその言葉に気分を害した訳でもなく普通に質問をした。

「彼等と会ってみての結果は?」

その問いかけに夜空を見上げながら束は呟く。

「肌で実感できたかな……この世界の人類とは違うモノの見方をし

てるのかな。私達が当たり前と見過ごす所を、あいつ等、まるで大切なモノを見るように見る時があったよ。ちーちゃんもそう感じない？ あいつ等と今まで付き合ってみて」

千冬は考える。

キラやアスランがクラスの連中や一夏達を遠目に見ながら何処か懐かしむ様な悲しい目をしている所を。

一夏達に訓練を施す時、眉間に皺を寄せて何かを祈る様に、ソレを表に出さずに教えていた。

「確かに、達観はしているな……年齢は19歳と聞いているが、19歳であの目が出る人間はそうはいない」

その言葉に束は予言を口ずさむ。

「何か……この世界に別の強い“何か”が介入してるみたいだね……近く、何かが、途轍もない何かが起こる気がする……」

その言葉に千冬は聞き返す。

「何か？ とは？」

その言葉に月を見上げながら束は言う。

「解らない」

と。

不意に束は問いかける。

「ちーちゃん」

「何だ？」

束は以前、月を見上げながら千冬に問いかける。

その姿は何かを求めるように、また、何かを否定するように。

「この世界は楽しい？」

その問いかけに千冬は目を瞑りながら答える。

まるで自分の言葉をかみ締めるように

「まあ、ソコソコ、な」

「そっか……」

その言葉と共に束は断崖から消え失せた。

千冬は目を見開くと其処には冷たい月明かりに照らされた断崖の先だけだった。

千冬はため息を吐くと心の中で呟いた。

——自分から世界を否定しても面白く無かるつに——

と。

クルーゼとクライシスはクルーザーに舞い戻り、自分に宛がわれた部屋にそれぞれ帰る。

クルーゼはサングラスを机の上に置き、皮製の椅子に座ると深々とため息を吐く。

「お前らしくないな、ラウ。何時もの余裕は何処へやった？」

その突然の問い掛けにクルーゼは鼻で笑いながら自嘲気味に語る。

「私とて超人でもなければ全知全能でも、ましてや神でもない。ソレは私自身がよく理解している事だよ、『エム』。いや、『織斑マドカ』と言うべきかな？」

その問い掛けにエム、織斑 マドカと呼ばれた少女はクルーゼを睨み付けた。

「私を、『織斑 マドカ』と呼ぶな」

その言葉にクルーゼは愉快そうに笑う。

「クツクツク……ソレは失礼した。エム。だが、その気持ち、解らぬでもない。君は織斑 千冬の……」

クルーゼがその先を言おうとした時だった。

クルーゼの目の前にスターブレイカーの銃口が突きつけられる。

「それ以上言うな、殺すぞ」

絶対零度の目線でクルーゼを突き刺しながらスターブレイカーの銃口を向けるエム。

しかし、クルーゼは涼しそうに立ち上がりながら言い放つ。

「君ではどんなに頑張った所で私に傷一つつけられはせんよ。ミューゼルにすら勝てぬではな。何なら、3人がかりで挑んできたまえ。或いは、この身に届くやもしれんぞ？ まあ、最も、確率は1京分の1だろうがな」

そう言いわれ、エムは悔しそうに武装解除した。

事実、クルーゼが亡国機業ファントム・タスクに入る時、揉めたのだ。

その時、彼を倒す為、派遣されたのが、スコールを隊長とするエム、オータムの小隊で挑んだが、モノの1秒半で撃破されてしまうと言う結果をたたき出し、クルーゼは幹部会から実働部隊の隊長の一人として認識される様になる。

事実、アツサリ武装解除され、何故、殺さなかったかと言う事を問い質した3人はクルーゼにこう言われた。

『強者の慈悲だ。有難く矜持したまえ』

と。

クライシスは今回の事を思い返しながら低く笑う。

その姿に報告をしに来たスコールは不気味そうに問う。

「思い出し笑い？ 正直、不気味よ？」

その言葉にクライシスは笑いを堪えながら言う。

「いやはや、久しぶりに血湧き肉踊る戦いだった。まあ、相手が完全ではなかったし此方も威力偵察が目的であつたから不完全燃焼の感否めんが」

スコールは先の戦いを思い出し嫌になりながら言う。

「あれで？」

その問い掛けに勿論と言いたげに答える。

「理解したであろう？ 我等、“戦人”^{いくやびと}と貴公等、“童”^{わっぱ}との違いが如何なる存在か？」

スコールはクライシスの言葉に内心キレそうになる。
自分とてプロの端くれ、ソレを童と称されては堪らない。

だが、この目の前にいる侍かぶれは自分達より軍人であり戦士であり本物の戦場を知る現人鬼あらひとおにであり死人しびと。

人でありながら人を捨てた人間バケモノ。

クルーゼも同じ事を言っていた。

冷静に戦場を把握し、戦略を構築し、戦術を想像し、目的達成の為にならば文字通り手段を選ばない人間。

自分達以上に冷酷で非情で、徹底したりアリズムを重んじるプロフェッショナル。

それでありながらこの男達の目はどす黒く、地獄の業火に似た輝きを放っている。

自分の経験からこの2人の様な男と出会った事は無い。

正直、スコールからすれば異端な男達なのだろう。

「例の件は処理したのか？」

突然の問い掛けにスコールは答える。

「ええ、貴方達の事は上がもみ消したわ。だから貴方達の事は表に出ない」

「それは上々の至りだ」

キラとアスランは今回のガンダム襲撃にさいし、ラウ・ル・クルーゼとラフト・クライシスを指名手配すべく、インターポールに働きかけた。

「駄目だ、何処も取り合わない……福音の事は関心事なのにガンダムタイプ2機については全く感心を示さない」

アスランのその言葉にキラは各国のコンピューターをハッキングして調べたがガンダムタイプのことについての記録は抹消されていた事に気分を重くした。

「コッチも駄目だね。データが完全に消されている。IS管理委員会刑事部は元より、アメリカはFBI、CIA、NSA、DIA全ての機関からの情報が消えている。各国にも当たってみたけどロシアのFSB、GRUにもイギリスのSISやDISにも無かった。日本の内調や公安調査庁、国際情報統括官組織や情報本部にもデータは無かった」

その言葉にアスランは天を仰いだ。

「痛いな、先手を取られた……情報戦で先手を取られるのは不味い。少なくとも此方は手札を数枚オープンにしている」

アスランのばやきにキラは自分の考えを述べた。

「アスラン、敵はクルーゼとクライシスだ。2人を相手に形振り構

ってられないよ」

その言葉にアスランも頷く。

「解っている。何を企むにしても此方も準備をしておきたい。計画を徐々に早めるか」

その言葉にキラはため息を吐く。

「ヤッパリ、こうなったか……『信念』の創造と『エインヘルヤル』の体現と『熾天使』の降臨を急がないと」

「『エインヘルヤル』は？」

その言葉にキラはため息を吐きながら答えた。

「何とか1つ。今の資金力じゃあどうしようもないよ。それに篠ノ之 束が作った『ワルキューレ』とは別物だから手間取る」

その言葉に道のりは遠そうだとアスランは思った。

「幾らジャステイスやフリーダムのコアのデータを参考にしていると
は言っても時間が掛かるか……」

キラ達は夜空を見上げながら今後の展望が見えない事に不安を抱くのだった。

31話 過去と決意とお茶のお誘いと（前書き）

今回の新章から題名をつけてみます。

31話 過去と決意とお茶のお誘いと

キラ達は臨海学校から戻った後、何だかギスギスしていた。

正確にはキラ、アスランと一夏達だ。

一夏達はあのガンダム2機の事を聞いたがキラとアスランは冷たく突っぱねたからだ。

何時もは仲良く昼食を取っている一夏達だったがここ最近、キラ達とは食事を取っていない。

一夏やシャル、ラウラが誘っても忙しいからと突っぱねる。

屋上で一夏達は今回の事件について話し合った。

「正直、キラとアスラン如何しちゃったんだろ」

シャルは寂しそうに呟く。

「明らかに私達に隠し事があるのは明らかだ」

ラウラもアスランに会えずため息を漏らしながら呟く。

一夏は先の事件のキラ達の様子を思い出しながら呟く。

「最近、キラ達、何か思いつめてないか？ あの二人があんな顔す

るなんてよっぽどだぞ?」

篤もまた一夏の言葉に同意した。

「ああ、正直異常だ。あの2人があそこまで思いつめるのは」

セシリアや鈴も頷く。

「ええ、キラさんもアスランさんも正直、カリカリしてますわね……」

「何か……近づき辛い感じを放ってるわね……」

一夏達は暗鬱たる思いで昼食を取った。

その頃、キラ達は学園裏庭で話し合っていた。

「正直、僕は反対だ。一夏達を巻き込むのは」

しかし、アスランはキラに言い放った。

「悪いが、あの二人が、俺達だけを標的にする筈がない。一夏達も確実に巻き込まれる。なら、俺達は話す義務と巻き込んだ責任がある。なら、話すべきだ。俺達の過去も含めた、包み隠さず全てを」

「でも!?!」

キラの言葉にアスランは言う。

「何を迷っているんだ？ キラ？ 悪いが個人的悩みならこの場で切り捨てる。正直、俺達は追い込まれてる。ソレは理解しているよな？」

その問い掛けにキラは力無く頷く。

「迷っているのか自分の出生を語るかを？」

その問い掛けにキラはまたもや頷く。

「クルーゼが現れた以上、お前の事は話さなければならない。無論、俺の父の事も俺とクライシスの事も全て……過去は切り離せないんだ、キラ。どんなに頑張っても過去からは逃げられない。ソレが自分の意思とは無関係に起こった過去の出来事でもな」

その言葉にキラは晴れ渡る雲一つ無い青空を仰ぎながら呟いた。

「……だからこそ、人は、明日を夢見て今日を一生懸命生きる、か……ゴメン、アスラン……僕は逃げていたよ……いや、見なかった、見ようとしなかった。考えないようにしようとしていた。クライシスから言われた通りだ。『自分の行動を振り返り見る。正しさを振りかざし、自分の想いだけを相手に押し付けるな』と言われた。結局、僕は、僕の想いを一夏達に押し付けて納得させてただけなのかもしれない……」

そう言うときラはアスランに向き直り、自分の決意を明かす。

「いいよ、アスラン。僕も覚悟を決めた。もう、迷わない。全てを、僕達の全てを明かそう」

キラとアスランは千冬に全てを明かす為、職員室に入室した。

「織斑先生、例の書類です」

そう言いながらアスランは千冬に作成した事件のレポートを提出した。

「ご苦労」

そう言うつとふとキラ達の顔を見ながら言う。

「私に何か言いたそうだな？ その顔から察するに、あの2機のガンダムに関する事か？」

その問い掛けにキラとアスランは頷く。

「解った。場所を変えよう」

そう言うつと千冬は椅子から立ち上がり場所を移した。

キラとアスランは自分の過去を包み隠さず話すと千冬は天井を仰いだ。

「……成る程な……お前等があいつ等に喋る事を躊躇った訳だ……」
そう言い、長い話ですっかり温くなった茶を啜りながら言葉を続ける。

「正直、ガキ共に聞かせるには重苦しい内容だ。だが、今後の予想がお前達の思う通りなら何かあるだろうな……特に一夏には……更にあの馬鹿が絡んでくる可能性がある以上、益々混乱は予測できるか……」

その言葉にアスランは千冬に問う。

「正式にお伺いします。学園襲撃事件、福音の暴走は篠ノ之 束の仕業で間違いありませんね？」

その問い掛けに千冬はソファから立ち上がり、窓際まで移動しながら言う。

「そう思う根拠は？」

その問い掛けに、キラは理由を述べる。

「学園を襲撃したISはノーナンバーのコアだった事、更に制御OSが学園を襲撃した無人ISと大本が一致しています。コアを作り出せるのは篠ノ之 束以外に作成は不可能ですから」

その言葉に納得した千冬は違う質問をした。

「ではガンダム襲撃事件は？」

その言葉にアスランが答える。

「あの2機のガンダムはクルーゼとクライシスが送り込んだものと思います」

「その根拠は？」

その言葉に千冬は根拠を問いかける。

「使われていたパーツが無人IS襲撃事件に使われていたパーツと違う点でしょうか。機体製作者は意図せずして自分の“痕跡”を残します。その痕跡から製作者は篠ノ之博士と全く違う痕跡があります。更に言えばあのコアユニットはフリーダムやジャスティスに使われていたコアユニットに似ています。多分、あの2人は自分達の機体のコアユニットを解析し、劣化版を作成したものと推測します」

アスランの言葉を繋ぐ様にキラも追加する。

「更に言えばAIのプログラムも違いが顕著に出ていました。ガンダムやザクに積まれていたAIは僕達の世界のAIに類似していたんです」

その言葉に納得した千冬はキラ達にこう言う。

「解った。話す時は私と山田先生を同伴させる事を条件とする。話す時は私がいっつ等を集める。異存？」

その問い掛けにキラとアスランは、首を横に振った。

「よろしい、ならば、今日は解散だ」

そう言うと、キラとアスランは応接室から退室した。

ソレを見送った千冬は一人呟く。

「束の……言った通りになりつつあるな……私も覚悟を決めるか」

キラとアスランが廊下を歩いている気配に気づく。

キラは首元に手をやり、襟元を調える。

アスランは腕時計を見る。

不意にキラはアスランに話しかける。

「アスラン、僕、用事があるから行くね」

「ああ、また教室で」

そう言うときらは左側にアスランは右側に別れる。

2人は気配を完全に消し、左懐からサプレッサーを装着したSIG
Sauer P226レールフレームを抜く。

アスランは左手に銃を構え直す。

銃口を下に下げるキラ達。

アスランはハンドサインでキラに指示を出す。

キラも左親指を立て、了解のサインを出す。

アスランが三本指を徐々に折り曲げていく。

キラも緊張しながらソレを待つ。

そしてアスランが親指以外の指を立て上から下に振り下ろすと、キラとアスランは壁を盾にして銃を突き出した。

「動くな！ 両手は頭の後ろだ！」

その瞬間、空を切り裂く音が聞こえ、キラ達は身を壁に隠した。

コンクリートの壁に鋭い金属が突き刺さる音を耳にしながらアスランはキラに呼びかける。

「カバー！」

そう言うときアスランは壁から飛び出しながらナイフを引き抜き、全速力で駆け抜ける。

敵と思われる人物は刃物をアスランに投擲しようとしたが足元の床が爆ぜる。

追跡者はキラの方に目をやると、キラは今度は追跡者の手元にある投擲用の刃物を狙い撃つ。

刃物は弾かれ床に数本ばら撒かれる。

床と金属が不愉快な旋律を奏でると同時にアスランは逆手に持ったナイフを追跡者の首に突きつけるが、追跡者は突きつけようとするナイフの刃をかわす様にバク転をしながら足を突き出し、アスランの顔面を蹴ろうとした。

アスランはソレを難無くかわし、一旦後ろへ下がる。

追跡者は学園の制服のスカートを翻しながら華麗に着地を決める。

アスランは銃を構え直し、追跡者に銃口を向ける。

追跡者は行き成りプウ垂れながら文句を言う。

特徴的な水色の髪をショートヘアにした2年生のリボンをした女性が目立っていた。

「も〜！ 女の子に銃を向けて撃つなんて何考えてるのかな〜」

アスランはそれに動じる事無く銃口を突きつけたまま言い返す。

「何が目的だ？ 俺達を尾行する目的は？」

その有無を言わせぬ言葉に女性はため息を吐きながら言う。

「もー、冗談も通じないのかなーまあ、いいか、名前は更識 楯無、2年生で生徒会長よ」

キラ達はその名に心当たりがあるらしく思い出すようにアスランが問いかける。

「更識と言えば……日本政府お抱えの対暗部を専門とする更識家が……更に楯無と言えば代々当主につけられる名だな」

その言葉に楯無は驚きの声を上げる。

「あらまー情報通ですこと。いかにも、更識家17代目当主、更識 楯無よ」

アスランは銃を銃口を突き付けたまま話す。

「その更識家が何の用だ？ 悪いが俺達は日本政府に危害を加える心算は無いが？」

その言葉に楯無は笑いながら言う。

「ソレが信用出来る程、国家は甘くないのよねーまあ、今回は様子見かなー。2人がどれ位の實力か確かめる為に、ね」

ウインクをしながら楯無は後ろを向く。

「立ち話も何だし、お茶しない？ それとも、こんな美人さんのお誘いを断るなんて勿体無い事する気？」

その言葉にキラは銃を懷に仕舞いこう言った。

「逆ナンするならもう少し可愛らしいやり方で誘う事をお勧めします」

アスランもまた、銃を仕舞い、こう言う。

「だが、まあ、丁度良い。喉が渴いていた所だったんだ。お誘いに乗るとしよう」

楯無は苦笑しながらキラ達の前を歩いた。

32話 密談と密約のお茶会

キラとアスランは楯無の後に続いて歩く。

暫く歩いた時、楯無はある部屋の前で止まる。

其処の教室の札には『生徒会室』と記されていた。

楯無は引き戸を開いてキラ達を案内した。

「さあ、ここが生徒会室。入って、入って」

そつ楯無に諭されるまま、キラ達は生徒会室に足を踏み入れる。

「あゝ！ キラりんのアスにゃんだゝ！ やっほゝさっきぶりゝ」

何と其処にいたのは同じクラスの布仏 本音だった。

「のほほんちゃん！？」

「本音か！？」

キラとアスランは心底驚いた様にのほほんの名を呼ぶ。

「どうやら自己紹介はいらないみたいinne？ 布仏 本音。彼女も生徒会のメンバーよ」

のほほんをそう紹介した時だった。

ドアをノックする音が室内に響き渡る。

「遅くなりましたお嬢様。あら？ そちらの方々は？」

メガネの女性が入室し、楯無をお嬢様と呼びながらキラ達の事を楯無に問いかけた。

「ああ、『IS学園の白い天使』と『IS学園の赤い騎士』と言えば解るかしら？ 後、お嬢様は止めて」

「すみません、つい癖で。彼らがですか？」

その楯無の言葉にお嬢様と言った事を詫びながらキラ達をマジマジと見る。

「あの、貴女は？」

戸惑うアスランが質問する。

メガネの女性は、あ、と言いつつ自己紹介をした。

「失礼いたしました。私は布仏 虚といいます。妹共々、会長に御仕えしております」

キラは楯無に聞きなれない言葉を質問した。

「あの……更識さん、『IS学園の白い天使』と『IS学園の赤い騎士』って？」

そのキラの質問に楯無は悪戯っ子が笑うように笑いながらその言葉の説明をする。

「ああ、上級生、2、3年生の間で君達の事をそう呼んでるの。君達の使うISからそう呼ばれてるわね。まあ、3人しかいない男で、しかもカッコよくて、強くって優しいとくれば女の子には人気出るわ」

そう、キラとアスランはどちらかと言えば同学年より上級生に人気があった。

以前、千冬の依頼で打鉄やラファールリバイブのカスタマイズを行った経緯があり、その時に上級生に講義説明を行ったのだ。

その時、キラやアスランの細やかで丁寧で紳士的な態度に上級生達は一昔前の映画に出てくる紳士をキラ達に見たのだ。

自分達より年下なのに自分達より大人で紳士で優しく強くカッコいい。

上級生の大半のハートを鷲掴みしたのは自然な反応だろう。

キラ達といえばそんな事、露知らず普通に接していただけに余り自分達がモテるという実感が無かった。

「更に、隠し撮りした生写真が裏で高値で取引されてますね」

虚の発言にキラ達は内心、頭を抱えそうになった。

これではまるでアイドルではないか。

大丈夫なのか？ この学園。

上級生達は恋人がいないのか？

などの心配をしてしまうキラ達。

そんなキラ達の心配を知ってか知らずか楯無は虚が出したお茶を可愛く啜りながらキラ達に招いた真意を話す。

「まあ、此方の用件をチャッチャと言うね」

そう言いながら楯無はキラ達の前にそれぞれ1枚ずつ紙を差し出す。

キラとアスランはその紙を手に取り書かれている内容を読み始める。

一通り読み終わったキラは呟く。

「これは……」

楯無はにこやかだがその目は何時に無く真剣にキラ達を見据えた。

「そ、契約書、日本政府の。内容は『日本政府に敵対行動を取らない事、出来る限り日本政府のIS開発に協力する事、日本国の危機が迫った場合、即座に脅威の排除する事ね。その見返りは、『日本政府はキラ・ヤマト、アスラン・ザラの日本国内での超法的行動の自由と一佐相当の陸海空自衛隊権限を与える』って言う事を公文書による確約』よ」

そう言いながら日本政府発行の公文書2枚を差し出す楯無。

ソレを手に取りキラとアスランはソレを読む。

「確かに……日本政府の印鑑と日本国総理大臣の押印が成されてる……」

ソレを読み終えたアスランは公文書を机に置きながら言う。

「まさか、日本政府がここまで思い切った事するなんて……」

キラは呆れながらも驚くように言う。
それもそうだ。

公文書という、明確な文書にして保障してしまつては反故にはできない。そんな事をすれば、日本国の名誉に傷がつくだけでなく、その権威と権力体制に亀裂を生み信用問題にまで発展する。

もしこれを反故にできるようになったとすれば、それは組織として末期に突入した時だろう。

公的機関にとって、これはそれだけ重い意味を持っている。

「そ、君達は日本政府にとって正に危険人物であると同時に宝になる。今の内に唾をつけたくなるのも人つてもんでしょ？」

楯無は苦笑しながらそう言う。

キラは質問をする。

「貴女の立ち位置は？」

その言葉に楯無は苦笑しながら言う。

「私の立ち位置はあくまで日本政府のメッセンジャーであり、日本政府と貴方達の交渉窓口よ」

その楯無の言葉にアスランも問いかける。

「あくまで中立か？　ここで明言して貰わなければ俺達とて交渉の運びや落とし所が解らない。更に、貴女はロシア代表だ。ロシア政府は何処まで関与している？　IS委員会はこの事を把握しているのか？　もし、把握しているなら日本政府の信用に傷が付くが？」

その言葉に楯無は明確に答えた。

「この依頼は日本政府が“更識家”に依頼した事、私、更識　楯無“個人”に依頼した事じゃないわ。それに委員会はこの事を知らない。後は国家が裏工作で委員会に働きかける事になっている」

その言葉にキラ達は“一応”信じる事にした。
何せ相手は公文書まで持ち出している。

つまりカードを見える形でオープンにしたのだ。
一定の信頼は出来る。

キラ達は自分達の考えを纏める為、保留とした。

「正直、話がでか過ぎる。考える時間を頂きたい」

アスランの提案に楯無は納得する様に言う。

「まあ、妥当でしょうね。解ったわ。期限は学園卒業までに決めておいて」

その言葉に内心、期間を長く置いている事に考える。

この期間で楯無が如何勧誘してくるのかを見極める事にした。

キラ達が生徒会室から退出した時、楯無は椅子に深々と座りながらため息を吐く。

「は~~~~~~~~全く……あの子達、滅茶苦茶手馴れてるじゃない」

その言葉に虚はお茶を差し出しながら楯無に問いかけた。

「会長、彼等は乗るでしょうか？」

その問い掛けに楯無は苦笑した。

「まあ、一定の信用は得られたわね。でも一定、あくまで此方に深入りをせず客観的に見ていたわ……正直、手に余るわ」

そう言いながら窓を見やる楯無だった。

キラとアスランは廊下を歩きながら今回の密談について話していた。

「アスラン今回の更識さんの話、如何思う？」

その質問にアスランは考えながら言う。

「正直、日本政府の真意が読めない。探る必要はあるな……」

キラも考えながら言う。

「そうだね。でも、逆にこれはチャンスかもしれない」

その言葉にアスランは頷きながら答える。

「ああ、計画を実行するにしても俺達は個人だ。組織的なバックアップは無い。なら、日本政府を利用するのも一つの手か……」

キラもその意見に頷く。

「あくまでこれは幾つもある手の内の一つだから何とも言えないね」
そう言いながらキラ達は放課後の廊下を歩くのだった。

33話 過去の始まり

キラとアスランは休みを利用してパソコンの前で日本を含む、各国の動きをつぶさに見つめた。

今回の日本の動きにキラ達は各国の状況が気になり、調べていった。

「アメリカは僕達にIS開発と選手になる事を条件に陸海空海兵の大佐相当の権利と米ドルでの預金口座を用意するそうだよ」

キラの言葉にアスランはロシアの状況を説明する。

「更識は何も言わなかったが、ロシアも更識をメッセンジャーにして交渉を依頼するそうだ」

キラは今度はフランスのファイルを見る。

「フランスは僕達にデュノア社の幹部の椅子を用意しているみたい……」

アスランは呆れながらドイツのファイルを開きながらボヤク。

「ドイツは准将の椅子を用意しているとか……」

2人とも呆れの境地に至っていた。

更に2人を呆れさせたのはIS委員会の態度だった。

その態度に怒りを通り越して呆れたのだ。

「……ふざけるなよ……」

アスランは怒りを通り越してソレしか言えなかった。

キラも憤りを隠せない。

「『今回の事に対し、IS管理委員会は一切の関与をしない』か……それでよく国際管理機関を名乗れるな……」

国際機関とは各国の思惑や利害を調整して“落とし所”を提示し、各国の足並みを揃えさせなければならないと言う責務がある。

更に言えば委員会は話し合いの場を提示し、ソレを国際法に則った管理運営を行う責務がある。

純然なる組織の運用はモラルと冷静な思考が必要不可欠なのだが、ソレを放棄している。

各国の動きを把握していながら、何もしない。

対応は後手後手に回る。

キラ達はIS委員会に早くも憤りを感じた。

事無かれ主義と官僚主義が蔓延している証拠だ。

更に言うなら福音事件も、幾ら専用機持ちとは言えIS学園の学生にソレを押し付けている。

この事でアメリカとイスラエルのIS関連企業の株価は軒並み暴落、対応をIS学園に一任したアメリカとイスラエルの軍は信用を失墜させた。

幾ら束が犯人とは言え、海上封鎖さえIS学園に押し付けたのは不味いと言わざるをえない。

幾らコアに限りがあるとは言え、アメリカはコア保有数で言えば日本に次いで第2位だ。

第二世代型でも世界第2位の筈なのにアメリカは動かなかった。

IS管理委員会も何を考えて、プロのアメリカ軍に待機を命じ、素人で実戦経験が無い一夏達にソレを押し付けたか、キラ達には理解に苦しむ。

キラ達の世界に置き換えるなら訓練校入りたての訓練兵にMSを乗せ、実戦出撃をさせる様な所業だ。

早い話があり得ない。

幾ら国際法上、ISを兵器として運用してはいけないと言う法があるにしても緊急非常事態に何もしない、させないでは話にならない。

この事からもキラ達はIS管理委員会を張子の虎と見做している。

まあ、各国の思惑で作られた委員会に其処までの拘束力は無いと言

えばソレまでだが、体裁の為に組織を作ると言う無駄な事をキラ達は嫌った。

組織とは本来作られた役割があるからこそ、その存在理由を許されているのだから。

土曜の夜、キラとアスランはキラの工房の応接室で一夏達を待っていた。

暫く間、待っているとチャイムが鳴り響いた。

キラは応接室のパソコンを操作し、インターフォンのカメラを見る。

其処には千冬を先頭に真耶と一夏達が続く形で立っていた。

「今、行きます」

キラはマイクにそう言葉を吹き込むと玄関に向かう為、応接室を出るのだった。

一夏達は古びた洋館の玄関の前に立っていた。

「ここが、キラの家？」

鈴の言葉にシャルが答えた。

「工房らしいよ。キラ個人が持つ」

その言葉に一夏はシャルに質問した。

「何で知ってた？ シャル？」

その問い掛けにシャルは答えようとした時、玄関のドアが開いた。

「ようこそ、入ってください」

そう言うときらは左手を室内に差し出し入るよう諭す。

一夏達はキラに案内されるままに洋館の廊下を歩く。

応接室に到着するとキラは扉を開き一夏達を応接室に誘った。

其処にはアスランがコーヒーを飲みながら座っていた。

無言を貫くアスランに一夏達は事の重大さを改めて認識した。

いや、認識せざるをえなかったと言う方が適切か。

重苦しい空気の中一夏達はそれぞれ無言で椅子に付いた。

キラは皆のコーヒーを用意するとソレを皆の前に置き、自分のコーヒーを応接室の机に置き、自分も椅子に座る。

キラは重く口を開く。

「さて、僕達の事を語る上で重要な2点の内、1点の事を語ろう」

キラはそう言いながらコーヒークップを持ち上げ、口に近づける。白い湯気がキラの顔を少しだけ隠した。

一夏達は固唾を吞んでソレを見守る。

「僕とアスランはこの世界の人間じゃない……この世界とは違う。平行世界の地球から来た人間だ」

その言葉に一夏達は驚きの声を上げる。

一夏達はその事を知らない為、こう言った反応をするのはまあ、解っていた。

一夏達は千冬からここに来るなら一切の口外は禁止する誓約書を書かされた。

もし、これを破れば無期懲役と言う重い罰則まで設けてまで。

つまり、一夏達はそれ相応の覚悟できている。

しかし、キラの口から語られた内容はSFに出てくる内容その物だった。

なおもキラは語る。

「先ず、僕達の事を語る前に僕達の世界について語ろう」

キラはコーヒを一皿、ソーサーに置くと静かに口を開く。

西暦末期に各地で民族紛争、宗教戦争が激化、石油資源の枯渇や環境汚染の深刻化、世界的な不況が襲い、世界各地で代表勢力による分割が行われ、世界各地でブロック化が進む。いわゆる国家統合、再編を目的とした戦争が発生。

この戦争を第三次世界大戦、または、再構築戦争と呼ばれる

そして、C・E・1、中央アジア戦線、カミール地方にて核兵器が使用される。

この事件を『最後の核』と呼んだ。

C・E・9に再構築戦争は終結。

各国は、アメリカ、カナダ、アイスランド、アイルランド、イギリスは大西洋連邦へ、

ロシア、イギリスを除くEU加盟国はユーラシア連邦へ、

日本、中国、韓国、北朝鮮、モンゴル、台湾は東アジア共和国へ、ラテンアメリカは南アメリカ合衆国へ、

アフリカ大陸南部は南アフリカ統一機構へ

スカンジナビア半島の各王国はスカンジナビア王国へ、

中東、アラビア半島諸国は汎ムスリム会議へ、

東南アジア、南アジアの国々は赤道連合へ、

オセアニアの国々は太平洋連合へ、

ソロモン諸島はオーブ連合首長国へと再編成された。

「世界は、不安は残るものの、各国は静かに平和を送る筈だった。しかし、世界はある男の告白で混沌とする」

「ある、男とは？」

その言葉にラウラは質問する。

キラは一旦、コーヒード喉を潤すと口を開く。

「その男の名はジョージ・グレン。大西洋連邦、旧アメリカの出身で僅か17歳でMIT、マサチューセッツ工科大学の博士号を収得、オリンピックで銀メダルを獲得し、アメフトのスタープレイヤーであり、後に海軍に入隊、エースパイロットとしても活躍。その他、理工学の分野でも若くして様々な業績を挙げ、世界中から万能の天才として注目され人物。しかし自ら設計した木星探査船『ツイオルコフスキー』に乗り込んで木星探査に出発する際、宇宙から自分の秘密を告白した。ソレが世界の混乱になるとも知らずに……」

キラは苦い顔をしてそう言う。

アスランもまた、苦々しそうな顔をする。

何せ、キラ達の世界の戦争の根幹であり、2つの人種の軋轢を生み出す原因となったのだから。

そのキラ達の顔に一夏達は何かあると思った。

千冬は目を瞑りながらキラの言葉を待つ。

キラは空になったコーヒークップを弄ぶように心を落ち着かせながら口を開いた。

「僕は、僕の秘密を今、明かそう。僕は自然に、ナチュラルに生まれてきた者ではない。遺伝子操作によって生み出された者、コイデイナーだ」彼はそう言ったよ」

「え？」

シャルは不意にそんな声を上げた。

「コーディ……ネイター？」

ラウラは聞きなれない言葉に疑問を投げかけた。

ラウラの質問に今まで黙っていたアスランが口を開いた。

「遺伝子操作により堅牢な肉体と優れた運動能力、優秀な頭脳を持つている人種。過酷な環境や重篤疾病に対する抵抗力も高いが、勿論、不死身の生物では無く、老衰、あるいはなんらかの不慮の事故により著しい損傷を身体に被った場合は死に至るが、ナチュラルよりはそう言ったりリスクは少ない」

その言葉に鈴は驚きながら言う。

「何ソレ！？ 超人じゃない！？」

その言葉にキラは強く否定した。

「ソレは違う。コーディネイターでも何かをするにも誰かから学ばなければならぬし、またコーディネイターと同等かそれ以上の能力を持つナチュラルも存在する。だからコーディネイターも万能の超人ではないんだ」

キラはそう言いながらも内心、鈴の言葉は酷く傷ついた。

幾ら、自分達が努力や苦労を重ねて事を成してもナチュラルは『ああ、遺伝子操作されたから出来て当然か』や『コーディネイターだから当然』と言うレッテルを貼られる。

コーディネイターにも得手不得手は存在する。

実際、キラはOSやプログラミングといったソフト面に精通しているが、アスラン程、機械工学などのハード面には優れていない。

まあ、理論的に他のコーディネイターよりは優れているがアスランには及ばない。

その逆もまた然り。

事実、戦闘技術の狙撃と言う分野一点に置いてはディアッカの方が優れているし、乱戦時の接近戦だけを見るならイザークに軍配が上がる。

しかし、全総合力を見たならキラやアスランの方が遙かに上なのだ。

一芸か多芸かの違いによるが総合力と言うポテンシャルで見たなら自分達は最強だと言う自負はある。

「ソレは理解した。だが、そのコーディネイターのジョージ・グレソンがお前達と如何繋がってくる？」

箒は確信を持ってその問い掛けをした。

多分、全員が箒と同じ予測をしているのだろう。

キラは覚悟を決めて口を開いた。

「僕は、そのコーディネイターなんだ……」

その言葉に、ああ、ヤッパリと言う空気が流れた。

しかし、一夏の言葉でキラ達の心は幾分か軽くなった。

「確かにキラやアスランはそのコーディネイターかもしれない。でも、キラ達はキラ達だろ？ 少なくとも俺達にとっては大事なツレだ。それに変わりはねえよ」

その言葉に一夏以外の全員が頷き、キラとアスランを見た。

その瞬間、キラとアスランは嬉しかったと同時に悲しくもあった。

自分達は一夏達を信じてやれなかったかとを、そして、自分達は何時から人を信じる事をやめてしまったのかと言う想いを、悲しく思えた。

キラは気を取り直して話を再開した。

ジョージ・グレンがコーディネイターの製造方法を世界中にネットワークを通じて公開した事。

地球連合の前身である国際連合が開いた『国連遺伝子資源開発会議』の議決により採択。以後、国際連合加盟国は本議定書の効力により、合法的にはコーディネイターを生み出す事が不可能となった事。

エヴィデンス01の発見による宗教的権威の失墜。

そしてここまで話したキラは続いてアスランが語る。

「そして、C・E・50年。パトリック・ザラ、シーゲル・クライン達はプラントのL5コロニー建設に従事してきたコーディネイターの有志によって、プラントの自治権、貿易自主権を求める政治結

社、『黄道同盟Zodiac Treaty』を作り上げた。食料生産制限撤廃と自衛権獲得を求める活動も開始した。だが、まだ表立っての活動ではなく、『地下に潜って』の違法組織ではあったがな」

ラウラはある人物の名を復唱した。

「パトリック……“ザラ”？」

その言葉にアスランは遠い目をしながら口を開いた。

「俺の……父だ……」

そのアスランの言葉にラウラは違和感を覚える。

（何故、アスランは父と呼んだ時、あんな悲しそうな顔をするんだ？）

ラウラは理由が解らなかった。

家族を持たぬ自分には計り知れない物をアスランは内包している。

そう解釈する事にした。

キラ達の話は尚も続く。

C・E・65年、プラント最高評議会の政権与党、黄道同盟がさらなる党勢拡大のうえ発展する形で、自由条約黄道同盟ZAF^{ザフト}Tが改めて結党された。同時に、史上初のモビルスーツ試作第1号「ザフト」が秘密裏にロールアウトされた事。

コペルニクスの悲劇でキラとアスランが離れ離れになり、キラはオーブへアスランはプラントに残った。

そして、大西洋連邦のアラスカ宣言、そして、アスハ代表の中立宣言を語る。

「そして、ヤキン・デューエ戦役が勃発した。その開戦当初、数の上では圧倒的優位だった地球連合はMSの性能に圧倒される。そんな最初の戦いで悲劇は起きた。地球軍の将校が核弾頭を持ち込みソレを使用、農業民間プラント、ユニウス7に命中、24万3721名の人々が犠牲となり、ザラ委員長を筆頭とするコーディネーター強硬派の敵意と憎悪は頂点に達し、オペレーション・ウロボロスを発動Nジャマーと言う核分裂を阻害する兵器を地球に大量散布、地球は原子力発電が出来なくなり、餓死者や凍死者を出す結果を招き、反コーディネーター主義が地球に蔓延した」

そのキラの言葉に一夏は啞然とし、箒は目をそむけ、鈴は怒り狂い、セシリアは口元を押さえ、シャルは目を瞑り、真耶は両手で顔を押しさえ、ラウラは憤りを露にする。

「何を考えている！！ その地球連合とやらは！？ 仮にも敵とはいえ民間人の居住している所に核を撃ち込むだ！？ 同じ軍人として恥ずべき行為だ！！ ソレにプラントも何を考えている！？ 関係の無い国にまでそのNジャマーを散布するなど！？ 地下資源が枯渇した地球にとっては最悪だろうに！！」

その言葉にアスランは冷たく切り捨てた。

「ソレが戦争と言うものだ。ラウラ……一度引き金を引けばもう両者とも戻れない。ソレが戦争なんだ……」

そう言いながらもアスランは辛かった。
自分を慕ってくれているラウラの口から父を罵倒する言葉を聞くのが辛かった。

父のやった行為は許される問題では無いが、やはり肉親の罵倒は堪えるものがある。

「そして、俺は母の死を契機に軍に志願した」

その言葉にシャルが反応する。

「お母さんの死？」

「ユニウス7の中に、24万3721名の名前の中に、母のレノア・ザラの名があつたんだ」

その言葉にキラと千冬以外は絶句した。

「じゃあ、アンタは……」

鈴の言葉に頷くようにアスランは答えた。

「ああ、ある意味、復讐の為だったのかもしれない。でも、母と同じ目にあわせない為に、俺と同じ想いをして欲しくない為に俺は銃を取る事を決意した」

「そして、僕は中立国のオーブで戦争を外の出来事と眺めながらオーブが保有するヘリオポリスにカレッジの学生として移り住んだ」

キラはそう言うのと立ち上がり、休憩を挟むことを提案し、空になっ

たコピーポットを持って台所へと向かう為に応接室から姿を消した。

33話 過去の始まり（後書き）

ま、纏まらない……

ラフト・クライシステロ事件まで長くなりそうです……

34話 過去から見た戦い

キラはコーヒーの入ったポットを持ってきながらソレを机の上に置き、椅子に座る。

キラは空のカップにコーヒーを注ぐ。

その時、応接室のグランドファザークロックは21時の鐘を重厚に時を告げる。

キラは一口、コーヒーを口に含み、話の続きを始める。

「さて、続きをするね」

そう前置きをするとキラとアスランはお互いのこれまでを話した。

キラはヘリオポリスでの生活を、アスランはザフト軍士官学校での事を語る。

そして、キラとアスランは自分の運命を大きく変えるターニングポイントを語る。

「そして、C・E・71年、1月25日。忘れもしない。それが僕とアスランの運命を大きく変えるターニングポイントだった」

キラはそう言いながらコーヒーを口に含む。

「ターニングポイント？」

シャルの質問にアスランは答える。

「地球連合軍は戦局の打開を図る為、ある計画を極秘裏に進めていた」

そのアスランの言葉にラウラは質問する。

「ある計画とは？」

その言葉に皆がキラ達に注目する。

キラは鎮痛な顔でその計画を説明する。

「『G計画』……地球連合の1国である大西洋連邦は極秘裏に中立国オーブ国営企業、モルゲンレーテ社との極秘共同開発の下、試作新型MSを開発すると言う計画だった」

その言葉にラウラは驚いた。

「中立国の国営企業と共同開発だと！？ ソレは条約違反ではないか！？」

アスランは頷きながら補足説明を行う。

「条約違反をするだけの価値はある。何せ、ザフト軍しか持ち得ないMSのノウハウを得る事が出来るのだから。この世界に例えるなら、ISを開発、軍事運用する事と同様の事なんだ。数で圧倒的

に勝る地球軍にザフト軍が拮抗できたのはMSの力とコーディネイターのポテンシャルによる所が大きい。MSの力はMA5機ないしは10機位の戦力差がある」

そう言いながらアスランはコーヒーを口にする。

「ザフトはこれまでのイニシアティブを奪われる可能性がある。何せ、生産力と数を揃える物量戦が主流の近代戦がNジャマーの影響で通信が封鎖され、なおかつ長距離誘導兵器の精度は著しく低下し、有視界での戦場でMSは正に最強の兵器足りえた。ボタン一つでケリがつく戦場は過去の遺物とかし、個人の力量が勝敗を左右する古代のような戦争をする時代が訪れた。正に、俺達コーディネイターの才覚を表すのに適した兵器といえた」

アスランの言葉に一夏達はISが出てきた当時を思い出す。

正に今、この時代がそうではないかと。

今の時代、ボタン一つ押せば全てが終わる戦争は起こらない。

その代わり、ISが兵器の主流となり、競技となり、個人の力量が左右すると言えた。

キラはアスランの言葉を引き継ぐ形で話す。

「その為、ザフト軍でも知将と名高いハルバートン大佐、後の准将は連合軍にもMSを開発すべく5機の試作MSを開発、それを試験的に運用し、新たな量産MSを創造する計画、それがG計画の全貌だった」

キラはそう語るとカップをソーサーに置く。

そして、アスランが語る。

「ザフト軍はそのG計画を察知し、G兵器を奪取すべく俺がいたクルーゼ隊はヘリオポリスに進撃、俺は極秘裏に潜入。破壊工作とG兵器を奪取する作戦に参加した」

その言葉を引き継ぐようにキラは語る。

「その時、コロニー全体が振動した。最初は隕石の衝突かと思ったけどソレは違った。ザフトがMSを発進させコロニーの港を制圧した時の振動だった。突如、警報が鳴り響き、僕と友達はシエルターに非難する筈だった。しかし、僕は別方向に行く女の子を追いかけた。追いかけて、そして、シエルターに逃げる途中で目にしたもの、2機の“ガンダム”だった」

その言葉に、一夏達は驚く。

「まさか……キラ達のガンダムって……」

一夏は驚きの声を上げながら呟く。

キラはその言葉に頷く。

「うん……元々は大西洋連邦が作り出した兵器だったものだよ」

そう言いキラは話す。

「その時、僕はシエルターに入る事が出来ず、たまたま其処に居合

わせた地球軍仕官、マリュー・ラミアスさんの所まで行き、そこでアスランと再開した。そして、アスランは隣のガンダム、イージスに乗りこみ、僕とマリューさんはストライクに乗りこんだ。ストライクはゆっくりと立ち上がり、爆発と同時にストライクとイージスは押し出されたんだ」

そう言いながらキラとアスランを見やる一夏達。

「その時のストライクを含むOSがこれまた酷くてね……そんな状況の中、行き成りジンが襲ってきた。その時、僕はマリューさんと操縦を交代してOSのプログラミングを書き直して何とか操縦できるようにしてジンを撃破したんだ」

その言葉に一夏が驚く。

「え？ 戦闘中……だったんだよね？」

その問い掛けにキラは頷く。

セシリアも啞然としながら言う。

「それで素人同然のキラさんがOSを書き換えて更に戦闘をこなした……と？」

鈴は益々呆れながら言う。

「あんたね……出鱈目にも程があるわよ……」

一夏達にそうは言われるが、キラとて命懸けだし、友達を守る為に必死でやったに過ぎない。

キラは気を取り直して、また話を始めた。

「そして、新造宇宙万能揚陸艦、アークエンジェルとに移動した僕と友達とマリューさんはソレに乗り込んだ。マリューさん、ムウさん、バジール少尉はヘリオポリス脱出を計画するけどその時の戦力はムウさんの故障したMAとストライクだけだった。だから、僕は友達を守る為にまた、ストライクに乗った」

そうキラが言い終わると、今度はアスランが口を開く。

「しかし、俺達も逃がす訳が無い。ジンにD装備、DESTROY・TION早い話が要塞攻略用兵装を搭載しアークエンジェルを撃破に掛かった」

ソレを聞いた瞬間、全員が息を呑む。

「でも！！ 幾ら敵国の兵器を製造しても中立の所に要塞攻略用兵器を持ち込むなんて！？」

シャルの言葉にラウラも頷く。

「ああ、幾らなんでもやり過ぎだ。一般市民は何も知らない。そのコロニーとやらの耐久度がどれだけかは解らんが、一般市民にも被害が出る」

そのラウラの言葉にアスランは答える。

「クルーゼの言い分は『もし、見過ごせばこの対価は我々の血で支払う事となる。ならばここで新造艦もろとも破壊した方がいい』と

言うのが言い分だった。それに、中立地帯で兵器を作る事自体が条約違反だ。確かにザフトにも落ち度は多々あるが、その要因を作ったのは地球軍とオーブだ。それにな、ラウラ、覚えておけ、戦争には法的な歯止めは殆ど意味が無い。起こってしまえば皆同じだ」

その言葉にラウラは苦い顔をした。

一夏達も同様の顔をする。

一夏は唸るように叫ぶ。

「人の……人の命を何だと思ってるんだ！？ 関係無いヤツ等だろ！？ 殺し合いがしたいならその地球軍とザフトだけでやれよ！！」

しかし、キラは冷たく言う。

「戦争をしている人間にそんな言葉は通用しない。自分の命と家族や仲間の命が掛かっている。僕達だって、好きで人殺しをしている訳でも無い。一夏達からすれば言い訳かも知れないけどね……でも、守る為に相手の命を犠牲にしなければならぬなら僕やアスランは敵を迷わず“殺す”」

キラの言葉にアスランも続ける。

「何かを犠牲にしなければ何かを守れない。そんな世界だった。仲間や家族の命と自身の道徳を天秤に掛け、俺やキラは自分の道徳的概念を犠牲にただけだ」

そのキラとアスランの言葉に一夏達は絶句した。

自分達はあつただろうか、その様な二者択一を迫られた事は。

いや、無かった。

話を戻すべくキラは再び話す。

「その戦闘で僕はアスランと再会する。僕はストライクのコックピットの中で、アスランはイージスのコックピットの中で……」

そして、アスランも語る。

「再開もつかの間、ヘリオポリスは崩壊、俺の部隊はジンを全て撃破、俺もキラも崩壊の余波で宇宙に投げ出された」

そして、キラ達は語る。

キラはアルテミスでの出来事を、アスランは評議会での報告を。

その時の大人達の対応にまた、一夏がキレた。

「何だよそれ！？ どいつもこいつも自分勝手じゃないか！？ 何が『裏切り者のコーデイナー』だ！！ 何が、『我々は戦争を終わらせる為に戦っている』だ！！」

その言葉にキラはまた冷静に一夏を諭す。

「皆、それぞれの思惑でそれぞれが動いている。ソレを内包した物が世界だよ。一夏。一夏だって遠くの物事には感心を殆ど示さないけど近くの物事には感心を示すでしょ？」

「でも!!」

一夏は納得できずに叫んだ。

「なら一夏、今、この世界で飢えや内戦、紛争、疫病でどれだけ人間が死んでいるか知ってる？ ソレを知って、他者の為にどれだけの事が出来る？ 行動しないで口先だけ正論を叫んでも何も変わらない。行動して、結果がでて初めてそれは認識されるんだ」

キラもアスランもまた、行動したからこそ言える事なのだろう。

一夏は何も言えず唯、呆然としていた。

「一夏、座れ。そして聞け。キラ達の話を」

ソレまで黙して語らなかった千冬がようやく口を開いた。

「ああ……」

一夏もまた渋々と席に座る。

そして、キラ達は大気圏ギリギリでの戦闘までを話す。

「こうして、僕は軍に残り、地球軍少尉として、アークエンジェルへと戻った」

そう言い終わると、キラはコーヒーを口に含み、喉を潤した。

34話 過去から見た戦い（後書き）

纏まらん!!

いい加減、早くラフト語りたいよラフト……

種運命終了までどれだけ短縮できるか……

35話 重力井戸の底で

キラはコーヒークップをソーサーに置くと天井を仰ぐ。

正直、2時間ブツ通しで話をしていたのだ。疲れない訳が無い。

キラは暫く天井を仰ぎ見て軽く息を吐き出すと会話を再開した。

「僕はデュエルとの戦いの最中に助けた民間人を乗せたシャトルがストライクとデュエルを隔てた。しかし、デュエルは勘違いして、脱出を図った兵と誤認、シャトルを撃墜した」

その言葉と共に一夏達は息を呑んだ。

尚もキラの言葉は続く。

「僕はシャトルを守る為、ストライクを限界まで速度を上げたけど間に合わなかった……大気圏で爆発、残骸は重力の摩擦熱で焼かれ消えた……ストライクもその爆発の衝撃で大気圏に突入した」

その言葉に筭が呟く。

「よく生きていたな……機体が大気圏の摩擦熱で燃え尽きるだろうに……」

その言葉に、キラは言う。

「PS装甲のおかげかな……PS装甲は実体兵器にはほぼ無敵だけど、更に耐熱性も通常装甲以上なんだ展開すれば大気圏の熱にも耐え切れる」

しかし、とアスランは前置きを置く。

「コックピットの温度や機体内部やフレームの熱や衝撃までは殺しきれない」

そう言いながら苦い顔をしながら説明する。

「そして僕はストライクを救う為に寄せて来たアークエンジェルに緊急着艦したんだ。でも、下りた所が不味かった……下りた所はアフリカのザフト勢力圏のど真ん中、『砂漠の虎』の異名を持つ、バルトフェルド隊の勢力圏に落っこちた。そして、僕も大気圏突入の際のコックピットの急激な温度上昇に体をやられ熱中症になった」

「何ソレ！？ 状況は最悪じゃない！ 地球に着いたと思ったら敵の勢力圏で其処には異名持ちの敵。アンタもよくよく運がないわね……」

その言葉に鈴は叫ぶように言う。

一夏達もウンウン頷きながら首を振る。

キラはその言葉に苦笑するしかない。

全くだ。生きてるからには最悪では無いのだろうが、運は無い方だろう。

いや、悪運はあるのだろうか。

キラはそんな事を考えながらコーヒーを飲む。

「そして、僕が目覚めた時、フレイがいた」

フレイの名を聞いた瞬間、一夏達は嫌そうな顔をした。

「ああ、あの女の風上にも置けぬヤツか」

「ああ、あの最低女？」

「同じ女として恥ずべき女ですわね」

「同じ、女として許せないね」

「全くだ。修正してやりたい」

箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラは不快感を隠そうとせず、毒をその口から吐き出す。

ユニウスセブンでの出来事やラクス人質事件を話した時、箒達は大人の汚いやり口よりもフレイのその言動や行動に怒りを抱いた。

一夏はふと質問した。

「キラは何で好きになったんだ？」

その問い掛けにキラは何とも言えない顔をしながら言葉を紡ぐ。

「初恋の相手だったからかな……」

そしてキラは話す。

その後のフレイとのやり取りを。

ソレを聞いた瞬間、箒達は真っ赤になって怒り狂う。

中でもシャルの怒りは凄まじかった。

「ふざけてるよ！！ そんなのふざけてる！！ 心と体の両方が弱
つてるキラに付け込んで肉体関係を持たせてキラを傀儡にしたかっ
ただけじゃないか！！」

箒達にとって、恋愛とは神聖なものであり、肉体関係を持つ事自体、
相思相愛で初めて許される事だと言う考えがある。

ソレを道具の様に扱うフレイが許せなかった。

ソレを汚された気がして、自分達の恋愛感を汚された様に思えての
怒りだろう。

更にシャルはキラの事を好きだと思っている。

ソレが余計にシャルの心を怒りで満たした。

真耶も近い考えなのか明らかに不快な顔をした。

しかし、千冬は不快に思いながらも彼女達をいさめる。

「ここでない者に怒りをぶつけても仕方が無かる」

しかし、箒達は納まらない。
特にシャルは。

「でも!？」

シャルは金切り声で叫んだ。

しかし、千冬は視線で箒達を射抜くと、言い放つ。

「いいから聞け。言いたい事があるならその後でもいえる」

とりあえずシャル達は怒りを何とか押し留め、キラの話を聴く事にした。

そして、バクウ強襲、明けの砂漠との共闘、カガリとの再開やゲリラの村の焼き討ちまで話す。

その時、全員にキラが力ガリに投げかけた言葉が重くのしかかる。

不意に一夏が呟く。

「『気持ちだけで何が守れるのか?』か……じゃあ、力だけで一体何が出来るんだ? 俺には解んねえ……でも、キラの言いたい事も解るけど、カガリって子の言いたい事も解るな……」

その言葉に全員が考え込む。

そして、キラはアンドリユー・バルトフェルドとの出会い。

「その時、バルトフェルトさんは僕達にこう問いかけた。『戦争には明確なルールも制限時間も得点も無い。なら、何処で終わらせる？ 全ての“敵”を滅ぼしてかね？』と……」

その言葉に一夏達は重苦しい想いに囚われる。

一夏達はキラ達みたいに戦場を知らない。

もし、自分がそう問われた時、自分は如何答えるだろう。
キラの様に無言を貫くか？

解らない。

如何すれば戦争と言うものを終わらせるのだろう。

キラ達は今、どんな答えを持っているのだろう。

そう問いかけたくても問いかけられなかった。

自分なりの答えがある訳でもないのにソレを問う事は間違っている気がしたから。

そして、キラは語る。

バルトフェルトとの戦い、ソレを撃破した事、そして、アラビア海を出てインド洋を進むコースを取った事、モラシム隊との戦い。

そして、カガリの遭難。

ここで、アスランはその時のカガリとのやり取りを語る。

「カガリは俺から奪った銃を構えながらこう言った、『アレは地球の人達を殺すんだろ?』と俺はこう答えた『なら撃てよ。俺はソレのパイロットだ』そう言った時、突然、カガリが銃を投げ捨ててな……ソレが暴発して俺の腕を掠めた」

アスランはそう言いながら懐かしむように言う。

そして、イージス、デュエル、バスター、ブリッツに追い込まれ、オーブ領海ギリギリの時だった。

「その時、カガリが艦橋まできてね、突然、オーブ海軍にこう言ったんだ。『私はカガリ・ユラ・アスハだ』って」

その言葉に一夏が質問する。

「“アスハ” って……」

その言葉にアスランは答える。

「そう、オーブ連合首長国代表、ウズミ・ナラ・アスハの御息女だ」

その言葉に鈴が呆れながら言う。

「何それ? お姫様がゲリラに手を貸していたわけ? 呆れた……」

そして、キラはオーブに戦闘のドサクサで入国した。

そして、アスランはアークエンジェルの動向を探る為、仲間とオー

ブに密入国したのだった。

そう語るとキラとアスランは窓を見ながら思う。

ラクスとカガリは元気だろうか？ と……

35話 重力井戸の底で（後書き）

もう、諦めて自分のペースで纏めていきます。

こつなったらトコトン行くぜ!!

36話 殺意の先に

応接室のグランドファザークロックは既に12時を過ぎていた。

振り子が規則正しく一定のリズムを刻む中、キラは気分を変える為にアスランに紅茶を、プリンス・オブ・ウェールズで入れてきて欲しいと頼んだ。

アスランも流石にコーヒーばかりでは些か飽きがきたのか了承する。

一夏達も流石に3時間以上コーヒーと言うのも流石に飽きる。

アスランは皆に何が飲みたいか質問をした。

その質問に、一夏はコーラを、箒と千冬は緑茶を、セシリアは紅茶のアッサムでロイヤルミルクティーを、鈴はオレンジジュースを、シャルはレモネードを、ラウラはグレープジュースを、真耶はキャラメルミルクティーを頼んだ。

アスランは頷きながら退出する。

その時間は休憩らしく、キラも立ち上がり、トイレへ行くと一夏達に告げる。

暫くしてキラが戻り、アスランもトレイを両手で持ちながら入室してくる。

それぞれの飲み物を置いていく。

一夏には1.5リットルのペットボトルを、箒と千冬には急須を、セシリアにはミルクティーが入ったポットを、鈴にはオレンジジュースの入ったガラスのピッチャーをシャルの前にはレモネードの入ったガラスのピッチャーを、ラウラにはグレープジュースの入ったピッチャーを真耶にはティーポッドとキャラメルソースを置く。

キラはカップを持ち上げ香りを楽しみながら一口飲むとソーサーにカップを置く。

「さて、話を再開しよう。僕たちはオーブに匿われた。中立宣言をしているオーブが地球連合の艦を匿う理由にはソレ相応の理由がある。その理由は簡単、技術協力だよ」

その言葉に一夏は疑問を投げかける。

「何で技術協力を持ち掛けたんだ？」

その質問にキラでなくアスランが答えた。

「オーブはMSの技術が、正確には自国が開発したMSをナチュラルでも操作可能なOSの搭載の為の技術を欲した。それ故に、キラのOS開発技術協力とストライクの戦闘データの無条件での提示を条件にストライク及び、アークエンジェルの無償修理の交渉を持ち掛けた」

アスランの説明にラウラは納得しながら答えた。

「成る程な……本来、MSとはザフト、コーディネイターしか動かせないものだ。更にNジャマーにより誘導ミサイル兵器は殆ど役に立たない。ならば、兵器はMSやMAなどの有視界戦闘や戦艦での近距離での撃ち合いでしか戦闘は決着がつかない。更にMSはMAの5から10機の差がある。故にオーブはMSの技術を求めた。か…… 自国を守る為に……」

キラもアスランも頷く。

「そして、俺達、ザフトはカーペンタリア基地からオーブに圧力を掛けてもらっていたが、それでも時間が掛かる。ソレならばオーブに潜入して調査を開始する事にした」

キラはM1アストレイのOS開発に、アスランはアークエンジェル追跡調査を開始した。

キラは開発のさなかムウに言った事を皆に言う。

「その時、僕は両親には会わなかった。その事をムウさんに聞いただされた時、こう言った。『言ってしまいそうで怖いんです……何で僕をコーディネイターにしたのって、いいそうで……』と」

その言葉に全員が息を呑んだ。

キラの場合、アスランと違い、自分の意思で戦場と言う場所に立つた訳ではない。

巻き込まれ、ソレしか自分の命と友の命を守る為に戦った。更にキラはコーディネイターでMSが動かせ、戦える。正直、議論の余地は無かった。

更に友達との軋轢やキラ自身の戦争による精神的ストレス。
キラ自体が一杯一杯なのだろう。

一夏達はキラに何と言葉を掛けてもよいか解らなかった。

一番、ショックを受けたのはシャルだろう。

想い人にそんな重たい過去が会ったとは思ってもよらなかった。

確かにキラのあの優しい笑顔には何かあると思っていた。

シャルは感じていたのだ。

自分達と接するキラが本心から笑っていない事に。キラが本心から笑っているのはアスランと2人きりで笑う時だけだ。

ソレがシャルには悲しかった。

キラは他人を何処か線引きをする所がある。
ソレも本人が気付かない、精神の根底的な所で、無意識に。

（それじゃあ、キラは一体、何時“笑える”の？ 何時まで僕達に
“作り笑い”をするの？）

シャルはキラを見つめながらそんな事を思っていた。

この時、シャルは決意する。

（何時か、本当に何時か、キラと“対等”になって並んで歩きたい。
キラの“笑顔”も“悲しみ”も“痛み”も“優しさ”をもっと見て

いたい。僕はキラと一緒に歩きたいんだ。同じ道を……)

箒は考えていた。

(力とは何だ？ 確かにキラやアスランは強い。ソレは私達の誰よりもだ。でも、守れなかった……)

箒は2人を身ながら思う。

(訓練の時、キラは私に問うた。『箒は力を手に入れて何をしたいの？ 力は手段であって目的じゃないよ？』と……キラやアスランは大切な何かを守る為に力を手に入れたのだろう……なら私は？ 私は何の為に力を手に入れようとしている？ 解らない……)

そう思いながら箒はキラとアスランを交互に見た。

鈴はキラ達を見ながら内心ため息を吐きながら思う。

(正直、アンタ等が其処まで重苦しい過去を持っていたなんてね……でも何で明かす気になったんだろ？)

そんな事を考えながらオレンジジュースを口に含んだ。

鈴は何時も飲みなれている果汁100%のオレンジの酸味がやけに酸っぱく感じた。

ラウラは正直、アスランが戦闘のプロである事を認識していた。

しかし、実戦経験が豊富で大きな戦争を経験しているとは予想外だ

った。

（軍人が背負うべき“苦しみ”か……私が背負うかも知れない想い……）

そう思いながらもラウラは決意する。

（良いだろう。嫁が背負ってる重みを背負ってこそだ。お前は私の物だ。なら、お前が背負っている重みも一緒に背負ってやる。だから……そんな顔するな。私が抱きとめてやるから）

セシリアは考える。

力とは自分が成功するべき手段だと。

だが、一度力を持つとその力に責任が伴う。

ならその責任を2人みたいに負っているだろうか。

いや負っていない。

（私は力を何に使い、何を責任とするのかですわね……私の課題は……）

一夏はキラ達の顔を見ながら思う。

一体、キラ達はどれ程悲しみを背負っているのだろう。と。

（俺は“あの時”白い騎士に問われた。『力を欲しますか？』と……

…でも、キラ達ほど力を持っても守れなかった方が多い……俺もそうなるのかな……）

一夏は一度頭を左右に振って弱音を追い出す。

（確かに、守れないかもしれない。でも、現実と妥協しても意味が無い。なら、強くなる。折れないように、挫けない様に！！）

そして、キラ達の話は続く。

フェンス越しの対話。

そして、アークエンジェル出港。

そこまで話すとアスランは組んでいた腕に指が食い込む。

キラはカップ握りながら琥珀色の液体を悲しそうに見つめた。

その時、一夏達は悟った。

この後、何かがある。

あの2人が思いつめた顔をしている。

そしてキラは意を決して語る。

「アークエンジェルはそのまま太平洋を進みアラスカの地球軍本部に向かうコースを取った。そのコースにはアスラン達が網を張っていた。僕達はソレを突破する為に作戦を立てた。最初はアークエンジェルを煙幕で隠し、艦上に待機していた僕がアグニを掃射、部隊

を分断して各個撃破と言う作戦だった」

そして、アスランも語る。

「俺達はその作戦にまんまと嵌ってしまった。スカイグラスパーと言う戦闘機2機の支援と完全に整備されたストライク、正に良い様に分断された。そしてキラは援護の元、俺を追い詰めた。イージスのエネルギーはエンプティに近く、対し、キラのストライクは小まめな装備換装で充電はフルに近い。俺はキラに討たれる事を覚悟した」

アスランは心的苦痛に顔を歪めながら言葉を捻り出す。
正直、見ている一夏達が辛いくらいだ。

「ソードストライカーを装備したストライクは正に俺に斬りかかろうとしたときだった。右マニピレータを切断されたニコルのブリッツがキラ目掛けてランサーダートを抱えながら突撃を開始した。だが……ニコルの攻撃はかわされ、キラの横薙ぎの斬撃がブリッツのコックピットを切り裂きニコルは戦死した……」

アスランは目を瞑りながら語る。

「その後、俺達は撤退した。そして、俺は俺自身の甘さが、キラを討てない自身の甘さが戦友をニコルを殺した事に気付いた。そして、誓った。『俺がキラを討つ』と」

そしてキラは語る。

「その後、戦端は開かれた。僕とアスランは2度目の激突をした。正直、あの時のアスランは恐ろしかった。自分が死ぬの覚悟で僕を

殺しに来たのだから……僕はジリジリとアスランに押される。その時だった。トールがスカイグラスパーに乗って支援に来た」

そう言うときらは瞳を閉じて思い返す。

「でも、トールはアスランの投げたシールドでコックピットを潰されて死んだ。今でも覚えている。グチャグチャに潰されたコックピットからトールのヘルメットが飛ぶ瞬間を……」

一夏達は息を呑んだ。

ソレは首が飛んだと言う事だ。

真耶は口元を押さえて涙ぐんだ。

「そして、僕はその時、僕の中で何かが壊れる音がした。そして……目の前のアスランと言う“敵”を殺す為に全力を尽くす事を決断した」

そうキラが言った瞬間、キラの胸元とアスランの右中指が光り輝く。

キラとアスランは何事かと自分のISを見る。

その瞬間、空中に映像が映し出される。

其処にはパイロットスーツ姿のキラが映っていた。

『アスラン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

その耳を劈く憎悪を口から吐き出しながら操縦桿を動かす姿だった。

ソレを見た瞬間、一夏達はゾツとした。

正直、怖かった。人間はあそこまで殺意と憎悪と憎しみを表現できるものなのか。と。

そして、映像はストライクとイーギスが激しくビームサーベルで斬り合う姿が映し出される。

イーギスの斬撃をシールドで受け止め、ソレを弾き返し、サーベルを下から上に振り上げるストライク。イーギスの左マニピレータは根元から切り裂かれ吹き飛ぶ。

そして、ストライクは一旦距離を取ると左足突き出し、イーギスの顔を蹴り飛ばす。

そして、イーギスは体勢を即座に立て直し、後方に跳躍する。

機体エネルギー残量はレッドゾーン一步手前を指し示した。

『俺が……お前を討つー!!』

アスランは有らん限りの憎しみと決意を吐き出しながらそう叫んだ。

そして、イーギスは残った腕と足から黄色いビームサーベルを展開し、全速でストライクに突撃を開始、意標を付いて左足を蹴り出しストライクの左マニピレータを根元から切断した。

ストライクも負けじとビームサーベル突き出しイーギスのメインカメラを突き刺し破壊する。

それでも怯まないイーギスは右足でコックピット装甲を切り裂く。

『アスランンンンンンンンン!!』

『キラアアアアアアアアア！！』

互いに持てるもの全てを出して目の前の“敵”を“殺す”“獣”と化したキラとアスラン。

シャルは泣き崩れながらもその様子を見つめた。
ラウラもまた泣きながらその様子を見守った。

辛かった。唯、2人は辛かった。

自分の想い人が憎悪と殺意を剥き出しに殺し合う姿が、唯、辛かった。

映像はイージスがM Aに可変し、ストライクに組み付いた。

そして、スキュラを撃ち放とうとした時、機体の色は鮮やかからスカラーレットからメタリックグレーへと変化した。

そう、エネルギーが切れたのだ。

『クッ！！ チィ！！』

そう叫ぶとアスランは突如、端末を操作し、右の操縦桿下から数字キーが現れた。

アスランはソレを素早く押す。

その瞬間、モニターは突如、

TIME REMAINING

COUNT DOWN

と、記された。

無情にも数字は9秒を回った。

アスランはイージスのコックピットから慌てて逃げだす。

それに気が付いたキラは啞然とした。

そして、次の瞬間、イージスは爆発し、その余波でストライクも爆発した。

その瞬間、映像は途切れたのだった。

37話 命の価値

キラとアスランは今の映像を驚きをもって見つめた。

まさか、自分達の過去の戦闘が映像として映し出されるのは予想外だったのだ。

しかもソレがフリーダムとジャスティスから映し出された事に1番驚いた。

そして、キラとアスランは今更ながらこのISに疑問を抱いた。

何でフリーダムとジャスティスがISになったのか、そして、ISに転用可能な技術がISのデータの中に入っていたのかと言う疑問だ。

そして、その疑問以上にキラ達の頭を悩ませたのは何故自分達はこの世界に来たのだろうと言う疑問だった。

今更過ぎて忘れていたが、今更思い出して頭が痛くなったキラ達だった。

そして、キラは紅茶を一口含むと落ち着きを取り戻し、語り出した。

「映像の後、僕は偶々其処に居合わせたジャンク屋のロウと言う人に助けられた。緊急用のハッチが緊急作動して爆発の炎や爆風から

守られたけど大怪我を負った」

そして、アスランも語る。

「そして、俺は爆風に吹き飛ばされ海岸に叩きつけられた」

そして、語られる。

キラはマルキオ導師に誘われプラントへ、そして、アスランはオーブにて治療を受ける。

アスランは語る。

「俺とカガリはあの時、語った。『何故、お前はキラを討った？』と問われた。俺はこう答えた。『キラが俺の友を討ったから』だと……そう答えた。そして、カガリは叫んだ『キラとて守りたい者の為に戦った』と俺も叫んだ『アイツはまだ15でピアノが好きで優しいヤツだった』とそして、カガリも叫ぶ。『アイツだって守りたい者の為に戦った。殺されたから殺して、殺したから殺されて、それで本当に平和になるのか？』と問われた。その時、俺は答える事が出来なかった」

そう言いながらアスランは窓を見やる。

其処には月が雲にかかり朧月になっていた。

キラも語る。

友を殺そうとしたその行動に自身が恐怖し、プラントの空を眺めながら涙を流した。

「そう、アレはパトリック・ザラがオペレーション・スピットブレ

イクの標的をパナマからジョユア、地球連合本部に移した事が解った時だ。僕はあの時思った。『ここにはいけない僕には僕の戦いがある』と。そして僕はラクスにここから出て行く事を告げた。そして、ラクスは問いかける。『また戦場へ?』と。僕はその場で頷いた。そしてラクスはまた僕に聞いた。『ザフトと戦うのですか?』と。僕は首を横に振った。そしてまたラクスは問う。『では地球軍と?』と。僕は更に首を横に振った。そして、こう言った。『何と戦わなければならないのか、ようやく解った気がした』と。

そして、キラは尚も語る。

ラクスはキラを連れてザフトが極秘裏に開発した最新鋭MSフリーダムをキラに与えた事を。

そして、キラはジョシユアに下り立ちアークエンジェルを救った事を。

そして、話し合いの結果、オーブへと逃げる事にした。

そして、アスランも語る。

クルーゼから自分がストライクを討った功績により、ネビラ勲章を授与され、特務隊、フェイスに入隊する事が決まり本国に呼び戻された。

そして、アスランは知る。

最新鋭MSが何者かに強奪、ソレを手引きしたのはラクスだと言う事を。

そして、アスランは父親からフリーダムの奪還か破壊とフリーダムに触れた施設や人の排除まで命じられた。

そこで一夏が質問する。

「何で、お前の親父さんはそんな過激な命令をしたんだ？ 幾ら極秘の最新鋭MSでも施設や人まで排除なんてやり過ぎだろ」

その一夏の問い掛けにアスランは答える。

「フリーダムにはNジャマーキャンセラーが搭載されていたんだ。だからこそ、父はソレが悪用される事を恐れた」

ソレを聞いた瞬間、全員の顔が強張る。

ラウラは納得したように呟いた。

「そうか、もし、これが地球軍の手に落ちれば再び核攻撃が開始される。ソレを恐れたんだな。お前の父親は」

アスランは頷きながら続きを話す。

自分はフリーダム奪還の為に最新鋭MSジャスティスを受領される事となる。

そして、ラクスとの対話。

ラクスから問われた事を一夏達に話す。

その話を聞き、一夏達は考える。

『貴方が信じて戦うものは何か?』と言う問い掛けに対して。

そしてアスランも地球へと舞い降りた。

その頃、地球ではパナマのマストライバーが破壊され地球軍は月への補給ルートを完全に遮断された格好へとなった。

そこで、ブルーコスモスのムルタ・アズラエルは中立国であるオーブのマストライバーを奪取してソレを補給路にする事を提唱した。

そして、オーブ解放戦線の火蓋は切って落とされる。

「開放戦線とは名ばかりの侵攻作戦だけだね……それでもオーブは戦う事を選んだ。自分達の誇りを守る為に……」

キラはそう言いながら紅茶をカップに注ぎながら語る。

圧倒的な物量で迫る地球軍。

フリーダム火力を持ってしても抑えきれないほどの物量。

3機のガンダムの出現。

「そして、僕は3機のガンダムに抑えられる形となった。その時だった。アスランが加勢したのは」

キラはそう語りながら紅茶を一口含む。

「俺は知りたかった。フリーダムのパイロットがキラなのかどうか

を」

そして、地球軍は一時撤退。

キラとアスランは再開した。

そして、その時は来た。

アスハ代表は戦線をカグヤまで後退させ、オーブ軍の大半を宇宙に上げ、オーブはアスハ代表を含む閣僚が自害と同時にマスドライバ―とモルゲンレーテの工場区画を爆破し、この戦いに幕を閉じた。

そして、アスランは語る。

「俺は父と再び話をする為に、ジャスティスをキラ達の手元に戻し、ヤキン・デゥーエに戻った」

アスランはそう語りながらも何処か悲しい顔をした。

「そして、父と対面し言葉を交わした。父がこの戦争をどう思っているのか、この戦争の行く末を聞いたかったから……だが、父の口から出た言葉は『ナチュラルを根絶やしにする』と言う趣旨の言葉だった。この時、俺は感じてしまった。父の歪んだ心情に、父は……母を失い歯止めが無くなってしまった。狂気に支配されていたんだ」

そう言いながらアスランは苦悶の顔をした。

「そして俺は父に掴み掛かろうとしたが、父に銃で撃たれ地面に転がっていた。手錠を掛けられMPに連行されるさなか最後に俺と父が交わした言葉は『失望しました父上』と『私もだアスラン』これが俺達親子の最後の会話だった」

その言葉に一夏は叫んでいた。

「何だよそれ！？　それが親子かよ！？　お前達それで良いのかよ！？」

その言葉にキラは一夏に言う。

「一夏、話の途中だよ。座って」

静かだが有無を言わさぬキラの殺気に一夏は押し黙り席に着いた。

そして、アスランは語る。

護送の最中、MPの隙を突いて逃亡を図ろうとした事。その時、クライン派に助けられた事。

ラク스가ザフトの最新鋭艦であるエターナルを強奪しアスランを逃がした事を。

そして、キラ達は語る。

ラクス達と合流したキラ達は廃棄されたコロニー、コロニーメンデルに隠れながらその機会を窺っていた事。

そして、ムルタ・アズラエルがアークエンジェルの同型艦であるド

ミニオンに乗り込み自分達を追いかけて来た事、その艦長がかつての仲間であるナタル・バジルールだった事。

そして、キラは語る。

「その時、ムウさんはクルーゼの気配を感じて、メンデル内部に移動した。僕もムウさんを追ってコロニーの内部に侵入した。その時、新型の機体にムウさんがやられている所だった。僕はソレを助けたけど、クルーゼは機体を乗り捨て、廃棄された研究所の中に逃げ込んだ。ムウさんもソレを追いかける。僕もソレを追いかける格好となった」

そう言葉を区切りながらキラは目を瞑る。

そして、決意した様に語る。

「其処には廃棄された人口子宮が多くあった。そして、クルーゼは語る。『ここが君の生まれ故郷だ』と。そして、クルーゼは資料と写真を僕とムウさんの前に投げ捨てた。其処にはカガリがウズミさんから貰った同じ写真と、ムウさんの子供の頃の写真が散らばった」

その時、ようやく一夏達は確信が持てた。

カガリとキラは双子だったと言う事を。

だが、謎は残る。

キラとムウとクルーゼの因縁と言う謎が。

「その時、彼は語った。このメンデルではコーディネイターを超えるコーディネイター、スーパーコーディネイターを作り上げる為の

施設だと」

その言葉に一夏達はある単語に疑問符を投げかける。

「その、何だ？ スーパー、コーディネイターって？」

代表して一夏が質問した。

キラは答える。

「事の発端は、コーディネイター作出のための受精卵へのジェネティックエンハンスメントにおいて、クライアントのオーダーに基づき技術者のデザインした塩基配列どおりの形質が胚の生育過程で発現しない例が少なからずあったんだ。例えば、青い瞳になるよう塩基配列をデザインしたのに青い瞳の胎児として発生発達せず、金髪になるようデザインしたのに金髪の胎児に育たない、などでだね。ヒビキ博士は、これらの現象を、生物である母胎という装置が不均質であり、それが様々な変数となって胚の生育に影響を及ぼすからだと考えたんだ。そこで彼は、胚が母胎からの余計な影響を受けない『人工子宮』を開発し、それを用いて受精卵を发育させ、完全にクライアントのオーダー通りの形質発現を達成したコーディネイターを誕生させられるように研究をしていた。

しかし、いつしかヒビキ博士の研究は自身の子供を身体、頭脳共に極限まで高めた生命体、『スーパーコーディネイター』にする事に摩り替わっていた。人工子宮という装置の機器としての完成度や諸々の問題は依然としてあり、満足のいく個体を誕生させる歩留まりは非常に低かった。ヒビキ博士は研究者としての執念から、妻であるヴィアの反対を押し切り、幾多の失敗例の山を築いたうえで、唯一の成功例として双子の子供の内の男の子をキラ・ヒビキとして誕生させた」

その時、アスラン以外の全員が息を呑んだ。

そして、涙した。

「人の……人の命を何だと思ってるの？ そのヒビキ博士は？ キラの親を悪く言うのは嫌だけど……でも、まるで命を物か何かと勘違いしてるよ……惨いよ……何で？ 何でそんな事が出来るの？」

一夏は有らん限りの憎悪を込めながら吐き捨てた。

「ソイツは人間のクズだ！」

箒も吐き捨てる。

「私の姉以下だ！ 正に外道の所業だな……」

鈴も怒り心頭だ。泣きながら叫んだ。

「ふざけんじゃ無いわよ！！ 腐ってるわね！！」

ラウラはある意味違った物の見方でキラを見た。

（完成された存在……か……アスランとは違った天才だな……生まれながらの天才と生まれる前から天才である事を約束された者が……）

セシリアも啞然とした。

（ふざけてる……これが人間のすることですか！？ 反吐がでます

わ！？ そのユウレン・ヒビキには……）

千冬は無表情だがそのユウレン・ヒビキに対して腸が煮えくり返す
思いだった。

真耶もまた、泣きながらも怒りを抑えていた。

ソレを尻目にキラは語る。

「そして、彼は語ったよ。彼はムウさんの父親、アルダ・フラガの
クローンだと」

その瞬間、全員が驚きの声を上げる。

それに構わずキラは語る。

「ヒビキ博士は研究資金を稼ぐ事に苦心していた。その時だった……
ある大金持ちが自分のクローンを作れと依頼した。そのクローンを
自身の跡取りとする為に。ソレがムウさんの父親だった。そして、
そのクローン体がラウ・ル・クルーゼだった。しかも彼は欠陥品だ
った。テロメア遺伝子が生まれつき短く、急速に細胞が老化し短命
だった。ソレを抑える為に薬を定期的に飲まねばならないほどに……
そして、彼は世界と自分と全てを呪った」

ソレを聞いた瞬間、全員が暗い顔をする。

「何だよ……それ？ まるで命の価値が安すぎるだろ……命つても
つと重いもんだろ？ 何でそんなに命を軽んじられるんだよ……」

一夏は力無く呟くのだった。

その眩きがこの部屋の全てを満たしているようだった。

37話 命の価値（後書き）

正直、話が垂れてきた気がします……

と、言うわけで、真に勝手ながら、種運命は語った事にして飛ばします。

まあ、重要なのは種とテロ事件なので……

38話 FIND THE WAY

皆は一斉に黙り込み、応接室の時計の振り子だけが規則正しく一定のリズムを刻む。

キラは徐にティーカップを持ち上げる。

カチツという陶器同士が当たる音がやけに大きく聞こえた。

日付は変わり午前2時。

闇夜はなお暗く世界を包み込む。

キラとアスランは皆の心が落ち着くのを暫く待った。

そして、ようやく落ち着きを取り戻した一同を見回し、話を再開した。

「そして、連合、ザフト、僕達はメンデル外部で激しい戦闘を再開した」

キラとアスランは語る。

キラ達と連合軍が戦っている所にザフト軍が乱入。

一時、戦場は混乱した。

「ザフトが戦線参加する時だった。国際救難チャンネル。この世界で解りやすく言うなら非暗号化されたSOS通信といえは良いのか、兎に角、そのチャンネルで全周波数でクルーゼが突如、通信をした。『戦闘を始める前に捕虜を返却したい』と……」

アスランの言葉に全員が不振がる。

何せ、キラとアスランの話を聞く限り、ラウ・ル・クルーゼと言う男はその様な人道的見地にたつて物事を推し進める男ではない事は理解している。

言い方は悪いが、目的の為なら手段を選ばない。そんな男だ。

そのクルーゼが捕虜を、しかも乱戦が予想される戦場に放り出す意味を一夏達は諒りかねていた。

「そして、救命ポッドが射出され暫くしてザフトのMS部隊が乱入してきた。連合とザフトの部隊を相手に苦戦を仕入れていたその時だった。救命ポッドから全宙域に通信が入った。フレイだった。フレイは……助けを求めているよ……」

キラはそう区切ると天井を見上げて目を瞑る。

その仕草にアスラン以外の全員が何かあると踏んだ。

「そして、フレイが言った、“ある一言”から連合、いや、アズラエルの感心を引いた」

その言葉にシャルが質問する。

「ある一言って?」

その質問にキラは同じ姿勢で答える。

「『戦争を終わらせる“鍵”』と」

その言葉に一夏達はクルーゼの言葉を思い出す。

『最後の扉が間も無く開く』と言う言葉を。

その“最後の扉”を開ける為の“鍵”が何なのか一夏達は解らなかった。

しかし、千冬だけは大方の予測は付いていたが。

だが、その鍵とやらがとんでもない物でその扉の向こう側が碌でも無い事だけは一夏達でも理解は出来た。

それ程、一夏達にとってクルーゼと言う男は禍々しい存在に見えた。

シャルはクルーゼの名を思い返してみた。

Le ル・クルーゼ Creuset、フランス語で坩堝。

シャルはまるでクルーゼの心を地獄の釜の坩堝に思えた。

外の夜空以上の暗闇の様に暗い地獄の釜の底の様な。

そんな化け物に思えてならなかった。

我知らずシャルは体を恐怖で震わせた。

アスランはキラの言葉を引き継ぐ形で会話を再開した。

「キラはフレイ・アルスターを回収しようとしたが其処に連合のガンダムが乱入。結局、フレイ・アルスターは連合の手に堕ちた」

それでもキラは語る。

「その時、フレイは泣いていた。そんな気がしたんだ……」

その時、キラの表情を見てキラは本当にフレイを愛していた事を一夏達は悟った。

そして、本当の愛とは見返りを求めない事だと言う事も。

そして、フリーダムは半壊した。

そして、キラ達はナスカ級戦艦に火砲を集中し突破に成功し、何とか連合、ザフトの追撃を振り切った。

そして、キラ達は語る。

「逃げ延びて、暫くして、ザフトの第一関門にして宙域要塞、ボアズが陥落したんだ」

その言葉にラウラが疑問を投げかける。

「幾ら連合の物量とマンパワーが優れていてもプラント本国を守る要塞だ。中々抜けないと思うぞ。僅か数日でどうやって抜いた？無理があるだろう？」

その質問にアスランは感心しながらも言う。

「流石ラウラ。いい所に気が付いた。防御要塞攻略に必要な人員は最低でも倍以上の兵数が必要だ。ボアズ守備隊の兵数はMS部隊1個師団。対する連合は第6、第7機動艦隊が参加した。確かに戦力的には倍だろうがこれでは心許ない。しかし、連合の被害は微々たる物だった。答えは簡単、連合軍は核をボアズに数発撃ち込んだ」

その言葉に千冬以外が驚きを露にした。

「ウソだろ！？ Nジャマーがあるのに核攻撃が出来るのかよ！？」

一夏の言葉にキラが答えた。

「フリーダム、ジャスティスにはNジャンセラーがついている。そして、クルーゼはザフトの軍高官でパトリック・ザラとも交流があり、FAITH、特務隊の人間でもある彼がソレを知らない訳が無い。そして、“最後の扉を開く鍵”をフレイに持たせた人物でもある」

其処まで言われて一夏達も予想が付いた。

「まさか……」

ラウラの言葉に千冬がやはりと言う感じで言う。

「ヤツの言う所の“最後の扉を開く鍵”とはNJキャンセラーの事か……そして、ブルーコスモス盟主にしてデトロイトに本拠地を置く大手軍需産業経営者でもあり連合の国防産業連合理事のムルタ・アズラエルの手に移った。か……これだけの肩書きと力を持つ狂気を宿した男に移そう物なら核ミサイルが大量生産だろうな」

キラとアスランは千冬这个回答を首肯で肯定した。

そして、キラとアスランは語る。

連合軍はボアズを抜け、プラント最終防衛ラインであるヤキン・ドゥーエに進撃した。

ここでアスランは苦悩の表情で語る。

「俺達は連合の暴挙を止める為に核ミサイルを撃破した。だが、第一波を防いだその時だった。突如、ヤキンの近くに巨大な何かが現れた。レーダーにも映らなかった物が突如として現れた事に全軍が困惑した。そして、その建物は眩い光を放ちながら連合艦隊を焼き払った。たった一撃で連合の艦隊の40%が消滅したんだ」

ソレを聞いた瞬間、一夏達は啞然とした。

たった一撃で物量が最強の連合軍の艦隊の40%が壊滅したと聞けば啞然とする。

「その兵器の名はジェネシス、核エネルギーを用いた巨大ガンマ線レーザー砲だった」

その言葉に鈴が疑問を投げかけた。

「何でガンマ線が兵器になるのよ？」

その質問にキラが答える。

「そもそもガンマ線は非常に透過性の高い放射線でかつ、非常に高エネルギーの電磁場だね。治療でもガンマナイフの原理で使われている。アレは多数の弱いガンマ線を一点に集中させ脳組織の腫瘍を焼く効果がある。ソレを要塞サイズにスケールアップして一点に集中して放出すればジェネシスほど高出力のレーザーの場合は核シエルトなどでも事実上防御不能だ。射線上にいる物は粉々に吹き飛ばされ、人体は放射能と電磁場で水風船の様に破裂する。しかも、防ぐ方法が無いときている。正に悪魔の兵器だよ……」

その説明を聞き、一夏達は嫌な顔をする。

それでもキラ達は話し続ける。

連合は日付が変わり27日、残存兵力を集結させ再度総攻撃を開始した。

しかし、ザフトは第2射目で補給を兼ねた第2陣諸共ブトレマイオス基地が消滅、地球軍はこれで宇宙における反抗の為の牙の大半を叩き折られる結果となった。

千冬はその事をこう言い、切り捨てた。

「合理的だな。だが、其処まで考えてソレをやるのは気が狂っているとは思えない」

と。

そして、物語は佳境に入る。

ジェネシスを止める為、キラ、アスラン、カガリが向かった。

「その時、僕はクルーゼの気配を感じ取った。今でも覚えている。あの焔々しい気配は彼だと言う事を……」

その時だった、また、フリーダムとジャスティスから光が漏れる。

キラとアスランはフリーダムとジャスティスを取り出すとその光は壁に当たり、映像を映し出した。

其処にはフリーダムがミィティアを装備した状態で高速機動で突き進みながら120cm高エネルギー収束火線砲を撃っている所だった。

プロヴィデンスはソレを鮮やかな機動でかわす。

フリーダムは右側の120cm高エネルギー収束火線砲からビームソードを展開し、右から左へと横薙ぎに振るう。

プロヴィデンスは鮮やかに上昇するとドラグーンを展開し砲撃を開始した。

そして、バスターは次々と被弾する。

しかし、フリーダムは無数のビームの嵐を掻い潜る。

『グッウ』

キラはコックピットの中で唸るように吐き捨てる。

『また君か？』

クルーゼは言いながらも肩部バルカン砲を乱射しながら距離を取り、ビームライフルを撃ちながらドラグーンをキラの周囲に展開、ソレを撃ち込む。

キラはミーテリアの高軌道を生かした高速回避運動を行いながらドラグーンを何とかかわす。

キラは牽制の為にミーテリアのミサイルを発射する。

しかし、クルーゼはドラグーンを展開、ミサイルを次々と撃破していく。

『厄介な奴だよ！ 君は！！』

破壊したミサイルの爆風の中からプロヴィデンスが躍り出てビームライフルを撃ち込む。

ソレが右側の120cm高エネルギー収束火線砲に当たる。

『彼方は！！』

そう言いながらキラは右側の120cm高エネルギー収束火線砲をパージしながら高軌道でその場から飛びのく。

爆発する120cm高エネルギー収束火線砲。

迫り来るプロヴィデンスを追い払う為、キラは残った左側の120cm高エネルギー収束火線砲のビームソードを展開し、右から左に薙ぎ払う。

ソレを上へと飛び上がりながら回避し、下に移動すると同時に左マニピレータにある複合兵装防盾システムのビームサーベルを振り下ろし左側の120cm高エネルギー収束火線砲を破壊した。

キラはソレをパージして鮮やかに回避する。

余りの高次元の戦いに、一夏達は見入ってしまった。

あのキラが、あそこまで追い詰められている。

「マジかよ……あのキラが……ここまで苦戦するなんて……」

一夏の呟きは皆の思いだった。

そして、千冬は思う。

（正直、全盛期の私でもこの2人の戦いには着いていけない……化け物レベルの戦いだ。いや……レベルの問題ではない……ステージの問題だ。この2人は人のステージから逸脱している。ヤマトは兎も角、クルーゼはナチュラルの筈……だとしたら……人の身を超えている……）

そう思いながらも千冬は映像を黙って見つめた。

映像はプロヴィデンスが肩部バルカン砲を乱射しながら距離を取り、ドラグーンを正面に展開していた。

フリーダムは鮮やかな回避で無数のビームの嵐を掻い潜る。

回避するフリーダムを追いながらビームライフルを乱射するプロヴィデンス。

『在ってはならない存在だと言うのに』

フリーダムはビームを回避していく。

『何を！？』

フリーダムは急速後退をしながら残った兵装のミサイルをばら撒き距離を取る。

しかし、プロヴィデンスのドラグーンがソレをいとも容易く撃破する。

残りの迫り来るミサイルはビームサーベルで切り払い回避して見せた。

『知れば誰もが望むだろう。君の様になりたいと！！』

『グッ！！』

そう叫ぶクルーゼにキラは苦悶の表情を浮かべる。

無数のビームの嵐の中、キラは何とか回避しながら突き進みながら残った兵装でプロヴィデンス本体を攻撃するが簡単にかわされる。

『君の様にありたいと！！』

『そんな事！！』

その言葉に皆が目を伏せて思った。

確かにそうだ。

キラ程の才能と実力があれば大抵の事が高次元で実現可能だ。でも、一夏達は知っている。

キラが苦悩しながらも前へ進んでいる事を。

誰よりも才能がありながらその才を鼻に掛けず一生懸命努力する姿を、一夏達は知っていた。

フリーダムは両腰のビームサーベルを引き抜くと、ビームを弾きながら回避するが、少しずつ被弾していく。

『故に許されない！！ 君と言う存在を！！』

クルーゼはそう怨念を吐き出しながらドラグーンを操る。

無数のドラグーンから吐き出されるビームの雨の一つがミイテリアの右スラスターに当たり爆発と振動をキラのいるコックピットに伝えた。

『グッ……』

キラは苦悶の表情を浮かべながらも容赦無く、休み無く降り頻るドラグーンの雨をかわす。

『僕は！ それでも僕は！ 力だけが、僕の全てじゃない！！』

そう叫びながらキラは残った兵装を乱射しドラグーンを撃破しようとする。

しかし、ドラグーンは回避行動を取りソレをかわす。

『ソレが誰に解る？』

クルーゼは微笑みながらキラの言葉を皮肉る。

そして、ドラグーンのビームを撃ち込む。

『誰に解る？』

そう言いながら残ったドラグーンをパージしてビームの網を作りキラの進撃を阻む。

『グッ！！』

キラは急速後退をしながらバラーエーナプラスマ収束ビーム砲を放つ。
しかし、プロヴィデンスは簡単に回避する。

『解らぬさー！！』

そう叫びながらドラグーンを集結させ正面に火力を集中する。

そして、フリーダムが回避行動を取ったと同時にドラグーンを全方位に散会させビームの雨を降らせた。

フリーダムはビームサーベルでドラグーンのビームを弾き返しながら回避行動を取りつつ反撃を試みる。

『誰にも！！』

そう叫びながらクルーゼはプロヴィデンスのビームサーベルでミータリアの右スラスターを切り裂き、完全に機能を停止させた。

『グッウー！？』

その時だった、キラの視界にフレイの乗った脱出艇が目飛び込む。

『キラ！！』

フレイの叫びにキラが驚きながら反応した。

『フレイ！！？』

キラはミーティアをパージしてドラグーンを回避するとフレイのいる脱出艇に近づく。

『フン』

クルーゼは鼻で笑いながらプロヴィデンスのビームライフルを構える。

そして、

脱出艇に狙いを定めて引き金を引き絞った。

放たれるビームからフレイを守る為、キラはフリーダム最大の加速で接近する。

そして、左マニピレータを全力で伸ばし、シールドで脱出艇を守った。

涙を浮かべながら再開を喜ぶフレイ。

今度こそ守れたと思い、笑顔を見せるキラ。

しかし、無常にも1機のドラグーンが脱出艇を射抜く。

爆発に包まれる脱出艇。

笑顔から一転、キラは絶望の混じった驚愕の顔をした。

そして、キラの目の前で爆発した脱出艇。

[illegible]

キラの絶叫と共に脱出艇は爆散、その爆発の余波でフリーダムも吹き飛ばされる。

その様子を満足そうに見たクルーゼはドラゲーンを全機戻して飛び去る。

[illegible]

キラは爆発に巻き込まれながらも最愛の人の名を叫んだ。

その瞬間、キラはフレイと対面した。

キラ……

「そんな……フレイ……そんな……」

キラは嗚咽混じりにフレイの名を呼んだ。

「ありがとう……ゴメンね……」

キラは首を横に何度も何度も振りながら涙を流しながら問う。

⌈
⌋

「ずっと、謝りたかった……」

『どうして君が……！？』

『怖かった……怖くて、ずっと……知らなかった……何も解って無かったから……』

フレイは寂しそうにそう言った。

幼い頃、母を亡くし。

父、ジョージ・アルスターに溺愛され、我侔し放題に育てられてしまったフレイ。

父の庇護という、大きな傘を彼女の世界の全てとも言うべきものを戦争によって突然失って以降、彼女は怯え恐怖した

それ故、父を殺したコーディネーターを憎み、その怒りの矛先を、同族であるキラに向けるしかなかった。

キラにひどい言葉を発し、さらには、キラに同族殺しをさせるべく、キラを戦場から逃がさない為にキラを、彼女の虜にする為にその身さえ、キラに捧げた。

だが、その後、キラと離れ離れになり、アークエンジェルの仲間とも隔離され、ついには敵の手に堕ちて漸く、自分を見つめ直す機会を与えられた。

自分がやってきたことを知り、自分がどうしていかなければならぬいかを知る。

やっと、そのことに気付けた。

キラに謝ろう。キラにありがとうと言おう。そして、キラと共に歩いて行こう。

その事をキラはこの時、感じ取った。

そして、キラは叫ぶ。

『フレイ！！』

と。

キラはそれしか出来ない自分が悔しかった。

しかし、フレイは微笑んだ。

『でも今、やっと自由だわ……とても素直に貴方が見える』

『フレイ！ クッ！』

キラは言葉が出なかった。

頭の中がグチャグチャで、何を言えばいいのか解らなかった。

しかし、フレイは誰にも見せた事の無い、素直で綺麗な笑顔でキラに微笑みながら言葉を紡ぐ。

『……だから……泣かないで……』

『チクショウ！！ 僕は……！！』

君を守りたかった。

その一言が出ないキラ。

唯、嗚咽を漏らすしかないキラにフレイは自愛に満ちた声でキラに語りかける。

『貴方はもう泣かないで……』

キラはフレイを見ながらようやく言葉を紡ぐ。

『僕は何も……』

『守るから…… 本当の私の想いが…… 守るから』

その瞬間、フレイはキラと重なると光になってキラの中に入る。

この映像を見た一夏達は涙を流した。

一夏も箒もセシリアも鈴もシャルもラウラも真耶も、あの千冬さえも。

そして、悟った本当にフレイは本当にキラを愛していたのだと。最初の行動や動機はどうあれ。

そして、キラに恋しているシャルは悔しさもあった。

死んだその時でさえキラの事を想い続けたフレイにある種の嫉妬がその想いに潜んでいた。

そして、爆風から放り出されたフリーダムが翼を広げ、フレイの仇である敵を倒しに飛翔した。

39話 終わらない明日へ

その事、クルーゼは圧倒的な力でM1アストレイを駆逐していく。

『はあああああああああああああああああああああ
！！』

フリーダムはビームライフルでプロヴィデンスを狙い撃つ。

しかし、クルーゼとて並みの敵ではない。

後ろと言う死角からの不意打ちのビームをいとも容易く回避してしまう。

そして、牽制の為にビームライフルを撃つプロヴィデンス。

『彼方は！ 彼方だけは！！』

『フツ』

クルーゼはキラの台詞を鼻で笑いながらドラグーンを操作してフリーダムを撃破しにかかる。

しかし、キラもまた並みの兵ではない。

後方のビームを最小限の動きで回避し、死角から飛んできたビームをバレルロールで回避するとビームライフルでソレを撃破する。
更に迫り来るドラグーンを回避して、発射体制に入った後方のドラ

グリーンを振り向き様にビームライフルで撃ち抜く。

『幾ら叫ぼうが今更!!』

クルーゼはそう叫びながらビームライフルと複合兵装防盾システムに装備されているビームガンでキラに攻撃を仕掛ける。

『ええい!!』

ソレを回避しながらキラはビームライフルでドラグーンを叩き落とす。

2機のガンダムが激しい攻防を演じる最中、ジェネシスの照準は地球に向けられた。

ソレを止める為、アスランとカガリはヤキン内部からの制圧を試みる。

ソレを防衛する防衛部隊。

『止める!! もう止めるんだ!! こんな戦い!!』

アスランはそう叫びながらフォルティスを撃ち込む。

『本当に滅ぼしたいのか!? 君達も全てを!!』

その問い掛けに、アスランの頭の中に見知らぬ兵士達の想いが響き渡る。

『奴等が先に撃つたのだ!!』

『ボアズには弟もいた!!』

『クソ……』

アスランはその声を振り切るように吐き捨てた。

そして、基地内に潜入し、司令室を制圧しようとしたアスラン達が目にした物は父であるパトリック・ザラが血を流し、宙に浮いている所だった。

逃げる兵達を他所にアスランは父親のそばまで寄る。

『撃て……ジェネシスを……我等の……世界を……』

そう言い残し、パトリック・ザラは息を引き取った。

『クッ……!?! 父上……このような事をして也得るものは何一つ無いのに……』

アスランはそう吐き捨てながらも自爆を解除しようとしたがある事に気が付く。

ヤキンの自爆とジェネシスの発射が連動していたのだ。

その事に気が付いたアスランとカガリはジェネシスを内部から破壊する事を考える。

そして、アスランとカガリはジェネシスの内部に侵入する。

『何か手はあるのか?』

カガリの問い掛けにアスランは覚悟を決めて答える。

『内部でジャスティスを核爆発させる』

その言葉にカガリは驚きながらアスランを問い詰める。

『それじゃあ、お前は!?!』

『これしか方法が無いんだ!!!』

そう言うアスランはカガリにこう言った。

『お前は戻れ!』

と。

カガリはソレを拒否したがアスランはリフターをパージしてそれをストライクルージュにぶつけて足止めをした。

その隙にアスランは最高速度でジェネシスの最深部へと向かった。

其処に到着したアスランは自爆の為に暗証番号を入力しようとした時だった。

其処にストライクルージュが飛び込む。

『アスラン!!』

その言葉に驚きを露にするアスラン。

『か、カガリ……！？』

『逃げるな！！』

アスランはその言葉に我に帰る。

そう、自分を犠牲にする事でアスランは父の業から逃れようとしていた事に気が付かされた。

『生きる方が……戦いだ！！』

その言葉に一夏達は息を呑んだ。

死ぬ覚悟をしていたアスラン。そして、生きる覚悟をといったカガリ。

自分達はこの極限状態の中でこれ程強くあれるだろうか。と。

その頃、キラとクルーゼは激しい接近戦を展開していた。

フリーダムのビームサーベルがプロヴィデンスの複合兵装防盾システムのアンチビームコーティングされた部分に当たり激しい火花を散らす。

『これが定めさ！ 知りながらも突き進んだ道だろう！？』

『何を！？』

キラの問い掛けにクルーゼは高らかに憎しみと言つ名の人の業を謳う。

『正義と信じ！ 解らぬと逃げ！ 知らず！！ 聞かず！！』

『グッ！！』

キラは苦悶の声を上げる。

尚も謳い上げるクルーゼ。

『その果ての終局だ！！ 最早止める術など無い！！』

そして、フリーダムとプロヴィデンスは一旦離れる。

『そして滅ぶ！ 人は！！ 滅ぶべくしてな！！』

その憎悪の声と共にドラグリーン全機がプロヴィデンスの前に集結し一斉発射した。

最早、点ではなく面の域に達するビームの砲撃をキラは信じられない速度で前進しながら回避した。

『そんな事！！』

フリーダムは鮮やかに回避しながらビームサーベルを仕舞い、ビームライフルでドラグリーンを撃破する。

『そんな、彼方の理屈!!』

『ソレが“人”だよキラ君』

キラの言葉を否定するクルーゼの言葉をキラは万感の想いで否定した。

『違う!!』

それに康応するが如くフリーダムは全砲門からビームとレール砲を吐き出す。

プロヴィデンスは鮮やかに回避するがドラグーンは撃破される。

『人は……人はそんなものじゃない!!』

迫り来るドラグーンを回避しながら叫ぶキラをクルーゼは嘲る。

『ハッ！ 何が違う!? 何故違う!!』

否定の言葉を吐き捨てながらクルーゼはビームライフルを乱射する。

『この憎しみの目と心と！ 引き金を引く指しか持たぬ者達の世界で!!』

その1発がフリーダムの右足の膝に当たり、右足を奪う。

『何を信じ！ 何故信じる!!』

ビームライフルと複合兵装防盾システムのビームを撃ちこむクルーゼ。

キラはシールドで防ぐがシールドの角度が悪かったのかシールドが吹き飛ばされる。

しかし、キラは諦めずにプロヴィデンスに迫る。

『ソレしか知らない彼方が!!』

ビームサーベルを引き抜き、プロヴィデンスに斬りかかるフリーダム。
ソレを防ぐプロヴィデンス。

『知らぬさ!! 人は所詮、己の知る事しか知らぬ!!』

『まだ苦しみたいか!? 何時か、やがて何時はと!?!』

攻防の中クルーゼは自分の人に対する想いをキラにぶつける。

『そんな甘い毒に踊らされ、一体どれ程の時を戦い続けてきた!?!』

この時、一夏達はキラの言葉こそ正しいと信じたかった。

だが、クルーゼの言葉もまた真実である事を誰もが理解していた。

激しい戦いの中、クルーゼが突然笑い出した。

『クッククク……アッハハハ!! どの道、私の勝ちだな! ヤキンが自爆すればジエネシスは発射される!!』

その言葉にキラは啞然とする。

『最早止める術は無い！！ 地は焼かれ、涙と悲鳴は新たな争いの狼煙となる！！』

『そんな……』

その時、アスランとカガリが内部から破壊すべくジェネシスへと向かう所をキラは見た。

『アスラン！ カガリ！』

キラは2人に気を取られていた隙にプロヴィデンスの接近を許す。

『人が数多持つ預言の日だ！！』

数機のドラグーンとビームライフルの砲撃をかわしきれず右肩のアイマーを損傷するフリーダム。

『そんな事！！』

キラも負けじとビームライフルを放つ。

そのビームの一線はプロヴィデンスの左肩の根元に着弾、左マニユピレータを根こそぎ持っていく。

『それだけの“業”！！ 重ねてきたのは誰だ！！』

体勢を整えるべくドラグーンを撃ち込むプロヴィデンス。

ドラグーンを破壊されながらも体勢を整えた。

『君とてその一つだろうが!!』

その叫びと共にビームライフルを放つプロヴィデンス。

その一撃がフリーダムの右マニピレータを破壊する。

『それでも!!』

キラはそう叫びながら左マニピレータでビームサーベルを掴み引き抜くとソレを連結する。

ソレを一気に引き抜きビームの刃を展開する。

『守りたい世界があるんだ!!』

そして、フリーダムはその持てる最大機動の全てを直進に回しプロヴィデンスに突撃を開始する。

『!..』

プロヴィデンスはフリーダムを近づけまいとビームライフルを乱射するがキラの超高速機動についてこれず狙いを外す。

『でやあああああああああああああああああああああ
あ!!..』

その叫びと共にフリーダムはビームサーベルを一閃した。

プロヴィデンスは身を翻し回避したが右マニピレータを根元から切り裂かれる。

慌ててその場から飛びのくプロヴィデンス。

ソレを逃すまいと追いつがるキラ。

プロヴィデンスは残った2機のドラグーンでキラの進撃を阻む。

その砲撃は頭部と胸部に着弾するがフリーダムの勢いを完全に殺す事は出来なかった。

『あああああああああああああああああああああああ
あ！！』

獣に似た咆哮と共に突き進むキラ。

ドラグーンの防衛網を突破し、プロヴィデンスに到達。

その刃はプロヴィデンスのコックピットを刺し貫いた。

その瞬間、ヤキンが自爆する。

それに連動してジェネシスも発射された。

キラはその場から飛び退き、プロヴィデンスはジェネシスに焼かれる。

その余波で核爆発の爆風に巻き込まれるフリーダム。

そして、内部でジャスティスが核爆発を起こし、ジェネシスも破壊される。

そして、キラは宇宙空間に漂いながら呟く。

『僕たちは……どうして……こんな所まで来てしまったのだろうか？』

その呟きに一夏達は涙を流した。

そして、アスランとカガリはストライクルージュでキラを迎えに行く。

3人とも涙を流した。

そこで映像は途切れた。

そして、キラとアスランは最後を語る。

アイリン・カナバが停戦を呼びかけ、終戦。

こうして、ヤキン・ドゥーエ戦役は集結し、C・E・72年3月10日、地球連合とプラント間に停戦条約としてユニウス条約が締結された。

そう言い終わるとキラはソファアールから立ち上がり、窓辺まで近づき、ゆっくりとカーテンを開けた。

キラの眼窩には朝日が飛び込んできた。

キラは目を細めながら外を見つめる。

アスランは腕を組みながら窓際に目線をやる。

時刻は午前5時を少し過ぎた辺り。

朝日が応接室を明るく静かに照らし出した。

39話 終わらない明日へ（後書き）

大変、お待たせいたしました。

リアルに仕事ガチで忙しく更新に手間取るわ、纏められず話が長くなり2つに話を分断するわでもう駄目駄目です。はい。

一夏達の詳しい思考は次に回します。

話は変わりますが、皆様の感想の中に種運命も書いて欲しいと言う要望がありました。

と言う事でアンケートを取りたいと思います。

俺は種運命を書くべきか？

それとも端折ってテロ事件を書くべきか？

皆様のご意見を伺いたいと思います。

ご協力の程、宜しくお願いします。

40話 それぞれのまとめ

一夏達は眠気は殆ど感じなかった。

これ程、濃密な話を聞けば眠気も吹き飛ぶと言う物だ。

ここに来てキラは一旦、話を終わらせる事にした。

キラやアスランが軍人であつたとは言え、ほぼ一晩中喋り続けたのだ。

若干の精神的な疲れが見えていた。

「話は続くけど一旦、ここで終わらそう。皆も眠いでしょ？」

そのキラの提案に流石に疲れたのか一夏達も同意した。

一夏達がキラの工房からそれぞれ解散するとキラとアスランは今回のISの出来事について話し合った。

「しかし……今回のあの現象は一体……」

キラの疑問にアスランは考えながら自分の憶測を述べた。

「これはあくまで俺の憶測だが……ジャスティスとフリーダムがISになっていたのとか関係があるんだろう。アレは俺達の戦いの記憶だ。ソレがISになった2機と俺達の記憶が何らかの理由で精

神接続されただろう。そもそもIS自体が謎の多いマシンだ」

その言葉にキラは頷きながら答える。

「そうだね……『エインヘルヤル』を生成する時も一夏の白式のコアを参考にしたけどコアの核となる『ワルキューレ』の解析は出来なかった。だから僕達のISのコアである『オリジナルエインヘルヤル』の外郭を形作ってそのデータをコピーする事にしたんだっただね……」

そう言いながらキラはこれまで調べて解った事を口にする。

「『ワルキューレ』の全てと言うべきか、学園や一夏の白式のコアから何か膨大な信号が出ていたんだ。今まで誰も気付かなかったのが不思議なくらいな程、膨大な……まあ、高度な暗号処理をされて発進されていたから誰も解らなかったんだろうけど……その着信元が篠ノ之博士に全て行き着くんだ。多分、あのウサ耳カチューシャが受信送信の全てを行って脳でアクセスしてるんだろうね……あの服事態もISと同じくらいの高度な技術の塊なんだろうね……多分、博士が本気になれば全世界のISを緊急停止するくらいは出来るね」

その報告にアスランは考えを纏める。

「結局、解ったのはコアの送受信くらいか……」

「後一つ……」

キラは最後にと付け足すようにアスランに報告する。

「僕達のISにも膨大な信号が出ていたんだ……ソレもこの世界で

は解析不可能な所か受信すら出来ない暗号処理が施されたデータが受信されていたんだ……」

その言葉にアスランは質問する。

「篠ノ之博士にか？」

その疑問にキラは首を横に振りながら言う。

「いや、正確には解らなかった……でも、何処に受信されているのが判明したんだ」

「何処に？」

「……『ジェネレーション・システム』……」

「何だそれは？」

その単語にアスランは疑問をぶつける。

「……解らないんだ……ただ、解った事は無数の世界の集合体で在りとあらゆる世界が情報として統合され混ざり合った世界だと言う事は理解できただけだよ……でもその情報を読む事は出来なかった……」

「……結局は謎のままか……」

キラとアスランは外を窓越しに見やりながら思考に没頭した。

一夏達は一旦、寮に戻るととりあえず仮眠を取ってから昼食を取り、喫茶店でそれぞれ落ち合う事にした。

全員が集合すると一夏達は今回の事について話し合った。

「でもよ……キラ達が軍人で大戦を潜り抜けた英雄ってのは解ったけど謎が更に出てきたな……」

一夏の言葉に筈が頷きながら答える。

「ああ、キラとクルーゼとの因縁は解った。だが、アスランとクライシスの因縁がまだ明かされていない」

そして、セシリアも付け足す。

「フリーダムとジャスティスがどうして今のストライクフリーダムとインフィニットジャスティスなったのかと言う疑問も残っているわ……」

「ソレは次の土曜に語られるだろう。問題はアスラン達と如何向き合うかだ」

しかし、ラウラはここでキラ達の付き合い方を質問してきた。

「そんなの関係無いじゃん。何時も通りよ」

鈴はオレンジジュースをストローで吸い上げながら詰まらなさそうに呟く。

「そうだよ、ラウラ。そんな事したらキラ達に失礼だよ。折角僕達を信用して話してくれたんだよ?」

シャルはそう言いながらラウラを嗜める。

結局の所、一夏達はキラ達の話が終わるまで、心のモヤモヤを如何すべきか悩む事になった。

40話 それぞれのまとめ（後書き）

今回は短めです。

アンケートの結果ですが、種運命も書いて欲しいと言う表が圧倒的に多かったです。

また、回想が長くなるから端折って種運命を書いて欲しいと言う意見もあった事から、種運命は重要な出来事以外は大半を削るつもりです。

これからも宜しくお願いします。

41話 繰り返される過去（前書き）

先ず、始めに……

感想でラクスとカガリを出して欲しいと言う要望が多く見受けられました。

残念ながらその要望に答える事は出来ません。

正直、そんな事をすれば今まで立てたプロットが破綻してしまうからです。

それに俺ではラクスとカガリと言うキャラを持て余す事になりかねません。

また、別の作品で書いて見たいと思います。

期待していた人は真に申し訳ありませんでした。

41話 繰り返される過去

キラとアスランはフリーダムとジャスティスを起動して向かい合っていた。

ここは第2アリーナ。

ただっ広いフィールドに2人が向き合う。

お互い無言のままキラは冷たい闘気を内包した状態で、アスランは真っ赤な炎にも似た闘気を激しく放出していた。

キラとアスランが戦うと言う事で多くの生徒と教師が詰め掛けたが、この闘気に当てられ殆どの観客が震えあがった。

キラもアスランもお互い訓練ではなく実戦の気構えで臨んでいる。

戦闘のプロの闘気が全体を包み込んだ。

その中で平然としているのは千冬だけで後は大なり小なり震えていた。

「…………正直、化け物だわ…………あの2人…………」

楯無は冷や汗を流しながらも何とか震えを押さえ込むとその様子を眺める。

正直、楯無にとってこれは予想外の事だっただろう。

まさか、キラとアスランが自分を超える実力者だった事は。

2人は向かい合い動かない。

一夏はこの事を疑問に思った。

「開始は告げられているのに何で2人とも動かないんだ？」

その疑問に千冬が答える。

「動かないのではない。“動けない”んだ。あの睨み合いには高度な戦略の駆け引きを行っている」

その言葉にセシリアが疑問を投げかける。

「高度な戦略？ ですか？」

千冬は頷きながら説明をする。

「ああ、今、2人は相手の攻撃方法や防御、迎撃、かわし方、間合いの計り方、射撃のタイミングや接近戦のタイミング、上空での移動方法、地形の応用、そこから導き出される攻撃最適な位置取りを僅か数秒で100から1000通りシミュレーションを行っている。更にヤマトは超理論的な戦い方をするし、アスランは獣を超える第六感で感じた事を理論的に当てはめ戦略や戦術を形成する。よく見ておけ、ガキ共。世界最高峰の戦いが拝めるぞ。なにせモンド・グロツソですらお目にかかれない戦いが始まるのだからな」

その言葉にゴクリと生唾を飲み込む一夏達。

「ッ！！」

キラとアスランはほぼ同時に動いた。

キラとアスランはイグニッションブーストを全開にして動く。

最初に仕掛けたのはキラだった。

キラは左右2挺のビームライフルを目にも止まらぬ速さで両方3連射した。

その攻撃をアスランは隙間を縫う様に全てを回避してみせる。

そして、その速度を殺す事無くビームサーベルを抜き放ち、アンビデクストラスハルバードモードにするとキラに襲い掛かった。

右から左への横薙ぎの一線がキラを襲う。

しかし、キラはその超高速の斬撃を後方斜め上に倒立反転しながらビームライフルを乱射した。

しかし、アスランはキラに向かってイグニッションブーストの加速で迫りながらビームサーベルを巧みに操り、全弾叩き落とした。

アスランに背を向ける形で倒立状態のキラは、背中のスラスターを機動させ180度を捻ると腹部力リドウス複相ビーム砲を叩き込む。

アスランは回避困難と判断し、即座にビームシールドを機動させキラの放ったカリドウス複相ビーム砲を防ぎ、ハイパーフォルティスビーム砲を撃ち込む。

キラはカリドウス複相ビーム砲をカットし、ビームシールドを展開し防ぐ。

この間、僅か10秒。

この短い攻防の中、観客からの歓声もどよめきも何も無い。

唯、場の静寂だけが支配していた。

キラとアスランが時間切れで模擬戦を終了し、一夏達の所までいくと一夏がキラとアスランに質問していた。

「何で急に模擬戦なんか始めたんだ？」

その質問にキラが答える。

「カンを取り戻す為、かな……」

キラの言葉にアスランも頷きながら答える。

「正直、今の心構えでは戦えない。クルーゼやクライシス相手では尚更だ。常に戦場の心構えをしておかないと……」

どうやら今の模擬戦でもキラとアスランにとっては不服らしく腕を組みながら考える。

一夏達はその様子を見ながら話す。

「アレで満足いかんのか？ あの人……」

第は呆れながらキラ達を見てそう言う。

「みたいね……如何考えても無茶苦茶緊張したわよコッチは……」

鈴もゲンナリしながら答える。

「でも、お互い全力の筈……何が足りないと言うのでしょうか？」

セシリアはそんな事を言いながらキラ達を見つめた。

「僕達には解らない世界だね……正直言ってあの二人が要求する領域が何処にあるのか解らないよ」

シャルもそう言いながらキラを見つめた。

「流石、私の嫁だ……兵としても操縦者としても高い所に目標を置く」

そんな事を話しながら金曜日の放課後の模擬戦は幕を閉じた。

次の日の土曜日、アスランの工房に集まった一夏達はアスランが出した紅茶を飲みながらアスランの話を聞いた。

「さて、ヤキンドウー工戦役から2年間は話したな……まあ、穏やかな時間だった。そして、2年後のC・E・73年、10月2日の出来事だ。ここから再び戦乱の世が訪れる。C・E・73から74の足掛け1年間のユニウス戦役が勃発した」

その言葉に全員が息を呑んだ。

また、戦争が始まる。

アスランの言葉は僅か2年の休息しかないまま世界規模の戦争が始まると言うのだ。

アスランは語る。

「10月2日、俺はカガリの護衛としてプラントの軍事工廠、アーモリーワンに向かっていた。カガリの目的はプラント最高評議会議長、ギルバート・デュランダル議長との会談だった。会談の内容はオーブから流出した技術財産の即時返却と活用停止を求める交渉だった。無論、オーブから流出したのは戦争で焼け出されたコーディネーターや技術者たちの返却だ。しかし、彼等の受け入れを行ったプラントとしてもソレは容認できない。会議は紛糾した」

アスランはそう語りながら紅茶を一口飲むとため息を吐き、また語る。

「その時だった。突如、警報が鳴り響き辺りが騒然となった。俺達は最初何事かといぶかしんだが、その答えが判明した」

その言葉にラウラが問う。

「その答えとは？」

その言葉にアスランはため息を吐きながら答える。

「ザフトが開発した最新鋭MS、俗称『セカンドステージシリーズ』早い話が最新鋭ガンダムタイプが連合の特殊部隊、ファントムペインによって強襲された」

その言葉にキラ以外は息を呑んだ。

「大胆だな。ザフトの軍事工廠。敵国のど真ん中に強襲を掛けて最新鋭兵器を強奪。この作戦を考えた奴は大胆で繊細、かつ肝が据わっていると思えん。ソレか余程の馬鹿か、どちらにしろとんでもない作戦だ。特殊部隊と言う事は公文書に残せない作戦だろうな……連合内部でもそのファントムペインとやらは非合法軍事活動の部隊だろう」

千冬の予測通り、ファントムペインとは秘密結社ロゴスが直接その意思を反映するべく設立した私兵集団だ。

名目上はブルーコスモスが管理している地球連合軍第81独立機動軍としているが、地球連合の批准している条約を彼らは批准しておらず、ユニウス条約で保有が禁じられた兵器も自由に装備しているかなり黒い武装集団なのである。

余談は兎も角、アスランは語る。

ガンダム3機はハンガーを潰し、近くのMSの発進をさせないようにすると迫り来る防衛部隊を次々と叩き落としていく。

アスランはカガリを連れて逃げる中、ザクウォーリアに乗り込み、その場を離脱しようと試みた。

しかし、運悪くガイアに発見され3機を相手に戦闘。

片腕をカオスのビームサーベルで切り落とされて時、戦闘機がミサイルをカオスの背に着弾させると鮮やかに上昇、追従するパーツと合体してMSになった。

そう、インパルス、衝撃の名を冠するガンダムとなり大地に下り立った。

そのガンダムの介入により3機は離脱を開始、白いザクファントムと赤いザクウォーリアが参戦したが赤いザクはスラスタ―損傷の為、戦線を離脱。

アスランのザクもインパルスを庇って左腕を損傷。

ミネルバへ退避した。

そして、部隊は宇宙へとその場を移した。

敵は条約で禁止されているミラージュコロイドを搭載した戦艦、ガ―ティールウで宙港を潰し待機していたMS部隊で残存勢力を叩き潰し、まんまと逃げ果せて見せた。

その鮮やかな手並みにミネルバ艦長タリア・グラデイスは危険な部隊と証した。

そして、デブリでの戦闘に突入し、ミネルバが動けない中、アスラの咄嗟の機転で危機を脱した。

アスランは尚も語る。

「ミネルバが宙域での修理中、事件は起きた……安定機動にあったユニウスセブンが突如として地球への落下コースを取り始めた」

この事で一夏達は予想した。

これからまた途方も無い事が起こる。

と。

閑話 とあるIS達の語らい

何処かの空中庭園で……

ある男が庭園を眺めながら佇んでいた。

男の身長は大体188・8センチ位だろうか。

白を基調に金色の刺繍をあしらったコートを着用していた。

髪は茶色でショートシャギーだ。

男はふと空を見上げる様な仕草をしながら後ろの気配に語りかけた。

「やあ、“ジャステイス”……息災で何よりです」

“ジャステイス”と言われた男は静かに男の5メートル後ろに突如として現れた。

「“フリーダム”。お前も息災そうで何よりだ」

“ジャステイス”と名乗る男はこの空中庭園の主をフリーダムと呼んだ。

この“ジャステイス”と呼ばれた男、身長は189センチ。

髪の色は藍色で、服装は赤色を基調とした銀の刺繍を施したコートを着用していた。

どうやらこの2人の挨拶はこんな感じで始まるらしい。

“フリーダム”は“ジャスティス”に語りかける。

「マイマスターが御学友に自身の過去を打ち明けた。それについてどう思う？」

その問い掛けに“ジャスティス”は思う所があるのか、こう口にした。

「……私は我が主を信じるだけだ……唯……“彼女達”を通じて篠ノ之 束に知られるのが不味いと思う……」

その“ジャスティス”の懸念に“フリーダム”はこう同意した。

「その意見に一部同意する。ただ……“ラファール”。彼女だけは我等が秘密を明かさないと確信している」

その言葉に“ジャスティス”はこう言った。

「ソレを言うなら“シュヴァルツェア・レーゲン”。彼女は口が堅い。私が保証しよう」

彼等は時々自分の庭園に遊びに来る女性を考えながらそう言った。

彼等はお茶を楽しみながら語り合う。

「ラファール」の愛らしさと言ったら……マイマスターが彼女のマスターの為にドレスを作った時など可愛らしかった」

「ソレを言うなら言わせて貰おう。“シュヴァルツェア・レーゲン”の美しさと言えば筆舌に尽くし難い程美しかった」

どうやらある人物達の会話に移っていた。

正直、俺の嫁サイコー発言乙と言いたくなる。

「それに比べて……“白式”ときたら……」

「まあ、奴は……頑固者だからな……」

“フリーダム”と“ジャスティス”はそう語りながらゲンナリとしていた。

それは“フリーダム”と“ジャスティス”が自分達を自覚してから数ヶ月の事だった。

主達が端整込めて作ったパーツやOSを受け付けなかったのだ。

主想いの彼等は直接白式のコアに乗り込み交渉しようとした。

しかし、白式はソレを敵対行動と認識。

広い湖の空間で白い甲冑に身を包んだ黒髪の女性が大剣を振り翳し、彼等を追い出そうと戦いを挑んだ。

これには流石の2人も慌てた。

一応は行くと宣言して参上したのに歓迎が白銀の刃では些か彼等に同情はしよう。

しかし、彼等とて主と共に激戦と言う名の歴戦を潜り抜けてきた最強の存在達。

多少の驚きを他所に追い遣ると臨戦体勢を整えた。

“フリーダム”は迫り来る“白式”の大剣を回避しながら両手にビームライフルを召喚しソレを白式に向けて撃ち込む。

しかし、“白式”はソレを何とか回避するが今度は“ジャスティス”がビームサーベルを2本召喚しソレを連結させて“白式”に迫る。

“白式”はその速度に着いていけず、ジャスティスにビームサーベルの刃を喉元に突きつけられる。

「これ以上、我等は戦う積もりは無い。唯、主達の贈り物を受け取って頂きたいだけだ」

ジャスティスの言葉にフリーダムが頷きながら答える。

「私達は君を“壊したくない”。どうかマイマスター達のギフトを受け取ってはくれないだろうか？」

白式は悔しそうに無言で頷くとソレを了承した。

「それに比べてラファールは可愛かったな……」

そう言いながら“フリーダム”は“ラファール”との出会いを思い起こす。

アレは彼のマスターに彼女のマスターが秘密を打ち明けてから彼女のドレスを作る事となった時だった。

“フリーダム”は彼女のコアに行った時だった。

その風景は南フランスの葡萄園を思わせる様な風景だった。

吹き抜ける風は肌を心地よく触り、“フリーダム”をいたく落ち着かせた。

暫く歩いていると薄いオレンジ色のワンピースドレスを着た少女とであった。

髪は金色を編みこんだポニーテール。

瞳の色は紫がかっている。

身長は160センチ後半位だろうか。

少女は此方に気付くと驚きの声を上げながら此方に問いかけた。

「彼方は誰ですか！？ 何故、私の世界に！？」

その少女は若干怯えながら“フリーダム”を警戒しながら問いただした。

「初めまして。美しい御嬢さん。私の名前は“ストライクフリーダム”と申します。御嬢さんのお名前は？」

“フリーダム”は何とか彼女の敵愾心を取り除こうと出来るだけ優しく語りかけた。

その甲斐あつてか少女は若干、“フリーダム”を警戒しながらも自分の名前を“フリーダム”に告げた。

「……“ラファール・リヴァイヴ・カスタム？”です……」

そう名乗った少女は此方に警戒を中々解かない。

しかし“フリーダム”はソレを意に介さずこう言った。

「ラファール“疾風”ですか……可愛らしい御嬢さんには似合わない名ですね……」

その“フリーダム”の言葉に“らファールは気分を害したのか脹れツ面で怒った。

「大きなお世話です……彼方こそ、“ストライクフリーダム攻撃の自由”なんて野蛮な名

前じゃないですか？」

その指摘に苦笑をしながら“フリーダム”は語る。

「確かにそうですね……でも、私は貴女方と違い、“兵器”ですか
ら……」

その言葉に“ラファール”は不振がる。

「“兵器”……？　どう言う事ですか？　それに彼方は“男”ですね？　“グランドマザー”に創られた物は皆“女”になる筈なのに……如何して？」

その質問に“フリーダム”は答える。

「私は篠ノ之 束、貴女方が言う所のグランドマザーが創り出した物では無いのですよ」

其処から“フリーダム”感心を持ち始める“ラファール”。

「あえて言おう。“シュヴァルツェア・レーゲン”は美しいと」

“ジャステイス”はそう言いながら“シュヴァルツェア・レーゲン”との2度目の出会いを思い返していた。

アレは彼の主が彼女の主を打ち負かしてから暫く立った頃だった。

“ジャステイス”は彼女のコアに来ていた。

其処は何処かの軍事基地の大きく広い作戦司令室だった。

その司令室の中央の椅子に女性は腰掛けていた。

その少女は銀色の髪に右目は赤色で左目は金色のオッドアイ、黒い軍服に身を包んだ軍人然とした少女がいた。

“ジャステイス”は少女に敬礼をしながら名乗りを上げる。

「突然の訪問、失礼する。私は“インフィニットジャステイス”アスラン・ザラの乗機だ」

その名乗りに少女は立ち上がり敬礼をする。

「ようこそ“インフィニットジャステイス”。我が基地へ。我が名は“シュヴァルツェア・レーゲン”。ラウラ・ボーデヴィツヒの乗機だ」

お互い名乗りを済ませると完結的に“ジャステイス”の主が作ったドレスの説明を開始する。

説明が終わわり、“ジャステイス”が入れた紅茶を飲みながら“シュヴァルツェア・レーゲン”は“ジャステイス”を見ながら言う。

「フム、“男”と言う物を初めて見たが……中々どうして……表現のしようを思いつかない……フム、主風に言うならカッコいいと言

った所か……」

その言葉に“ジャステイス”は苦笑した。

そもそも、ジャステイスはアスラン・ザラ専用に使われた機体だ。

アスラン・ザラの戦い方を参考に“兵器”として作られた自分。

元の世界では自分は味方からは勝利と伝説を約束し、敵には敗北と恐怖を与え続けた存在だ。

まあ、プロパガンダ的なカッコよさが彼女達にはカッコいいと見えただろう。

因みに、“ガンダムタイプ”は例外無く美形である。

更に言うなら、ガンダムはダンディーなお髭が特徴な紳士ではあるが、皆、例外無く美形だ。

うん、カッコいい!!

“ジャステイス”は何処から聞こえたか解らない声を無視して会話を進めるのだった。

閑話 とあるIS達の語らい（後書き）

ISのアニメを見て思った事で書いて見たいと思って書いてみました。

ウン、ガンダムタイプを擬人化すると何か全員美形になりそうだな。

白式なんか女の子と白い甲冑姿の黒髪の女性だし……

特に ガンダムは髭の紳士になりそうだ。

間違い無い！！

42話 break the world(前書き)

大変、大変遅くなりました!!

ようやくUPできました……

仕事……仕事が忙しい!!

いい加減急がしすぎるわ!!

42話 break the world

デジタル時計は時刻を19時と表示していた。

アスランは温くなった紅茶を一口含むと溜息を吐き出し語り出す。

「俺とカガリはデュランダル議長とグラデイス艦長からユニウス7が安定起動から逸れ、地球に降下を開始している事を聞かされた」

その事を聞いた時、一夏が質問をする。

「何で安定起動からそれなんだ？」

その質問にアスランは答える。

「その時は解らなかったが、人為的に動かされていたんだ。父を…パトリック・ザラを信奉するテロリストが人為的にスラストでユニウス7を動かしたんだ」

それを聞いた瞬間、キラ以外の全員が息を呑んだ。

「……う……そ……だろ……」

一夏はうつろたえながらそう吐き出した。

それに構わずアスランは語る。

「俺は当初、イザークの部隊の破壊活動を手伝う為に議長に無理を言ってMSを借りる事になった。しかし、イザークの部隊が作業中に謎の部隊に襲撃される事態が発生、突如俺の任務は破壊活動からテロリストの排除とジュール隊の支援へと切り替わった」

その時、ラウラは質問を挟む。

「お前はそれを納得したのか？ “アスラン・ザラ” と言う名を捨て、“アレックス・デノ” と言う男になったお前が？」

アスランは天井を仰ぎながら呟く。

「納得はしてなかったさ……それでも俺は……戦友達を、イザークやディアツカを助けたかったし、落ち行くユニウス7を放ってはおけなかった。だからその時だけ、俺は“アスラン・ザラ” に戻る事にしたんだ……」

その言葉にアスランの悲哀を皆は感じ取った。

そして、実感した。

C・E・世界においての“アスラン・ザラ” と言う“名”の重みを。ザフトの英雄にして大量殺戮を行った男の息子、その名は光と影がアスランの肩と背中に重々しく押し掛かっていた事を。

アスランの“名”がアスランを苦しめている。

そんな結果だった。

そして、アスランは語る。

「俺はイザークとディアッカと合流し作業を護衛した。しかし、テロリストもそれを唯見ている訳が無い。妨害しに来た」

その瞬間、アスランの指輪が光だし、映像を写す。

其処には青いザクと緑色のザクがジンハイマニューバ2型と交戦するシーンだった。

その様子を見ていた一夏達は啞然とする。

「うそだろ！？ オイ！！ 何て連携だよ！！」

一夏は信じられない様に叫ぶ。

「ここまで洗練された連携は始めて見た…… コレが大戦を生き残ったパイロットの技量か…… テロリストも並ではないがアスランとそのイザークとディアッカとやはその上を行っている。正直、今のIS運用部隊でここまで洗練された連携の出来る部隊はいないだろうな」

ラウラは見たままの率直な感想を述べた。

「コレが…… 本当の部隊運用…… アスラン達はコレが当たり前なのか！？」

箒は驚きの声を上げる。

「凄いね……」

シャルはそう呟く事しか出来なかった。

「私たちがコレを出来るまでに何年かかるか……」

セシリアも啞然としながら答える。

「あんた等もう出鱈目だわ」

鈴も呆れながら言う。

一方、千冬は冷静に分析する。

（ＩＳはあくまで競技、ザラ達のＭＳは戦争が目的、なら必然的に個人技能と連携技能の違いだろうが……青いザクにしろ、緑色のデカイ砲を抱えたザクにしろ個人技能では全盛期の私と同等の実力か……青色のザクは密集地帯での乱戦なら全盛期の私を超えている。緑色の方は狙撃や射撃だけなら全盛期の私を超えている……全く……こんなのがゴロゴロいるのか？　ザラ達の世界は？　だとしたら化け物だらけだな……こんな奴等が連携を完璧にこなして戦闘するのだから……）

千冬は知らないだろうが、イザークにしろディアツカにしろ伝説的なパイロットなのだ。

後に語られる『ラフトクライシステロ事件』では２人は伝説となっている。

イザークは超接近戦闘のスペシャリストとして、ディアツカは中長距離狙撃戦闘のスペシャリストとして代表例として挙げられる程の

戦闘巧者なのだ。

ここで掻い摘んで説明するなら、キラは砲撃殲滅戦闘のスペシャリスト。

アスランは近中距離殲滅戦闘のスペシャリスト。

シンは万能型接近戦闘のスペシャリスト。

として挙げられる。

この5人を総称して“伝説の五英雄”と呼ばれる事となるがそれは後に語られる。

そして物語は移り、連合の部隊も介入して事態は混乱したがユニウス7が砕けた事により連合は撤退した。

しかし、アスランはタイムリミットまで残って大きな破片をビームライフルで砕いていく。

しかし、テロリストはアスランに攻撃を仕掛ける。

その時の叫びを聞いて一夏達は悲しくなった。

「娘さんの墓標を落として娘さんが帰ってくるのかよ……地球にいる奴等殺して死んだ人間が蘇んのかよ……関係ないだろ……」

一夏は力なく呟いた。

アスランはその言葉を聞き、悲しそうに呟いた。

「それが人間さ……やり場の無い怒りや悲しみはぶつけられる。負の連鎖は誰かが断ち切らなければならない。だが、断ち切っても吹き上がってくる。人の心は麻布の如く荒み易いものだ……だがな、それを理由に逃げるか立ち向かうは己が決める事だ」

アスランはそう言うともた語り出す。

ユニウス7の破片は地球に落ち、世界中に甚大な被害を引き起こす。

後に“ブレイク・ザ・ワールド”と称される事件だ。

そして、キラは語る。

「僕はその時、オーブの海岸で空を見上げる事しか出来なかった。そう、“ソラが堕ちてくる”事を見ているしか……」

42話 break the world（後書き）

ここで質問に答えます。

Q デビルガンダムやサイコガンダムを擬人化したらどうなるか？

A まあ、デビルガンダムは1958年の映画『吸血鬼ドラキュラ』に主演として出た若い頃のクリストファー・フランク・カランディ
ーニ・リーですかね。

サイコガンダムは2003年の映画、『リーグオブレジェンド』の
ジキルとハイド役のジェイソン・フレミングですかね。

ターンXは『トランスフォーマーシリーズ』主演のジェイソン・マイ
ケル・ステイサムでしょうか。

因みにあくまでイメージです。

……て、全員セシリアの母国出身の俳優じゃん！！ グレートブリ
テン及び北アイルランド連合王国ばかりだよ！！

43話 再び戦場へ

アスランは一旦、席を立つとトイレへと足を運んだ。

その間に一夏達は黙ってアスランを待った。

キラはその間に窓を見やりながら遠い目をする。

アスランが戻りソファーに深々と座りながら指を組みながら目を瞑り大きく息を吸い込み吐き出すと目を見開き語り出す。

「さて俺は地球の引力に引つ張られる形で地球に落下した」

その言葉に鈴が堪らず止める。

「ちょ、ちよつと！！ アンタ、何で生きてんのよ！？ ガンダムタイプなら兎も角、最新とは言え量産機でしかも損傷してんでしょ！？」

その言葉にアスランとキラが答える。

「まあ、な……我ながらよく生きてたと今更ながら思う。シールドで摩擦熱をやり過ぎて何とか生きているスラスターを制御してたな……落下速度を殺す事無くバランスを調整して、コックピット内温度と機体内外の温度の調整も行ったな……バッテリーはエンプテイー1歩手前、警報アラームはそこら辺中から鳴り響く、温度は装

甲表面が熔ける1歩手前だった。おかげで塗装は焼け焦げ所々メタリックが見えていた」

「カタログスペックでは大気圏突入には耐えられるけど……でも、イレギュラーが無い限りは推奨される行為じゃないね……確かに……例え大気圏を突破できても先ず戦闘できる状況かどうか疑わしい損傷はするだろうし」

それを聞いた一夏達は啞然とする。

あの冷静な千冬ですら啞然とした。

なにせ、現行のIS、第二から第四すべてのISには宇宙空間での活動は困難に近い。

何故なら宇宙空間にISが対応する為シールドを絶えず生成しなければならぬ。そうしないと、風船の様に人間が膨らみ破裂してしまっからだ。

更に太陽が当たらない一瞬で物体が凍る世界や太陽が当たる所は灼熱の世界から操縦者を守る為にもシールドエネルギーは出し続ける。

更に有害な紫外線や放射能、太陽風から操縦者を守る為にシールドを出す為、シールドエネルギーはモリモリ削られる。

船外活動僅か1分でシールドエネルギーはエンプティーとなってしまう。

更に大気圏突入などと言う荒業など出来るはずが無い。

この為、ISは宇宙空間の活動と言う当初の目的を放棄せざるを得なかった。

しかし、MSはそんな事は余り関係ない。

パイロットは宇宙の真空状態は勿論の事、放射能や紫外線からは全く影響を受けないと着ている。

まあ、酸素やスラスタ推力には限りがあるが、長時間の戦闘にも耐えられるだけの備蓄はある様だ。

更にノーマルスーツはこれ等宇宙の脅威からパイロットを守ってくれると言う優れたものである。

このキラ達の言葉からもキラ達のC・E・世界は発展してる事を改めて認識させられた一夏達だった。

そして、話は進み、アスランはミネルバから下りた後の事を語る。

ブレイクザワールド事件を受けて、地球連合側は、『ユニウスセブン落下テロ事件に関与したテロリストは全員死亡した』としたプラント側の報告を一度は受け入れたものの、それを事実上撤回し、プラントが『戦闘中に死亡した』と説明したテロリストの引渡しや武装解除、プラント最高評議会への監査員の派遣の容認をプラント側に要求する共同声明を発表したが、プラントは拒否しこれにより戦端が開かれる。

ザフトはコレの撃退に成功し、積極的自衛権の名の元『オペレーション・スピヤ・オフ・トワイライト』を発令し再度ザフトは地球降下作戦を開始した。

そして、アスランはカガリの意思を伝える為、交渉役としてプラントへ向かった。

其処までアスランが話し終わると今度はキラが語る。

オーブは中立と言う概念を一転し大西洋連邦主導の世界安全保障条約に加盟した。

テロ事件により政権の流れは中立よりのカガリから連合よりのセイランへと傾いた。

最も、年若いカガリが国内建て直しにお飾りで代表に選ばれたと言うのが世論の見方だった。

オーブとザフトの交渉も連合の圧力がありカガリが動かざるを得なかったからである。

その情勢下ではキラ達の居場所はオーブを含む地球には無かった。

必然的にキラ達はプラントへ亡命めいた引越しを余儀なくされた。

「そんな時だった。事件は起きたのは……ある夜僕達が寝静まった時だった……ハロが突然侵入者の警報を出したんだ」

「侵入者？」

その言葉にシャルが質問する。

キラは頷きながら答える。

「うん、コーディネーターの特殊部隊……」

それを聞いた瞬間、アスラン以外の全員の顔が強張る。

「何とか難を逃れながら地下シエルターに逃げ込んだけど、その時、僕とマリューさんとバルドフェルドさんは気付いたんだ……この特殊部隊の目的を……」

「その目的とは？」

ラウラの問い掛けにキラは答えた。

「ラクスの暗殺」

と。

その瞬間、アスラン以外の全員は驚きの声を上げた。

「ちょ、ちよつとまで！！ ラクスの暗殺だと！？ キラ、それは本当か？」

筈の驚きの問いにキラは静かに頷いた。

「プラントの歌姫の暗殺とは……余程その組織はラクスにいてもらいたく無いらしいな……パトリック・ザラ信奉者の犯行か……？」

ラウラは顎に手をやりながら考え込む。

さらにキラは爆弾を投げ込んだ。

「シエルターが突破不可能と判断した彼等は今度はMSを使ってシエルターごと僕達を殺しにかかった」

その言葉にセシリアは啞然としながら呟く。

「他国の領内でMSを使うなんて……無茶苦茶しますわ……」

その言葉にシャルが疑問を挟む。

「オーブの軍隊は動かなかったの？」

その問い掛けにキラは自分の推測を述べる。

「多分、セイランは僕達を見捨てる気でいたと思うよ。何せ僕は力ガリの双子の弟でコーデインターだからね……そんなの事実が連合に漏れたらオーブの立ち居地が危くなる。僕達の命とオーブの命運を天秤に掛けたら答えは自ずと出てくる。更に僕達が死ねば厄介払いにもなるしプラントの領土審判も問える。一石二鳥だよ」

そのキラの推測に一夏がキレた。

「ふざけんなよ!! まるで人の命が物扱いじゃないか!!」

その言葉にキラは皮肉めいて一夏を諷めた。

「それが国と言う物だよ一夏……僕たちの命と其処に住む全国民の命、どちらが重いかを問われれば間違い無く後者だ。僕がオーブの立場でも同じ結論を下す。最小限の犠牲で最大限の効果を、それが政治と言う物だよ」

「でも!？」

「僕達軍人やラクスやカガリ達政治家は確かに冷たい決断を下さなければならぬ……でも、僕もラクスも、アスランもカガリも切り捨てた物の重みは背負っている。背負い続けるんだ。死ぬまで一生ね。もし、自分の判断が間違いだとしても上に立つものは外見は毅然としなければならない。そして、自らの過ちを冷静に判断しそれを是正し価値観の違いと言う垣根を越える。それが背負うと言う事だよ」

その言葉を付け足すようにアスランが答える。

「だからこそ俺達は忘れてはいけないんだ……自分が力を持ったその時から破壊者でもあり、切り捨てられた者達は永遠に切り捨てた者たちを忘れはしない事を……それが俺達の、そう、俺達の永遠の罪であり、俺達の戦いなんだ。正しいと信じた信念を貫く力と、過ちを認め是正する勇氣、そして……違う価値観を受け入れる寛容さを持ち続ける。それが俺達の戦いなんだ……」

その言葉に一夏は完全に押し黙った。

言葉の重みが違う。

そう思わせるに十分な2人の雰囲気飲まれてしまった。

今ここで言葉を吐いても自分の言葉の薄っぺらさが敵う訳が無いと思ってしまったから。

一夏だけではない。箒もセシリアも鈴もラウラもシャルも押し黙った。

そして、感じ取った。

本当の意味でキラとアスランは戦っているのだと言う事を。

その時、キラの胸元が光り出す。

其処にはメタリックグレーのフリーダムが映し出されていた。

そして、キラは歩み寄る。

そう、キラは再び自身の剣を引き抜いたのだ。

そして、その戦いとも呼べない一方的な破壊が映し出される。

フリーダムは無数のアッシュを蹴散らしていく。

余りの強さに啞然とする一同。

そして、決着が着いた時、アッシュは機密保持の為自爆した。

その様子に一夏たちは啞然とした。

「自爆……だと……」

ラウラの唸るような呟きが室内に響く。

ラウラとてドイツの特殊部隊の軍人だ。

任務失敗は死を意味するが、自分から命を絶つ事は早々しない。

それをこの部隊は平然とやるのだ。唸りもする。

そして、キラ達は自爆したMSの残骸からやフリーダム映像から襲撃者の機体が最新鋭の水陸両用MSである事が判明した。

つまり、テロリストがおいそれと持てる代物ではない。何せようやく正規軍が配備されるレベルのものなのだから。

この事からもプラントもきな臭くなる。

正直、プラントに移り住むと言う案も廃案になった。

その時だった、カガリの女中マーナが現れカガリがユウナ・ロマ・セイランと結婚する事になったのを聞かされたのは。

「そして、僕達は決意した。この戦争に潜む闇を調べ上げる事に……」

そのキラの言葉にセシリアは問う。

「戦争に潜む闇とは？」

その問い掛けにキラは自分の考えを述べた。

「今回の戦争で僕はある意味何か作画的な物を感じた。この時それ

が何かは解らなかつたけど……でも、何かがあるそう踏んだ僕達はモルゲンレーテの極秘ドッグからアーケエンジェルを発進させ力ガリを拉致する事を考えた」

その言葉に鈴が啞然としながら驚く。

「ちょ！？　ちょっと、アンタ！！　一国の元首を拉致って！！
明らかに重罪じゃない！！」

箒とセシリアも呆れながら答える。

「全く、スケールの大きな花嫁泥棒だな……式典会場にフリーダムで乗りつけ国主を拉致、なぎいる部隊を蹴散らしてアーケエンジェルに着艦、そのまま離脱……」

「無茶苦茶しますわね……」

ラウラは違う質問をした。

「その時、アスラン、お前は何をしていた？」

その問いにアスランは答える。

「議長と会談していた。そして、俺は議長に自分の真意を読まれてしまった。そう、俺のトラウマとも言うべき物、父、パトリック・ザラの呪縛を……」

そう語るアスランは遠い目をする。

何か懐かしむ様な目をしていた。

「そして、俺はイザークとディアックと会い、戦友の墓標で2人と話し、自分が世界に何が出来たのかを考えた。そして、俺は、フェイス、特務隊へと復帰、セイバーガンダムを授与された」

その言葉を聞き、千冬は呟いた。

「そのデュランダルとやら……中々の狸だな……影でキラとラクス
の暗殺を企てる傍らでアスランを自軍に引き込む。中々の腹芸だ。
この世界の政治家にいない本物の政治家だな」

その言葉にキラもアスランも同意した。

議長は確かに許されざる行為をしたかもしれない。

だが、政治と言う分野に置いてはラクスやカガリすら超えるずば抜けた政治力とカリスマ性、行動力を有している。

そして自分なりに世界の平和と言うもののビジョンを見据えていたのだから。

それを実感させられたのはやはりデュランダル政権崩壊後の混乱期でラクスの政権と常に比較対照とし挙げられた程、為政者として優れていた。

キラとアスランは過去に想いを馳せながらこの世界の今後の世界のビジョンが全く見えない事を嘆くのだった。

44話 迷う赤い騎士と隠れる白い天使

アスランは取り合えず場の空気をかえる為、紅茶を入れなおす。

手鍋に全員分の水をいれ、缶のフタを開けティースプーンで紅茶葉をすくい数杯入れ、それを沸かす。

アスランは沸騰した手鍋を見ながら火を消す。

そして、手鍋に蓋をして蒸らした後、ユツクリ牛乳と砂糖を入れてユツクリかき混ぜる。再び温まるまで手鍋を火にかける。

沸騰する前に火を止め、暖めておいたポットに葉が入らないように注ぎいれる。

アスランは香りと色合いを確認し満足そうにポット皆の前に置いた。

その匂いに真っ先に反応したのはセシリアだ。

「ミルクティーですわね……入れ方はインディアンで？」

その問いにアスランは問いかける。

「ああ、チャイは嫌いかな？」

「出来れば別々に入れた方が私は好みですわ。インディアンは茶葉が粗悪なダストティーですからミルクと砂糖で誤魔化している様で嫌ですわ。それにちよつと甘くて太りそうですわね」

その言葉にアスランは苦笑する。

「英国式か？ 悪くはないがミルクティーなら俺はチャイの方が好きでな。茶葉も安くて美味しく飲める。それに、今回は少量でも甘く感じる砂糖を入れておいた。カロリーを気にする必要は無いぞ。それに長時間話を聞いて脳が疲れるだろ？ 糖分を摂取したほうがいいぞ？」

正直、キラと真耶以外の周りは何を言ってるのか解らないが紅茶の入れ方と言う事は理解できた。

兎に角、アスランの淹れてくれたチャイを飲みながら少し落ち着いた所でアスランは語る。

アスランはセイバーで地球へ降下し、オーブへ向かったがオーブ軍からスクランブルをかけられる。

他国とはいえオーブ国防軍の管制に通信を送り、許可を待つ為に領空ギリギリの外で待機していた。アスランには落ち度は無かったはずだ。

そう、“事前情報”を与えられていないアスランからすればだが。

オーブ軍から聞いた内容はオーブが世界安全保障条約の加盟国、つまり中立から一転、地球軍側に付いた事を意味した。

この時、アスランは混乱する脳内でオーブが理念を捨て、地球連合側に付いた事とプラントが敵勢国家になった事を理解した。

しかし、混乱する中で一つの疑問が沸き起こる。

『カガリがいながら何故地球軍側に付いたのか？』

と言う疑問だ。

そこでアスランは行政府にアレックス・デュノとして通信をする。

しかし、行政府から冷たくあしらわれた。

アスランはムラサメをやり過ごし、オーブから逃げる様に撤退する。

アスランは取り合えずカーペンタリア基地に向かう。

そこでアスランはミネルバと合流、そして、議長からの命令書をタリア・グラデイスに手渡す。

その命令書にはタリア・グラデイスをフェイスとする通知と中東經由でスエズ基地へ向かえと言う内容だった。

つまり、中東のガルナハン基地を叩きスエズに向かえと言うある意味無茶な内容だった。

この内容にラウラが質問した。

「何故、陸路、敵領内を横断する命令を出したのだ？ 幾らでも安全なルートはありそうな気がするが……」

その質問にアスランは答える。

「コレはあくまで俺の私見だが、このガルナハン基地が防衛してい

るのはエネルギー施設火力プラントだ。このプラントは中東エリアの連合軍基地に電力を供給している。原子力発電所は先のオペレーション・スピヤ・オフ・トワイライトによりザフトに制圧された。コレにより残るはこれ等の旧来の発電所しかなくなる。コレを攻略する意義はザフトにとって大きい」

この時、一夏はある疑問を口にした。

「あれ？ 確か……アスランたちの世界って化石燃料が枯渴したんだよな？ どうやって燃料を確保したんだ？」

その質問にキラが答えた。

「確かに化石燃料は枯渴したよ。でもね、人工石油やバイオ燃料、代替エネルギーが無くなった訳じゃない。まあ、推測だけどガルナハンは人工石油を使った火力発電を用いたのかもしれないね」

「余談で話が逸れたな。まあ、いい。話を続けるぞ？」

アスラン達はガルナハン攻略を任されたラドル隊と合流し基地攻略の作戦を練る。

この基地の防衛は強固で先頭にMS部隊を配備、中央に陽電子リフレクターを搭載したMAが展開、更に後方には陽電子砲が待ち構えている。

この、陽電子砲が厄介で陸上戦艦からの砲が届かないアウトレンジからの砲撃が可能と言う物だ。さらにそれを防衛するのは陽電子リフレクターを装備するMAだ。

更にこの任務を困難にさせているのは宇宙からの降下兵団の派兵が積極的自衛と言う政治的制約の為、展開できないと言う。

アスランは現地民兵ゲリラの協力でガルナハン基地正面に抜ける坑道の地図を入手した。

ここでアスランはこの地図を元にミネルバの部隊とラドル隊との共同で陽動を仕掛け、その隙にシンのインパルス分離機能を使い坑道を抜けさせ陽電子砲を強襲すると言う案を提示した。

この作戦は成功し、ガルナハン基地は陥落した。

しかし、アスランは現地住民が地球軍兵士を虐殺する所を目撃し素直に喜べなかった。

弾圧を強いていた事から自業自得と言えばそれまでだが、人の怒りが戦場で現れた結果をアスランは見ているだけにコレは納得できない所があった。

そして、アスランはスエズ基地に到着、そこでラクス偽者を演じる少女ミア・キャンベルとそれに行っていたデュランダル議長と再会する。

一方、キラ達は海中に潜伏、情報収集を行っていた。

この情報収集でキラ達はデュランダル議長の政策が見えてくる。

其処にはラクスと言う『プラントの歌姫』と言う影響力の大きい存在をプラントから引き剥がしラクスを『単なるアイドル』という事を印象づけると言う政策だった。

ここからデュランダル議長はラクスが旧クライン派を糾合し新クラ

イン派を立ち上げるのを阻止する事が見えてくる。

確かにメディアとは単なる映像媒体ではない其処から製作者側の隠れた意図が見え隠れする。

実際問題、各国の諜報員が諜報活動をする場合、テレビや新聞、ラジオと言った放送媒体から情報を入手し、其処に隠されている政治の流れや国民の考え方などを探る事が出来る。

さらに、経済新聞からはその国が経済を何処に持っていくかと言う意図を読み解く事が出来る。

実例と挙げれば、2008年の経済新聞が日本の情報担当部局が中国要人の発言や内部文書を分析した結果、中国が2005年1月の対日工作会議で、日本の国連常任理事国入りを明確に反対しない方針を確認していた事実が判明とスッパ抜いた事や、自衛隊は、中国の指導者が共産党全国代表大会で発表した重要講話や、中国国防白書の一字一句を詳細に分析、報告書は、1993年5月に『国防教育報』に掲載された『中国人の航空母艦に対する夢』と題する論文を引用し、『中国は航空母艦を大型兵器と見なしているだけでなく、国家の強大さを示すシンボルとして期待している。中国は旧ソ連から購入した航空母艦の改修作業を進めており、実戦で使用できるレベルまで能力を引き上げる計画』と載せた事からも何処に何が潜んでいるか解らない。

故に諜報活動においてメディア収集は重要なのだ。

更に噛み砕くなら男女の仲の会話にも思惑が潜む。

キラとアスランはこの事からも新聞やテレビやネット、更には政府

筋の発表を注意深く観察しこの世界のあり方を推測した。

世界各国は東が開発したISを『最強だが厄介な兵器』と位置付けていた。

新聞やメディアはISを『競技』として宣伝しているが、政府は『兵器』として認識している。

数が少ない兵器では重厚な量や核などの戦略兵器に押し切られる。だからこそ日本政府はISのコアを各国にばら撒く事を決断したのだろう。

しかし、通常兵器として捉えるならISは最高の兵器だ。だからこそ各国は各企業に資金をばら撒き開発を進める傍ら、ブラックボックスたるコアの研究を行っている。

この事からもISのコア的大量生産による軍事活用と安定した兵装運用を各国は目指していた。

しかし、戦争はしたくない。

つまり、抑止目的の軍事力の拡張を各国が目指している。

更にIS委員会は各国の開発事情を把握する為の場であり抑止の意味合いや諜報活動の場としても利用されている。

この世界はもしかすると脆いガラスの競技場で競争をする様なものかもしれない。

東がガラスを叩き壊さないかと言う懸念はキラ達はいだいている。

余談は兎も角、キラはこの事からもデュランダル議長が信用が置けないと疑念を持つようになる。

そして、いよいよ過去はその速度を増しながら進んでいく。

番外編 束の備考

乱雑に積み重ねられたケーブルの山の中央の空いたスペースで一人の女性がタッチパネルキーボードを高速で叩きながら呟く。

「面白い！ 実に面白いよ！！ “あの2人”の科学技術は！！」

明らかにテンションが高い。

無理も無い。

彼女にとって“他者”が開発した物など取るに足らない雑多な物なのだろう。

しかし、ウィンドーには彼女をときめかせる世界が広がっていた。

「このミラージュコロイドって言う粒子に電気を流す事で粒子と波動の両方の二面性も持で、電磁波の一種で、一般的に触れることができず直進しかしない光を固体として体現出来るなんて凄いよ！！
！ 更に何！？ これ！！ 荷電粒子を超圧縮する事で唯電気を通すだけで理論上、電気が続く限りビームが撃ち放題！？ 更に方向性を定められないプラズマに荷電粒子を混ぜて安定させてる！？
更にレーザーの出力が桁外れ！？ 更にコレが低電力で使用可能！！？」

束は我を忘れてひたすらにウィンドーを読み進める。

「凄いよ！これ！！ VPS装甲！？ 特殊な装甲に電気ながして

装甲強度が爆発的に跳ね上がるんだ……更に出力したいじゃレーザーや荷電粒子砲も防げるなんて……チート装甲だ事……」

更に束はウィンドーから気になる事を見つけた。

「核！？あの2機のIS核動力で動いてるの！？作動方式は……ハイパーデュートリオン！？何それ！？核とデュートリオン粒子電力供給技術との複合動力！？出力が9000kw/hオーバ……！！？1時間で一家庭の約1年間の消費電力が賄えるね……それをシールドエネルギーに変換してるのか……そりゃ減らないわけだ」

余りの出鱈目さに目を輝かせる束。

「更にOSも無線式精神ネットワーク……追従性はこの世界のOSより遥かに凄いけどこのOSはただだけないな……一般人、言うかちーちゃんですら操縦困難だよ……どんな反応速度してんだろあの2人……」

束は考えながら呟く。

「フム……“紅椿”搭載できそうな技術は……ビーム兵装と無線神経ネットワークOSを改良くらいかな……悔しいけど、VPS装甲は製造不可能に近いし、シールドエネルギー的にカツカツなのにこれ以上は消費できないよね。かといって核を積むわけにもいかな……てか、ISに搭載可能な核エンジンなんて束さんにも出来ないよ」

そう言いながら束は考える。

「しかし……あの2機……チートするにも程があるわ……この天才東さんすら諦めた宇宙空間での活動を高次元で可能にしようなんてさ……だからかな……全身装甲にあの頭を覆っているヘルメットみたいな物があるのは……」

東はガンダムのフォルムを思い出す。

独特のあの“顔”、左右対称のアンテナ、2つの目、口。何だか人間が兜を被った様な佇まいだ。

「ガンダム」……か……一体何だろ……」

そう呟きながら東は紅椿の製作に取り掛かった。

番外編 束の備考（後書き）

HDエンジンの出力に堪えてですがあくまで私の考えです。

なにせ正式な資料が無かったもので……

45話 切り裂く白い天使、墮ちる赤い騎士

アスランは全員に30分の休憩を提案した。

流石に全員頭の中が混乱しているのかその提案を了承した。

アスランは暫く目を瞑り、天井を見上げながら重たい溜息を吐いた。キラは立ち上がり背伸びをすると窓際まで向かい眼窩に広がる夜闇を眺めながら少し小さな溜息をその口から吐いた。

ラウラは突如立ち上がると洗面所まで行き、まだ使ってもいないハンカチを濡らし再びアスランの所に戻りアスランにそれを手渡した。

「疲れただろ？　それで頭を冷やせ。私はこんな事しかできないが……」

「いや……有難う。ラウラ」

「いい、気にするな。嫁が疲れているのだ。同然の行動だ」

アスランは苦笑しながらもそれをありがたく受け取ると目を覆い溜息を吐いた。

シャルもキラの所まで歩み寄るとカップをキラに差し出す。

「ハイ」

「有難う……」

そう言いながらキラは壁に寄りかかりながら体を窓に晒さず視線を窓から外す事無くカップを受け取るとそれを静かに啜る。

「外を警戒してるの？」

そのシャルの問い掛けにキラは静かに答える。

「我ながら度が過ぎるとは思っただけだね……ここに来る時、尾行者がチラホラいたから。今は2時の方角、距離300メートルに2人、11時の方角、門の塀の所に2人、後、12時の方角、距離1000メートルに望遠レンズで覗いてるのが2人……後10時の方角、距離500メートルに2人。まあ、アスランと千冬さんは気付いていたみたいだけど……明らかにプロだね……気配の消し方や歩き方も不自然じゃなかったし、多分日本の内閣情報調査室、内調……後、アメリカのCIA……フランス対外治安総局、DGSEにドイツ連邦情報局、BNDに中国共産党中央統一戦線工作部、中央統戦部にイギリス情報局秘密情報部、MI6にロシア連邦保安庁FSB……全く……これじゃあ諜報機関の万国博覧会だね……」

その言葉にアスランは同じ姿勢のまま疲れた様に呟く。

「これらの国に共通する事は技術力が高くそれなりに資金が潤沢な事だ。早い話、軍事力がある事が共通する。多分、俺達が開発したデータを見て俺達の事を調べ上げ、俺等の人となりを調べて交渉などの材料にするんだろ？ 交渉は駆け引き、様は人対人の最上級のコミュニケーションだからな交渉は……」

そう言いながらアスランは溜息を吐く。

一夏達にとってはそれ所ではない。

まさかキラ達に監視の目が光っているとは思ってもよらなかった。

しかも国家と言う巨大な存在である。

しかし、キラ達にとっては何時もの事だ。

何処の世界でも変わらない。

自分達が将軍や最高指揮官になった時から他国の目が光っていた。

地球連合だろうがオーブだろうがプラントだろうがだ。

同盟国でさえ諜報対象となるのが上の人間なのだ。

更に言うならこの世界に来てからは国家や企業に監視される立場になった。

余談は兎も角、アスランは念の為に皆に盗聴の心配の無い事を説明した。

「まあ、この家には俺が入った時に妨害電波をだしておいた。盗聴は出来ないよ」

そう言うときアスランは過去の話に戻った。

アスランは語る。

港に入港した後の事を。

そして、ハイネとのやり取りを。

「その時、彼はこう言ったよ……『なら、何処となら戦いたい?』
とな……そしてこうも言った……『割り切れ、そうでなければ死ぬ
のは自分だ』とな」

その言葉に一夏が反論する。

「人の命だぞ!? 割り切れるかよ!! 確かに俺は戦争の事や軍
人の責任なんて知らない。でも、それでも解る! 命は重いんだ!
! それを割り切れなんて俺には出来ない」

その言葉にキラは立ち上がり一夏の前に立つ。

「それでいい……一夏は軍人じゃない。命の重みを解っていればそ
れでいいよ……僕やアスランが望んでも願っても足掻いても置こう
ても手に入らない物を一夏は持っている。僕やアスランが捨て去つ
た眩しい物が、大切な想いが、願いが一夏の胸の中にある。その価
値観や想いは大切にしなよ……」

そう言いながらキラは憂いと哀愁と羨望に似た眩しさと幼子を見る

複雑な目をして一夏を見つめながらその肩にそつと手を置いた。

そしてアスランもまた悲しく微笑みながら皆に言う。

「人を殺す事が悪なのは変わらない。それが戦争でもな。正しい戦争なんて無いんだ……皆正しいし皆間違ってる。だから、無理に理解しようとはするな。だが、忘れるな。戦争に関わる事は既にそれに加担している」

そう言いながらアスランは話を戻した。

「俺達はダーダネルス海峡で連合とオーブの連合艦隊と戦闘に突入した」

戦いはザフトが遅れをとるがアスラン達の戦いで何とかミネルバに傾く。

「しかし、ミネルバが陽電子砲をオーブの総旗艦タケミカズチに砲撃しようとした時だった。陽電子砲が何者かに狙撃された」

「砲撃をしたのは何者ですか？」

セシリアは狙撃したのが何者なのかを問いかける。

アスランは苦悶の表情で答えた。

「フリーダム……キラだ……」

アスラン以外の全員がキラを一斉に見た。

そして、キラも語る。

「僕達は情報からダーダネルス海峡で連合とオーブの連合軍がアンブッシュしている事を突き止めた。そして、オーブを止める為、僕達は戦闘に割って入った」

そしてアスランは何処か皮肉そうに語る。

「結果はミネルバに死者が多数、オーブ、連合にも死者や行方不明者、怪我人も出た。結局キラ達がやった事は唯戦いを終わらせたいと言いつつ戦場を混乱させただけだった。この戦闘でハイネも戦死した」

キラはそれを聞きながらその皮肉を甘んじて受けた。

キラとて解っていた。

自分が力で押さえ込み、多くの人達を犠牲にした事を。

いや、正確には思い知らされた。

結局、自分は破壊者で突き詰めれば人殺しで始末が悪い事に自分の意見を他者に押し付け、力で自分の正しさを表現した碌で無しだと言っ事を。

そして、ラクスに完全に甘え、依存して全てを盲目的に信じ、彼女の苦しみや想いを何度と無く見ようとしなかった。

そして、カガリを甘やかした。

結局、自分はラクスの優しさを無限と勘違いしてそれに甘えていた。彼女の内側の声を、『助けて!』『甘えさせて!』『私を見て!』と言っ心の悲鳴を聞けなかった。

今なら解る気がする。

何とかラクスはキラとの中を修復しようと必死に努力をしていたのだろう。

しかし、キラはザフトの軍の制服組トップ、ラクスはプラントの国主。

公私共に生活ですら甘えが許されない環境だった。

しかも、あの時はテロ事件で上から下まで絶望的な忙しさだった。

コレでは関係修復所の騒ぎじゃない。

更にあの時キラはアスラン、シン、イザーク、ディアッカと共に宇宙と地球双方の戦場を転戦していた。

結局の所、自分は如何しようも無く心が弱く、ガキだったのだろう。

あの二つの大戦で心の成長が止まっている気がした。

だからこそ自分は心を、他者を知り、他者の意見と自分の意見の正しさと間違いを見ようと努力した。

その意味であるテロ事件はある意味で自分の心と向き合う機会になった。

そして、こんな自分に変わらぬ友情を持つてくれるアスランに感謝した。

アスランもそう言いながらも心の何処かで自分の甘さが全てを悪い方向へもって行っている事を理解した。

キラを責める資格は自分には無いのだ。

自分とて甘ったれてただけだろう。

思考停止をして議長の甘言に踊らされ、カガリを放置して好き勝手やっただけだ。

更に間尺が悪い事にテロ事件ではカガリが政治家として甘さを捨てきれないと責めて詰った。

アスランはカガリがアスランや盟友のラクスに甘えていた事をあの時論破し、それを激しく攻め立て、政治家失格とまで言ってしまった事すらある。

カガリも泣きながらアスランの事をキラに寄りかかった軟弱な男と詰った。

正直、あの時行政府と軍部が対立しなかった事が不思議なくらいだ。

まあ、外面だけは取り繕っていたから目立つ事は無かっただろうが、2人の側近達は感づいていただろう。

結局、自分は唯逃げたかっただけの臆病者だったのだろうと。

その意味であのテロ事件は自分を見つめ直す景気にはなった。

そして、父の闇の部分を知る事が出来た事も。

そして、アスランはこんな自分にキラが変わらぬ友情を持ち続けてくれる事をありがたく思った。

そして、アスランはそう考えながらも語る。

アスランはフェイス権限で独立行動を取り一時、艦を降した事。そして、偶然、ミリアリア・ハウと接触しキラとの対談の場を用意してくれる事を了承させた。

そして、対談は物の見事に破綻した。

まあ、アスランの意思が弱かった事やラクス襲撃に動揺していた事もあったが。

そして舞台はクレタ島沖での戦いとなる。

そこで、キラとカガリが再び乱入。

戦場は更に混乱した。

その時、フリーダムとジャスティスがまたもや映像を映し出す。

其処にはフリーダムとセイバーがビームサーベルで激しい戦いを行っていた。

『こんな事が嫌で今泣いてるんだぞ！？ 何故君はそれが解らない！？ なのにこの戦闘もこの犠牲も仕方無い事だって、全てオーブとカガリのせいだって！ そう言って君は討つのか！？ 今、カガリが守ろうとしている物を！！』

『ッ！？ キラ……』

『なら僕は……君を討つ！！』

その瞬間、フリーダムは急加速でセイバーに迫る。

セイバーは遅れてシールドを前面に出し迎え撃つ形をとる。

シールドを投げ捨てたフリーダム。

そして、フリーダムのビームサーベルとセイバーの盾がぶつかり粒子と火花が散る。

フリーダムはその弾かれた体勢から左マニピレータを使い逆手にビームサーベルを引き抜きそれを左から右へ横薙ぎに払う。

その瞬間、セイバーの腕が飛ぶ。

そして、それを今度は右から左に払い首を飛ばし右のサーベルを下から上に振り上げ、今度は同時に内から外へと切り払う。

セイバーはバラバラになり重力に引かれ落ちた。

45話 切り裂く白い天使、堕ちる赤い騎士（後書き）

えゝ正直に告白します。

フリーダムVSセイバー戦のキラの言葉が理解できません。マジで

……

『こんな事が嫌で今泣いてるんだぞ！？』
だから如何した！？ 政治家が泣き言言うな！！

『なのにこの戦闘もこの犠牲も仕方の無い事だって、全てオーブとカガリのせいだって！』
カガリは代表でしょ？ それにオーブが決断したから地球連合にいるわけで！！

『今、カガリが守ろうとしている物を！！』

カガリは結果論からすればあの戦闘で混乱を招いているだけです！！

まあ、あの時のキラは意味不でした。

正直、カガリを甘やかしているだけの様な気がします。

愚痴につき合わせて申し訳ないです。

番外編2 少女達の夢

とある南フランスの田舎町。

其処に少し大きめの家があった。

表札にはアルファベットでYAMATOと書かれた表札があった。

家の中で一人の男がコーヒーを啜りながら新聞を読んでいた。

男の特徴はアジメイストの瞳に栗色がかったショートシャギーの髪型、口元や目元にはほんの少し皺が蓄えられている。

男は新聞を読みながらドタドタと戸口から聞こえる足音に気付く。

男は新聞を机に置くとコーヒーを一口飲んだ。

「お父様！！ お母様にご飯できたって！！」

少女は元気よく部屋の戸を開けながらそう叫ぶように言った。

「解ったよ。ジャクリン。スバルも呼んできて」

「うん！！ 兄様も呼んでくるね！！」

そう言うとジャクリンと呼ばれた少女はスバルと言う自分の兄の部屋まで行くのだった。

男はユックリと階段を下りダイニングまで歩む。

扉を開くといい匂いが鼻腔を攪る。

「アナタ、もう直ぐ全て終わりますから座って待っててね」

そう言いながら女性はテーブルにスープ皿を優しくおきながら言う。

「お早うシャル」

そう言いながら男は軽く女性の頬に軽くキスをした。

「お早うキラ」

女性もそれに答える様に男の頬に軽くキスをする。

どうやらコレがこの夫婦の朝の挨拶らしい。

キラが椅子に座りながら料理が並ぶのを待っていると足音が響く。

「お早う父さん、母さん……」

少年、15、6だろうかそれ位の年齢の男の子が扉を開けながら眠そうに両親に挨拶をした。

「お早うスバル。座って待っててね」

女性はそう言いながら少年にコーヒーを差し出す。

「有難う……」

「も～～う！ お父様！ 兄様ったら全然起きないのよ！！」

そう言いながら少女は脹れ面になりながら元気良く席に座った。

女性は苦笑しながら少女の前にオレンジジュースを差し出す。

「いいじゃない。アナタと違ってスバルは勉強してるのだから」

そう言いわれ少女は更に頬を膨らます。

「そんなにIS学園に入学したいわけ？ 兄様なら一発で国家代表だよ？」

その言葉に少年は答える。

「僕は別に代表になりたい訳じゃないよ……彼と……マックスと決着をつけたいだけさ……」

そう言いながらコーヒーを煽った。

男は苦笑しながら少年を見た金色の髪は母親に髪型は父親似だろう瞳は両親と同じ色合いだ。

その瞳にはライバルであり親友の少年を見据えているのだろう。

マクシミリアン・ザラを。

夫婦は溜息を吐きながら親友夫妻に想いを馳せるのだった。

ドイツのブランデンブルク州、エーベルスヴァルデにある閑静な住宅地の一等地に大きめな家があった。

男が一人パソコンの前に座りながらキーボードを叩いていた。

心配が近づいてくる事を察知した男はタイピングをやめる。

暫くするとノックの音が響きわたり、ドアが開く。

其処には藍色のロングヘアーを棚引かせた少女が入室した。

「父上、食事の準備が整いました。早くリビングにお越しく下さい」

そう呼ばれた男は微笑みながら少女に声をかける。

「ああ、解った、アンネ。直ぐに向かう。マックスも起こしてくれるか？」

「解りました」

そう言いながら少女は退室した。

男はそう言いながらユックリとした動作で椅子から立ち上がった。

男がリビングに到着すると銀髪を棚引かせながら女性が男性に挨拶

をする。

「お早う。アスラン。紅茶がある。飲むといい」

そう言いながらティーポットを優しく置き、男に近づく女性。

「お早う。ラウラ」

そう言いながら男は席につきティーポットを取りティーカップに紅茶を注ぎ淹れた。

暫く紅茶を楽しんでいると2つの気配を感じ取る。

「お早う……オヤジ、オフクロ」

そう言いながら短めの銀髪をかきながら少年は席に着いた。

テーブルにはハムやソーセージ、チーズや野菜、ライン麦パンが並んでいた。

全員が席に着き食べ始める。

「兄上、最近少々起きるのが遅くはありませんか？」

その言葉に少年はムスツとしながらパンにハムとチーズとサニーレタスを挟みながら言う。

「勉強だ……遊んでいるわけじゃない」

そう言いながらそれを齧る少年。

暫く噛みしめそれを飲み込むところだった。

「アイツとの……スバルとの決着がまだだからな……」

夫婦は子供達のやり取りを見ながらこう思った。

（この負けず嫌いさはアスラン（ラウラ）に似たのだろ）

そう思いながら苦笑するのだった。

「『』という夢を見たんだけど如何思う？』」

二人してこんな事を休み時間に言ってきた。

キラもアスランも目が点になりそうだった。

「コレは早く嫁と結婚しろと言う夢だ」

ラウラはそう言いながら婚姻届をちらつかせた。

「あの……キラが嫌じゃなければ……キャー！」

シャルは恥ずかしがりながら婚姻届を抱きしめながら言う。

キラとアスランは2人の母国語でこう呟いた。

「c e t i n u t i l e . L o r s q u e j e n e f a
i s p a s t ? t q u e l q u e c h o s e
「 d e r a r t i g u n b r a u c h b a r . W e n n i c
h n i c h t s f r ? h m a c h e
」

因みに日本語訳は……

『駄目だコイツ。早く何とかしないと』

と。

46話 堕ちた白い天使、傍観する赤い騎士

全員、話の内容を整理すべく頭をフル回転させていた。

しかし、ここまで頭が混乱するのは初めての経験だったらしくどうして言いが解らない。

冷静なのは話の当事者のキラとアスラン、そして千冬くらいだろうか。

それでもキラは話を再開した。

「クレタ島沖での戦いが終決してから暫くの事だった。スカンジナビアからの入電でベルリンがロゴスの攻撃を受けている事をした僕達は彼等を止める為、再度出撃した」

そう言った時だった。

キラのネックレスが輝きを放ち、映像を壁に映し出す。

其処にはベルリンを防衛していったザフト軍とベルリンに住む一般市民が攻撃を受ける様子だった。

それを見た瞬間キラとアスラン以外は全員息を呑んだ。

ベルリンを破壊しているのは何とたった1機のMA。

しかしその大きさが尋常ではない。

50メートル以上あるつかと言う巨体が戦艦を上回る火力で都市区画ごとザフトベルリン守備隊を殲滅したのだ。

その様子に鈴が啞然としながら呟いた。

「何よ……アレ……」

その声音には若干の恐怖が滲み出ていた。

その質問にアスランが呟くように言う。

「GFAS-X1……デストロイ……アレがその名だ……」

その言葉にセシリアが反応する。

「デストロイ……破壊の名に恥じない力ですわね」

ラウラは怒りと恐怖が緋い交ぜになった顔をしていた。

圧倒的に大きな力。

容赦無く自分の国の首都を蹂躪される様を見るしか出来ない。

例えばアスラン達の記憶でもいい感情は無い。

そこでラウラはある疑問を持った。

「……何故、連合はベルリンを襲撃したのだ……」

その質問にアスランが答える。

「ベルリンはザフトが押さえていた拠点だった。それに、ブレーク・ザ・ワールドの時にデュランダル議長は地球に住む人達に災害派遣を行った事からもザフト寄りだった。更に軍も駐屯していた事からターゲットになったのが表向きで、裏はブルーコスモスのロード・ジブリールがザフトに軍の駐屯を許したヨーロッパに対する報復とザフト軍の壊滅の両方を狙った行為だった」

それに対しラウラが怒る。

「ふざけるな！！ヨーロッパに何か支援の手を差し伸べたのか！？ ロゴスやブルーコスモスは唯コーディネーター排斥を叫んでいただけだ！！ 何か手を差し伸べたのか！？」

ラウラの怒りはセシリアやシャルの欧州組に強かった。

勿論、一夏や箒、鈴も激しい怒りはあったが彼女達程ではない。

3人の怒りは憤怒と言っても過言じゃなかった。

怒りの間に映像はフリーダムがデストロイと対決しているシーンだった。

キラが接近しようするとデストロイがMAからMSに変形したのだ。

その姿に誰もが呟く。

「アレって……」

鈴の呟きに篤が呟く。

「ガンダムか……」

そして、映像はデストロイが胸部のスーパースキュラが火を噴いた。フリーダムは難無く回避するが回避した射線の先の町が粉々に吹き飛んだ。

『クッ！！』

映像のキラは苦悶の表情を浮かべた。

更に映像はアークエンジェルのゴットフリートが放たれるがデストロイの陽電子リフレクタービームシールドにより防がれる。

更にキラはフルバーストで射撃するが全ての砲弾が逸れてしまう。

「嘘！？ キラの攻撃が直前で曲がった様に見えたけど！？」

鈴の言葉に全員が疑問の声を上げる。

「多分だけど……ゲシュマイディッヒンツァーだと思っ……ロゴス壊滅の時にジブリールが資料を廃棄したから何とも言えないな……」

キラはそう言いながらも映像は尚も進む。

デストロイとの戦いは千日手の様相を呈してくる。

キラにしても攻め手に欠いていたし、ステラにしても高速で逃げ回るフリーダムを捉える事が出来なかった。

しかし、ここにキラの欠点が潜んでいる事を千冬は見抜いた。

確かにキラの戦いは熟練の戦いだ。

しかし、フリーダム最大の武器であるフルバーストに頼りすぎている。

このデストロイには接近戦で緻密な技術が要求される。

それに関わらずキラの攻撃は射撃一辺倒だった。

アスランもソレが解っていたらしく明らかにこの頃のキラは慢心とまではいかないまでも心の何処かで油断があった。

フリーダムの高性能に頼り切っていたと言ってもいい。

ソレが戦いを長引かせる要因となった。

そんな状況の中ミネルバが乱入、インパルスが出撃した。

そしてインパルスはデストロイの攻撃を掻い潜り接近戦で装甲を切り裂いた。

そしてインパルスのパイロット、シンとステラの会話がなされデストロイの攻撃が止んだかに見えた。

しかし、突如としてデストロイが暴走。

スキュラを撃とうとした時、キラはソレを止める為、スキュラにビームサーベルを突き入れた。

デストロイはスキュラの砲身を破壊され内部に堪ったエネルギーが暴発、機能を停止させた。

映像が終わった後、アスランはミネルバ側の状況を説明する。

シンはステラを殺された事からキラへの復讐に燃える。

「そんな時だった……議長が世界に向けてある声明を発表した」

その言葉にシャルが質問した。

「ある声明……」

「声明と言うかアレは世界的な機密の暴露に近かった……この戦争を裏から操っていた存在、ロゴスの事を暴露し、ベルリンの惨劇を公表、キラが倒したデストロイの映像をインパルスが倒した様に手を加えた」

その言葉に一夏達はデュランダルに対して余り良い感情は湧かなかった。

「中々の狸だな……ベルリンの大惨事を誰が起こしたのかを明確にして敵を作り、メディアと言う媒体も最大限に利用して見方、いやこの場合駒を集めたか……政治家としては中々の策士だ」

そして、フリーダムはまたもや輝きを放ち映像を映し出した。

アークエンジェルがザフトの大軍に追われている姿だった。

その映像にキラとアスラン以外の全員が驚きの声を上げた。

追いつがるバクーやバビを蹴散らしながらアークエンジェルの退路を確保するフリーダム。

しかし、その映像に映し出された部隊数が冗談ではない数だ。

追撃部隊は明らかに一個師団規模。

300機以上のMS部隊に

因みにザフト軍MS部隊の編成は一個小隊が3機、一個中隊が15機、一大隊が30機、一個師団が十個大隊編成で300機と言う編成となる。

ザフト地上軍大規模基地一つ分の部隊がアークエンジェルとフリーダムを追撃していたのだ。

フリーダムの火力でも到底間に合わない規模だ。

最初に声を上げたのは鈴とシャルだ。

「ちょ、何よこの数！？ 明らかに集めすぎでしょ！？」

「これじゃあ多勢に無勢だよー！！」

更にラウラが冷静に疑問に思った事を口にする。

「何故ザフトはこれ程の大部隊を差し向けた？ 確かにキラは強いが幾らなんでも数が多すぎる」

その疑問にアスランが答えた。

「表向きの理由はアークエンジェルとキラの行動だ。元々、キラ達は何処の国家にも属さず戦闘行為を行っていた。コレは明らかに国際法上重大な違反だ。コレを見過ごせば戦場での法的根拠が消え去る。だからと言って前大戦を終決に導いたアークエンジェルとフリーダムを表立って処理できない。だからこそザフトは極秘作戦、『エンジェルダウン』と言う作戦でキラ達を抹殺しようとした。と言うのが表向きだ」

その言葉に千冬が反応する。

「表向き、と言う事は裏があるのдар？」

その問い掛けにアスランはこう答えた。

「ソレは後に語るが裏の理由を簡単に説明するならデュランダル議長が進めようとしていた計画の最大の障害にキラ達がなると考えていた。だからこそ、デュランダル議長はキラ達の違法行為を逆手にとつて抹殺を図った。勿論、キラ達にも相手の謀略の為の材料を与えたと言う落ち度はあるが、この頃からだ。俺はデュランダル議長に何かがあると思ひ始めたのは……そう、まるでコレまでの事件が全てチェス板の上の出来事に思えてきたのが」

その言葉に一夏と箒が苦々しく吐き捨てた。

「それじゃあ……キラ達はその計画の為に命を狙われたのかよ！？
ふざけんな！！ デュランダルって奴、まるで人の命を物か何か
と勘違いしてないか！？」

「ああ、汚いやり口だ。確かにキラの介入でザフトにも死傷者が出
た事は確かだがソレを公表せず秘密裏に始末するなどやり方が汚い」
だが、セシリアだけは冷静だった。

「でも、ソレが大人じゃなくて？ 確かにデュランダル議長のやり
方は褒められた物ではありませんわ。でも、大人はその様な汚いや
り口を必要とあらば辞さない。皆さんにも経験があると思いますわ
……」

その言葉に一夏以外の全員が苦々しい顔をした。

少なからず一夏以外の全員が大人の汚さを知っている。

箒は姉のせいで大人たちに住む所を盪回しにされ、監視された。お
陰で落ち着く暇も無かった。

セシリアにしても両親と死別してからは大人達の汚い欲望にまみれ
た金の亡者達と戦ってきた。

鈴にしてもあれだけ仲が良かった両親が口汚く罵り合いをしている
所を何度と無く見た。

シャルにしてもデュノア社の大人連中から開発したISの実験台に
され腹違いの家族から罵られた。

ラウラにしても軍からは勝手に体にナノマシンを入れられ、失敗作
と言う烙印を押された。

しかし、一夏は違った。

ある意味、そう言った大人の汚さに余り晒されなかったといえる。
何故なら千冬がそれらから守ってくれたからだ。

子供は自分の親や親戚、周りの大人を見て育つ。

そう言う意味で、ある意味、一夏は千冬と言う厳しくも暖かい大人
がいてくれた事が今の人格形成の大きな要因だったのだろう。

何せ彼女達は大人の汚さから自分を守る術を子供の時から身に着け
なければならなかった。

箒は強い力こそ相手を黙らせる最良の手である事を知った。

セシリアは豊富な知識と努力こそが自分を守る術と理解した。

鈴は強い心で自分の弱い心を鎧う事を学んだ。

シャルは笑顔こそ最大の防御である事を覚えた。

ラウラは戦闘能力として完成する事が自分の身を守る事だと考えた。

違いは在れど結局、大人達の汚さや重圧から自分を守るのは自分だ。
大人達はある意味で敵だったのかもしれない。

そんな自分達だからこそ解る。

箒、セシリア、鈴は一夏の真つ直ぐな純粋さ。

穢れを知らない純粋な白さに憧れたのだろうと。そして、同時に守
りたい。この純粋な白き心を私が守りたい。他でもないこの私が。
と言う欲望を刺激される事を3人は感じた。

そして、シャルやラウラがキラやアスランに憧れたのは、大人達の汚さを知りながらも尚、立ち向かい、対等に渡り合い、時に認め、理解しそれでも自分の信念を貫いている。ある意味で理想の大人に対する憧れの感情に近い恋心なのだろう事は薄々理解していた。

ある意味この5人に共通する恋心は憧れと言う所が大きいのだろう。それをキラとアスラン、千冬と真耶は理解した。

しかし、一夏だけはこの乙女達の複雑な心情を理解できないでいた。

そして、映像はそれでも進む。

突如、アークエンジェルの前方にミネルバが立ちはだかる。

そして、何とか難を逃れるアークエンジェル。

そして、インパルスとの対決が始まった。

フリーダムの攻撃を紙一重でかわすインパルス。

その映像にキラとアスラン、千冬以外の全員が驚きの声を上げた。

「ウソだろ……キラの……あのキラの攻撃が全然当たらね……」

一夏は何とか声にならない声を上げた。

それだけキラの技量が凄まじいのインパルス、シンはその尽くをかわす。

その様子を冷静に千冬が分析した。

「気迫や想い、そして、相手への対策がヤマトの技量を上回った。ヤマトは明らかにアークエンジェルを気にしながらの撤退戦、しかも一度倒した敵と言う事で油断があった。対してインパルスのパイロット、シン・アスカとやらは自分が死んでもヤマトは殺すと言う決死の覚悟とそれに裏打ちされた戦術、そして機体特性を余す事無く使い切った見事な戦闘だ。正直、キラは負ける。勝てる要素が見つかからない。平常心で通常の戦闘ならヤマトが勝つがこの戦闘だけ見るならキラは戦う前から負けている」

その言葉が示す通り、徐々に追い込まれるキラ。

あのフリーダムが片翼を失いボロボロの状態で逃げているのだ。

そして、最後の時は来た。

インパルスがソードシルエットに換装せずエクスカリバーだけを装備し、キラ目掛けて突進した。

フリーダムは慌ててシールドで防御しビームサーベルを引き抜く。

そして……

フリーダムのサーベルはインパルスのメインカメラを貫き。

インパルスのエクスカリバーはフリーダムの腹部、動力炉を貫く。

そして、フリーダムは墮ちたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6901q/>

ISガンダムSEED

2011年10月4日23時21分発行